

純白の月を仰ぐ。

夜の森は暗く、風もなく、月光の静けさに包まれていた。

時間が停まったような。時間が無くなったような。

空が落ちてきたような。地面が無くなったような。

月の光が、なにもかも奪い去ってしまったような。

とても、静かな夜。

わたしは、ひとりだった。

お母さんは、どこ？

お父さんは、どこ？

ねえ、じいやはどこ？

みんな、どこにいったの？

わけも分からず、泣きたくなって、

だけど、わたしはお姉ちゃんだから、泣くのを我慢した。

微かな風に、森はひそひそ話をするように葉をならす。

その葉音が、恐かった。

揺れる影が、恐かった。

誰でもいいから会いたかった。

でないと、わたしも、消えてしまう気がしたから。

幽かに白く、眠るように静かな夜。

暗い森の中、どこからか祭り囃子が聞こえてきた。

それを辿った。

森の中を走った。

後ろから、不気味な笑い声が聞こえる。

足下で不気味な影のお化けが踊ってる。

賑やかな音。

辿って、森を抜けて神社に出た。

月光が舞い降りた境内は、冷たくなってしまったように静かで。

賑やかな祭の跡は、微かにもなかった。

なにもかもが、死んでしまったように、苦しいほど静かだった。

わたしは子供だから、よくわからないけど、

なぜだか、ここにいたらいけないと思った。

よくわからない。

どうしてか分からなかった。

沢山の大人の人が、あちこちで寝ころんで月を見ていた。

よく、わからない。

鳥居の近くで寝ているおじさんは、目をあけたままちっとも動かない。

砂利の上で俯せに寝ているお爺さんは、さわったら冷たかった。

灯笼に寄りかかっていた人は、ちよっと触れたら地面に倒れて、真っ

赤な何かをまき散らしてバラバラになった。

よく、わからない。

よく、わからないけど、すごく怖くて、わたしは叫んだ。

おかあさん。

おとうさん。

じいや。

森に向かって、闇に向かって、社やしろにむかって、月に向かって叫んだ。

耳が引き裂かれそうなほどの静けさに慣れた心臓が、とつぜん聞こえてきた鈴の音に跳ねるように驚いた。

社の大きな鈴が、騒さわがしく鳴る。

中から出来たのは、知らない大人だった。

よるよると階段を下りて、そのまままっすぐ、わたしに近づいてくる。ほっとした。けどすぐにそれ以上に怖くなって動けなくなった。

その大人の人は、とても怖い顔で近づいてくる。

怒られると思った。

だけど、その人はすぐに倒れてしまった。

よく、わからない。

そのままわたしは、倒れたその人を見ていた。

すると顔だけあげて、わたしに何か言ってきた。

上手くならない楽器のように、なんども、何かを言おうとしている。

ひ　と　ご　ろ　し

その言葉の意味が、わたしには、よくわからなくて。

ば　け　も　の

そう言って、その人は怖い顔のまま眠ってしまった。

大人の人は、みんな眠ってしまった。

子供のわたしだけが、ひとり、まだ眠れない。

こんなにも静かな夜なのに、まだ眠れない。

きつと、明るすぎる月のせいなんだ。

神社に舞い落ちる、細く柔い月光を壊すことなく、鈴がなった。

扉かどが開かれたままの拝殿はいでんから、白い影がゆつくりと浮かんだ。

小さな影だった。

月みたいに白かった。

影がゆつくりと、月下に進み出る。

大人達が眠る静かな夜、白月の下、闇に隠れていたのは子供しかいな

い。

わたしは、その子が嫌いだった。

でも、すごく恐くてすごく寂しかったから、駆け寄ろうとした。

その子の名前を叫んだ。

その子もわたしを、見た。

その子の眼が、わたしを視る。

その時、私達は目があった。

瞬間、

その子の二つの眼には、空があった。

澄み切った寒冷な黒い夜空があった。

その中には、冴え冴えとした白い月。

—— 巡り会った視線は束の間 ——

どこまでも広がってる空が閉じてしまう。

たしかにあったはずの大地が崩れていく。

つつみこむ空気が静かに消え去っていく。

胸の中にあつた暖かいものが冷たくなる。

見えてたものが、暗く、見えなくなつて、

聞こえる音が、遠く、聞こえなくなつて、

形あるものが、儚く、朽ちて散っていく、

命あるものが、瞬き、亡くなってしまふ。

—— すべて亡くなる、夢をみた。 ——

残ったのは純白の月。

閉じて、沈んで、散っていく、

朽ちて、壊れて、消えていく、

気付いたら、わたしはもういない。

ただ、なにもかも忘れて、純白の月を仰いでいた。

その時、わたしは、ようやくわかってしまった。

みんな死んでる。

わたしも死んでしまふんだ。

そして、純白の月を遮る、

泣きじゃくる弟の素顔を、初めて、見て思つた。

その瞳がすごくきれいだ ——

それと、

—— みんなシキが殺したんだ、と。

「人間と人間の、人間としての関係」

哲学者 マックレーン

外に出ると、夜空は匣の蓋を閉じたような暗かった。

きつと雨が降るな、と思っていたら、しばらくして小雨が降り出した。こんな時に爺やがいれば、出かける前に傘を持つように教えてくれるのだけど、生憎と今はどっかに遠出してるから、私は、今、雨に対して非情に無防備。だから近くのコンビニの前に立ってかけていたビニル傘を拝借した。けど、風も出てきて、横殴りの雨に傘一本ではまだ不安だから、路駐してる自転車の籠に押し込められていたカッパも拝借。黒くて地味だけど、この際、贅沢はいわない。

万全の装備で、私のささやかな趣味、夜の散歩を続行した。

いつからか奥津城絵馬は、夜に独りで散歩をする趣味をもつようになった。昼間に学校へ向かう道を復習するような道のりも、夜では、やっぱり風景も違って見えて、気持ちもまったく違う。心地よい緊張感だ。

なるべくひと気を避けて道を選ぶ。

なるべく暗くて静かな場所へ行く。

きつと、独りになりたかったから。

きつと、少しでも孤独を感じたかった。

なぜこんなことを続けているのか、なんて自問自答はしない。だってそんなの無意味だもん。そんな理由その時々で、お節介な知識人が適当に見繕って語ってくれるんだから。世間には嫌になる理由は溢れてる。

闇に溶け、雨に染みるオレンジ色の外灯の列。

冷たくなったレンガの歩道。

時々眩しいライトをぶつける車。

楽しそうな賑わいは遠い。

生活の悪臭も届かない。

少し興奮したように荒れた川の流を見下しながら、大橋を渡る。

幸せな家族の寝息が詰まった団地を横目に、避けるように通り過ぎる。

もっと静かなところへ。

橋を渡り、道を辿り、幽かな外灯の光と毒々しいネオンを手繰り、もっともっと暗い場所へ。眩しい白色が一つとない闇へ、自然と足が進んでいく。もう半分以上、夜を消費したというのに、繁華街はまだ人の喧騒が絶えない。それ以上に雨の勢いは、不吉な予感を誘うほど激しくなっていく。

人の匂いや声を避けるように路地裏へ歩く。たまに娯楽と快楽に飢えた遊び人がいるから危ないって、あやめなら言うかもしれないけど、生憎と私は、そんな奴らに靡くほど、軽くもなければ、か弱い女でもない。

ビニルに当たる雨音に、遠くからの喧騒は掻き消され。

だけど、その雨音を掻き消して、叫び声が聞こえた。

街の中で、樹海の獣のような叫び声なぜか聞こえた。

それは微かだけど、たしかに禍々しく、身震いするような叫びだった。

昔、それに似た叫びを聞いたことがある。もしかしたら、だから惹かれて、気付いたら、叫び声を辿って歩き出していた。

空は暗い。

しばらく歩くと、もう叫びは聞こえない。

耳元で弾ける雨音、それでも静かだった。

隙間から漏れ出したようなネオンの残留で、輪郭だけが照らされた路地裏。

ひと気のない迷路のような道の真ん中に、人がいた。

空っぽの人形のように佇んで、暗い空を仰いでいる。

子供みたいに小柄で、襦袢のような白い布を纏って雨に濡れている。

その姿が、あいつと重なって、脳髄を刺すような苛立ちを感じた。

近づいて、傘を差し出した。

仰いでいた空を遮られて、その子は振り返って、空っぽの硝子玉のよ

うな眼で、私を見た。

そして密かに、眠りにつくように息を呑んで微かに笑った。

その子が、なにか呟いた。

だけど私はそんな声を聞かず、白い布についた赤い染みと足下に転がっ

ている刃物に目を奪われた。

かすかに血の臭いがして、目眩がした。

ひどく、気分がわるい 夢のようだ。

◇

見上げると、夜空は虫食いだった。

まるで今の私の心境を表しているような空に、妙な共感を覚えて、私を取り巻く不運を、気付けば思い返していた。

洗いたての白いシーツに絵の具を垂らしたように、じわりじわりと染みこんで、ぼたりぼたりと垂れ続けて、小さな染みが少しずつ領土を広げていくように、静かに、そっと撫でるように大きく、濃くなっていった、ああ汚れたなって思った時にはもう取り返しがつかないほど手遅れだったりして……。つまりそんなふうには、気にしなければ通り過ぎることができることが、塵も積もれば致命傷になってしまったんだな、と諦めたように弛緩した口元から溜息を漏らしながら思った。

最初の一滴は、なんだったんだろ。

お人好しでお節介焼きの正義の味方見習の、鳥居礼慈君の暴挙だったのでしょか。行方不明の後輩を捜してるみたいだったけど、礼慈がそんな人捜が出来るような器用な人間じゃないってのは、不本意ながらも幼なじみだからよく分かる。だから、車に弾かれた小石が飛んできたように、こっちまで被害が及ぶはめになったんだろ。

被害は主に、爺やが礼慈の相談をうけた直後に旅に出ってしまった、板長を失った我が家の食生活の質は、自由落下運動の勢いの如く低下した。でも、そんなことよりも問題は、あやめだ。

かさぶたのように脳裏にこびりついて離れない光景。

強の夕方。神社の裏の森。朱色の混じった白濁色の陽射しに照らされ、白い着物の子供と黒い制服の女の子が、秘密の場所で内緒話をしているように向かいあっていた。女の子は私の友達で、白い子供は私の秘密で、もつとも関わってほしくない人に、もつとも知られたくない秘密を知られてしまったと思う。

まるで昔からの友達のように笑っている二人を見て、私は悪寒を感じた。全身の熱が微風に奪い去られたような寒気と、地面が壊れてしまったような不安定感と目眩で、しばらく呆然と立ち尽くして、その後なにをしたのか、あやめを兎に角シキから遠ざけなきゃって必死だったから、シキに何をしたのかも、あやめに何て言ったのかも、よく覚えていないや。それぐらい気が動転してたというか、きっと、怖かったんだと思う。その事を思い出すだけで、感情が爆発して身体をバラバラにしてしまいたいそう。出来れば忘れたい。ううん、何も無かったことにしたい。出来れば、何もかも。初めからだ。

叶わない願いを溜息で吐き捨てる。

時刻は夜の九時を回り、まだ夏から生き残った生き物たちの不気味な囁き声が周りの木々から漏れ出して、秋の気配は冬眠しているようにまったく感じられない樹海の外れ。母屋から森の中の神社を繋ぐ林道のちょうど真ん中あたりは、人工的な光に拒絶反応を起しているように小刻みに枝を揺らして葉音を立てて、暗闇を抱え込んでしまっているた。



「はい。ハ咫鳥のことを調べてたのです。……………あ、でもそこには載ってないよ。それ、妖怪ばかりだから」

シキは紙袋の中から冷め切った焼き芋を取りだして、リスのように少しずつ齧るように皮ごと頬張っていた。

「一緒でしょ、どっちも空想の生き物なんだから」

ソファの上に本を放った。直後に、破けたか、と慌てたが本の耐久性は予想より丈夫だった。

「いいえ、そうとも言えませんよ」

頬に溜めたものを呑み込んでシキが言った。

その理由を述べよと言うように見下ろして返した。

「区別すれば、ハ咫鳥は妖怪ではなく、もつと神様に近くて、祀られてもいます。うちの神社も、一応は、祀ってるでしょ？」

百合のように首を傾げて見上げるシキに、私は視線をさけるように顔を背けて、そういえばそれっぽい鳥の置物あったな、と思い出した。

「ハ咫鳥は、神様の遣いで……………その本に載っている鳥の妖怪、以津真天、鵺、青鷲火とは、区別されるだけの理由があるのです。神様は、人が創

り上げた幻想であり、その幻想の中でしか生きられない。けど妖怪は、人が創り上げた幻想だけど、ときどき、人の世に現れるんだよ」

「ん？……………どうということ？」

まさにどうということかわからない、シキが言っていることが回りくどくて有能な通訳か高性能な翻訳機がなければ理解できない。

「そのままだよ。神様はあくまでも信仰の象徴だけど、妖怪はある現象にあらわれる幻……………影法師みたいなもの。基本的に神様って、人に対し

て不干渉だと思うんだ。でも日本の神様は結構、数も幅も広いから例外があるかもしれないけど、一神教の神様の場合、全知全能なんだから、

人に関わるなんて余分な事はしないはず。だってもう独りで完結してるわけだから、祟りなんて怒りの発露はないだろうしね。あ、この点は日

本の神様とは違うね、荒ぶる神がいる訳だし……………でも、だとすると……………あれは……………矛盾するか……………例外は……………似てる？……………ああ……………

……………やっぱり違うかな」

独り言モードに突入しやがった。文法が省略され、暗号のように他人には解読不能な声の羅列が放出される。

もちろん、そんな暗号電波なんか解読しようという汚濁みたいな好奇心は、洗い立てのシーツのように綺麗さっぱり私にはない。だから視線

はすでに空中浮遊を開始し、お化け屋敷みたいな蔵を眺めていた。そして鈴虫より静かな啜きが途絶えると、それで、という用意していた相づ

ちをうった。

「うん、やっぱり違いは色々あると思うんだ。だから区別されてる。神様はやっぱり象徴で、住む世界が違うけど。妖怪は現象で、人と同じ

世界に住んでる。だからときどき、姿を見せるものなんだ」

シキは雨漏りがしていないか確認するように両手を平行につきだした。

「古今東西……神様と人間とが住む世界は同じではないんだよ。ほら、神道だったら高天原でしょ？ 神様はそっちから出てこない……というよりに出てきたくないのかな……人に関わらないんだ。ただ人々の方がそっちに近づこうとしているだけ、干渉しようとしているは人ばかり。反対に妖怪と人間とは、同じ世界に住んでる。いろんな妖怪の話には、妖怪が人間にいたずらしたり、おどかしたり、逆に人間が妖怪を退治したりと、なんだかと共存してる。……妖怪は、神様よりずっと人の近くに

いるんだよ」  
だよ、ってそんな満面の笑みでいわれてもね。回りくどい上に難しそうな話の割に、オチは、妖怪が棲む町みたいなアピールコメントみたいで、時間を無駄に消費してしまった後悔が溜息でアピール。

「で。結局、なにがチガウノカシラ？」  
ポイ捨てのような投げやりな問いに、シキはそれでも笑顔を崩さなかった。

「うん。だから、それらの誕生と生き方っていうのかな、棲む場所が違う。それぞれをね、箱に入れて分別してあるんだよ、一緒にならないように。ま、妖怪はそうでもないけど、特に日本の神様って穢れることを嫌うからね」

そしてシキは空腹が満たされたような満足そうな息を漏らして、食べかけの焼き芋の処理に戻った。

「汚れ、ね。まあ、そりゃ嫌でしょうけどさ……」

汚れることが嬉しいなんて泥遊びみたいな精神は、とても理解も共感もできないわ、というのが素直な感想。出来れば綺麗でいたい。それは綺麗なもの、善いものに思えるから。汚いモノを見て心休まることなんてない、汚いところには醜いもの、悪と呼ぶモノがたくさんあるから。それは平和という言葉が、綺麗に磨かれた後にしか使われないのと同じように。

ポケットに仕舞っていた携帯電話が震えた。シキも食事を中断して、その震源と視線を向けるように振り返っただけが、振動は速やかに処理され、私の手の内に。

「はい。……って虎子か」

営業用音声から日常会話モードへとすぐさま戻す。そんな必要の無い相手だったから。

『露骨に嫌がるな、私も同じ気持ちだ』

電話の相手は、鬼束虎子。

「なんの用？ わたくし、忙しいのですが」

通話終了ボタンに指をかけながら語尾を強調しただけが、これからの予定など明確に決まっているわけでもないし、就寝時間までにまだ四時間以上の余裕がある。

『奇遇だな。私もガキ相手に長話をするほど暇ではない。……本題だけ言うぞ』まるで変声期のスイッチを切り替えたように声の調子が変わった。

『妃真河村の山中で、昨夜未明に人骨が入った箱が発見された。ニュースでも流れたはずだが、観たか』

「……………うん、観てないけど……………」

深刻な空気を感知。それが私と何か関係あるの、という質問が出かかったけど、その深刻そうな雰囲気は喉の奥底へと押し戻された。

『まだ調査中でハッキリしていないが、葬儀医師の判断では、その人骨というのはな、もしかしたらオマエ達の母親のものじゃないか、と言っている』

淡々と用意されていた文章を読み上げるような明瞭な虎子の言葉を、たしかに受信しけど、たしかに言葉の意味も理解できたけど、沈黙でしか反応できなかった。驚きの声もない。ただ握りしめていたケイタイ電話を落としそうになって、ぎゅっと握りしめたぐらい。視界が霞む、思考の空白に断線、母親の記憶が断片的にハイウェイを駆け抜けるように過ぎるだけ。それが数秒。昏気楼のような思考の霞はすぐに霧散し、耳には怒鳴るように名前を呼ぶ虎子の声が入った。

『絵馬。正気か』

「え、あ、うん……………あんたよりは」

『っは、結構。隠居にはオマエから話してくれ、今、出てるのだろ？』

「うん。たぶん一週間は帰ってこないかも。連絡があったら話とく」

『ああ。こちらの正式な結果が出るのはもっとかかるだろうよ。あとそれから、このことは、シキには秘密にしておけよ』

「え……………？ なんで」

顔だけ少し振り返って、ソファの上で焼き芋を食べているシキへ視線を送った。

『なんでもなにも、シキは母親の死は知らないんだろ。それに、私は知らないが、当時の事件はシキに関わりすぎている、そうなんだろ？』

「……………うん」

呼吸のような相づちを打った時には、私の視界は八年前の記憶へと遡っていた。色褪せることなく、むしろ五感全てが鮮明なまま仕舞われていた面を、シキを眺めながら観えていた。

「そうね……………」視線を暗闇へと放り投げる。「用はそれだけ？」

『そうだ。……………ああ、それとも一つ。鳥居礼慈のことだがな』

「礼慈？」

『ああ。あいつ、今ちょっと危ないことしようとしてるから、ときどき釘を刺してあげなさい。いいね』

「へえ、ずいぶんと優しいこと言うのね」

『夏みたいに暴走されたら、後始末が大変なんだよ』

「あれは馬鹿王子のせいでしょ。大丈夫よ、礼慈は単純だけどバカじゃないから。そういうば最近、見てないな……………せっかく忘れてたのに」

過去の被害を思い出しながら溜息を付くと、用件はそれだけだと、虎子は潔く通話を終了した。

視線を落とし、考えを巡らせ落ち着いてから振り返った。

ソファの上で、シキは膝を抱えて小さく丸まって、お腹を空かせたひな鳥が餌を求めるように、私をみている。まだお話したりない子供のよくな視線だけど、これ以上つきあうほど、私は優しいお姉さんじゃない。

無人だったみたいに土蔵から外に出る。

家へ戻らず、そのまま境内を抜けて夜の街へ下りた。

日中の残暑のせい、夜になってもまだ長袖では暑くて、でもときどき肌寒い夜風が、あらわになった肌を撫でる。

街は静かだ。いえ、私の周りがぼっかり穴が空いたように静かなんだ。レイアウト模型のような住宅街を抜けると、周りの箱のような家から生活する人達の声が漏れてくる。明かりのある場所だけから漏れてくる。暗いところでは沈黙。まるで外灯の光に群がる虫の羽音のように、命は、明るい所に集まる。そして外へと漏れる。

ヘッドライトは容赦なく先を指し、無関心に過ぎ去る。

まるで通り魔のような非情さと、血で汚れたナイフみたいに握った光。

過ぎ去る光は、どこへ行くのだろう。

照らすべき相手が待っているのだろうか。だからそんなに急ぐのか。

光が鳴っている。

光の側には命がある。

沢山の光には、沢山の命が集う。

色とりどりの電飾に包まれて、明るい通りを行き交う人の群れ。

沢山の人がいる。

周りには空白を埋めるようにたくさんの人々。

だというのに、とても孤独だ。

群れているのに、関係ない。

通り魔よりも他人に無関心なんだ。

手を伸ばせば届く距離に居る人を。

危険か安全かさえ疑わない無関心さ。

あるいは鈍感さ。

気付いていない。気付かない。気付きたくもない。

そんなに鈍感だから、気がついたら死んでいた、なんて事になるんだ。

もしかしたら自分が死ぬ事とか、命があるとか、人は人を殺せるんだ

よ、なんて、そんな子供でも知ってることもさえ忘れるほど、鈍感だったんだ。

たんだ。

でなければ、こんな暗い所に来たりしないはずでしょ？

光には命が集まる。

闇には何が集まる？

そんなの決まってるでしょ。

「ああ」恍惚と悪寒にブレンドされた溜息が漏れた。

天蓋に覆われた匣のように暗い路地裏に、真新しい血溜まりがあった。

その真ん中には、匣が一つ置いてある。

中を覗こうとか、何が入っているかなんて、思わなかった。

匣は黒かった。死んだ血のように黒かった。

だからその中には、きっと死んだ人が入っていると思った。

だったら仕方ないよね。

だって、死体って何があっても起きないぐらい、鈍感なんだから。

もの言わぬ死の匣にむけて、私は慈悲深く微笑みかけた。

こんにちは、さようなら、と挨拶するみたいに。

## 2

きっかけは、些細ちさいなものだったはず。

「弱いから嫌いです」

女はそう、男を拒絶した。

男は酷くショックだった。常に誰よりも優れ、誰よりも勝っていると思っていた男にとって、その言葉は、自分の存在そのものを否定するよ  
うな言葉に等しかったのだろう。プライドも尊厳も、なにもかもを、女  
はその一言で拒絶した。

それでも男は諦めなかった。いや、諦めることなど許されない。女の  
言葉を許容するということは、自分自身で今までの自分のすべてを捨て  
る行為に等しかった。

弱い、その言葉を男は否定しようとした。その場ではすぐに否定でき  
なかつた弱さを、それを言った女を自分のものにすることで否定しよう  
とした。

あなたは弱いから嫌いです、と女が言った。

ならば、強さを示せばいい、と男は思った。

男は誰よりも優れている、勝っている、強いと思っていた。それを疑  
うことはなかつた。学校では常に誰よりも優れた自分でいた。自分以外  
の人間を蔑み、見下していた。まるでアリかなにかのように。

男はまず、人を殴ろうと思った。

暴力がもつとも簡単な力の証明だろう。

夜の繁華街で、適当に夜遊びをしている学生を捕まえて、路地裏に連れ込んで殴ってみた。相手はすぐに泣き出し、歪んだ顔で助けると財布を差し出した。今度は数人のグループに、わざと絡かまれ路地裏に誘導した。相手は四人ぐらいだったけど、群れるような馬鹿に負けるはずがない。結果は、少しの傷を負ったものの、容赦なく泣き声をあげる事がなくなるまで殴った。どちらが強く、どちらが弱いかなんて明確だった。

だけど、男はひどく落胆した。

こんな暴力は、今までだって何度となく行ってきた。

それでも女は、弱い、と言う。

人を殴れる程度ではダメだ。

人を殴るぐらい誰だって出来る。

そうだ、自分が殴った相手だって、殴ってきたじゃないか。

この程度の強さでは、女は自分に振り向かない。

ならばと、今度は人を殺してみようと思った。その考えに至り、それを実行に移すまで時間はかからなかった。

深夜、繁華街を徘徊し殺害相手を探した。誰でもよかった。誰だかって殺せると思った。きつとあっけなく殺せるのだろうと、忍ばせたナイフに触れながら男は思った。

数時間、繁華街を彷徨った。

それでも相手は中々決まらなかった。殺したい相手はいないのだから、相手を選ぶのに時間がかかり、しだいに人通りも少なくなってきた。なかなか決まらない。だから男は路地へと入り、さらに人気のない路地へと更にはいった。

最初に会った奴を殺そう、と決めた。

まるであみだくじのような感覚で、楽しくさえあった。

そして、十分としない内にようやく殺す相手が見つかった。

仕事帰りらしきスーツを着た男だった。都合良く、男は背中を向けている。しかもこちらに気付いている様子もない。なんて無防備なのだろうか、と男は口元をわずかに歪ませ、ナイフを取り出した。あとは駆けよって、労働を労う意味で肩を叩くように、背中を刺せばいい。きつと、挨拶を交わすより早くに事は終わるだろう。

だが男は、駆け出す間際になってふと疑問に襲われた。

殺してもいいのだろうか、と。

知っている。もちろんそれは法律により禁じられている行為だ。道徳で戒められるた悪行であり、社会というシステムの中で悪とされる問題だ。人殺しはいけない、と大人達は子供に、疑いを抱かせないほどまで叩き込んだ事ではないか。

そのブレーキが今、男の足を止めた。

男はナイフを仕舞い、踏み出した足を元に戻した。

殺人はいけないことだ。

だが、だからこそか、殺してみようか、という魅惑の好奇心が嘯きかけ、殺したらどうだろうか、という蠱惑的な嘯きも加わり、人を殺してみようという男の決意は、それらの嘯きで、より確かな形となって男にとり憑いた。

そう、人殺しはいけない。

では、許される殺人とは？

目の前を遠ざかる男が死ねば、世間は自分をどう評価するだろうかとか考えてみた。きっとマスコミ御用達の、罪のない市民を殺した残忍な殺人犯、という常套句を使われるかもしれない。

「そうか、殺しても良い奴を探そう」

単純な解答を得た。よく聞く、罪のない人間を、という言葉。ならば罪のある人間ならば良いのか、という単純な答えだった。

男は再び、夜の街を彷徨う。

上質な肉を探す肉食獣のように、目は冷静に人間を観察している。

夜の街には罪はことかかない。

恫喝、カツアゲ、暴行、傷害、援交、強姦、詐欺と、魑魅魍魎が闊歩するかのよう、多種多様な悪が至る所にあった。

だが、それらの罪に男の触手は動かなかった。

もつと、もつと罪のある人間を殺した方がいい。

もつと、もつと悪を背負った人間を殺したい。

正義の味方のつもりはない。悪に対して強者のイメージがあっただけ。

そしてさらに一時間ほど彷徨って、やっと乾いた牙を舐めて、おわずけを食らっていたナイフを取り出せた。

足音さえ反響するコンクリートの迷路、その袋小路に、まるで不法投棄されたように女の子がいた。夜の暗さとビルの影で、それが最初は捨てられたマネキンか薄汚れた縫いぐるみに見えた。

その女の子は、見慣れぬ制服をきていた。高校生ぐらいだろうか。まるで数時間も雨晒しにあっていたように髪は乱れ、着衣もただ着ているだけという姿で、相貌は人形のように、けれどすでに死体のように生気を感じぬ眼で、男をみた。

その女の傍らには、同じぐらい若い男が仰向けに倒れていた。その頭の回りには血だまり。ひと目で死んでいるのは明らかだと思えた。

射精の絶頂に似た快感の電波が男の精髓を駆け上がった。

罪のある人間を見つけた。

人殺しだ。

そう理解した瞬間。

「ああ、これなら殺してもいいな」と男は呟いて女を見た。

多く者は、その姿を哀れに思うかもしれない。

けれど男は、それを醜い物のように観ていた。

そしてそれに視線を向けられる事がひどく腹立たしくもあった。

だから、それに近づき、忍ばせていたナイフを心臓に突き刺した。

事は、呆気ないほど簡単に終わった。

まるで道端の小石を蹴飛ばすように、歩くついでのように人を殺した。女の子は悲鳴ひとつ上げることなく絶命したのだろう。本当に投げ棄てられた人形のように、道端に倒れた。

それをしばらく観てから、男はようやく気付いた。

自分は人を殺してしまった、のだと。

人殺しは罪だ、それを犯せば罰せられる。

本来もつと早くに気付くべき事が、男の思考から綺麗に抜け落ちていた。それに気付いた時、言ひしれぬ怒りが沸き上がった。

目の前の死体。見ず知らずの女。ゴミのようなクズのせいで、自分が何年も屈辱的な時間を強要させられる事が理不尽に思え、その怒りのあまりに目の前の死体を蹴り飛ばした。まるで水をつまんだゴムボールのように鈍く転がる死体。それを何度か蹴っても、男の怒りは鎮まらなかった。

人を殺した。それはただ強さを証明したかった。

自分は強い。だたそれだけのために。

自分は悪くない。

悪いのは死んだ女の方だ。

女は人を殺した。

罪のある人間であり、そう、これは罰なんだ、と。

女が警察に捕まり裁判で死刑を宣告されたとして、結局は、誰かがこの女を殺すではないか。その誰かが自分であっただけ。

誰かが罪を与えて、誰かが罰を与えるではないか。

それがたまたま、自分であっただけ。

そう、たったそれだけのこと。

悪ではない。思えば、社会だって殺人を禁じる一方で許容しているではないか。それを決定する人数の違いだけではないか。正しさも間違っても関係ない。ただみんな決めてみんな殺しましょう、と言っているだけで、一人で殺すのも大勢で殺すのも、些末な違いじゃないのか。

男はひとりで、人を殺した。

自分は悪くないと、反芻する。

ただ自分は強く、目の前のそれが弱くなければ死ぬことはなかったのに、あまりにも弱いから死んだだけなのだ。

だから、自分は悪くない。

悪いのは、弱い人間なのだ。

自分は、決して悪くはない、と男は自分に言い聞かせた。

突然、背後で音がした。

本来なら聞き逃すような小さな音に、けれど男は怯えたように敏感には反応し、脊髄反射の速さで振り返った。

振り返った視線の先には、遠い、遠い場所から微かに流れ込む朧気な光を背後に、切り絵のような影が立っていた。

まだ熱帯夜の余熱が残る初秋だというのに、それは地面に影を広げるマントのようなものを纏っていた。

影は長く細くゆらゆら、作り物のような足音を響かせ男に近づく。

男はそれを息を呑み、ただ見ているしか出来なかった。

視界から光が失われていくように、近づいたその影は現前まで近づいた。そこでやっと男は影の顔を見た。いや、それは仮面だった。鳥類を連想する鋭い嘴に、穿たれた二つの孔。白骨の面から、微かに壊れた管楽器のような息が漏れ聞こえるだけ。

男は、その影に不吉な鴉を連想した。

影は、匣を持っていた。

黒い匣。

男は、奇つ怪な白骨面からすぐさまその匣に、まるで魂を奪われたように魅入られた視線を向けた。漆黒と影を塗り重ねたように艶やかさな面で形作られた理想的な正立方体。まるで質量を持った影の塊。

男は、その匣に魅入られた。

「知りたいですか」

風が吹いた。無機質な灰色の袋小路に、その声が影のように男の脳髓に忍び込み響く。魔的な声はまるで呪文。命令ではない。けれど男は、まるで操り人形のように顔をあげ、白骨面に向けて明確に頷き見せた。

「どうぞ、開けてください」

妖しげに、艶やかな魅惑が含んだ声が白骨面から漏れる。

そして男の手は、幕を上げるかのように匣の蓋を、開けた。

「秘密、ですよ」

白骨面から漏れる声が遠くに聞こえる。

男の意識、否、男のすべてがその匣の中へと注がれていた。

匣の中。

そこには。

「これは、穢れたハ咫鳥です」

男が求めていたものが、望む形で男の前に現れたのだろう。

男はその夜、初めて嗜った。唇を三日月のように歪め、喉が痙攣したように声を漏らして、匣の中のものを、見つめていた。

「匣は隠すもの。見てはいけないもの、見られてはいけないもの、隠さなければいけない、秘密を収めるもの——穢れは、匣の中へ」

隠してしまえばいい、と影は言う。

男は、魂が抜けたような眼で白骨面を見た。

その面に穿たれた二つの孔、その向こうの闇を見る。

そして、

「あなたの穢れも、匣の中に——」

男は背後の死体を、見た。

奇跡的な朝だ。

睡眠時間五時間とないのに目を覚まして、そしていつも冷ややかに早朝登校している運動部員達に混じって登校してしまった。それは目隠ししたままプロ野球選手からホームランをとるような快拳だと我ながら思う。その反動で、普段の四割り増しで機嫌が悪いと自覚してる。今なら泣く子も無視できる冷血ぶりだと思う。低血圧なのだから、しかたないじゃないの。

だけど、それが原因ではないと思う。

まるでぼっかり穴が空いたように、私の周囲には空白が生まれていた。

まるで見えない壁。

まるで拒絶の意志。

私に積極的に近づく人はいないというのに、軽蔑や疑念に畏怖が混濁した視線は、無礼なほど突き刺さって、渦巻くように陰のある小さな声が外から流れ込んでくる。

この状況に私は、懐かしいな、と呆れながら思った。八年前にもこんな空気だった、こんな風に人の醜いものを見せつけられた。日まで一緒に喋ってふざけ合ったりして、笑顔を見せ合うように顔を合わせていた同級生達が、今日になったら、まるで意志の疎通ができない宇宙人みたいで、私は独り、同じ場所にいるのに切り抜かれたように孤立している。

直接的に排除しようとする力はないのに、間接的に、拒絶している意志が充満している。その空気が、肌の奥に突き刺さるトゲみたいだった。八年前もそうだったけど、今、私の心は乱れてもないし悲しいとも悔しいとも感じない。まるで関係のない出来事のように、悪夢ほどの不快も感じなかった。

なんでだろう？ 何が違うのかな？

成長して、他人に無関心になれるようになったからかな？

私には関係ないって、自分を騙せるほど嘘が上手くなったから？

そんな嘘に騙されてあげられるほど、優しくなったからかな？

それとも、何時失っても平気な人ばかりを、トモダチに選んだから？

失いたくない人をまつさきに見捨てるようにしていたからかな？

もしかしたら、こうなる事が分かっていたから。それでも、誰にでも

なく負けるのが悔しくて、逃げないって覚悟したからかもしれない。昔みたいに逃げたり、誰かに守ってもらったり、泣いたりするのは嫌だから。

違うのは、きっと自分独りで何かに挑もうとする姿勢だと思う。きっとそれが成長したってことなんだろう。

いっそ、独りのほうがいい。独りだって構わない。

孤立しても、孤独になっても、きっと大丈夫だから。

きっとそれが、私にとってもいいことだから。

だけど私のそんな想いは、叶わなかった。

今日は誰とも楽しく話しをしたりする気分じゃないのに、昨日と同じように、あやめと小夜子が、屋上で一緒に昼食をとろうと誘ってきた。半ば強引な誘いだけど、私は断らなかつた。

きつと二人も気付いてる。

周囲から向けられた拒否の意図と、対抗する私の拒絶の意志に気付いているはず。だけど、それでも彼女建ちは拒否せず、拒絶を受け入れなかつた。

それはきつと好意だと思う。

だけど、好意は必ずしも善行ではない。善意は必ずしも救いではない。好意も善意も、必ずしも喜ばれるものではない。

私は分かっていた。あやめと小夜子に悪意はないと。むしろありがたい好意だと。だけど、それがひどく痛くてたまらない、苦しくて堪らなかつた。

親しい人がさしのべる優しさに包まれた手が、孤立しようとする自分の稚拙さとか、周囲を拒絶して孤独になろうとして、それがバカみたいにな独りよがりの悲劇のヒロイン気取りなの？ って自己嫌悪と恥ぢかしさで、引き裂かれそうなほど胸が痛くて、それがたまらなく苦しい。

でも、そんなことよりもっと苦痛だったのは、気に掛けてくれる友達に八つ当たりするみたいに冷たくしたという罪悪感が、堪らなく腹立たしかつた。そして、周りの人と協調しようとしれない鈍感な友達にも、苛々していた。

苛々して、腹がたつた。

小夜子に酷いことを言つたかもしれない。

あやめに冷たくあたつたかもしれない。

そんなことをした自分に、一番、腹が立つた。

フラストレーションが募る。だけど学校ではまるで人形のように振る舞って、感情を完全密封して足早に帰宅して、一気に解放するように靴を叩きつけた。それからクッションを蹴ったり叩きつけたり、無言で激しくリハビリを終えてやっと、ピノキオのように人形から人間に、普段の私へ戻っていきける。もつとも、それでも解放されたのは五割も満たない。そのうち、自分が哀れに思えるほどの虚しさを感じて、靴を拾い上げてそつと机の上に置いたのだった。

電話がなつた。

気息さにはる髪を引っ張られる足取りで、廊下に出て骨董品めいた黒電話をとつた。

「はい、おくつ」

『鬼束だ』

相手はこちらの言葉が言い終わるのを待てないほど短気だった。その無礼さに、さつき投げつけた靴の犠牲が無駄になってしまった。

「……………ただいま留守にしております」

『ニュースは観たか？ 観てないな？ 観なくていいぞ。今教えてやる』  
相手は私の機嫌などおかまい無し。

思わず、電話を床に叩きつけたい衝動にかられた。

『殺人事件が起きたぞ。この町でだ』

「……………そう」気のない相づち。受話器を握りしめていた手がわずかに緩んだ。「それが、なに？」

『なんだ、驚かないのか？』

「投げやりな現代ツ子なんでえ」溜息で喋っているような声で返して、壁に身体をあずけた。

『今日、学校で鬱陶しい陰口を浴びなかったか？』

言われて、私は拳を握りしめていた。殴ってやりたい気持ちを抑えて舌打ちし、何もない壁を睨んだ。電話口の向こうで虎子が、答なんて聞くまでもないと底意地の悪そうな笑みをうかべているよう気がした。

『やはりそうか。この町の連中は、まだヤタガラス様の祟りを恐れているものが多い。それで匣に入った白骨死体が発見され、ニュースで八年前の事件との関連を仄めかされては、過敏にもなるだろうね。だが、それも数日程度で収まる、あれだけで祟りを謳うのは少々、インパクトに欠ける。どうせ貴様も、そう思っただけで涼しげな顔で馬鹿みたいなんて思っているのではないか』

一言も返さず頷きもしなかった。

確かに今日一日、何度となく祟りだの呪いだのという馬鹿げた単語を耳にした。だけど、だからどうしてっていうのよ。そんなの今更、どうってことはない。

『気丈だな。だが、消化されるには少し時間がかかるかもしれないぞ』

「……………どういう意味よ」

「そのままの意味だ。白骨死体が見つかっただけで終われば良かったんだがな、ついさつき、バラバラ死体が見つかった」

「だからそれがどうしたって……………」

『話は最後まで聞け。そのバラバラ死体はな、匣に入っていたんだよ。まるで八年前の事件の模倣だ。当時は、死体の側に匣があっただけだし、このタイミングだからな、明日明日で忘れるものではないだろ。まあ、それでも一週間ほどの我慢だ』

もつともこれが単発ならな、と虎子は含みを漏らした。その意味を追求しない。それほど注意をむけていなかったからだ。

『もしかしたら近々、そっちに行くかもしれないから、その時は美味しい茶菓子でも用意しておいてくれ』

じゃあな、とまるで留守番電話に伝言を残すように、通話は一方的に終わった。

そして虎子から解放されて、私は溜息をついた直後に玄関の呼び鈴がなった。息継ぎの暇をあたえてくれない無礼者はどこのどいつだ、と玄関の方へ向け、硝子戸にうつった微かなシルエットを眺めながら、まさかもう来たのか、とあまり当たって欲しくもない予感を引きずりながら、玄関の戸を開けた。

「何よ陰険女！」

「きゃー！」

けど、恥ずかしいほどの外れだったようだった。

「あ、……ちやあ」

目の前にはスーツ姿の虎子ではなく、小さな悲鳴を上げ驚きに開いた口元を片手で隠す和服美人が立っていた。うん、歌舞伎の早変わりとかのレベルではなく、まったくの別人だ。

「あの、ごめんなさい」とりあえず平謝り。

「さっき、しつこいセールスが来ていたので、つい……ごめんなさい」

さらに言い訳。恥に醜態を上塗りするような行為を尤の速度で増していく自分に自己嫌悪。だけど目の前の和服の女性は、上品に微笑んだ。

「いえ、お気持ちばかりです。災難でしたね」

和服の女性は慈悲に満ちた微笑みを浮かべ、首を傾げた。

すこし見惚れてしまった。焦げ茶色の着物で少し地味な印象が拭えないけど、桜色の髪に滑らかな輪郭の顔のせいかな、艶やかに写る。

「ええホント。困ったものですよね、最近のセールスのしつこさには」

その聖母のような大らかさに、調子に乗って苦笑いを浮かべる私。なんだか人としての器の差が歴然となった瞬間のような気がした。

「で、えっと、どちら様でしょうか……」恐縮しながら尋ねた。

「あら、ごめんなさい」

和服の女性はそう言って、微笑みを消して姿勢を正した。

「わたくし、天綺家の使用人の織上朱鷺子と申します」

深々と頭を下げる女性に連れられ、どうしたものかと私も会釈のように頭を下げた。

「本日は、主人の使いで伺わせていただきました。御当主様、奥津城儀人様は、ご在宅でしょうか」

使用人さんは淀みない流暢な発音で言葉を紡いだ。それでもそれが威圧的ではなく、やんわりと聞こえたのは、その女性の声のせいだと思う。

「ごめんなさい。祖父は今、外出……旅行に出かけていて、しばらく戻ってこないんです」

取って付けたような丁寧な言葉でも、まるでメッキのように不出来に我ながら聞こえてしまう。それでも女性は厭な顔ひとつせず、左様ですか、と女優のように顔を少しだけ、一瞬だけ曇らせた。

「あの、私から祖父に伝えておきましょうか」

「ありがとうございます。ですが主人は、儀人様に直接、と申しておりますので。失礼ですが、日を改めまして伺わせていただいても、よろしいでしょうか」

「はい、それは構いませんが……。すみません、お手数をかけて」

「いえ、そのようなことはございません」

使用人さんは上品に微笑んで、失礼します、と深々と頭を下げて踵を返した。そして庭から道路へと出る門まで来ると、振り返ってもう一度頭を下げた。私はそれを姿が見えなくなるまで見ていた。むしろ、見惚れていたに近かった。

部屋に戻って、ぼんやりと畳の上に寝ころんだり、押し入れに隠してあるコスプレ用の衣装を整理したり、そろそろ新作作るのかなとか、小夜子に生地を少し分けてもらおうかなとか、雑誌を眺めたりしてたけど、どうも身がはいらないというか頭がぼうつとして、そのうち眠ってしまった。

眼が醒めると部屋は暗くなっていて、電気をつけて時間を確認するのモ億劫だから、そのまま部屋を出て居間へ移ってから時計を見たら、もう八時を過ぎていた。お腹もすいてたから、適当にインスタントですませてテレビをつけた。バラエティーばかりだけど面白くなって、チャンネルを次々と変えていたらニュース番組があって、ちょうど地元のニュースが流れていた。

どうやら本当にこの町で殺人事件があったみたいだ。

昨日きいた、匣に入った白骨死体のことは流れていなかった。きっとそれぐらい小さな、どうだっていいことなんだろう。今ながれている殺人事件だって、きっと明日には風化してるはず。だって、およそ自分とは関わりのない他人の死なんて、朝陽よりも印象の薄い出来事だもん。いつ、どこで、誰が亡くなったなんて気にしていたら、それだけで自分の人生が終わってしまう。

こうしてインスタントラーメンを食べている間に、ひと口ひと口、もとは何かの命だったモノを噛んでいる時にもきつと、どこかで誰かが死んで、どこかで誰かが生まれてる。

よく分からない。

どうしてそんなに他人の人生が気になるんだろう。

ああ、でも殺人事件だもんね。

それなら台風情報と同じかも。

これだけ危険かとか、自分とどれだけ距離があるとか、やっぱり気になるよね。だって死にたくないもん。殺されるなんてまっぴらだし、友達とか家族とか大切な人がそんな台風に巻き込まれるのだって、嫌だもん。

「爺や、大丈夫かな……」テレビを観ながらぼんやりとした呟き。

高齢者の独り旅行って、子供のはじめてのおつかいぐらい、家にいる者としては心配だよね。不慮の事故や突然の体調不良、なにか事件に巻き込まれていたり……。

「まあ、爺やなら大丈夫か」

色々と考えてみたものの、我が爺やはそんならのご老人とは違うのだ。あの人間凶器みたいな虎子に、あと二十歳老けてくれたら五分で戦えるかな、と言わしめた達人なのである。むしろ、こっちの心配をされてる気がする。うん、きつとそうだろう。

「だったら、早く帰ってきてくれないかな」

でない、毎日レトルトばかりの偏食になっちゃうぞ、と立ち上がった、私よりもっと偏食の奴に補給物資を届けることにした。きつともう起きてるころだし。

台所から適当にお菓子や果物をビニル袋に詰めて家を出る。

まだ夏の名残のように秋らしい寒さはまだ遠いみたいで、林道の木々も、まだ沢山の葉っぱを着込んで、まだ紅葉までひと月はありそう。

見上げれば星が見える。今夜は月も出ていて微かに明るい夜。だけど森に入ったら五メートル先に人が立ってても直ぐに気付かないかもしれないほど暗い。

小夜子が幽霊が出そうで怖いって、前に言っていたのを思い出して笑みが漏れた。毎年何人も自殺者が出てくる樹海で、神社の近くだから、そういう怪談があるかもって思うのは分かるけど、それはちょっと夢みすぎな気がする。そんなものよりも、猪とか熊とか野犬の方がずっと、私は怖いと思うな。

幽霊なんて、見た目が怖いだけ、実害なさそうだし。

そういえば、あやめは幽霊とか苦手だったな。去年の夏に、肝試しをしたら途中で大泣きしたっけ。あの時は、なんでそんなに怖がるのかなって思った。昔からこんな環境で育ってるせいなのか、そういう幽霊とか妖怪とか、そいつた類のものを怖いと思ったこともない。それどころか、爺やが、心靈現象や超常現象の類を毛嫌いする現実主義者だから、そういう教育をされてきた結果かも知れない。それでも、吸血鬼だの魔術師だの超能力だのと、私の周りにはそういうオカルトが事欠かないのが、不思議だ。でも、幽霊めいた奴が身内にいるんだから、しかたないかもしれない。

土蔵は静まりかえっていた。いつものことだ。

だけど奥まで入っても、いつもソファの上に座っているはずのシキの姿がなかった。ついさっき幽霊めいた奴と思ったばかりだから、ひよつとすると、どこかに隠れてるのかと考えてみたりしたが、このガラクタだらけの土蔵で、あれを探す気になれない。暗いし。呼んでみたけど返事がない。居たら、私が来る前に気付くはずだから、何の反応がないのはきつと外に出てるんだろう。

「って、あのバカ。また神社に居るんじゃないでしょうね！」

あやめに見つかったばかりなのに。夜の間だけ森の中なら出歩いて、それこそ幽霊かなにかで誤魔化すことができるのに、境内になんかに出たら、誤魔化すのが難し。こっちの気もしらないで、あいつ、何してんのよ。

ビニル袋をソファに放り投げて、私は急いで外に出た。そして林道まで引き返して境内に向かった。必死になって走るのも悔しいから、それでも歩くほど悠長な気分でもないから、拳を握りしめて競歩みたいに早足で林を抜けた。

境内に出ると、がらんと静まり返っていた。まるで宇宙からの冷気で凍ってしまったような静けさは、すべての物体が停止しているような錯覚さえした。

とりあえず人気はない。それは少し安心できた。もっとも夜中に神社に参拝にくるほどの信奉者がいるとは私には思えない。

しかもあの殺人的な石段には、祭でもないかぎり外灯は点かないのだから、危険を冒してまで夜中に神社に来るなんて、自殺者志願者ぐらいしか思いつかない。

「ん？ いるじゃん！」

そうだよ、夜でも訪れるかもしれない人がいるんじゃないか、と自らツツコンでみたものの、それだったら心配することないかな、と楽観的に考えてもみたりする。

だって、本気で自殺する気ながら、幽霊みたって気にしないだろうし、それぐらい精神的に弱ってるなら、幻覚の類だともって諦めてくれるかもしれないと思っただからだ。

見渡しても一応、そんな自殺志願者らしき人はいない。いてもきつともう樹海の中だろう。そこまで責任は負えません。それとシキの姿も見えない。アイツの白い着物は、夜でも案外見分けがつく。

どうやらシキはお腹が空いて、我慢できずに樹海で食料を確保でもしにいったのだろう。そういうサバイバル能力は、爺やお墨付きだから、そこまで心配しません。このまま家に戻ろうかと思っただけ、ついでだから、お賽銭さいせんの回収をしようと拝殿に寄ることにした。

吹き抜ける風はやや冷たく、素肌に触れると身震いがした。

廃墟のような神社だが、それでも荒れ果てている訳ではない。境内にはゴミ一つなく綺麗なものだ。毎晩、ここを掃除している奴がいるからだろう。

賽銭箱の中身を確認すると、月に小銭が十枚と入っていないのに、なぜか、この日に限っては、ずっしりと重みを感じるほどの硬貨と、我が目を疑ってしまったが、紙幣までも入っていた。元旦にだってこれだけの賽銭はない。信じられないが、今日一日だけで数十人と参拝して、お賽銭を落としていったのだろう。

「ま、理由はめでたい事じゃないのは、確かだろうけど、ね」

この現象に対する分析は実に簡単なものだ。だってこれとよく似た事が、すでに八年前に起こっていたんだもん。

「でもすごいな。賽銭に一万円も放るなんて……」

盗人のように賽銭を上着のポケットに回収し、我が手に収まっている一万円札を摘みながら呟く。

「そのうち、札束でも置いていくんじゃないでしょうね……」

確か、そんなこともあったような。あの時は、流石に驚いたというよりも怖かったな。賽銭箱に百万円ぐらいの札束が置いてあったんだもん。

「まったく、信じられない。神頼みなんて流行らないわよ」

空っぽになった賽銭箱を眺めながら、呟く。

「でも、それで救われる人もいるよ」

ただの独り言に、どこからか幼い声が返ってきた。

下げていた視線を水平に戻し、周囲を見渡した。

誰もいない。

だけど誰だか分かる。

「救われると信じた者が救われる、それが宗教だもん」

幼い、おどけた様な声が近づいてきて、拝殿の回廊かいらうから音もなく、まるで幽霊のようにソイツは姿を現した。夜闇にぼんやりと浮かぶ白い着物に同色の肌、まるで浮いているような足取りは幽霊じみている。だから、その姿を見て、そこにソイツがいると実感するまでに数秒の誤差が生まれてしまう。

「シキ。あんたどこに行つてたのよ！ 勝手に外に出てたらダメだって何度言つたら」

「お供え物が沢山あるよ」

柳に怒りをぶつけたように、シキは幼い輪郭の顔を少し傾けて、口元だけで微笑んで流した。こつちが、いくら怒つていようがお構いなし。それが私をさらに苛立たせる。

「野菜もあるから、傷まない内に持って帰つた方がいいよ」

シキはそのまま慣れた風に拝殿の扉を開けて中に入った。後ろ姿だけを眺めれば、至つて普通の行動かもしれないけど、アイツの両目は包帯をまかれている。それを忘れさせるほど、まるで見えているような足取りをしている。

「そう……母屋に運ぶの手伝つて」

自由気ままに行動する猫に怒つてもバカみたいだから、しかたなく気急ぐ命令すると、シキははいと頷いた。

拝殿の奥に、野菜やビニル袋に入ったお米やお酒が入っている一升瓶が置いてあった。これには流石に驚いた。まるで祭でもあったような、お供え物の量だ。お賽銭に札束つていうのも、強ち冗談ではなくなるのではないかと呆れてしまう。

段ボール箱にお供え物を適当に詰め込んで、シキには野菜と一升瓶をと重たい物を持たせて、拝殿を出る。

外は薄暗く、境内は石灯籠のかすかな灯りがあるだけ。

それでも人目が無いことを十分に確認してから、シキを連れて母屋がある林の方へ足早に向かった。

鬱蒼と生い茂る木々と、天蓋のような枝と葉っぱのせいで、林道は暗闇に支配され、明かりのない足下は輪郭のない底なし沼のよう。方々から、何かうごが蠢く音が忍び寄ってくる。風が吹く。風に揺れた木々が不協和音を鳴らす。

「お姉ちゃん」

整いすぎた声が背後から聞こえた。

私は足を止める事も、一瞥いちめくも、返事もしない。

「外で、何か起こつてるの？」

不意に足が止めてしまった。息を呑む。驚いて、それ以上にシキの言葉に反応してしまった事が悔しかった。

「あやめちゃんが言つてました。ヤタガラスの祟りのこと」

シキの声は抑制されたように静かだった。

それに反比例するように、私は内心、穏やかではなかった。密かに舌打ちをした。初めて、あやめに抑えようのない怒りを覚えた。弾けそうな感情を、深呼吸をして落ち着かせる。その間の静寂は、私を嘲笑っているようにさえ感じた。

「シキ。……祟りってあると思う？」

上手く落ち着いた声を発せられ、私は振り返らず訊いた。

「祟りはあります。だけどそれは概念としてで、現象としては……個人の定義によると思います」

まるで用意していたように、直ぐさまシキは相変わらず解りづらい返答をした。私が嫌いなタイプの話し方だ。

「じゃあ、シキは祟りを信じないの？」

私はあくまでも振り返らず、突っぱねたような言い方で訊いた。

「祟りの何を信じるの？」

間髪入れずシキが、今度は子供っぽい言い方で尋ね返してきた。

「祟りの存在よ」

「それは言葉として？ それとも現象として？」

「そんなの決まってるじゃない」

「何が決まってるの？」

「本当に祟りが起きるのかよ！」

「祟りってなに？」

「だから———！」

冷たい風が、熱くなった私をなだめるように頬を撫でる。

そこで夢から覚めたように、言いかけた言葉を呑み込んだ。そうしなければ振り返ってしまいそうだった。シキに翻弄せんろうされてるようで気分が悪い。

「だったら……祟りって、なに？」

私は何かを隠すように、声を出した。

その質問は私にとっては無価値だ。

だけどシキはどうしてか、くすりと微かに笑った。

「なによ、何が可笑しいのよ」

「お姉ちゃんがそんなこと訊くの、珍しいと思って。それにね、あやめちゃんも、同じような事を訊いてきたから」

自然と、あやめがシキと話している光景が脳裏に浮かんだ。それはスムーズな想像だった。

「お姉ちゃんが訊いてるのは、祟りの事、それともヤタガラス様の祟りのこと？」

「どっちも同じでしょ」

「ううん、違うものだよ」

軽やかな声が弾み、シキが近づいてくる気配がしたから私も歩き出した。

後ろを……シキを見ない。

「ヤタガラスの祟りだと、ハ咫鳥の仕業で、何かが起きたってことになり。祟りは、ハ咫鳥の能力の一部、装飾オウシキョクになっちゃうんだ。だけど祟りだけなら、それ単体の現象で、雨や雷と同じような自然現象になる。」

昔はね。雷は、雲の上にいる雷神様が太鼓を叩いてるから、あんな大きな音が鳴るんだって言われてたらしいよ。でも本当は、雷神様なんていないし、雷は起こすのは雷神様なんかじゃない。……………祟りは現象を指し、ハ咫鳥はその現象を発生させる仕組みを……………犯人を差しているだ。祟りだけなら、呪いに近い。ヤタガラス様の祟りだとね……………祟りよりも、ハ咫鳥の正体が鍵になるんだけど……………」

急に萎しぼんだように、シキの声が消えた。

「お姉ちゃん……………聞いてる？」

迷子のような弱々しい声が投げかけられた。

聞いている。聞こえるんだから、聞きたくなくても聞こえてしまう。生憎と両手は荷物で塞がってるんだから、嫌でも聞こえてる、と心の中で愚痴るだけで声にはしなかった。

木々のトンネルの出口が見えてきた。

微かに薄い闇だけど、ここからはそれが明かりのように見えた。屋敷の瓦屋根が見える。もうすぐ出口だから、私は黙っていた。

シキも、きっとまだ話の途中だったんだろうけど続きを口にしなかった。きっと諦めたんだろう。振り返ったら、萎れたような顔をしているに違いない。

林道を抜け庭に出る。屋敷には人氣はない。当然だ。独りだと無駄に広すぎる屋敷は、昔は嫌いだった。まるで箱の中に閉じこめられている気分がして、小さかった私には広すぎる屋敷が、ひどく狭く思えた。きつと出口がなかったから。出口がなければ、広いも狭いも大差はないもの。

玄関には回らず、裏庭へ。ちょうど台所の勝手口まで着いたら、そこで私は荷物を置いた。背後には常に、シキの足音が聞こえている。まるでわざと、自分がいることをアピールしているように、必要以上に大きな足音だった。その気になれば、音を立てずに忍び寄ってこれる幽霊みたいな奴なのに。

「シキ、そこに置いて」私は振り返らず指示した。

はい、と小さな声が聞こえ、地面に荷物を置く動作が着物の擦れる音で分かった。

「お姉ちゃん。訊いても、いい？」神妙な声で、シキが言う。

私は背を向けたまま、なに、と言った。

「やっぱり、外で何か起きてるんだよね？」

ひどく心細い声に、どきりと一瞬呼吸が止まってしまい、不覚にも振り返ってしまった。その瞬間に、後悔や憤りや苛立ちに舌打ちした。

包帯で顔半分も覆われているシキの表情は、私の気持ちを透かしているように、その上で私を本気で心配しているみたいだった。それは声、隠された目からも伝わっている。見ている私まで、怖くなってしまいそう。だからすぐに顔を背けた。そうしないと、堪えられない。

「……なにも、ないわよッ」

内心を映し出したように声が荒くなってしまった。それを隠すようにさらに声を大きく張った。

「用は済んだんだから早く戻りなさい！　ここは、あんたが居ていい場所じゃないんだから！」

無様にも動揺した自分の感情を払い飛ばすように、怒鳴りつけた。直後の静寂が、胸に針が刺さるように痛かった。

布が擦れる微かな音。続いて砂利が擦れる音がした。遠ざかっていく、気配は、まるで風のように幽かで、それが遠くへ行くほど、なぜか私を締め付けるような痛みを感じた。

「シキ！」　気付いたら、振り返って叫んでた。

シキは、背を向けたまま足を止めた。正面へ回ることなく、そのまま樹海の方へと消えようとしている姿が、白い着物のせい、儂はかなげに写った。きつと気のせいなのに。

「あんたは、外のことを気にしなくていいの。シキは……」

——外に出てはいけないから。

「シキが心配することなんて、何も無いから」

——心配して、四苦八苦するのはいつも私達。

「あんたは、大人しくしてたらいいの。なにも、しないで……」

——本当はシキさえいなければ、どんなに……。

頭の奥に浮かんだ言葉を呑み込み、押さえ込みながら喋る。

遠くの方で風が吹く、樹海を撫でるような葉音が抜ける。

その風に揺れる百合のように、シキは小さく頷いた。そして、本当に幽霊のように樹海の中へ、静かに吸い込まれるように消えた。闇にとける白を、私は見届けて、我慢していた衝動に任せて地面を蹴った。

小さな砂利が、飛んでいく。

——だけど、外に出る事はない。

だから代わりにつてわけじゃないけど、私はそのまま家には入らず、散歩に出かけることにした。なんとなく、頭を冷やしたかった。でも、庭を抜けて竹林の細道を下って道路に出たら、もう理由なんて忘れてた。

外へ。

——出口がないと、外へ出ることが出来ない。

——出る事が出来ない世界なら、知らない方がいい。

——知ってしまったら、きつと苦しいだけ。

——だったら秘密にしておいた方が楽だ。

——秘密のままなら、少なくとも、苦しくない。

——だって、その苦しみを知らずにいられるのだから。

——だから、経験できない世界に憧れるだけ、苦しみを増してしまふ。

——いくら願っても、神話の世界や御伽おとぎの国へは、行けやしない。

——私達が暮らしている世界とは、違う世界だから。

——遠い、遠い、およそ自分とは関係のない星を、夢みるようなもの。

「ああ——」　——でも。

だから、美しいと思えるのかもしれない。

夢だから、汚れることのない幻想を見てしまうのかもしれない。

それが現実なら、きつとすぐに汚れてしまうけど、

夢の中なら、きつと、それはいつまでも、美しいままでから。

だからきつと、願うんだ。叶えようとするんだ。

希望を持ってるんだ、きつと。

現実にも、そんな美しいモノがあるはずだ、つて。

それを見つけるには、この世界は狭すぎるのかも。

だからもつと遠くまで、未知の土地へと向かおうとしてるのか。

それとも、今いる場所が、嫌で嫌で、しかたがないのか。

美しいものを望むのなら、希望から外へ。

悪辣な汚れを拒むのなら、絶望から外へ。

今とは違う日常を夢みて、箱庭から外へ。

それが叶うことがないと、知っていても。

「違う……そうじゃない」

独り言が、大橋から暗闇の水面へ落ちる。

私はそこで考えるのをやめた。

「奥津城じゃないか」

橋の前方から歩いてくる人影が、慣れ慣れしく声をかけてきた。

どこの酔っぱらいか、ヤンキー兄ちゃんかと睨んでみたら、そいつは、

まあ馴れ知った人物だったから、私も馴れ馴れしく答えてあげた。

「げ、礼慈かよお」

親愛大盛りだ。

「なんだよ、その嫌そうな顔は」

生憎と私には、まだ礼慈の全体像がハッキリと視認できないのに、どうやら向こうは、私の表情まで克明に見えてるらしい。さすが鷹の目。

夜だからフクロウか。

「何してんだ、こんな時間に？」

やっと顔が分かるまで近づいて、礼慈はまるで、夜遊びをしている不

良少女に説教でもする教師みたいな口調で尋ねてきた。面白みのない質

問と同じぐらい、面白みのない表情で。

「花火大会を見物してるように見える？」

「花火があがってれば、な。そんな時期じゃないだろ、もう」

さらに近づいてきて、腕を伸ばせば届きそうな位置で、礼慈は立ち止

まった。

「散歩か？」

「ま、そんなところね」

真面目君に投げやりな返答をしたら、顔をしかめてコイツは、溜息つ

きやがった。バカかオマエは、みたいな感じで。

「奥津城。おまえな、女の子が一人で出歩いて安全な時間じゃないだろ」

さすが正義感にネクタイしめて着込んだような真面目君の礼慈は、実

に教科書通りというか、つまらない心配をしてくれた。

「関係ないでしょ、礼慈には。私が何時どこを歩こうが、迷惑かける訳じゃないんだから」

髪を払って、ほっとしてくださらない、という丁寧に言い返した。  
すると礼慈は。

「心配するだろ。まだ迷惑かけてくれた方が良く」

と、真顔でさらりと言った。

二秒ぐらい呆気にとられてしまった。なんだって、そんな青臭いセリフがさらりと出るのよ。驚き通り越して怒りさえ感じたけど、そうだからコイツはこういう奴なんだ、と思い返して心を静めた。

「余計な心配、どうもありがと」礼慈の顔を直視出来なくて、顔を背けた。

「でもご心配なく。夜の散歩は私の趣味なの。別に、今に始まったことじゃないから慣れてるし。大丈夫よ。素手なら、私、あんたを二秒で殺できるんだから」

顔を正面に戻すと、礼慈は器用に左右非対称に顔をしかめていた。まるでゲテモノ料理でも目の前に出されたような顔だ。

「何？ 悔しいの？ 礼慈なんか弓もってなきゃ、ただの陸上部よ」

「まあそうだが。奥津城、暗殺は意味が違うと思うぞ」

「……………うっさいわね！ いいの！ 脳天にカカト落とし決めりゃ同じでしょ！ やってあげようか、今、この場で！」

「御免被る」礼慈は、攻撃をかわした。

「オマエが強いのは、ガキの頃から知ってるよ、身をもつてさ」苦笑いを浮かべる礼慈。

「でもな、危険なことには変わりないんだから、やっぱり、夜の一人歩きはやめたほうがいい。……………今は、特に危ないんだから」

「何が危ないの？」

「オマエも知ってるだろ。殺人事件が起きたの」

「ああ、そんなこと、ニュースで言ってたわね」

「知ってるなら分かるだろ。ついさっき、また犠牲者がたらしいから、殺人者が、まだ近くにいてもかもしれないんだ。だから……………」

必死に私を説得しようとしている。真剣な顔付き。怒ってるようだけど、それは大真面目に、私のことを本気で心配してくれてるんだろな。

でも悪いけど、それがあまりにも無垢だから笑っちゃいそう。

「なにが可笑しいんだ？」

礼慈には珍しく刺々しい口調。どうやら私は本当に笑っていたようだ。でも、本当に可笑しかった。

「だって。殺人鬼がうるついでるから危ない、そう言ってるんでしょ？」

「ああ、そうだ。少しは危機感もてよ、怖いとか」

「それが可笑しいのよ」

どういう意味か分からないと言う風に、礼慈は不審な視線を向けてくるから、教えてあげる。

「だって私のすぐそばに、ずっと昔からシキっていう殺人鬼がいるのよ」  
可笑しさに混ぜた私の言葉に、礼慈はまるで殺人現場に遭遇したみたいに直立不動のまま固まってしまった。

きっと忘れてたんだ、こいつは。

最初に教えてあげたのに。

シキが、生粋の殺人鬼だって。

「だから、いまさら怖いとか思わないの。だって、家にいようが外にいようが、ほら、危険だっていうなら、私はずっと昔から、いつ殺されてもおかしくないのよ、シキに」

言葉を紡ぐたびに頭の奥が冷えていく。自虐的な、もしかしたら加虐的な笑みも零れていたかも知れない。薄笑いの滲む声は、我ながら耳障りだった。

礼慈の表情が哀しく曇る。自分を悲しむ顔じゃない、まるで百年後の、見ず知らずの人類の不幸を憂うれいでいるような、優しく暗い表情。

分かる。礼慈が次に私に言う言葉が。

「奥津城……シキはオマエを——」

「分かってるわよ！」

だから遮った。

「そんなの、礼慈に言われなくなたって、私が一番わかってるわよ！」

だから、そんな哀しそうな顔を向けなくて欲しい。

だから、そんな悲しそうな眼で見ないで欲しい。

「わかってるわよ……私は……あいつの——」

俯く。それ以上の言葉は出なかった。唇が語りたくないと、喉が声にしたくないと訴えるように、私はその続きの言葉を口にすることができなかった。代わりに、深呼吸するように、私の中から形のない重たい空気をゆつくりと溜息と一緒に吐き出す。

「礼慈ってさ……」顔をあげて、振り向いた先にいる、そいつに言う。

「ほんと、優しいよね」言って爽快な微笑みが自然と浮かぶ。

「どういう意味だよ、それ」礼慈は不満そうにはぶててる。

それは可笑しかったけど。

「バカは死ななきゃ直らないっていうけどさ……」

これ以上、見ると感染しそうだから。

「私、あなたのそういうところは、嫌いじゃないから……」

ぽつりと微風を持って行かれるほど小さな声で。

「死なないでよ」

呟いて、背を向けた。

「礼慈も、ひとりで夜道なんか歩いてると、殺人鬼に殺されるかもしれないから、気をつけなさい。よい子は早く帰りましょう！」

交通安全標語を読み上げるように大きな声で言い残し、手を振った。

「おい！ 奥津城、送っていきよ！」

後ろから礼慈が叫びながら駆け寄ってくる音がしたから、いいわよ、と叫び返して、顔だけ振り向いた。

「ありがとね」色々な、ありがとを込めて。

十歩も歩けばもう聞こえない。

でもきつと、私の姿が見えなくなるまで、見守ってるいるんだらうな。

そんな暖かい眼差しを背中に感じる。

つくづく思い知らされてしまう。

ああ、私って友達に恵まれてるなって。なんで、あやめに小夜子、礼  
慈にしたって、あんなに純粹で優しいのだから。

嫌になるな。純粹さに触れる度に、自分がどれだけ汚れてるか、簡単  
に比較できて、思い知らされるのだから。

どうすれば、この汚れは落ちるのか。どうすれば、いつまでも綺麗な  
ままでいられるのか。どうすれば、純粹な気持ちを思い出せるのかな。

きつとあつたはずだ、私にだって、きつと……………。

バカみたいに純粹無垢に……………うん、きつそれは、すごいこと。馬鹿  
なんかじゃない。きつと負け惜しみ。でも、もし、いつまでも純粹のま  
ま、無垢なまま、無邪気でいることをバカだと罵るなら。

バカは死ななきや治らない、と言うのなら。

無邪気さを無くした人は、なんで死んだのだから。

純粹な想いは、なんで死んだら消えてしまうのか。

無垢が気持ちを、なんで死んだら失うのだから。

死ねば、生まれた頃の綺麗な私達は、汚れてしまうのだから。

美しさは、死ねば汚れるのだから。

優しさも、そんなのだから。

純粹さを失い、無垢な気持ちを捨て、邪な願いに汚れた人達。たとえ  
ば、人の命を搾取する殺人鬼のような。たとえば、私達、は、いつたい  
なんで死んだのだから。きつと、もう、なんで死んだかさえ分かりはし  
ない、ゾンビみたいになってしまっているかも。

まだ潔く、綺麗なまま、美しく死んでしまいたいものだ。

ゾンビみたいに、腐敗した心を持ち続けて生き続けるのなら、  
いつそ、汚れきってしまう前に、殺人鬼にでも殺してほしい。

「って、そんなこと言ったら、また礼慈が怒るか」

眼を瞑れば簡単に思い出せる、子供の頃の私達。

その頃から、礼慈は正義の味方で、今と変わらない。

それが好いと思った。それはすごいことだと思った。

できれば、これからも、そのままいて欲しいと思った。

その夜は、本当にそう思った。

だが、それも一日と持ちやしなかった。

「やっぱり、いっぱん死ぬね！」

翌日の昼休みには、私の怒りは頂点に突破した。それはもう、今から金属バットを振り回しながら校内一週して、窓硝子をすべて粉々にして、ついでにムカツク先輩なんかもボコボコにして、弁償は鳥居礼慈君へ、なんて満面の笑みで、やってしまいたい衝動に顔きそうなぐらいに。

思い出だけでも忌々しい三十分。昼休みになるやいなや、礼慈に呼び出されて屋上へ。まるで愛の告白か、一騎打ちの決闘かというデットオアライブなシチュエーションの予感、後者よりの結果。私と同じように呼び出されていた一之宮小夜子嬢に、礼慈は噴火寸前の火山のような形相で、何をいうのかと思えば、今ながれる私への誹謗中傷の発信源はオマエか、なんて仲立ち役をしようとしているのか、火にダイナマイトを放り込もうとしているのか、もうバカは大人しくしてろよバカと言いたくなるような暴挙にノーブレーキでつっこんだ拳げ句に、小夜子を平手で殴りやがったぞ。平静を装っていたけど、さすがに、思考が銀河の彼方に飛んでいきそうになった。小夜子は涙目で逃げて行くし、こは友情の証として、私が代わりに礼慈を屋上から突き落とすぐらいボコボコにするか、と意気込んだ途端に、あやめがやって来るから、やり場のない苛立ちを拾い集めて屋上を後にするしかなく、とりあえず踊り場のポリバケツを盛大に蹴飛ばして、少しは冷静さを取り戻せた。

そして、ふとした疑問。

「誰だよ、あいつに変な入れ知恵したのは」

礼慈らしい熱血漢な行動だけど、どうしてあんな行動に出たのが、分からない。っていうか誰だよ、小夜子が犯人だなんて言ったのは。小夜子が八年前の事件のことを知ってるとは思えない、あやめもそうだ。

まあ、ありえないこともないけど……だとしても、どうも腑に落ちないな。これは勘だけど、黒幕がいる気がしてならない。だとすれば誰だ？

あれこれ考えながら、とりあえずメシだ、とひと気のない場所へ逃避しようと思えば降りたら、見つけた。

もやしっ子の典型のような針金体型。鬱陶しい長髪に、無味乾燥とした表情で、体型と同じようなフランスパンを担いで飄々と廊下を通り過ぎる男子生徒。

「おまえか！」

瞬間、私の第六感がマツハの勢いで大決起集会を起こした。

根拠も証拠もないが、私は兎に角、その骨つちを、私怒ってませんよとフランクにとつつかまえて、ひと気のない体育館へと連行した。

そして、私の不機嫌さを察した奴に、私がさっきまで誰といたかと尋ねたら、こいつはあつざりと、私が言いたいことまで察した上で、自己弁護をはじめ、あまつさえ「奥津城。男運ないだろ」とまで言いやがりました。

「礼慈を、そそのかしたの、アンタでしょ」

私の追求に、神籬安良は最後まで飄々としていた。

まあ一通り、私の鬱憤を愚痴に変換して放出して、再発防止策に努めよと指導した。そしてロボットみたいに黙々と弁当を片付けて、ついでに礼慈宛の伝言を頼んで、立ち去ろうとして、ちょっと足を止めした。

「ところでさ、礼慈とあんた、何やってるの每晚？」

「はあ？ 礼慈から聞いてないのか」

コンクリートブロックの階段に座ったまま、フランスパンを裁断するように食べる神籬を、立ってる私が当然見下ろすようにして観察しながら尋ねると、もの凄く嫌そうに肉の薄い顔を歪めた。

「まあ、一昨日までは人捜しだったんだよ。手嶋霧霞っていう後輩なんだが。こつちが捜すどころか、昨日、本人が登校してきたから、なんていうかさ、骨折り損のくたびれもうけみたいな、空回りな結末だったのさ。礼慈が、奥津城の所に相談しに言ったとか聞いたが、ホントに知らないのか？」

「ええっと」

うん、そんなこともあったな、ってぐらいしか覚えていない。そうだよ、礼慈がうちに来て、その後すぐに爺やが旅に出たんだよ。そっちの方が私には重要だから、相談の内容なんて忘れてたわ。けど、行方不明の後輩捜しというよりも、もっと危険な内容だった気がするんだけど。

「だったらもうお終い？」

「そうだな」神籬は難しい顔で首を横にふった。

「礼慈は目的を達したから、終わりだと思うが、アイツは何をするかからないからな。オレはオレで、やることが見つかったから、しばらくは探偵と連絡とると思うが……」

「ふうん。神籬の目的って、なに？」

どうしても知りたい訳じゃないけど、なんとなく口がその言葉を投げかけていた。そのまま無視されても私の機嫌が悪くなるぐらいで、どうでも良かったけど、神籬はそうだなと呟いて、不敵な笑みを浮かべた。

「奥津城にはいずれ明かすことになるが。今はあ、ひ・み・つ」

ピントと来た。

私、こいつ苦手だわ。

しかし、放課後になってから、神籬は予言者にクラスチェンジした。認めよう。私は、たしかに男運ないわ。一斉に流れ出る生徒に紛れるように、けど群れることなく足早に校舎を出た。

「奥津城絵馬」

すると、背後から声を掛けられた。振り返り、そいつの顔を見ると、私はすぐに顔を戻して歩き出した。

「おい待てよ！」

喧騒とした生徒の群れの中から、聞いているだけで腹が立ってきそうな偉そうに命令して、そいつは私の肩を掴んだ。

仕方なく足を止めて、そのまま振り返って殴ってやるうかしらと一瞬思ったけど、私は密かに深呼吸をして、平静を装って振り返った。

「手、離してくださいませんか？ 先輩」

微笑みを浮かべて、優しく口調で言う。するとそいつは手を離して一歩下がった。だから見たくもないのだけど、顔が視界に入る。

同じ学校の制服。セーラー服ではないから男子生徒で、腕に付けている校章の色で三年生だと一目で分かる。胸を張って堂々と佇んでいるが、鬼束虎子に比べたら見窄らしい。それでも人を見下すような嫌らしい目で私を見るものだから、なるべく目を合わさないようにして、その両目の上の海藻みたいな髪を見た。

「何かようかしら蕪木先輩」

こういう相手には本心を、感情を晒すのが屈辱的だから、私は似非お嬢様偽装を繕った。そうすれば、間に壁を作れた気がする。

「絵馬。返事を聞かせる」先輩は腰に片手を添え、それでバランスをとりながら胸を張って命令した。

さて、こいつは何を言っているのか、と数秒回想。

「ああ……。それでしたら、先日はっきりとお答えしたはずですが」

私は、笑みを浮かべて首を少し傾けた。

私は目の前の男に告白をされた、らしい。唐突ではなかった。なぜかこの人は、以前から私の婚約者を自称していた。気持ち悪いな、本当に。なんでも昔々、そんな約束をしたとか言う。覚えていないな。あげくに両親同士は承諾済み、だとか言う始末。生憎と、私の両親はいないので、そんなの無効。だから、私ははっきりと断った。当然だ。

「もう一度言いましょうか。私は、先輩が大ッ嫌いです」

私は微笑みを崩さず、この時だけ先輩の目を見て、ゆっくりとハッキリと、周囲の生徒にも聞こえるぐらいの大きな声で言ってやった。

周囲にいた生徒が私たちの方を向く。先輩はその視線の熱湯をあび、茹で蛸みたいに顔を赤くして、肩を振るわせた。

面白い反応だけど、私は早々に校門へ歩き出した。背後では呼び止める声が、罵倒を叫ぶように聞こえてくる。だけどそのまま直進すると、今度は駈け寄って、私の腕を掴んで強引に振り返らせた。

「おい！」罅が入った鏡餅みたいな表情で、怒鳴る。

私は腕を払った。それだけで先輩は狼狽える。怒鳴ったのは、たんなる虚勢。簡単にメッキが剥がれ落ちる。なんて脆い男なんだ。

私はそのまま無言で離脱。

校門を出て、しばらく歩いてから、深呼吸をした。

「もうッ」道端の小石を蹴飛ばす。

小石はアスファルトで二三度弾んで溝に落ちた。なんだか悪いことをした気になって溝に落ちた小石を見た。

「ああ、君も災難だったね」

私にハッ当たりされて、汚れた水の中に落ちた小石くん。恨むなら私じゃなくて、祟りを恨んでね、私は悪くないから。とお経を唱えるより軽薄に一瞥して、立ち去る。

バスに乗る前に、時間があつたから、近くの露店で今川焼きを千円分衝動買い。店のおじさんに、ひとつおまけしてもらったら、ちよつと機嫌回復。なんて現金な奴だろう。バス停に戻ると、大通りへ向かう人混みの中に、見覚えのある人を見つけた。あやめのお母さん。声をかけて挨拶でもしておこうかな、と迷つたけど二秒で止めようと決めて、ちよつと到着したバスに乗り込んだ。なんだか大きな鞆を持って、旅行でも行くような格好だから急いでるのだろう、と後から自分に言い訳をする。

まだ日が高く、バスの窓硝子をすり抜けた陽射しは、白く濁つて、スカートの上にこぼれ落ち、歪んだ平行四辺形に照らす。時間を少しずらしたおかげで、バスの混み具合はマシな方だから、後部座席に座れる事ができた。だけど息苦しさは感じる。どんどん空気が濁つているように。誰かと視線が合うのをさけて、ずっと膝の上に落ちた陽射しを眺めた。

ごろごろと擦れて弾むバスに揺られ、ほとんどの客が降りた辺りで、私は周囲を伺うように見渡してから窓の外を見た。風景は、町から遠ざかり、時代を逆行しているような錯覚が、天使の囁き程度に襲ってくる。

なんて無害。

なんて退屈。

コンクリートと鉄の障害物が減っていく。かわりに壁のような山々、樹海が窓の額縁を占めていく。

人の気配が消えていく感覚が、私に安堵と平静をもたらず。バスに乗るまでの苛立ちが、だんだんと洗淨されていく。

田園風景とそれを囲む樹海。バスは、私ひとりを下るすために停車した。いつものバス停に下り立ち、バスが走り去ってから動く。まるで物置のようなバス停の後ろには細い砂利道が樹海の方へ続き、辿っていけば、家に着く。だけど、私はそのままバスが過ぎ去った方とは逆の方向へ歩き出した。そこからすこし進めば、神社の入り口に近いからだ。実際に計つた事はないけど。

歩道のない道。時々空を見上げた。雲が掠れた青い空。高い処ほど色は濃い。鴉が、低い地面を歩いてる人間への当てつけのように、颯爽と黒い翼を広げて飛び去っていく。いとも容易く飛び去る。それが笑みを浮かべてしまうほど少し憎たらしく思えて、石でもぶつけて打ち落としやろうか、なんて思つて地面を見たら、さつき溝に落ちた小石を思い出した。

樹海を左手に眺め、外縁をなぞるような道を歩く。ぽっかりと森に穴が開いている場所にたどり着いて、回れ左。まだ青々と葉っぱを着飾つてる広葉樹がバースデイケーキのローソクより濃い密度で生い茂つて、木々のトンネルを造り出している。

少し入れば、ずっと昔から積もっていた枯れ葉の地面に、灰色の御影石の石畳が一直線に奥まで続く。朱い鳥居を潜り、見上げ続けると首が痛くなりそうな勾配の石段を、急がずゆっくりと登る。中腹当たりまで昇って振り返り見下ると、目眩がしそうになって手すりを強く握りしめた。

押し上げるような風が背中にあたる。町中とは違う、草木の瑞々しい生命の潤いを乗せた匂い。

頂上の大きな鳥居が見えてきた。と、同時に誰かの話し声が聞こえた。「うち」足を止め、舌打ち。

きつと祟り怖さの参拝客か、でもなければオカルトネタが大好物なマスコミだろう。八年前も、うるちよるしてたな、と思ひ出した。その時は、爺やが追っ払ってくれたんだっけ。私はもう子供じゃないんだから、今度は私が追ひ払ってやる。まだ小石を蹴飛ばすより、気分が良い。

それを推進力にして一気に駆け上がる。思わず紙袋を落としそうになった。

境内には二人。あやめと、後ろ姿しか見えないけど間違いなく鬼束虎子。何か話しているように向き合っ立っている。種やかな世間話じゃないのは、あやめの顔を見てすぐに分かった。怯えてる。

「あやめ！」叫んで走り出してた。

あやめの視線が私に向く。虎子が振り返ろうとする、と同時に私は右足を顔面めがけて蹴り上げた。乾いた音が一発だけ響く。蹴り上げた私の右足は、つま先を虎子の片手に捕まれて止まった。

「あやめに何したの！」

虎子を睨みつけると、この女は嘲笑うように口元をつり上げて「世間話だ」と、あからさまな嘘をぬけぬけと言いやがった。しかも溜息のように鼻で笑って私の足を解くと、興味がなくなったように立ち去った。

そのすれ違う間に、私の耳元に爆弾を落とすように、冷笑と共にそんな囁きをあの女は残した。

悔しいから振り返らない。きつと背中で笑ってるに違いない。わざわざ気分を悪くするために動くななんて馬鹿げてる。だからすぐに、あやめのもとに駆け寄った。

「あやめ大丈夫？」

「う、うん」

何時間毛雨に打たれた子犬のように、小さな肩をさらに小さく寄せたように両手で抱きしめながら僅かに震えて、視線はどこか虚るで、今にも涙がこぼれ落ちそうな目をしている。ともて、大丈夫だと思えない。

「本当に？ あのジェノサイドマシンガ女に何かされなかった？」

きつと今頃ご自慢の赤いスポーツカーを爆走させている女に怒りを向けながら尋ねたら、あやめはなぜか笑った。というより、笑われた？

「ちよつと、こつちが心配してるのなんで笑うのよ」

あやめはなぜかさらに笑う。笑いだけのフルコースでも食べたみたいに笑うのだから、怒ってるこつちが馬鹿馬鹿しくなっちゃう。

「もうっ。だからなんで笑うのよ。失礼ね」

「ご、ごめんね。だつて、なんかほつとしたら、つい……………」

目尻に堪った涙を拭いながら、まだ絶えない笑顔のまま、あやめは言つて、大きく深呼吸をするように肩で息を吐いた。その時、拭い切れなかった涙が流れたのを、私は見守った。

「ま。大丈夫そうでなによりよ。いい？ 今度あの女にあつたら、速攻で逃げなさい。もうっ世界新記録を狙うぐらいの全速力でね。でないと思げられないから、あのサイボーグから」

言つて、逃げる猛犬を追いかけて蹴り飛ばした虎子の活躍を思い出し、人間であの女に勝てる奴はいるのかと、子犬のように円らな瞳を潤ませているあやめを見て思った。逃げられないだろうな、きつと陸上部の礼慈だつて無理だもん、と思つたけど私は言わなかつた。

「うん。がんばつてみる。ありがとね絵馬ちゃん」

「い、いいわよ別に……………」

言えるわけがない。こんなに私の言葉を信頼しているんだもの。サンタクローズを信じている子供に、サンタさんはただの肥満おじさんなんだよ、なんて言えないのと一緒に。

私は話題を変えることにした。

「ところで、あやめ。あんた、なんでここにいろの？」

当たり前障りのない事を尋ねたつもりだけど、言つて、後悔した。

「絵馬ちゃんに会いに」あやめは即答した。

女の勘なんて必要ないぐらい繕つたような微笑みで、嘘をついたぞ。

「シキと会つてたんでしょ」

問い詰めると、あやめは案外あっさりと白状した。

あやめの手には紙袋があつた。ちょうど私が飼つてきた物と同じだつた。どうやらシキに餌付けをしていたらしい、とすぐに分かつた。

伏木町の端に小さな池のある公園がある。そこへ、あやめと行つた時、この子は、その池のほとりで魚か鳥の餌をわざわざ買つてまで、餌付けするような子なのだから、シキを見たら、まあそういう母性本能というか動物愛護の精神が燃えるのだろう。そういう世話好きっているんだな、案外身近に。

「まあいいわ。ほら行くよ」

他人の趣味趣向には、こちらが迷惑がかからない限りは放置する現代の子の私は、手招きして林道の方へと歩き出す。

「行くつて、どこに？」

「どこつて、私の家よ」

もしかしてシキに処にでも行くと思つたのだろうか。まさか、そんなはずはない。絶対にそんなことはしない。したくもない。してやるもんか、と心の中で呪文のように三段活用で唱えた。

「行つてもいいの？」

後ろで、あやめが不安げに首を傾げる。弱々しく無害そうな表情に、動物愛護精神が、うずいてしまう。

「私に会いに来たんでしょ？ だったらこんな処より私の部屋に行きましょ。ほら、置いていくわよ」

言つて、私は少し歩いて振り返つた。

「もしかして、もう帰る？」

「ううん。帰りたくない」

投げたボールをくわえて戻ってくる犬のような勢いで、あやめは駆け寄ってきた。そして減速して、私の歩みに合わせる。

「あのね絵馬ちゃん」

少し斜め後ろを歩くあやめが、私に腕を縫るように掴んだ。

「今日、泊めて」

足が止まった。

それは、聞き間違えかな、と自分の聴力が心配になるほど実にナチュラルに、しかも唐突だった。

あやめの顔を見る。

とめて、とはどうやら足を止めて、という意味ではないらしい。

「……………マジデスか？」

◇

方々から轟くように、木材が軋む幽かな音さえ響く静かな深夜。

ふと、目が覚めた。

横で寝ているあやめを起こさないように、布団の擦れる音さえも気をつけながら、私はそっと体を起こした。

蛍光灯はとうに眠って、竹林に面した窓から幽かな明るさが部屋を、ほんのすこしだけ照らす。月光の光にも劣る明かりの中で、やっと周囲の輪郭が分かるほど目が闇に慣れてから、布団を抜け出して、枕元のカーディガンを羽織って、そっと部屋を出た。

しんと静まりかえった廊下は暗く、冷え切った板張りが、より一層覚醒を促すものの、飛び跳ねたりできるほど気息さは抜けない。それをそのままに台所に向かい、コップ一杯の水を飲んで、深海から浮上したように大きく呼吸をしたら、頭がだんだんとクリアになってきた。

誰もいない居間を眺め、不気味なほど静かな気配を感じながら、夕食時の傷がまだ癒えない台所の惨状を眺め溜息をひとつ。賑やかだった気配。爺やが見たら、きつと叱られるだろうなと、あの怖い仏頂面を思い出しながらも、それでもちよつと楽しかった時間に頬が綻ぶ。

部屋に戻り、中には入らず襖の隙間から布団の中で体を丸めて眠っている女の子の姿を確認。よく眠ってる。無防備な寝顔に、知らず頬が緩んでしまう。

そっと襖ふすまをしめて玄関へ。そして鍵をあけて外に出る。

風が、少し冷たい。取り囲むように、風に撫でられた木々が葉音を鳴らし、まるで輪唱のように、しばらく続く。

夜空を見上げた。

月は見えず、だけど深い、見上げ続けると目眩めまいがするほど深い暗闇に、針で穴をあけたような星々が輝くと、あの闇を捲めくると、アルミホイルのような空でもあるのかと思えた。

深く息を吸う。夜気で濾過ろかされた空気が、体の中で循環じゅんかんしていく。

庭を抜け、林道へ。

耳をすませば、微かに鈴虫の鳴き声が聞こえる。

時々風が吹く。風がなくても、林の木々は周期的に揺れているように、葉音が絶えず浮遊している。鳴りやまず、だけどここはとても静かだ。

外灯は無い。空は蜘蛛の巣のように広がった木々の枝と葉に覆われ、輝きは地上にまで届かず、漂うような闇に包まれ、だけど幽かな輪郭だけは、慈悲のように残されている。

凜りん、と鈴の音がした。

足を止め、息を潜めて耳をすませていると、もう一度鈴の音が聞こえた。目の前に滑らかな闇。神社の石灯籠の小さな灯火も、ここまで届かない。方向を樹海の方へ変え、道なき道を勘だけを頼りに……鈴が鳴る、まるで導くような音を辿って歩くと、闇のなかに輪郭が溶けたような土蔵が見えてきた。そして更に近づくと、その前に白い影が立っていた。

深夜の森に、人影。間違えなく、それはシキ。

あやめだったら、幽霊だと思って悲鳴をあげて腰を抜かすかな、なんて思いながら近づくと、コントラストが溶けた人影が、闇のなかでも明確に独立したように鮮明になってくる。

白い着物の裾が、膝まで伸びた草と一緒に風に揺れているから、まるで宙に浮いているように見えるから。

「あ、やっぱりお姉ちゃんだ」

周囲の暗さに反比例したような声でもしてなかったら、樹海で亡くなった少年の幽霊じゃないかと思ってしまう。もしかしたらシキは、わざとあんなにも嬉しそうな底抜けに明るい声を出しているかもしれない。でも、今よりずっと小さかった時、シキをお化けと勘違いして大泣きして時があって、もしそれを覚えていてのことだとすれば、ありがた迷惑のうえに、性根の悪い挑発だ。

だから、無言で近づいて、下段右膝蹴りを放った。

「にや！」

変わった生き物の鳴き声が聞こえた気がした。

片手をあげて挨拶をすませたような流れで、土蔵の入り口の前のコンクリートの小さな階段に腰を下ろす。

ワンピースのパジャマのまま、布越しに、ひんやりした冷たさがお尻に伝わる。それも数秒。私の温もりをコンクリートに分けられる。人間とコンクリートだって分かち合えるのだから、平和なものだ。

台所からもってきた紙袋を隣に置く。中身は、すっかり冷え切った今川焼き。中身のクリームも、すっかりくたびれて美味しそうな匂いは、もう放ってはいない。

シキが、紙袋を上手に避けるように隣に座った。まるで葉っぱでも落ちてきたような静かさだ。

「今川焼き……だよね」

シキは首を傾げながら上目遣いをするように顔を向けた。まるで、食べても良いですか、とおわずけを喰らってる犬のような表情をするものだから、紙袋から一個取り出して渡した。

「よく分かったわね」

まるでリスがドングリをかじるように、小さな今川焼きを両手で持って、小さな口で少しずつ、かじるように食べるシキを、膝で頬杖をついて眺める。

「うん、匂いで。良い匂い」言って、リスはどんぐりをかじり始めた。

紙袋に顔を近づけて嗅いでみたけど、紙袋の匂いしかなかった。

「あ、お姉ちゃんが来たときも、良い匂いがしました」食べるのを中断して、頬張った顔で宙を眺める。

「すっごく柔らかくて、優しい、お姉ちゃんの匂い」

星を語るようなゆっくりとした声で、緩ませた口元を、甘いお菓子へと近づけて笑みを作るように口を動かす。

「……変態」

自分の長い黒髪のひと端に、鼻に近づけて石鹸の匂いを嗅ぎながら、髪の毛のなかに染み込ませる風に密かに呟いた。

けど、きつと聞こえてるはず。猫みたいな風体だけど、その実、犬並の嗅覚と聴覚があるのは、嫌ってほどおもしろされてる。特に耳は、私達とは使い方がちがうし。

りん、とどこからか鈴の音がした。

シキの方を見たけど、鈴の音は少し遠くの方から聞こえて、それが近づいてきた。草むらのなから白い猫が現れ、少しだけこちらを向うように止まったら、軽快な足取りと連動した鈴の音を伴って近づいてきて、軽やかにシキの膝の上に乗る、座礁したクジラのように身を伏せた。ふさふさとした毛並み。シキが柔らかかそうなその背中を撫でて、食べかけの今川焼きの端を少し千切って、猫に食べさせようとしたけど、そっぽを向かれた。

「いらないの？ おいしいのに……」残念そうに欠片を自分の口に運ぶ。

どうやらこの猫は美食家らしい。もしかくは知らない人から食べ物をもたらすはいけません、ときちんと躰をうけているのだろう。見たところ、野良猫ではなさそう。首には鈴のついた赤い首輪が巻かれている。

鈍い灯りを閉じこめたような瞳で猫が、私を見た。

「懐いてるわね、その猫」

ぽつりと呟いた私の声に、シキは首を傾げて顔を向けた。

「ね、こ……？」まるでお化けでも見たような顔をする。

「そうよ……まさか、猫、知らないの？」

「……知ってるけど、分からなかった」萎れるような声。「そっか、きみが、猫なんだね」

そっと、花卉に触れるような優しさで、猫の背中を撫でるシキの口元が、傍げに、幽かに笑みを浮かべたように見えてしまつて、それを長くは直視できなかつた。

猫なんて、小さな子供だつて当然のように分かる。そんなの常識なのに、シキには、その常識が通用しない。森の中しか世界を知らない、両手で数えられる程度しか他人を知らない。そして、見えるモノほとんどは、きつと、包帯で覆われた夜のような闇。

私達とシキとは、棲んでる世界が違う。

それは文化とか言語の違いより、きつと隔絶的なほどの違いがあるのかも知れない。

すこし腕を伸ばせば届く距離に居るのに、私とシキの間には硝子のように透き通つた拒絶という壁がある。もちろん、それを作っているのは、こちら側の人間、つまり私達だ。

拒絶するのは、常に多数派の群れ。個人は避ける。群れは、それ故に鈍感で愚鈍だから、避けることができないから、傷つかないように沢山のシールドを纏っているんだ。服を着て家を籠もつて、社会を作つて法律を敷いて、道徳とか宗教とかで心まで覆つて、あげくに死んだら死に装束に棺桶とお墓。

そうやってどんどん装飾を増やして、終いには、群れどころか、個人までもどんどん濁つたように鈍い生き物になつて、不自由になつてしまふ。

ここから一生、出る事が許されないシキと、どこへだつて行ける私。

どちらが不自由なのかな。どっちが、鈍く汚れているんだろう。

「あれ？ 尻尾は一本なんだあ」

緩い声に視線を向けると、シキは猫の尻尾を摘んでいた。手には今川焼きはもうなくて、頬張つた顔を左右に傾げている。

「なんだあ、猫又じゃないんだあ、きみ」

「猫の尻尾は普通一本よ。……二本も三本も尻尾がある猫つて、どんな猫よ」

「ん？ 猫又です」

「だから、なにそれ、どら猫の仲間？」

「妖怪です」さも当然と言いたげな口調と態度で、シキは言った。

返す言葉も反応に困り果てた私。沈黙で距離を取るように数秒、何も言えなかつた。その間に、シキはふたつ目の今川焼きに手を伸ばした。そして普通の白猫は、背伸びをしながら優雅に欠伸をした。

「シキ。あやめとなに話したの？」

言つて、シキの膝の上で丸まっている猫に手を伸ばそうとしたら、バネのように猫は飛び退いて、どこか暗いところへ逃げてしまつた。

「もしかして、妖怪の話？」

逃げって行った猫を探すように、視線を遠い闇へやりながら訊いた。

私達が学校で話すような当たり前の話が、そもそもそれらを知らないシキに出来るわけがない。シキが知ってることは、すべて後ろの土蔵の中に入っている古びた本の知識だけ。山のようにあるそれらは、ほとんどが、子供が好きそうな不思議な生き物や妖怪の本だったり、およそ私達には縁遠いものばかり。それに、私や爺や以外の人と……人と話す事自体が、彗星のように希有な経験なんだから、まともな話が出るわけがない。

「うん」甘いお菓子を口に含みながらシキは頷いた。

「誰かと話しができるって、すごく素敵だよ。命に触れてる……」

儚げな微笑みを向けるシキ。まるで奇蹟に出逢った子供のような目が、その白い膜の下にあるのだろう。それが天蓋のような木々の間から、星を見上げるように空へ向いた。

ふたりで夜空を仰いだ。

闇。

黒い、黒い、黒い濃い闇が、小さな汚れを隠す。圧倒的な夜闇の中では、醜悪な汚れは、星の瞬きよりも霞んでしまう。

匣の中にいるように、賑やかな営みも毒々しい鮮やかさも、ここからでは遠い、おとぎの国のように遠い。停滞に似た静けさは、死んだような静けさは、結晶化された静けさは、優しく包み込むような沈黙と共に、わたし達を見守っている。

風が、忍び足で吹き抜ける。

撫でるような葉音。

肌に触れた冷たさ。

目を瞑れば光はない。

断線していく実感。

眠りに誘う深い浮遊感。

どこかへ墜ちていってしまいそう。

どこかへ飛んでいってしまいそう。

夢へと消えてしまいそう、自分。

つなぎ止めるものは、闇にはない。

私ひとりでは、地に足がつかない。

「孤独の人生に生死はない、夢と現実の境界がないのと同じ」

ふいに、自分以外の重みが腕に寄りかかった。

「命って、自分独りだけのモノじゃないと思うんだ。独りだと、空っぽ」

寄りかかるシキの体は、とても軽かった。

突き放すことは簡単。だけど。

「独りでは、生きていけない。独りでは、死ぬこともできない。誰かに寄りかかっていないと、命は、きつとどこにもないから——」

私は、しばらくそのままにしていることにした。

布ごしに伝わる。

たしかに命は、今、ここにある。

頭上を列車が通過する。

轟音の残響に血塗られた断末魔が溶ける。

血。吹き上がり舞い、散り朽ち落ち、小石を染め、砂に濾過された。

顔。顔面神経の暴走により決壊した表情は凝固して保存されるだろう。

手。掴もうとした、何をとさえ分からずきつと、空の手は閉じる。

腹。裂けて濡れて零れて欠けて、静かに垂れた。

首。折れて曲がり、砕けて剥がれ、緊ぎ途切れ。

肌。裂ける切れる、切れる抉れる、抉る裂けた、切れる剥がす。

足。投げ出した。動かない。動かせない。逃げられない。どこへいく。

眼。閉じることなく、それを見ていた。そして、見られていた。

顔にかかった血飛沫とナイフから垂れる血液の温度に反比例するよう

に、数秒前まで彼を支配していた情熱は冷め、溜息と共にどこかへ消え

てしまったようだ。虚ろな酸素を吸い、情熱と二酸化炭素が吐き出され

る。その繰り返しで、身体は黄金のように重くなり、けれど、輝きなど

虹彩や結晶板にさえない。

最初にナイフを突き刺した時の情熱はもうない。

皮膚から肉へと突き刺さしていく快楽はもうない。

暗闇に飛び出した同色の血飛沫の美しさはもうない。

胸を刺し腕を裂き腹を抉り喉を切り、さて、次はどこを刺そうという  
楽しい選択も、胸は硬く腕は長く腹は柔らかく喉があっけなく。じゃあ  
頭を刺したらどうだろう、という好奇心も枯れ果ててしまった。

しばらくその場に立っていた。その間に頭上を電車が二回通過した。

その間ずっと、死体を見下ろしていた。すると闇に眼が慣れて、水面

に投げ出された腕から、血が川へと流れていくのも見えた。その濃度の

低下、広がり、雲に似た曲線と形へのこだわりのなさを、さらに電車が

一台通過する間も眺めていた。

そして残ったものは、憎悪。

酸素を補給し燃え上がり炎のように、それは激しく、瞬く間に彼を支

配する。体内で燃え上がった怒りの炎が、体外へと燃え移るのに、時間

はかからなかった。

ナイフに付着した血はもう乾いている。それをもう一度、二度、三度

と冷たくなった死体に突き刺し、サンドバッグか捨てられる事が決まっ

たナイグルミのように、罵倒しながら表面の原型が壊れるまで、一心不

乱に、ただそれだけを一所懸命に、真剣に、我武者羅に、そのためだけ

に生きているかのように、死体をナイフで壊していくそれは、殺す時よ

りも濃厚な狂気に酔いしれているように夢中だった。

ナイフを捨て、押し殺した咆哮と共に、死体の頭を両手で掴み上げ、

それを鉄橋の柱に叩きつけた。コンクリートの柱から鈍い音と共に、歯

ごたえのある振動が伝わる。

その伝播で、徐々に落ち着く。二度三度繰り返した。

頭蓋骨が割れ、脳漿が垂れるまで繰り返す、最後には両目を抉り、ボーリングの球を持つようにして地面に叩きつけた。もはやそれが何であつたかさえ、シルエツトでは判別できないであろう。

頭部が著しく破損し、胴体はまるで捌かれるのを待つイカみたいに、あらゆるモノが重力に従順と垂れていた。

乱れた呼吸のまま、壊れた肉塊を一瞥し、ナイフを拾って去る。

その潔さは、川へ流れた血液のより粘性は低い離脱だった。

◇

町外れの河川。二つの町を繋ぐ鉄橋の近くに、夜闇の中で不気味に影を彩り点滅する赤ランプの群れ。まるでテントウムシの群れのように警察車両が道路を占拠し、鉄橋の舌では、暴力的なまでの光量のライトが一カ所を照らしている。その周りにはバリケードのようなロープと、顕微鏡で見る単細胞生物のように忙しなく動く警察官達がいた。

それらを観察するような位置、鉄橋の上にはスーツ姿の女性が、細胞の動きを冷徹かつ無感情な眼差しで観察しながら、耳にあてた携帯電話の呼び出し音を一分ほど聞き続けて、それをポケットにしまい溜息を漏らした。

「こうも沢山死人が出ては、こちらまで忙殺されてしまいそうですね」  
淡い赤ランプに微かに照らされながら、喪服姿の老人が、機敏な足取りで赤く染まった闇から現れた。

「恋人へのラブコールですか、鬼束女史」

穏やかな笑みを浮かべる老紳士へ、鬼束虎子は無言で一瞥を返した。

「違います。鬼淵さんです」虎子は視線を、眼下の捜査状況へ戻した。

「ほほう」

老人は頷き、彼女の隣に立って、同じように眼下の様子を見下ろした。その時丁度、ビニル袋に包まれた担架がテントの中から出てきた。

「殺人、ですか？」老人は明瞭な発音で尋ねた。

「全身をバラバラにされ、ご丁寧に匣に詰められている。これが人の仕事ではないのなら、近くにお行儀の良い大型肉食獣がいることになる。そうなれば事故か自然災害ですね。私の管轄外で助かる」

棘のある文句に、老人は朗に笑って頷いた。

「一日一休。私は人体解剖が好きですが、解体は重労働ですので、老体には辛い。……………勉強熱心な殺人犯ですね」

「殺人中毒者、という意味ですか、葬儀先生」

「いえいえ。手慣れてきている、という意味です。上手くなってますよ。おそらく三十分ぐらいは、解体時間は短くなっているでしょう。これは、ええ、あくまでも私個人の感想です。中毒というのでしたら、殺人よりも解体でしょうね。人を殺すのが好きなら、もっと隠蔽するでしょ、長く続けるため。ですがこれは、ほらこれ堂々と放置、わざわざ解体までして匣にまでつめてですよ。殺人中毒者のやることではありません」

「つぶ。さすが、スプラッタ狂も半世紀を超えらると言うことが違いますね」

鬼束は手すりに背をあずけ、道路を歩き交う制服警官と、深夜にも関わらず集まってきた野次馬へと視線を向けた。経験上、愉快犯や注目を浴びたい目立ちたがり屋な犯人は、よくこうして自分が起こした事件で人々が、どう反応するかを確かめに現場に現れることがあるが、今はマスコミという優秀な観察役がいる。それでも一通り、野次馬の顔をスキヤンしてた。

「それで……………死体を匣につめる理由については？」

「わかりませんね。殺人犯の思想でしょう。死体の解体というのは先にも言いましたが、かなりの重労働なのです。しかも夜とはいえ、町中で、いつ人眼につくかもしれないという条件下となると、使う道具は簡素なものでしょう。一時間程度では……………無理でしょうね。そこまでしてバラバラにしたら、普通なら隠蔽しますよ。そのために、解体するのでしょうから」

「そう、普通は事件の発覚を恐れて死体を隠滅する。その過程で遺体を運搬し、隠蔽しやすいように解体するもの」

「ええ。ですが、そこまでして匣に詰め、隠すでもなく放置。これは明らかに不合理です。不合理であれば、それは情動的な……………殺人者の思想が大きく支配した行動でしょう」

「まあ、ごもつともですね。手間暇掛けて己の思想を主張するんだ、こいつは、さぞかし頑固者か自己顕示欲が強いのだろうね」

「それは私の専門外ですね。そういう相談なら儀人にすべきですよ。それに彼は私よりも、犯人に近い。……………もつとも奴は、こんな殺人はしませんかね」

河川敷から上ってきた担架が二人の目の前を通り過ぎ車に乗せられた。それを葬儀老人は、無感情な眼差しで見送り、思い出したように呟いた。「そういえば、儀人は不在でしたね……………おまけに、鬼淵君も帰郷してしまっているとは、なるほど、さすがの鬼束女史も焦ってしまいますか」

「貴方は、いつから精神科医になった」

「冗談です。……………そうですね。儀人がいなければ、彼にでも、相談してはいかがですか？」

「……………シキ、か？」鬼東はいぶかしげに、葬儀老人の表情をみた。

「……………ええ。違った視点からの話を聞くだけでも、役に立つでしょう。

彼は少々……………変わってますからね」

「そうだな」頷き、険しいまま硬直しているような葬儀老人の表情に、虎子は眉をひそめた。

「……………シキを推すわりに、あまり気が乗らないようですね、葬儀先生。

奴の主治医として、不安なことでもありますか？」

抑揚された声での質問に、老人は陰鬱な眼を向け「貴女はカウンセラーでしたかな？」と苦笑いを浮かべた。

「……………そうですね。今はあまり刺激を与えたくない、ですね。最近、儀人は、彼を少々自由にしました。環境が劇的に変わったせいで、彼にあまりよくない影響が出るのではないかと危惧しています。が、困るのは私ではなく、儀人ですからね。それと彼は、患者などではありませんよ」

魔力を帯びたように陰の落ちた瞳が鈍く煌めき、老人は強い声で、けれど啞く細さで声にした。

「いざれこの国を襲う病魔に対抗するための、尊い実験体です」

そう語る葬儀老人は、医師とは違う、もっと暗い部分を剥き出しにした顔を見せていた。

虎子はそれを聞いていた。表向きは先程までと変わらない平和的なものだが、一秒後の死を幻視したように胸のライフルホルダーに意識をむけていた。いつでも、銃を抜けるように。

「ろくな死に方をしないな、貴方は」

咄かれた虎子の嫌味に、老人は穏やかに笑って返した。

「当然でしょう。私達は、沢山の命を犠牲にしすぎ、生きすぎ、業を重ねすぎた。今も、若者の未来を犠牲にして生きている。そうすることでしか、己の人生に価値を見いだせない老いぼれが、安穩のうちに死ぬるとは願う事すら憚れる。私は魔道に、儀人ならば修羅道に、互いに足を踏み入れた瞬間に、それは覚悟していますよ」

自身の生涯の終焉を語る老人には、悲しみなどなかった。他人事のよう

に自分の死を語る。まるで死体の検分を行うように淡々と。「貴女は踏み誤ってはいけませんよ。魔道に生きた者達が、どんな最後を向かえたか、かの一族を見た貴女なら、分かるでしょう」

「……………承知しています」鬼東は誓うように頷いた。

「そう、それで思い出しましたが……………。葬儀先生。例の薬、なにか分かりました？」

「ネバー・モアですね」

そうですね、と鬼東は頷く。老人は黒い革靴から一冊のバインダーを取り出し、それを渡した。渡されたそれには、人名が記されたリストが挟まっていた。

「貴女の読みどおり、あれは秘薬で間違いないでしょう。加工され、質はズいぶんと低下はしていますが、本物ですよ。値段を聞いて驚きました。私なら、すべて買い占めますね。大安売りにも程があるというものです」

「それで、このリストは？」

「首謀者と目される間道舜一と、関わりのある者のリストです。秘薬を、誰が加工したか知りませんが。はつきり言わせてもらえば、酷いですよ、これは。それでも、これを密売するのなら協力者が必要でしょう。とりあえず、めぼしい者達のリストを作っておきました」

「そうか……ズいぶんと気が利くな。それに手際がいい。これだけの数を昨日今日で作るとは……」

「いいえ、それは私ではなく熾天王寺からのプレゼントです」

「ん。御前が、なぜ？」

「どうも孫息子も一枚噛んでいたからでしょう。彼、あれで結構な、孫煩惱ですからね」

「なるほど、御前といい御隠居といい、それに貴方も。ズいぶんと孫には、お優しいのですね」

「ええ。孫はやはり可愛いですからね」

「よくもぬけぬけと、そんなことが吐ける」

「それはそうと。……ネバー・モアに関して少々、気になる点があるのですよ」

虎子はリストに落としていた視線を、老人へ向けた。

「間道舜一がネバー・モアの主犯だしたら、どうもその動機は不明瞭なのです。売買の値段も安すぎる、まるでお菓子だ」

「それは学生をターゲットにしているからでは。しかるべき相手に売れば、それこそ貴方にでも売れば、大金が手に入るだろうが、それでは」

「それでは、確実に正体が知れ、殺されるでしょう。ですが、だからといって、あれはまるで、誰彼構わず買わせようとしているようです。採算を度外視しているうえに、危険です。それに、依存性は既存のものよりも弱い。普通なら、依存させリピーターを確保するでしょうが、これにはそれをまるで考えていないように思える。これは……そう。まるで実験です」

「実験？ ドラッグの購買層のリサーチでもしている？」

「いいえ、これはネバー・モアの効力を確かめているのでしょう。貴女からいただいた幾つかの薬を調べたら、これ、改良もされているのですよ。改良というよりも、バリエーションを増やしている、と言った方がいいでしょう。ただ売って銭を稼ぐための薬とは、どうも違う。それどころか、これがもし薬の効力を知るための実験だとすれば、間道舜一がこれを行う理由がどうも分からない。これは私の印象ですがね、もしかしたら間道舜一は、何者かに、操られているのではないのでしょうか」

葬儀老人の言葉に、虎子は静かに瞼を瞑り、その仮定を吟味するように数秒、思考を巡らせた。

「私は、それを少し探ってみようと思います」

鬼束が眼を開けたとき、老人はすでに背を向けて歩き出していた。

「もし黒幕がいるのなら、それは間違いなく私達側の人間ですからね」  
去っていく葬儀老人を、鬼束は呼び止めることなく見送った。

しばらくすると部下が死体の身元の確認がとれたことと、第一発見者の聴取の報告にやってきた。そして先ほど起きた自動車事故の被害者が病院で息を引き取った事と、ひき逃げをした車の捜査の進捗具合なども続けて報告された。

「どうや今夜も長丁場になりそうだ、と鬼束は空を見上げ、紫煙のように溜息を漏らした。」

◇

忘れ物の行方を確かめるように舞い戻った。

そこにあつたものは、そこにあつた時よりさらに壊れていた。それでも綺麗に片付けられている。まるで散らかったオモチヤを、寝ている間に妖精達が代わりに片付けてくれたように、自分がもたらした結果が、誰かによって別の結果に取って変えられていた結末は、もはや他人事のように。

「だけど、それは興味の対象が散らかっていたオモチヤから、オモチヤを片付けた妖精へと移っただけにすぎない。その正体を暴いてみたい、散らかったオモチヤを片付ける姿を、どう片付けるのかを確かめたい。それは幼い子供がベッドに潜って、サンタクロースがやってくるのを寝ないで待ってしよう、という好奇心に近かったと彼は思った。」

「サンタクロースや妖精なんか、いやしないだって？」

「なるほど。たしかにそんなメルヘンを信じるほど幼くはない。」

「けど、サンタや妖精じゃなくても、たしかに、いる。」

「何が、いる。」

「姿を見せない、何が、たしかに、いる。」

「すぐそばに。すぐ後ろに。すぐ前に。すぐ横に。頭上に。息がかかるほど近くに。見ている。隠れている。きっと、どこかに、近くに、そばに、すぐそこに、いる。」

一度じゃない。これで四度目。

人が死んだら、やってくる。

闇の中から、闇が消える前に。

人を殺したら、やってくる。

眠りにつくと、やってくる。

匣を抱えて、どこからか。

バラバラに散らかしたよ。

綺麗に散らかった命のクズだ。

片付けない、そのまま去ろう。

汚れてしまった汚れてしまった。

血が吹き飛んだ、臓腑が垂れた、たくさん垂れた。

汚れてしまった散らかった。

僕は知らない見たくもない。

触りたくない。汚れちゃうから。

そのままそのまま、知らんぷり。

さよならさよなら、知らんぷり。

誰もいない。もう誰もいない。

やってくる。匣を持ってやってくる。

血を集め、腑集め脳漿集め。

手足千切って指切って、バラバラバラバラ

頭叩いて、壊して断ち切り、バラバラバラバラ。

砕いて散って、集めて集めて匣の中。

綺麗に綺麗に匣の中。

汚れてしまった、さあ匣の中。

誰かが匣の中、何かがぎっと匣の中、きっとすべて匣の中。

人が死んだらやってくる。

人を殺したらやってくる。

夜になったらやってくる。

汚れた死体を片付けに、匣をもってやってくる。

誰もいなくなつてから、匣をもってやってくる。

知らない内に片付けて、誰にも知られず去っていく。

ほら。いるでしょ、妖精さん。

「あやめ。悪いけど、学校には独りで行ってちょうだい」

寝不足の頭は、たしかそんな事を言ったのを覚えている。あやめに暴力的に起こされて、それで限界だったのか、私は学校を休む事と昨日ごたごたに巻き込まれた小夜子への伝言をあやめに託して、早々に布団の中に潜り込んで、二度寝をしたらしい。

そして現在、午前十時を回った辺り。鉛なまりの東でも背負ったような氣息けだるさで布団から抜け出して、顔を洗って歯を磨いて、寢癖ねびくが酷くてセツトするの面倒だから、目覚めのシャワーを浴びて、髪を乾かしながら居間で独り、ニュースを見始めた頃には、もうお昼。

テレビのニュースでは、世界各国がよほど平和なのか、こんな田舎町の事件をどのニュース番組でもとりあげていて、モザイクがかかっていただけ、うちの神社らしき映像まで映し出されていた。もちろん無許可。他にも、どう見ても用意されたようなセリフを言わされている住人へのインタビューとか、まるで特撮映画のセットみたいに注連縄しるななとか藁人形わらにんぎょうとか飾り付けられた住宅が映し出されていた。ここまで来ると、本当にこの冬公開の映画の宣伝のように思えて、現実味が持てない。たしか去年ぐらいだったか、どっかの町で起きた殺人鬼事件の時もこんな芝居があったニュースをしていた気がする。もしや使い回しか。

それから、切ろうかなと思いつつも、ショートにする気がまったくない髪が乾ききるのを諦めて、タオルを畳の上に投げた時、まるでそれを咎とがめるようなタイミングで、玄関の硝子戸を叩く音がした。呼び鈴があるのに、それを使わない辺りで、すぐにその来客の正体を直感した。

「貴様に用はない。シキに話がある」

玄関を開けると、そこには直感通り、威圧的なほどフォーマルな装いの鬼束虎子が仁王立ちしていた。開口一番に挨拶をするという常識がない社会人、しかも刑事を見たのは始めてだ。

「シキに……何の用よ」私はいつの秘書じゃないのよ、と言ってやりたかったが、それを視線に変換した。

「連続通り魔殺人のことは、知っているな」

目の前の冷血女刑事は眉一つ動かさず、陰しい顔付きのまま尋問めいた問いかけをする。

「それがなに？」

「昨夜も犠牲者が、箱の中から発見された。死体を箱に入れるという手口に関して、なんらかの宗教的意味、儀式的なものがあるのではないと、思ってたね」

「それで爺やに話しを？」

「ああ、本来ならそうしたい。ああ、これは私的な行動だ。立場上、結構自由に動けるんでね。だが居ないのだから、シキにと思ったんだよ。これは葬儀医師の推薦だ。あいつも、そういう話には詳しいだろ」

「ダメよ」

いつでも戸を開かれるように手を添えながら、ハッキリと断った。

「なぜだ」まるで受け入れられて当然の誘いを断られても、自信と余裕にみちた顔を少し傾け、腕を組みながら虎子は目を細めた。

「夏の事件で、オマエは私に借りがあるのだぞ。これぐらい受け入れても、まだ利子が余る」

「それでもダメなものはダメなの。だいたいね、その借りだって、虎子じゃなくて鬼淵さんにでしょ。そうよ、あの人はどうしたの。爺ややシキを頼る前に、あの人がいれば、どんな殺人鬼だって、簡単にお縄にできるでしょ」

「そうしたいが、生憎と、先輩は地元の事件の捜査のため帰郷しているし、吸血鬼や魔術師が犯人ならともかく、この事件まだ、怪異はない。本来なら私だって管轄外だが、あの薬が多少なりとも関わっているようだから参加しているだけだ。それにな、今はその捕まえるべき殺人鬼がどこのどいつなのか分からないんだよ。手がかりは匪だ。その匪について、話を聞きに来ているんだ。分かったか？」

死人を増やさないように捜査に協力しろ、と虎子は付け足した。

ズルイ。最後の言葉は卑怯だ。虎子がここに来た理由も分かったし、人選も納得してる。私がそう考えてるときっと分かっただけで、人命をちらつかせたんだ。

「絵馬」

小さな溜息を吐いて、それまで纏っていた威圧的なオーラも肩の力を抜くように和らげ、虎子は柔和な面持ちで私を見つめる。

「葬儀先生から、シキの事は聞いています。あれと会うなら、と御隠居にも釘を刺されている。貴様が拒むのは、それだろ。それに關しては私も、重々承知している。私は、アイツに借りがある、それを返す前に壊れられては、私も困る。だから、それに関しては、必ず守ると約束しよう」

それではダメか、と刑事ではない鬼東虎子が、泣きやまない子供をあやすような優しい口調で言った。

私は目を瞑った。虎子の言葉の真偽を考えるためではなく、覚悟を決めるための時間を稼ぐために。そして静かに深呼吸をして、体中に蔓延している厭な予感を、外に吐き出そうとした。

私は、とてもイケないことをしようとしているのかも。本当に、シキに外の出来事に關わらせていいのか、と頭の奥で誰かが密かに囁く。

目を開けて、私は後ろ手で玄関の戸を開けて無言で歩き出した。少し遅れて虎子が着いてくるのが、砂利の音で分かった。

「ありがとう」

背後から聞こえた声に、幻聴じゃないかと、一瞬疑いながらも不覚にも、少し笑ってしまった。

庭を抜けて林道へ。地面には万華鏡のような木漏れ日が落ちていた。空を横目で見上げた。鳥の影が飛び去る。脇に入って、獣道めいた道なき道を樹海の方へ向かって歩く。

伸びた草木が足首をくすぐるように触れる。深い絨毯だと思えば気にならないけど、長く歩くと被れないか心配になってくる。

しばらく進むと白壁の土蔵が見えた。土蔵の中は、無人のように人の気配も物音一つもない。もしかしたら寝ているのかも知れないと思っただけど、それを理由に日を改めるほど淑やかな人格をしているはずもない、後ろの女は。

森林の瑞々しい草木の香りは消え、枯渴した匂いが鼻孔をくすぐる。

正面から土蔵の奥まで見渡せる。奥の壁、天井近くの格子付きの窓から差し込む陽射しさえも、ここでは色褪せているのに、その下にあるソファだけは目が覚めるほどの純白。

奥へ進む。両脇には今にも崩れ落ちそうな古今東西の書物の山。棚には、埃を被った神具祭具の類が無造作に置かれているだけ。

まるで死んでいるような物。停滞しているだけの物ばかり。

軋む板張りの床。

ソファの上では、シキが両膝を抱えて丸く座っている。うつむく顔。

寝ている様子だけど、私達の気配に気付いたのか、ゆっくりと顔を上げた。

「お姉ちゃん……、それに虎子さんも一緒ですね」

どこか、うっとりとしたように鈍い口調。相変わらず両目には包帯が巻かれているのに、それでも私達を判別できるあたり、その理由を、私はもう尋ねる気にはなれなかった。

「よく分かったな」

だけど挨拶代わりに虎子が、私の横で足を止めて訊いた。

「はい、足音で」シキは鼻で深呼吸をしながら答えた。

私はてっきり匂いで分かったのかと思っただけど、直ぐ近くにいても虎子は無臭だ。観れば化粧もしていない、透明感のある顔をしている。もちろんタバコの匂いもしない。いつだったか、この犬並みの嗅覚をもつシキを打ちのめす日のために禁煙したと呟いていた。

「お久しぶりですね。来てくれて嬉しいです」

シキが口元だけ綻ばせて、少し高い、幼い声で言うと、虎子は複雑そうに顔をやや顰めたのを、私は横目で確認した。シキはまるで友達が遊びに来てくれたような口調だけど、生憎とこの女はそんな暇人でもなければ、博愛主義者であるはずがない。犬を愛でるより機関銃いじりが大好きな冷血女なんだ。

「シキ。悪いが、貴様と遊びに来た訳でないんだ。ちょっと話がある」

軽い口調で、それでも事務的な態度で虎子は用件を告げる。そしてモデルのような歩行で、ソファの近くに近づくと、膝掛けに腰を下ろした。腕と足を組み、シキに背を向ける形で虎子は話始める。

「今、外では、連続通り魔殺人事件が起こっている」

その言葉で語りだした。

シキは顔を虎子の背中へと向ける。私は所在なく二人から少し離れ場所を立ち尽くす。

「現在、こちらが掴んでいるかぎりでは犠牲者は三名。一人目は高校生。繁華街千近くの路地で殺害されていた。発見は早朝、殺害推定時刻は深夜零時から三時辺り。二人目は十九歳の大学生。深夜の犯行だ。そして三人目は二十八歳男性、職業不明。鉄橋下で殺害されたようだ。殺害時刻等は一人目とほぼ同じ。これは昨夜、殺害からその時間は経っていない間に、巡回中の警官に見えられた」

そこまで話して、虎子は顔だけ振り返ってシキの様子を覗き見た。

シキは何かに怯えているように両膝を抱えて、身を丸めたままソファの上で動かない。私達がここに来た時からずっと同じ体勢。ただ、親指の爪を噛んで、じっと足下を睨むように顔を伏せている。

「その事件に、虎子さんは関わっているんですか？」

さっきの弾むような声とは対象的に、読経のように沈んだトーンでシキは体勢をくずさず尋ねた。

捜査には参加している、と虎子は粘性の低そうな声で答えた。

「鬼淵さんも、一緒ですか？」

「いや。先輩が関わるほどの怪異は、まだ発生していない」

「なのに、虎子さんが捜査に参加している理由は？」

「先の事件の後始末のついでに、かり出された」

間髪入れない問答の後、シキは焦らすような間を置いて、虎子の方へ顔を向けた。まるで見透かすような視線、いや、雰囲気私にも伝わってくる。

こういう磁場を発生させるから、まるで自分のやましいもの、隠していた疵<sup>きず</sup>すべてを、さらけ出されるような気分がして嫌だ。

「虎子さん。僕に……いえ、きつとお爺様に、何か訊くために来たんですよね」

「そうだ」

「何を、知りたいんですか？」

甘言で人々を惑わす悪魔のような響きで、シキは声を発する。一見無邪気そうで、だけど猛毒を含んだような言葉に、なぜか私は緊張を感じて身構えた。

「シキ。……匣を用いた儀式というのは、あるか」

虎子は、言葉を選ぶように慎重に声をだした。きつと、私との約束を守りながら、自分が知りたい情報を得ようとしているんだ。

「……箱を使った儀式はありませんよ。確か、皇室の儀式で、賜劍<sup>しげん</sup>の儀というのがあります。これは天皇家に子供が生まれ、その子供の健やかな成長を願い、天皇から守り刀を授ける儀式なのですが、その小刀は、桐の箱に収められ、子供の枕元に使者が供えます。それに、箱をご神体にして、神社もありますし、他にも魔術的儀式に箱を用いる事があると思います。だけど、虎子さんが訊きたいのは、儀式における箱の存在理由、匣の意味ですよね」

つらつらと流れるように語るシキ。虎子は、そうだな、そっちの方が近いかな、と曖昧<sup>あいまい</sup>に頷いた。

「匣には、どんな意味があると思う？」

虎子の問いかけに、シキは一度天井を仰ぐように顔を上へと向けて長く息を吐いた。そして、私へ視線を向けるように正面へ、ゆっくりと降下する。

「何かを隠すためとか、守るためとか、もちろん収めるために、箱は使われると思いますけど、それは使用方法であって、本質ではないですね。僕も、それは分かりませんが、強いて言葉にするとしたら」

それは、とシキは虎子へ視線を向けて答えた。

「それは——かくぜつ、ですかね」

声を発するシキが、尊大な光に照らされて見えた。

「隠すにしろ守るにしろ、収めるにしたって、つまりは、何かから遠ざける、離すのが匣の能力だと思います。外界と切り離す、かく、隔離するのが目的で箱を使うものだと、僕は思います。もちろん、個人によって違いはあるでしょうけど、つきつめれば、区別したいのでしょう」

「区別？」

「はい。もちろん区別するだけなら頭の中で十分です。だけど、実際にそれを明確な形で表すとすると、別ける必要がある。二つ以上のモノを区別し、それを明確に表すために、仕切り、もしくは壁を作って、隔たりに作る。そうすれば一目瞭然でしょ？ それら区別したモノは、同じではないと表現される。箱を用いるのは、それらを主張するため、意思表示だと思えます。」

極端な話……匣は、境界線の役目を担っているのかも知れません。そ

れによって、現実世界に内包されながらも、乖離した世界を匣の中に作るうとした……結果に近い呪術的思考があるのかも知れません……」

言葉を紡ぐ度にめい、酩酊していく様な声は、最後には、遠い記憶に隣れみを添えるように儚げに途絶えてしまった。その残留した空気のせいか、その場は、しばらく重苦しい雰囲気にも包まれた。

「シキ」回想は長くは持たず、虎子が鋭い声を発した。

「例えばだ、親が大切にしている花瓶を、子供が誤って割ってしまった、としよう」

突然、虎子の声が軽くなった。と同時に、それまで黙っていた私も、思わず首を傾げてしまう。一体この女は唐突に何の話を、と言おうとしたけど、面白そうだから黙っていることにした。

「そして割れた花瓶を、子供が箱の中に入れた。この場合、子供はなぜ、割れた花瓶を箱に入れたと思う？」

虎子は振り返り、言葉を投げかけた。それから少し遅れて、何を問いかけているのか、私は分かった。遠回しに、殺人犯が死体を箱に隠す理由を、シキに質問しているんだ、きっと。

「それ、何かの謎かけですか？」

虎子の真意が分かるはずもないシキは、リスのように首を傾げた。まっとうな質問だ、と虎子は念を押すように厳しく言う。

「んーん、分からないですよ。僕、そんな経験ないから。虎子さんは、あるんですか？ 花瓶を割った事が」

「妹が大切にしていたヌイグルミで窓硝子を割ったり、ショーウィンドウを車でぶち破ったことはあるが、花瓶はないな」

暴力女はまるでついでのように、私の方へ顔を向けた。

「小学生だったころ、教室に置いてある花瓶を、掃除の時間に割っちゃった事はあつたかな」

「ほお。それでそれをどうした？」

「その時、見つかったら先生に怒られると思って、接着剤を探して直そうとしたんだけど、見つからなくて、セロテープを使ったけど、直ぐにバレるから、どうしようかと思ってね。結局、粉々に壊して、花壇の土の中に捨てたわ」

「悪ガキめ。貴様の粗暴さは、昔からか」

「家を木っ端微塵に爆破するような女に言われたく無いわね」

しかめっ面の虎子を、私は睨み返した。

「はは、隠したんだね」

私と虎子の嫌悪の衝突とは裏腹に、愉快いそうに笑うシキに、私達の視線が集まる。というより、刺す勢いで睨んだ。

「お姉ちゃんは、センセイって人に怒られるの嫌で、壊れた花瓶を隠したんだよね。だったら、虎子さんの質問の答えもそうじゃないの？」

残った笑い声を絞り出して、シキは虎子の方へ顔を向けた。

「発覚すれば、それ相応の罰が与えられる。ならば、その発覚を防ぐために、割れた花瓶を……花瓶を割ってしまったという罪の形を、隠すために、箱に入れた」

どうかな、とシキは首を傾げる。虎子は腕を組み直し、今度は腰を捻ってシキを見据えながら質問を付け足した。

「根本はそうだろうよ。ではその罪が、花瓶を割るなどという悪戯ではなく、非人道的にも社会的にも許容できない行動ならば……、社会的、法的な罰をも恐れぬ者が起こした犯行で、その隠すという行為の動機、意味はなんだと思う？」

虎子は刑事の顔で、尋問めいた厳しさで問う。

「虎子さんが何を求めているのか、よく分からないけど」対して緩い口調で言葉を紡ぎ出した。

「虎子さんがいう非人道的な行為というのは、その犯行の瞬間だけじゃないのかな。もしその罪を隠すのなら、それはやっぱり、罰を恐れてだと思ふよ。つまり、隠している時は、社会性があるはずなんだ」

「まさか。もし社会性が備わっているなら、そもそも社会から排斥されるような行動は起こさないだろ」

「いいえ。犯行の瞬間だけ……魔が差した、という事もあるでしょう。これは特別な状況でも、希少な経験でもないと思います。例えば、人を殺してしまう事だって、身体構造上可能な殺害方法で環境さえ整えば、誰だって可能性はあるわけなのですから。」

誰かを殺したいと思っても、その衝動を法律が、社会が、宗教あるいは倫理がブロックするものです。そういうセーフティプロテクトを後天的に教育させているのでしょ？ でも、もし、それらのブロックを解除すれば、どうでしょう？」

滑らかな発音で語られるシキの言葉を、私は最近、爺やから聞いた気がした。何時だっただろう。爺やには誰にそれを……………。

「……………そう、法律や社会は発覚しなければ罰せられない、宗教や倫理だって、本人が納得し享受しえる解釈さえ得れば、難なく突破できるはず。あるいは、それら全ての関係性を破却するように、自分で洗脳すればいい。それをするのが、あるいは魔かもしれない。……………もちろん、殺人に限らず、人には沢山の衝動が訪れるはずですよ。でも、それらすべてを実行はしないでしょ？ 虎子さんも実行したい事、衝動的に何かを壊したいと思うことあるでしょ？」

「あるよ。時々、本気であの警察署を爆破したいと思うね」

「でも、それをしない。なぜ？」

「そんな事をしてしまったら、私は不利益を被る」

「その不利益とは？」

「まず逮捕されて実刑を喰らって多大な時間を奪われるだろうね。それに、経済的にもペナルティがあるだろうし、社会的にも……………評価はガタ落ちだからな。友人知人もいなくなるだろうよ。社会の中で、生きる難易度がぐっとあがる」

「では、もしそれらの可能性がなくなれば？ 虎子さんがもし警察署を爆破しても、何のペナルティもなく、それまでと変わらず生活できるとなったら、虎子さんは、その衝動を実現させますか？」

離れている私でさえ、耳元で悪魔が魂を撫でるような囁きを、シキは滑らかな発音で。今まさに、鬼束虎子という一人の人間を、冥府の悪魔が契約を持ちかけようと誘惑しているようだ。

私は見た。虎子がその言葉に、僅かだけど、肩を微動させたのを。

「い……………いや、それでもしないだろう。そんな事をしてしまったら、大勢の人間が巻き添えを食らう。死人もでるだろう。それは本意ではない、からな」

「なぜ？ 死人が出るのが嫌なのですか」

シキは厳しい声で尋ねた。

「それは……………」

あの虎子の狼狽している。組んだ腕の手が、縋るように両腕を握り絞めていた。

「今、虎子さんが思った理由すべて、本来、その人が死んでしまう事とは、関係ありませんよ。罪悪感でさえ、まったくの無関係だ」

見透かしたようにシキは誘惑を紡ぐ。

「様々な理由、言い訳で自分を騙そうとしたって、虎子さんなら、それらがすべて不条理で不合理な論理だと看破しているはずですね。なのに、それらを頑なに守ろうとするのは、なぜでしょう？」

虎子さんが実現したのは警察署の爆破であり、殺人ではないのに、なにどうして、虎子さんがそれで罪悪に悩むのです。ただ……その前後で人が死んでしまった、というだけなのに。今この瞬間だって、多くの人が死んでいる、それらすべて虎子さんに関係していますか？ 違うでしょ？ 警察署を爆破したいのだって、それなりの理由がある、それ相應の理由だと思ったから爆破する。違いますか？ 虎子さんが悩むとすればそれだけです。それ以外のことなんて、虎子さんには関係のない……

……些末なこと。だから——

「シキ！」

悪魔の甘言を、虎子は悲鳴に似た叫びで遮った。

「もういい。私のことはいいから……、それ以上は……」

顔を背けて、シキの声を遮るように片手を突き出す虎子の声が、不協和音のように乱れ、普通の歳相当の女性に、まるで怯えているように、私には見えた。もしかしたらそうなのかもしれない。今、この場の空気は、ひどく胸を締め付け、苦しい。

私も、足下が不安になって視線を落とした。

「ごめんなさい。少し言葉が過ぎましたね。僕も、直接間接を問わず、人が死んでしまうのは嫌です。とても悲しい事ですし、殺人も許容できませんし、してはいけない事です」

シキの声は幼い子供のようにならなっていた。だけど陰しい。

「だけど、魔が差す、というのがどういう事が分かって頂けたと思います。魔が差すその時、嘔吐のですよ、今のような誘惑を。自分自身が、自分に対して、だけどそれはあたかも自分ではない……そう、魔が嘔いたかのように。それを他人が意図的に行うのが、洗脳です。恣意的に他人の価値観、関係性の破壊、再構築、改変改竄、捏造などを行う」

「ああ、概ね理解したよ。犯行時は、人事不省なのは」

さすが多くの修羅場を潜ってきただけの事はあるためか、虎子は既にいつもの威圧感を放ち出していた。

「で、罪を隠すという行為の動機だが」

「ですから、それはおそらく罪の発覚を恐れた、という社会性だと思えます。その罰がどれだけ自分に影響するか、それによってどれだけ自分が不利益を被るか、そのリスクを理解している……それは社会性がなくてはならないでしょ？」

「貴様が言う、社会性とは？」

「自分に影響を及ぼす他人の存在の有無……でしょうかね。あるいはその数か規模、強弱だと思えます。自由度とか」

「つまり貴様は、孤独ならば、罪を隠す必要がない、と言いたいわけか」  
「孤独なら、罪そのものがありません。罪は、他人と作る約款なのです。ひとりなら、すべての行動に罪はなく、そこに悪もない。孤独の人間、社会性のない人は、虎子さん達が属している社会から、匣から外れた者。それを人とは呼ばないのでしょ、虎子さん達は？」

その問いに、虎子はもちろん、私も、何も答えられなかった。

私や虎子を知っている社会、つまりそれは、この外の世界の事だ。私達の日常、当たり前のようにあつて臆気に捉えている世界というもの。法律がある。常識がある。歴史がある。文化がある。気が遠くなるほどの昔から、沢山の人達で築き続けている人の世界。それを社会と呼び、その世界のルールに沿って生きている者達を人と呼ぶなら、外の世界から外れているシキは……人ではないということになってしまう。

「それに虎子さん。そもそも動機なんて考えたって、如何なる場合も、それは推測の域を決して出ないよ。きっと本人も、一秒後にだって分からない」

「考えるだけ時間の無駄か……」

「犯人像を推測するなら、無駄とはいえないと思いますけど。虎子さん、そういうの、やりたくないでしょ？」

「もちろん」

「虎子さんが追っている犯人が、なぜ罪を隠そうとするのか、と考えるより、使われた箱にどんな呪術的思考があるのか、儀式殺人ではないかと疑ったから、ここに来たんでしょ？」

「ん……」

見透かされている。回りくどい例え話で、悟られないように話をしていた虎子の目論見は、どうやらとうに見抜かれていたようだ。シキは悪戯ツ子のように口元を少しつり上げて笑っている。

虎子は悪戯が失敗したように赤みがかった髪を搔いて、密かに舌打ちをした。

「何に箱を使ったか分からないけど、箱にどんな呪術的意味があるか、というのと、やっぱり隔絶だと思えますよ。簡易的な結界。神聖な物を、箱に収めて、その神聖性を保とうとするんだと思います。あるいはその逆が、パンドラの匣ですかね。パンドラの匣の話は知ってますか？」

「まあ人並みにはね。この世の災厄を閉じこめた匣の話だろ。それを開けてしまった事で、人類は様々な災いに遭ってしまう、だったか？」

「ええ。匣の中から、エリス、ニュクスの子供達、疫病、悲観、欠乏、犯罪などが飛び出し、慌てて閉めると、最後には希望、あるいは絶望が残されたと言われています。予兆や予知とも言われているようですけどね。そもそもパンドラとは――」

「ストップストップ！」虎子が慌ててシキの口を閉めた。

「貴様はその手の話になると、酔ったように饒舌になるのを忘れていた。パンドラの話はもういい」

「えええ、面白いのにい」

足をばたつかせて駄々を捏ねるシキを、鬱陶しそうに虎子は、はいはいまた今度な、とあしらった。

うん、それが適當だ。無闇に甘やかさないでいたきたい。

「じゃあ、それはまた今度にするとして」口から指を離して、また両膝を抱えて座り直した。

「神聖な物を隔離する以外にも、穢れを封じ込める、という呪物の役割もあるでしょう」

「汚れを封じ込める、か……。汚いモノには蓋を閉めるというやつだな」

虎子が反芻するように口になると、シキが首を鼻のように首を傾げた。

「あれ？ ……ああ、虎子さん。それは字が違うよ。僕が言った穢れは、汚物を意味する汚れじゃないよ」

「ああ？ どっちも同じだろ？」

「違うよ。穢れは、たしかに清濁や不浄など汚れに対する意味も一部として持つけど、そういう物理的な汚濁ではなくて、もつと抽象的な意味を表す言葉なんだよ。そう、古事記で、伊弉諾尊が黄泉から戻ったさいに、その身が穢れ、それを祓うために日向の阿波岐原で、禊を行ったと書かれているように、穢れは死に繋がる意味を持っていると思われまます。また民族学では、穢れを、ケとカレに分け、ケは生気の気、カレは枯渴の枯れ、二つを合わせ、穢れとは気が枯れた状態を意味するとも言われています。穢れは流動的な死を意味していると思うのです。イメージとしてはですね。命という水源があり、生気が川のように流れているとして、末端から徐々に水は枯れ、流れを遡り、終には水源をも枯渇し、生気という水は果ててしまふ。結果、その川は死んでしまふ。これを生物に想い換えてみてください。生気が衰えていく様を。これが死穢。穢れです。これと対となる概念がハレですね、祭りなどの晴れの舞台とか表現されるように、穢れを祓う意味が、祭りなどにはあります」

「……………まるで病気か何かだな」虎子はぼつりと呟いた。

「そうですね。穢れは、共同体内の秩序を乱す、悪という意味も持ちますから、あながち感染する病とも言えなくもないかもしれませぬ。そう、死は日常生活では悪に並ぶ、忌避されるモノでしょう。この鳥の森神社は、元は、死に纏わる神を祀っていたそうです。そのため、死に纏わる物を神社に預け、御祓いをして貰おうとしている方がいるようです。本来は、神社などにはそういう穢れの類を持ち込まないものらしいのですが、変わってますね、うちの神社は」

そこで私は、時々うちの神社に心靈写真だの藁人形だの、挙げ句に動物の死骸だとか投げ捨てられている事を思い出した。なるほど、そういう意味があつての事だったのか。ただの嫌がらせか宣戦布告ではなかったのね。

「穢れは、個には死を、群には悪を表す。だとすれば、それはやはり忌避され、封じられ、隔絶される対象となるでしょう。命を愛するのなら、穢れは、絶対的な敵ですからね」

零れた言葉に、私は視線を逸らした。シキを直視できなかつた。

それはあんたの事だ、と囁くように、私の声が頭のなかで響く。

今まで、何度も言いそうになつた言葉を、私の声で、私ではない誰かが、私にだけ聞こえる周波数で囁く。それが、ひどく私の心をかき乱す。「匣を開けてはいけない」

——私達は、あんたを一生ここに閉じこめているんだよ。

「匣の中に入れるのは、それ相應の理由がある」

—— アンタがこの匣に入っているのは、穢れだから。

「パンドラの匣のように」

その声は悲哀を帯びて、とても優しく幼い。

「匣を開けてしまったがために、不幸になることもあるのです」

—— 外に出したら、沢山の人が不幸になるから。

「それは匣に纏わる古今東西の多くの話が、そうなのです」

—— 八年前の悲劇も、そうして起きたように。

「犯人が匣の中に罪を入れたのなら、求めるものはきつと……」

それを告げるのは、匣の中の子供。

「やはり、日常なのでしょね」

シキは、

—— それは決してアンタには、手に入らないもの。

孤独に、謡うように言う。

「非日常から、日常への帰還の儀式、それが匣の役割かもしれません」

私は堪らず、二人を置いて土蔵を出た。

「脱出と回帰のイニシエーション」

◇

日が傾き、空が藍色の染まりだした頃、本日の賽銭とお供え物の回収のために、私は神社へ向かった。そんなの普段なら、月に一度すればよかったのに、日課になりつつある。

原因が原因なだけに、素直に喜べないのがネックだけど、氏子の居ない貧乏神社にとっては、その賽銭は藁にも縋るような思いなので、有り難く回収させていただき、お供え物は冷蔵庫行きである。

賽銭箱のお金を回収していた時、突然、誰かに声をかけられた。その不意打ちに心臓を痛めるほど驚いて、だけを参道へ目をやると急降下で気が抜けた。

橙と紫のグラデーシヨンの空を背後に、青白く灯りだした石灯籠の間、参道の真ん中に、細長いシルエツトが唇気楼のように立っている。声を発するような仕組みがついているカカシかと思えるような影が、二足歩行で拝殿まで近づいてきた。

「なんだ、神籬か……驚かせないでよね」

溜息混じりに非難を投げ、賽銭箱の裏から前へと回って、回廊から階段へ少し下りた。あと二段ぐらい残した辺りで、視線の高さが合う。

「どうしてさ、オレはお化けじゃないぜ」

飄々と薄ら笑いを浮かべる神籬は、けど、それに近い不気味さを羽織っているように見えた。

不気味さや妖しさでは、シキも神籬も同じだけど、質が違うように思える。シキは日本ホラー、神籬は欧州のホラー。とたえるなら、リングの貞子と、フレディだろう。

「で、何しにきたの。冷やかしながら帰ってちょうだい」

とつとと帰りやがれ、と言いたいところだが、オブラートに包んで言ってみた。それから靴を履く。その間に、神籬はさらに近づいてきていた。あと一歩で腕を伸ばしたら手が届きそうなほど。

「オマエだけだな、平和なのは」

辺りを見渡しながら気の抜けたような声で、そんな事を言った。

「どういうこと？」苛立ちを半ば隠すように腕を組む。「もしかして、私に喧嘩売りに来たの、神籬」

「違うさ。オレはただ、今日、学校休んでた奥津城のお見舞いに来ただけさ。ほら、昨日の今日だからな」

「あら、あんたがそんな世話好きだとは知らなかったわ」

「オレはミステリアスな男で通っているからな。……ま、余計なお世話だったな。一之宮や榊とは違って、奥津城は強い女だな」

「失礼ね」

「そうか？ だって、オマエぐらいなもんだぜ。普通のままなのは」

そう言って、神籬は不敵に笑みを浮かべた。斜めから差し込む夕日に照らされて、その笑みは禍々しく歪んで見える。不必要なほど不安をかき立てる不愉快な笑み。

「どいう、ことよ」

自分の声が怯えているように聞こえて腹が立つ。

「奥津城。住宅街があるだろ、商店街の向こうに」神籬は振り返り、参道の向こう、町へと視線を向けた。

「八年前はさ、どうだった？ この辺りの家でさ、何か変わった飾り付けが流行らなかつたか？」顔だけこちらに向き直し、まるで獲物を咀嚼する猛禽のような目で、私を見る。

神籬の声に導かれるように、古い写真が脳裏を走りさる。

注連縄と紙垂と御札に包まれた家々。庭先、玄関先、ブロック塀の上に、道端に盛り塩のように山積みの動物の死骸。漂う腐敗臭と血の臭い。聞こえてくる読経と祈りの輪唱。注がれる怯えと怨嗟の視線。覆う殺意。人々の心を蝕む、ヤタガラスの祟り。崩壊と瓦解に、沢山のものを失った。

「榊の家、住宅街にあるよな」

その声が、心の波乱をびちゃりと止めた。

急速に冷静に。「あやめがどうしたの！」と声を荒げていた。

「今日、鴉が多いな」町の上空を見据えながら呟く。「家中を括るように縄が張り巡らされ、呪文のようなものが書かれた札を張られ、そして鴉が群れる家が一軒だけ、それが榊の家だと、言ってたぜ」

風に靡く旗のように、神籬はくるりと振り返った。

「言ってたって……誰が？」

私の声に反応して、目をキツネのように細め笑った。

「一之宮と礼慈だよ」

響く。その声はひどく良く通った。

「あの二人が見たらしくて、それで神がかなり動揺してたみたいだ。もっとも、礼慈もかなりショックを受けたみたいだが……、いや、三人とも理由は違っているかもしれないけど、辛そうだったぜ」

まるで何かを訴えるような神籬の視線は、矢で殺すように鋭い。それから黙して、言葉を続けないけど、明らかに敵意に似たものを私へ向けているのが、肌で感じ取れた。

いや、きつと怖いんだ。

「奥津城。ヤタガラス様の祟りを、信じるか」

オマエが悪いと、言われているようで。

「現在おきている事件と、八年前の事件」

だけど何もできないから、なにも言い返せない。

「その二つの事件と、ヤタガラス様の祟りは」

ただ逃げるように、受け入れるしかできない苦痛が。

「本当にオマエと——奥津城と関係ないのか」

怖いんだ。

「奥津城。八年前、何が起きたんだ。ここで——」

不気味な闇が世界を閉ざす。

閉ざし、閉ざせ、閉じよと唱えるように。

曖昧な青白い灯りが、最後まで、外へと通じる道を白く照らしている。だけ。

「オレは真相を知りたい」

逃亡を阻止するように、黒衣の青年が立ちふさがる。

「知ってるんじゃないのか」

その瞳には、悪意と憧憬の灯りを潜ませていた。

「あれは殺人で、誰が殺したのか。知ってるな、奥津城」

悪寒がするほど、似ていた。

八年前の夜に見た、シキに殺された人の最期の瞳に。

まだだ。

足音が聞こえる。背後で聞こえる。

振り返る。誰もいない。

視線を感じる。誰かが見ている

振り返る。誰もいない。

だけど纏まとわる。憑よかれています。

聞こえる。足音が、声が、視線が、悪意が、後ろから。

人を殺した。もう数えるのが億劫になるぐらい殺してみた。

毎晩、誰かと約束したわけでもないけど、人を殺してみた。初めは呆

気なく殺せた。二回目は暴れられて手こずった。三回目は悲鳴をあげら

れた。今まで聞いたことのない叫び声に、背筋がぞくりとして気持ちい

い歌声だった。四回目は確か抵抗したから、顔が潰れるほどナイフで殴っ

て殺した。五回目からは……あまり覚えていない。つまらなかつた。ど

れぐらい刺せば殺せるかも分かつたし、どこを刺せば死ぬのか、どこを

切れば、血が噴き出すかも分かつたから、ハンマーや鉄パイプ、眠らせ

て石で殴り殺したりも試してみた。

人を殺した、人殺しなんだろう。だけど、連日ニュースで騒いでる連

続殺人犯なんかじゃない。あれは別の奴がやったことだ。死体をバラバ

ラにして、匣につめた？ オレがやったのは殺しだけだ。

殺した、ただそれしかやっていない。だけど、翌日には、どうやらオレが殺したらしい奴が、バラバラになって匣に詰められて発見された、ニュースで流れる。

それは誰かが、オレを罠にはめようとしている——と、思った途端に、背後にその誰かが、絶えず自分を見ている、と彼は感じ始めた。そして、それが錯覚ではないと確信するのに時間はかからなかつた。

人を殺し、去る。そして赤いランプに群がる野次馬に紛れて戻ってみれば、死体はいつの間にか、匣の中に片付けられてしまっていた。

彼が去ってから、警察が来るまでには、最短で三時間程度だった。その間に、解体をしなければならぬ。となると、もうそれは死体を見つめる時間なんて、きつとありはしないだろう。尾行され監視されている、と彼は思った。

いったい誰が、なんの目的で。

それを確かめる手段は簡単なものだった。

その夜、彼は一人の女性の後をつけた。

闇のように黒い髪、シルエットがどことなく似ていたからだろう。声をかけ、路地に誘い込み、適当な物陰で犯し、事が終わるとひどい吐き気に襲われ、気持ち悪くなって、殺した。似ていたけど偽者だった、似ていたことがすぐく腹が立った。殺した後は、そのまま死体を路地裏に置き去りにした。その時にはもう、それにはなんの執着はなかつた。

だけど、しばらく周囲を歩き回って、戻ってきた。

すると死体はまだあった。まだ人の形のまま、そしてその死体の側には生きている人影があった。気付かれないように近づいた。物陰に隠れて見ていた。そのシルエツトは見覚えがあり、闇のように黒い髪。迂回して正面に回り込んで顔を見た。明かりはなく陰を纏ったように不鮮明だったが、それを見間違ふことはきつとないだろう。それが誰だか分かった、ならば後は目的を問い詰めれば良い。なのに、彼はまるで美しい絵画に見惚れてしまったようだった。

奥津城絵馬がいる。

彼女の足下には彼女に似た死体がある。

捨てられた子猫でも愛でるような眼差しで、慈悲に満ちた手でそっと触れるように、奥津城絵馬は、血溜まりの水面を指でなぞり、そっと紅を塗るような繊細さで唇を撫で、舌で拭う。

白壁に包まれた微かな明かりが、彼女の笑みに、艶を持たす。

その笑みに彼は目眩した。猛り過ぎ喜びは、呼吸困難をもたらす。

同類だ、という直感と、仲間だという喜びは、彼女と何か繋がったという酩酊にも似た一体感で、彼を心地よく包む。

奥津城絵馬が、穢れに触れる。

それを彼等は眺めていた。

5

その日の夜、虎子から電話があった。どうせ仕事の愚痴か、嫌味でも言うのかと思っただけど、まったく違っていた。

夕方頃、礼慈が襲われ、その襲った人物が殺された、と虎子が言った。礼慈が襲われた、という言葉に私は一瞬、礼慈が殺された、と勘違いしてしまい、みつともなく動揺してしまった。けど、礼慈自身は無傷らしいというのを聞いて安心したと同時に、どうしてそれを私に知らせたのか、腹が立つほど分からなかった。

『まだ調べはついてないが、これも例の箱入り殺人と関連しているとするれば、どうやら本格的に秘薬、こちらではネバー・モアと呼ばれている魔薬と繋がるかもしれん。明日朝一に、部下に資料を届けさせる。オマエはそれをシキに渡せ。中身は極秘扱いの物だから、くれぐれも無くすなよ。それと、起きてるよ』

一方的に迷惑な用件を言い残して電話は切れた。翌日、予告通りに朝早くに、虎子の部下の鳥口とぐちという若い刑事が家にやってきた。大学生ぐらいの新入社員みたいな感じだけど、疲労感はやベテランっぽかたのが印象に残っている。見ていて哀れに思えるほどで、虎子に部下なら仕方がないとさえ思えた。その人は私に虎子から預かったという茶封筒を渡すと、急いで帰っていった。きっとそういう命令を受けていたのだろう。

封筒の中身を少し覗くとA4用紙の束がびっしり入っていて、現場写真らしきものまで入っていた。素人の私が見ても、警察の捜査資料で、一般人に渡していいものではないというのが分かる。

戸惑ったものの、これがもし発覚して困るのは、私じゃなくて虎子なんだからと、癪<sup>しやく</sup>だけと言われた通りに、それをシキに渡すことにした。

虎子の予告もあって、昨夜は早めに就寝したから、この日の朝の目覚めは、たとえ六時起床でも、まあまあなもの。被害があるといえば、私ではなく、餌をおわずけとなったシキぐらいなので、これは許容範囲。

まだ朝霧が晴れない内に、シキの餌をつめた紙袋と茶封筒をもって土蔵へ向かう。

鳥のさえずり。朝霧に瀟<sup>しょう</sup>過された朝陽は、瑞々しい森林の香り。

深呼吸ひとつで、昨日みた夢は霧散する。

目を瞑って朝陽を正面から受ければ、暗い話は散っていく。

足取りは軽く、気分も良好だから、シキの無駄話にも十分ぐらいは付き合っただけでもいいかな、という天文学的に珍しい心境だった。

ただど珍しいことは、それだけじゃない。

土蔵が見えてきた辺りで、人影が見えた。

一瞬どきりとしたけど、それが昨夜九死に一生を得た鳥居礼慈だと分かる、眠気が襲ってくるほど力が抜けてしまった。

ここに来るなどかなり強めに言ったのに、ついに残っていたネジまで無くなったのか、今にも樹海で自殺しそうな憂鬱<sup>ゆううつ</sup>な顔をしていた。

「礼慈」声をかけ足早に近づく。「何してるの」

尋ねてみたけど、答えなんて分かりきってる。返ってきた言葉も予想通りで、見たとおりに気疲れしたような声だった。

「大丈夫なの。昨日のこと、虎子から聞いたけど」

「ああ、まあ、見ての通り」

初めて笑ったような不自然な笑みを浮かべる礼慈は、見た通りなら、本当に樹海で自殺しかねないと思った。

「私に、殺人鬼がうるついているから気を付ける、なんて言った本人が襲われたんじゃ、世話無いわね」

「……………オマエは大丈夫か」

それでも自分より他人の心配をする辺り、やっぱり根っからのお人好しだ。きっと、こいつは自分が死ぬ間際でも他人の心配をするんだろうな、と私はほんやりとそう思った。

「シキと何話したの？もしかして、あやめに関係あること？」

「……………知ってるのか、奥津城」一瞬、窒息したように顔を強張らせた。

「神籬から聞いた。小夜子も一緒に居たんでしょ」

「ああ……………それをずっと考えてた」

肩を縮めて落ち込む礼慈の姿が、焦れたいほど違和を感じた。

「らしくないな。礼慈ってそんなキャラじゃないでしょ……………よし、分かった。小夜子は私に任せて、あんたは、あやめの事だけ心配しなさい。いいわね」

「は？」

「は、じゃないの。礼慈は心配しすぎなのよ。だからシキになんか頼ろうとか馬鹿みたいなこと考えるの。その挙げ句に、意気消沈するほど打ちのめされたんじゃない、本当に世話ないわよ。アイツはね、容赦なく疵を抉る悪魔なんだから。そんなことも忘れてるぐらい、気を回しすぎて、今のあんたはオカシくなってわけ。分かった？ 分かったらさっさとここから出て行く。そして二度とここに来ない。いい？」

「……………ああ。わるいな、奥津城」

霧に掠れたような笑みを浮かべて礼慈は歩き出した。

もし礼慈がこんな状態じゃなかったら、ついて来て貰おうと思ったのだけど、こんな状態でもう一度シキに会ったら、きっと神社の石段で見事な階段落ちをして死んでしまいそうだったから、さすがにそれは止めて欲しいし、私もそこまでオニ虎子じゃないから、見逃してやった。

そして、すれ違い、背を向けたまま、思い出したように礼慈が。

「ところで、シキを縛ったのオマエか」

なんて、そんな訳の分からない事を言い残して行った。

礼慈が見えなくなったのを確認して、溜息を盛大についてから扉を開けて土蔵の中へ入る。

中は相変わらず時間が停まっているような代わり映えのなさ。昨日と、先月、去年、きつと明日も来月も来年もずっと先も変わることはないだろう。せいぜい気温や明るさが違うぐらい。

シキは一番奥の白いソファの上で、団子虫のように丸まっていた。

「っあ。お姉ちゃん！」

私に気付いて、全身を捻ってバネのようにシキが飛び跳ねた。忘れていたけど、虎子によって紐で両手両脚を縛られたままだった。その理由はというと、シキがうっかり虎子のタブーを口にしたから。私には、ただのストレス発散にしか思えないのだけど。

「こ、これ解いてくださいよ！ も、もれちゃう……………」

「っげ！」

真つ青な顔で激しく顔を左右に振るシキ。慌てて紐を解こうとしたけど、あの馬鹿虎子、固結びの上にガッチリ縛りやがってるから、中々解けやしないぜ。

「シキ。切るものないの？」

「切るものなら、この紐を切ってください」

「そうじゃなくて刃物よ刃物！ ハサミかなんかないの！」

「あ、ソファの下に」

会話が噛み合わない苛立ちを保留して、ソファの下に手を伸ばして何か棒状のものを取り出した。見れば、今時ヤクザ映画か時代劇でしかみない短刀。なんでこんな物騒な刀がここにあるのか、なんて疑問は一生保留しておいて、それで紐を切った。枷かぎがなくなると、シキはゴムボールのように跳ねて、左側の棚の奥へと走り込んだ。そこにトイレと水飲み場があるらしい、見たことはないけど。

待つこと一二分。爽やかな午後に目覚めのような晴れ晴れとした笑みを浮かべて戻ってきたシキは、それまでがよほど窮屈だったのか、遊園地の風船ドームの中で暴れ遊ぶ子供のようにソファに飛び乗って、いつもの体育座りみたいな姿勢に落ち着いた。

「……………シキ。虎子がこれをアンタにだって」

茶封筒を投げぶつけると、それを白刃取りみたに両手で受け取り、それが何なのか確かめるように触って、丁寧に封を開けて中身を無造作に取り出した。

「捜査資料みたいよ。夏の事件、覚えてるでしょ？ その時の幕と昨日虎子が言ってた事件が、なんか関係あるみたいで……………まあ、よくわかんないけど、それ、読めだつて。虎子命令」

「読めって言われても……………」お焦げの塊を噛んだような顔を傾けた。

「お姉ちゃん。虎子さん、僕に何をさせたいのかな？」

「そんなの、どう考えたって犯人を推理しろ、って脅迫でしょそれ」

そうでなければ一般人に極秘の捜査資料を堂々と横流しする刑事がどこにいるっていうの。いや、そもそもアイツ刑事じゃないし、それにそれでもそんなことする刑事ないだろうし。

「犯人を推理……………。僕がこれを読んで分かるぐらいなら、きっと警察が、とっくに捕まえてると思うんだけどな」

「犯人像を探れってことじゃないの。プロファイリングだっけ？ 犯人の動機とか考えと、そういうのを推理しろってことでしょ」

「それこそ、僕には不向きだよ。僕より、社会を沢山経験して知っている虎子さんの方がずっと向いてる。だって人を殺す動機って、突き詰めれば、他人への甘えだもん」

「ちよつと。なんで人を殺す理由が甘えなのよ。変じゃない？」

「そうかな？ 僕はそれ以外の動機を知らない。人が人を殺す動機って、他になにかある？」

「そりゃもちろん、相手が憎いつてのが一番でしょ。恨み辛みや、怨恨とか、あとは……………、結局は切羽詰まった状況とか、色々あるわよ」

思い浮かぶのは不快な感情ばかり、醜いものばかり。爽やかに人を殺す、なんてものがあるわけがない。でも戦争だったら、もしかして名誉とか自己犠牲の精神とか、あるいは何かを守るため、なんて綺麗な言葉があるかもしれない。

でも、それらも結局は。

「結局は、相手に対しての甘えだよ」

シキの言葉は、綺麗な偽善を許そうとしない。

「恨み辛みや、欲情や願望。確かに言葉にすれば沢山の動機はあるけど、突き詰めれば、相手に対して何かを期待している事にかわらない。憎いから殺す、それは自分では処理できない感情を、相手に押しつけて一緒に消えて貰う事を願ってる。自分のためではなく、誰かのために殺す事だつて、その誰かに自分の価値を、或いは評価を期待しているから。他人から自分に返ってくる利があるから。」

誰かに気付いてほしい、誰かにかまって欲しい、誰かと一緒にいたい、誰かを支配したい、他人と接触して、その反応でしか自分の存在を確かめる術をしらない。どんな理由を繕っても、他人に干渉する、ということとは、他人に干渉したいという願望から発せられるものに違いない。孤独では厳しい、だから他人に依存したい。それを、甘えと呼ぶんじゃないの？ それに——」

幼い声は、そこにはなかった。

シキの声は厳しい。

正面に立つ私が罪人のように、威圧感が土蔵中に覆われている。

「どんな綺麗な言葉で飾っても、殺人は殺人。殺人に、優劣も清濁も、貴賤もない。どんな理由があつたって、どんな言い訳をしたって、殺人は許容されない。いえ、許しなんて救いがあつてはダメなんだ。殺人は、生きとし生けるものすべてに對する攻撃、生きようとする命への裏切りなんだから。そんなの、絶対に間違つてる！」

弾ける慟哭に似た声。

まるで命を賭けた叫びに、私は何も出来ず、立ち尽くすばかり。

驚いたんだ。

感情を乱し頭わにしたシキに、私は恐怖に似た驚きを覚えた。

怖かった。

シキの言葉は、刃のように鋭い。

その言葉は、生命を慈しみ力強く守る。

だけど、それは同時に。

「人殺しは……人を殺した人を、シキは……どうあつても許せないの？」

震えてしまった声で問いかけると、

シキは、明瞭な声を響かせ即答した。

「はい。自分が殺されるのが嫌なのはもちろん。僕にだって、死んで欲しくない大切な人がいます。だから、殺人は絶対に許るせない。それを許したら、大切なその人を見殺しにするのと一緒だから。そんなの、僕は、嫌だ」

叫びでもなく囁きとも違う。白に包まれたシキの振り絞るような言葉は、綺麗だと思つた。潔癖で、無垢で、飾り気のない素朴さ。

だけど、それを聞いて沸き上がる感情は、怒りしかない。

殺人を許さない言葉は、正しいと思う。そうであつて欲しいと思う。

その言葉は綺麗だ。そして、命への愛がある。

だけど、それを殺人者が言っている。

それが、ひどく私の心をかき乱す。

——お母さんとお父さんを殺したのは、シキなのに。

溢れ出そうな言葉を拳に握りしめて、押し込める。

だって、それをシキは知らないから。

知らないから、こうして静かなんだ。

そう。知らなければ、とても平和なんだ。

乱れることなんてない。知っているものだけが乱れる。

すべてに関係のない人生は、きつと、とても穏やかだろう。停滞ていたいに似て。

誰にも関わらない孤独は、きつと、とても軽やかな命だろう。浮遊うゆうに似て。

真実を知らなければ、事実よりも嘘を、秘密はとても優しいから、騙されての方がきつと、簡単に、幸せは得られるはず。

その日の夜。

もう一度土蔵を訪れた私は、扉の前で佇むシキを見つけた。

夜空を眺めているわけでもなく、ただ立ち尽くしている様子だった。

どうしたの、と訊くと、シキは腕に抱えているモノを、私に見せた。

白く細い両腕に抱えられていたのは、一昨日見た白猫。初め、その猫

は眠っているのかと思っただけど、触れたら冷たかった。

「ずっと眠ってて、起きないんです」不安げな小さな呟きを零す。

猫は力なく丸くなって眠っている。

きつと、もう起きやしないのに、シキは優しく包むように猫を抱いて

いる。病気なのかな、とシキは言っ、縋すがるように私を見た気がした。

「……………病気、かもしれないから……………わたしは看病してあげる」

シキの視線を一秒でも早く逸らしたく、迷いながらそんな嘘をついた。

猫を受け取る。暖かくない塊は、重く、どうしてか嫌悪感に背筋が凍る。

どうしてだろう。

一昨日は、この柔らかく、ふさふさした毛並みを撫でて可愛がる事ができたのに、死んでいると分かると、それは猫ではなく死骸になって、触れることすら、ためらってしまう。

なにが違うの？

暖かいか、冷たいの違い？

動いているか、停まっているかの違い？

それとも、生き物と死体の違い？

だけど、猫はまだ一昨日と同じ姿のままなのに、

ひどく汚いモノのように、私の躰からだは、それを拒否している。

死が伝染すると喚わめいているような悪寒が、ずっとした。

その猫を、私は裏庭に埋めた。

かわいそうに。

土をかぶせる度に、そう思った。

真っ白な毛が、土に汚れていく。

かわいそうに。

もう走ることも出来ないほど埋まって、何も口にすることも鳴き声も

聞こえないほど深くに埋められて、ひとり、肉が腐って骨も残らず土に

食べられてしまうんだ。

何も残らない。何もかも消えてしまう。そして死体は無くなる。

かわいそうに。

死骸の姿が見えなくなると、背中の悪寒が消えた。

一度家に戻って、手を洗った。いつもは使わない石鹸まで使って、入念に洗った。土を触ったからじゃない。洗ってる最中、頭の中を過ぎったのは、埋めた猫のことばかり。きっと死体に触ったから汚くなったと思っただ。そんなはず、あるわけないのに、だけど、なぜかそうしなればいけない気がしてならない。

土蔵に戻ると、シキはさっきと同じ場所で立っていた。

私が戻ってきたのに気付くと、猫はどうなったか尋ねた。

私は少し迷って、いなくなつたと言った。

「猫ってね、自分の死を悟ると、いなくなつちゃうのよ」

分かりっこないのに、私はシキから視線を逸らした。

「だから……………もう、いないの」

吸い込む空気が、喉を枯らす。

「……………死ぬの？」

ひどく、崩れかけの音が、私の胸を痛めつける。

「……………そうよ」声を出して、吸い込んだ空気は誰かの涙で湿っているように、私の瞳を濡らす。とても熱い潤いだ。

「死ぬのよ……………生きてるから、誰だって、いつか……………」

そんな理屈は尠めにならない。お父さんとお母さんが死んだ時、私は、どんな言葉を聞いても悲しさに泣き続けた。命があるもの全ていつか、死んでしまうから、と約束された別れという言葉なんかより、私は、お父さんとお母さんの声が聞きたかった。

「悲しい？」

「分らない。でも……………嫌です、こんな気持ち。すごく……………苦しくて、僕……………」

泣いてしまいそうな儂い声は、すでに涙に濡れているようだった。

「シキ——」密かな呼吸と共に視線を向けた。

交わる事のないはずの視線に、見つめられているよう。

「人殺しはいけないことよ。」

人を殺していい人も、殺されてもいい人なんて、絶対にいないの」

「うん……………」

「約束して。絶対に、殺さないって」

命が尽きるまで、生きようとしてるすべてを。

「うん」

私の声は、爪つまよりも微かな音で——忘れないで、と。

「うん」返ってきた声は、闇より深い。

「約束、破ったら……………わたし、許さないから。絶対に、許してあげないから……………もう絶対、会いに来てあげないから。いいわね」

「……………うん。僕、虫も動物も人も、命あるもの、みんな好きだから」

それに——と。

「僕、お姉ちゃんが大好きだから、約束守るよ」

シキは幸せそうな顔をしていた。

夢見るように、何もかもが幸せな夢の続きのように。

淡い月光が闇に溶ける。

静かな夜。

そんな夜は、決まって誰かが涙を流している。

そんな夜は、決まって幸せな夢をみることができる。

6

その夜は、初めて明確な目的を持って人を殺した。

町外れの雑木林に連れ込んでから、眠らせナイフで殺した。ただそれだけで、それで準備は整って、用もなくなったから捨てるように、その場に置き去りにした。それから適当に時間を潰してから、また雑木林に戻って、木々で身を隠しながら、死体を見ていた。

誰かがくるのを待っていた。いや、誰かじゃない。

奥津城絵馬を待っていた。また、彼女がやってくるのを待っていた。息を潜め、闇と同化するようにひっそりと静かに待っていた。目を瞑った。それでも自分以外の生物の微かな鼓動すら聞き逃さない自信があった。それほど、感覚が研ぎ澄まされ、とても静かだったのだろう。

金属を打ち合わせるような、微かな音がした。

目を開ける。死体を見る。

そこには、自分以外の生き物がいた。

人影。

闇の中でもその影は、人の形を模っていた。

息を呑む。瞳孔が広がり、影と闇の境界線を見極める。

違う、その一言がまず零れた。

地面には血が乾きだした死体。それを見下ろす影は、彼の女のように細い線を束ねた華奢な輪郭をしておらず、黒檀こくたんのような黒を纏っていた。

霧のように重みを忘れてしまったような黒い外套が、意志を持つ生き物のように蠢き、足下の死体を喰らわんとする怪物が口のように広がり、その中心には、白骨のように白い仮面が闇に浮かんでいた。

悪魔だ——身体が微動する。その光景は官能的な恐怖に彩られていた。そこには待ち望んでいた女はいない。だが、出逢いたかった者がいた。

悪魔は跪き、死体を愛でるように闇色の腕を伸ばし、愛撫するように温もりを失った肌で触り、分厚い鉈を取り出し、ギロチンのように死体の首に落とした。

息を呑む。無慈悲に振り下ろされた刃の無情さが、美しいと感じた。

不条理な死を迎えた者への憐憫もなければ、殺人者への憤怒もない。

まるで幻のように、感情というものが見いだせず、雨風のようにただ決められた現象のための存在かのように、死体を解体しはじめた。

それはあまりにも滑らかだった。挙動とか動作とか手さばきとか、そのような見かけの滑らかさではなく、もつと情緒的な……そう、躊躇いという思考の障害が、その悪魔にはないように思え、それが美しいと感じた。

震えている体に気付いた。自分が、その悪魔を憎悪を抱いていた事さえ忘れるほど、羨望の念を抱いていることに気付いてしまった。

それが屈辱だった。

そんな憧れ、弱い者が抱くものではないか。

下から目線なんて卑屈な気持ちに吐き気がする。

憧れ、羨まれ、妬まれ、恐れられる。それが強者の証。

自分より上の位置にある者を認める弱さではないか。

そんな卑屈な感情へ対する怒りが、彼を悪魔の解体場へと赴かせた。

声を発する。

死体の解体に専念したい悪魔は顔をあげた。その仮面はもう白くない。

悪魔は立ち上がる。外套が軽やかに翻る。

向かい合う殺人者と解体者。

互いの手には、鋭利なナイフと鈍器のような刃。

ひゅーひゅー、と壊れた管楽器のような息遣いが木霊する。

「……………あ」

何か言おうとした。だけど、それがあまりにも滑稽に思ってしまったから止めた。そもそも疎通できる言語があるとも思えない。言葉を交わすことの必要もない。そもそもコイツを話をしたいわけでもないだろう、と自問するしまつ。そんなことのために、今、ここにいるわけじゃない。そんなことのために、この死体を用意したわけじゃない。それでも、

「おまえ、何？」

それぐらい尋ねるのが礼儀だろ。

ひゅーひゅー、と壊れた鳴き声が漏れる。血塗られた仮面が、笑みを

浮かべるように歪んで見える。きっとそんな声色で奏でられたのだろう。

「ま、いいや」

時間の無駄だったと自嘲。

そう、時間は貴重だ。

ぐずぐずしていたら、奴がくる。

この清々しい狂気を孕んだ澄んだ闇を祓う朝陽が来る前に。

「じゃあ、殺し合おうか」

まるでそれが約束であったように、

二人は死体を挟んで踊り出した。

◇

夜は彼の時間。

昼間は、匣のような土蔵から出ることを禁じられた彼に許された時間は、鋭利な陽射しを振りまく太陽の眼から逃れるように、に隠れるようにと、その姿が見えなくなった僅かな夜のみ。多くの生き物たちは、闇に主役を譲るように眠りにつき、夜という舞台には、闇の中で煌めく眼をもつ者だけが残り、秘密のうちに遊ぶことができる。

深夜の樹海は、閉ざされたように濃密な闇が充満し、先に照らされても歩くことさえ厳しい自然の迷宮の中では、人の眼など満足にこの世界を直視できず、地面に抱擁するように倒れるか、木々に道を塞がれ闇を仰ぐしかできない無力な生き物へと成り下がるしかないだろう。

事実、この森に眠る亡者の多くは、望む望まずを問わず、樹海の闇に呑み込まれ、のど元で咀嚼されるように、じつくりと同化していくのだ。天然もしくは人工の光の加護なくして、人は樹海では致命的に無力だ。だけど、彼には、それはあまりにも無縁というもの。

平素より両目を闇に覆われた少年に、陽射しと月光の差など温もりのどの意味しかなかった。光の加護などなくして、彼はまるで部屋の中を歩くような気軽さ、無防備さで、樹海の中を闊歩していた。

ゴムボールを引き詰めたように不安定な足場さえ障害にならず、乱立する木々にさえ触れることなく見えているかのように避けては進む。

時にはトンビやフクロウと戯れるように、彼らの真似をして、太い幹を昇り、枝から枝へと飛び移りながら、この限られた時間を謳歌しているようだ。

樹海は広い。樹海にはたくさんさんのモノがある。

その多くは忘れ物だろう。

窪地くぼちに横たわる人に、いくら声をかけてもまったく反応しないのだから、それはきっと人の形をした、人ではない物なのだろう。きっと誰かが忘れていったんだろう。

そして、その夜が明ける頃に、シキは見つけた。

それは忘れられた人形と同じ強烈な臭気を放つ匣。硬い、硬い四角い匣はとても冷たかった。

それが箱だと分かると、シキは蓋を捜して、そっと重たい板を外して、箱を開けてしまった。途端に溢れ出た臭気は、まるで鋭利なナイフと針の弾丸のように、シキの嗅覚を襲い、意識を二三次ほど吹き飛ばし、失神する前に、天敵に遭遇した兎のように跳び退いて、鼻を着物の袖で覆った。

危険を感じながらも、それが脅威とは思わなかったのか、それとも好奇心が彼を後押ししたのか。シキは再び匣に近づき、匣の中に手を入れた。

匣の中のものに触れた。触れて、撫でて、指先で弾いて感じ、輪郭を脳裏に浮かべると、それはまるで人の顔のようだった。

だけど人の頭のはずがない。

きつと人形だろう、とシキは思った。

腕もあつた、足もあつた、指が幾つかあつた。だけど生きているはずがないから、きつとそれは人じゃなくて人の形をしたモノ……………森に忘れられた人形と同じなんだと、シキは思った。

そう分かると、さっきまでの恐怖はなくなり、珍しいオモチャで遊ぶように、強烈な臭気に痺れ、時間を忘れ、朝陽が現れるまで、腐った血で汚れたそれを弄んでは、黒紅で汚れた唇を三日月のように歪めていた。

ただ遊ぶように。

故に、そこに悪意はなく。

故に、そこに罪悪があるうはずもない。

ならばそれは、やはり、無邪気な遊びだったのだろう。

◇

背中には硬く柔らかい肉の塊。仰ぐ空には星と暗雲……を遮り頭蓋骨のような能面があった。

どうして、という疑問が痛みを孕む憤怒と共に脳裏を占拠していた。殺し合おうか、と彼は言った。

なのに結果はおよそ殺し合いとは言えない、一方的な有様。

ナイフを持って襲いかかった。悪魔は鉈を捨てた。それを見た瞬間に、彼は、相手の血飛沫を浴びる未来を幻視して少し口元が緩んだ。しかし悪魔は抱擁するように迎え入れ、そして腕を掴み、万力のように握りしめナイフを奪い、それすら投げ棄て、鳩尾みずおちに拳を一撃。

それを受けた瞬間に幻視は霧散し、意識さえ朦朧とした。その後、何度打たれたが、それが殴られたのか蹴られたのかさえ判別できず、一際大きな衝撃の後に、視界がクリアになり、彼は、死体の上に仰向けに倒れていた。

今、自分の血潮が大気に触れていないのが、不思議なぐらいだろう。今まで何人も殺してきた、その経験は、自分を強者であるという確信を築くほどだった。手際だって慣れてきた、誰よりも強いということ、一方的に他人の命を搾取せきしゆする権利を持っているとさえ、思っていたのだろう。

それがハンマーで硝子を割るように容易く打ち砕かれてしまった。

その衝撃は、およそ硝子が碎けるよりも重く、致死量の猛毒のように彼を蝕くさんだことだろう。

今すぐ目の前の仮面を割って、その奥の顔を原型が残らなくなるまで砕いて脳髓のうずいを引きずり出して踏みつぶしてやる、という凶暴な衝動にさえ、身体はバラバラになってしまったように動きはしない。

そんな彼を、能面が見つめる。

見下している。死体と一緒に見下している。

見下している。死体を見下している。弱い奴を見下している。

見下していた。殺した死体をいつも見下していたのは自分だ。

見下す。強者が弱者を見下す。見下すのは、自分だ。

見下している。能面が、自分が殺した死体一緒に自分を見下している。

なんて——屈辱。

殴られた痛みなんか忘れるほど苦しかった。その屈辱が耐え難い。

見下す。能面が見下す。ただ、それだけだ。

殺さない。そう、なにもしない。ただ見下している。

そして、もう興味がないように……もうここには何もないと認めたらうに潔く、彼の視界から消えた。本当に、道端に塵屑ちりくずが落ちていたという確認をすませたような無関心さに、彼はしばらく、捨てた鉈を拾ってくるのではないかと思っていた。

だが、ようやく立ち上がれるようになって辺りを見渡すと、もう自分以外の生物はいなかった。

残ったのは、すっかり血も乾き死臭を放っている死体だけ。そこでようやく、自分は弱者ですらなく、生かすも殺すも差のない微小な存在だという、悪魔の視線の意味を知った。

「あ、あ、……………」震える。

もうじき夜が明ける。

その前に、

「ああアアアああああアアアッああアアアアアッああ……………」  
獣の咆吼が、血煙と共に夜に残る。

7

「シキを尋問しろ」

麗らかな昼休みのさなか、虎子からそんな電話がかかってきた。

こっちもタイミング悪く取り込み中だったが、私は急いで帰宅することにした。用意周到な虎子がパトカーを用意していたから、それに乗り込んで、車中で鳥口さんから事情を説明されて、簡単な事情聴取みたいなことも受けた。

家まで送ってもらい、虎子が待ち伏せているのと思ったら、どうやら別の事件現場に行っているらしく、遠ざかっていくパトカーを眺めながら、急いで帰ってくる必要があったのかな、とあの女の職権乱用ぶりを非難した。が、玄関をあけると、まるでどこからか見ていたかのように家の電話が鳴って、出ると案の定、虎子だった。

また豚骨スープみたいなことってりとした嫌味でも言うのかと思っただけ、予想外にも今日は、レモンジュースみたいにあっさりと呼件だけ、例のごとく一方的に命令して勝手に電話をきりやがった。

後でそっちに行く、それまでにシキから聞き出せるだけ聞き出せ、というまるで、ここは政府の極秘テロ対策機関か、そしてアイツはテロリストかスパイか、それでもって私は冷酷な尋問者か、と言いたいことは山ほどあるけど、生憎ともう電話からはもう電子音しか聞こえない。

瘡だが、本当に不本意だが、状況が状況だけに、今は虎子の指示に従うしかないかと、自分にしては織姫と彦星の逢い引きぐらい珍しく素直に、シキがいる土蔵へと向かったのだが。

「こいつ、私に喧嘩売ってるのね……………」

土蔵の最後部に位置する白いソファ。その上には、置物のように何時だって白い着物姿のシキが座っている。そのはずなのだが、今日に限って、その置物は地震でも起きたのか、倒れていた。そう、文字通りの横転。体育座りのまま横に転がって身動きしない。ふざけているのとしか思えない、常人には窮屈な体勢で寝入ってる。しかも、いつもなら警察犬が火災探知機並の嗅覚で、私が土蔵に入った瞬間に気付くはずなのに、手が届く側まで近づいても、すやすやと熟睡している。

なんていうか、憎たらしいほど安眠してるから、蹴り飛ばして拳で叩き起きてやりたい衝動が、私の両手両脚に忍び寄ってくる。

しかし、だが待てよ、と嘯きが脳裏に届いた。

これを理由にしてこのまま帰っちゃえ、という天啓を賜った。

「うん。寝てるなら仕方ない。起こすのもカワイソウダカラ、ね」

誰にでもなく、エスケープの呪文を唱え回れ右。そのまま外へと逃げだとしたが、何か、振り返る途中に何か、チラリと見慣れない物が視界に入った気がした。その違和感に視線は戻され、ソファの足元へ焦点を合わせると、無造作に脱ぎ捨てられた着物。

それを見た瞬間、頬が引きつるような寒気が走った。

まるで絵の具を零したように赤黒く染まった白衣。その赤が何であるか、見た瞬間に分かった。嗅ぐと、嫌な記憶が脳裏を過ぎる。

これは血だ。

「ああ、そうだよ。朝、あいつ血だらけだったんだぞ」

数時間後、陽が沈む前に虎子は母屋にやってきた。そして居間で昆布茶をぐびぐびと飲み、遅い昼食を摂りながら、そう呟いた。

「だがまあ、安心しろ。あれは返り血じゃない、死体の腐血だ。匣の中の死体を弄くって付いたものだ」

真つ赤なトマトソースたっぷりのパスタを食べながら、虎子がそっけなく、どうでもよさそうな口ぶりで言った。

食事中にそんな話をする神経もさることながら、死体を弄ぶ、その行為に項に冷たいものを感じた。吐き気さえする。

「私が発見したとき、匣の周りに肉片が散乱して大変だったんだぞ。子供の躰は家族の責任だろ。死体で遊ぶなって、ちゃんと教えとけ」

「無理よ、そんなの」

虎子は迷惑そうに顔をしかめるけど、それは出来ない。

「そんなこと、シキに分かるはずがない。どう教えればいいのよ」

「どう教えるって、簡単なことだろ。死体なんかで遊ぶなって言えば」

「シキは死体を理解できないのよ」

まるで魔法のように、私の言葉は静けさを呼び込んだ。虎子が息を呑む。半開きの口をそのままに、視線が泳ぐ。

部屋は重苦しく空気に換気され、まるで生き物全てが寝静まった深夜の静けさが、耳鳴りがするほど煩かった。

「そう……だったな。わるい」

消沈したように虎子が謝るなんて奇跡的な出来事なのに、私の感情は引きこもったまま微動だにしなかった。

僅かな幕間。沈黙は凶々しく居座り続け、虎子が機械的に動かすフォークとお皿がぶつかる音だけが、まるで時計のように規則的に鳴り続ける。

私も、それ以上は何も言わなかった。とてもじゃないけど口を開くことができない。吐き気が喉まで染みついてしまっていたから。重い酸素が身体の中に満ちている気分。

「それはともかく……。シキから何か聞き出せたか。あれは匣を置いた行った奴を目撃したようだが」

まるで数分の沈黙が無かったように虎子は問いかけ、私は首を横に振って答えた。

「寝てたから無理だった」

「……そうか。こっちも目撃者を捜してるんだが、手応えがないからな、アイツのが、今のところ美味しい情報なんだが……仕方ない」

叩き起こすか、と立ち上がり両手の拳をぶつけて気合いを入れた。まるでこれから世界タイトル戦でもやろうかというボクサーみたいだ。なるほど、腹が減っては戦は出来ぬと言うのだから、飯を食ったから戦に赴くのだろう。

「ああ、ところで絵馬」

襦フスマをわずかに開けて、虎子は顔だけ振り返った。

「この事件のことで、何か、私に言っていないことがあるんじゃないのか」

敵か、悪性の異物を見る凶器のような視線に、さっきのものとは違う寒気が全身を走った。まるで呼吸を許さない。

「貴様、何を隠してる」

シラナイ女ガイル。

「なにも……隠してる事なんて、ないわよ」

残り滓カサのような声で答えるも、虎子の視線から疑いの念が消えない。本当か、と再度問いかけるような威圧的な視線。

「そう……か」

その啖カサきがスイツチのように、私が知っている虎子がそこに戻ってきた。

「貴様はシキを異常だと言ったが。ああ、たしかにアイツは、間違えなく生粋の殺人鬼だよ。だけど、それは体質で、アイツは殺人嗜好者じゃない。それでも異常だと言うのなら……」

そして、もう興味のないように虎子は完全に私に背を向ける。

「その逆は、どうなのかね、絵馬」

襦を開け放ち、疑問だけ置き去りにした。

◇

私の憂鬱な気分同情し同調してくれたように、空は照度をさげ、重苦しい色をたつぷり染み込んだ暗雲に覆われ、もうすぐ夜闇が訪れるのに、それを待ちきれず、冷たい雨は降り出した。

連日の祟り騒動の影響で増えたお供え物を、拝殿から外に出し終え、扉を閉めてからブーツを履いて、傘を持ってこなかった事を悔やんで溜息をついた。

雨はまるで物語のクライマックスを急かすような勢いで降り始め、あつというまに境内には鏡のような水面が幾つもできあがり、参道の御影石も艶やかに磨かれ、石灯笼の青白い灯火は、霧のような雨粒によって闇に滲む。墨色の皮膜に包まれたように薄暗い境内。

雨宿りしようか、それともお供え物をまた拝殿の中に戻して、走って母屋に帰ろうかと、雨が眺めながら、私は亀のようにのんびりと考えた。「お姉ちゃん」

雨の合唱に加わるように、シキの声が何ものにも邪魔される事無く聞こえた。その声を辿って振り向くと、薄暗い雨の中で、藍色の番傘をさした白い着物姿の浮かんでいた。まるで怪談のような情景だ。

虎子はシキから何を聞き出したらしい。帰りに母屋に寄った時に、陰しい表情で、今夜辺りが分水嶺かもな、と言っていた。犯人が分かったのと私が尋ねると、渋い顔で頷いた。

シキは、犯人を知っているのだろうか。あの死体を作った人。いや、そんなはずはない。だって、その犯人は。

「お姉ちゃん、何してるの？」

遠近感を狂わすように大人しい歩みで近づき、人形のように首を傾げるシキから、かすかに血の匂いがした気がする。匣の中には死体がある。匣を開けて死体で遊ぶ。腐った血に濡れ、肉塊を弄んだのに、纏う白さに、きつと誰もが騙される。この子供は穢れていない、と。

「あんたこそ、何してるのよ」

憂鬱の気分とは無関係のように、いつも通りに棘を刺すよう声で言える。きつと表情だって、そうだろう。

「森に。青鷲火をね」

「そう」と相づちを打ったけど、どういう意味なのか分からなかった。

「傘、お姉ちゃん、使う？」

摘んだ来た一輪の花のように傘を差し出すシキの腕を、私は片手で素っ気なく押し返した。

「いいわよ。持ってきてるから。それに、雨宿りしたい気分なの」

つまらない嘘をついた。馬鹿みたい。意地を張らないで素直に傘を借りればいいのに、そんなことしたらシキが濡れて風邪ひくでしょ、なんて、ちつとも心配してないくせに。本当はこんなところで雨宿りするより傘をさして早く家に帰りたいくせに。ほんと、馬鹿みたい。言ってから、私はもうしばらく雨を眺める事に決めた。

ぼんやりと、落下する水滴の群と琴線を弾くような雨音に耳をかたむける。他とは違う、踊るような雨音が傍まで近づいて、それが急に途絶えた。

ちらりと横を見たら、傘を畳んだシキがいた。

腕を伸ばせしても、あと、手がつぐらい足りない距離。

「僕も、雨宿りです」

私は言葉を口にしようとして、だけど口からでたのは溜息で、そのまま瞼を閉じて雨音に身を委ねた。そうすれば、私は独りだ。

冷めた空気が、身を包む。

小さな生命が、踊る様に。

弾ける滴と碎ける雫の音。

私の周りで回り回り困む。

賑やかな音。だけど冷淡。

その冷たさが、私を包む。

骨の芯まで、暖かく包む。

吐息が、気付いたら歌に。

静かに、雨に添うように。

私は、古い歌を口ずさんでいた。

私を月に連れてって、と雨に唄う。

雨音に掻き消され、暗雲に遮られ。

届くことのない他人の願いを唄う。

静かだ。こんなにも静かなのに、私の隣には、シキがいる。

それさえ、とても心地よいと思える程やかな静けさが私に訪れる。

だけど不意に、昔の記憶が脳裏に過ぎった。

「シキ！」叫んで、その声に自分でも驚いた。

「……………どうしたの、お姉ちゃん」

視線を少し下げると、雨に枯れた花のように萎えた表情でシキがいる。

「用がないなら、さつさと戻りなさい。邪魔だから」

言って煙を払うように手をふった。

「うん……………」物足りなさそう声を漏らし、シキは私から離れた。

私は付き合って、幻のようなシキをまだ見続けて、ふと立ち去った場所に目をやると、藍色の傘が置いてあった。

瞼を閉じ、顔を正面に戻して、溜息をひとつ。

そして瞼をあけると。

そこには艶やかな闇。

幽かに蒼く幽かな闇。

そして、黒い陽炎が現れていた。

寒気が抵抗して、冷えた空気を呑み込むと血の気がひいた。

それが人なのか分からない。

振り返ると、もうシキは居ない事が、自分でも驚くほど不安だった。

もう一度みた。霞む闇の中に浮かぶ影の中で、白い能面がゆらゆら揺れる。

まるで骸骨。

それを直視した瞬間、体は寒さに凍り付いたように凝固して、指先一つ動かすことも、声を発することも、それから目を逸らすことすら出来ず、まるで煮ぎつけられるようにその影を見つづけた。

白い能面を被った影。

まるで浮遊しているように、輪郭を揺らして近づいてくる。

参拝の気軽さでも、儀式の厳かさもない足取り。

青白い灯籠の灯りに照らされて、影は闇から隔離されて、仮初めに人の形を取り戻しては、再び闇に紛れ、青白い光に暴かれては、影を揺らす。

雨音に紛れ、小石が擦れる音がする。

その隙間を縫うように、鳴き声が聞こえる。

ひゅーひゅー、と細く甲高い鳴き声が漏れる。

息を呑む。微かに震えている自分の体に気付いた。

目が痺れ、喉が痺れ、頭が痺れ、身体が痺れて。

一步また一步、足が見えない影が迫る。

それが不意に止まった。

細い雨粒。

風が吹く。

樹海の木々を揺らし葉音を鳴らす。

影の輪郭がゆらゆらと揺れる。

揺れて――襲いかかってきた。

「――あッ」

瞬間、縛り付けていた呪縛が解けた。

緩慢な揺らめきから、鋭利なほど素早い影の接近。

迫る。

影から細長い腕が伸びる。

咄嗟に右へ避けた。

影が、横切る。

まるで濃霧のような黒い衣が触れた。

空を掴む影の手。素早く回転し執拗に迫る。

「ツク」石畳を滑るようにそれをさけた。

影から距離を取ろうとバックステップ。

影が追う。

「つちよっと！」

制止を遮って影が迫ってくる。

その動きはひどく人間らしかった。

だから身構えた。

飛び込んでくる影。両手を伸ばす。

「フッ」

短い発声と共に、体を前屈し地面に両手を突く。

影の接近、距離は一メートルを切る。

タイミングを合わせ素早く上半身を捻り、巻き込むように左カトを振りあげた。遠心力により鈍器となったカトを、影の中腹辺りを左から打ち付けてやった。

「ヒャア！」苦悶の悲鳴が、影から漏れた。

くるりと回って立ち上がると、はじぎ飛ばされバランスを崩した影は灯籠に寄りかかるように尻餅をついた。

「似非でも役立つわ」

緊張と恐怖がブレンドされてハイになった笑みが零れる。だけど自己陶酔に沈む前に、倒れた影……白い能面を被り黒衣のマントを纏った人間を眺めて、これから離れなくては、という冷静を取り戻した命令に従って、その場から走り去る事にする。

でも影は、反発するバネのような勢いで飛びあがった。

マントが翻る。翼を広げた鴉のように影が広がる。

獣じみた動きに驚いたけど、すぐに身構えた。

タイミングを計る。

右足を一步退く。上半身を捻る。視線を能面の頭上へと定める。

影の中は闇。

距離が瞬時にして闇に喰われる。

能面めがけて足を振りあげた。

我ながら絶妙なタイミング。避けられるはずがない。影が避けようとした瞬間に、能面が割れる。瞬きの間に終わる。

私の目には、刹那後に碎ける能面を捉えていた。光。

危険な鋭さに輝く光が迫る。

その瞬間、悪寒を感じた。

そして、

「あああッ——ッ」

光に犯された。

背中から石畳の上に倒れる。その痛みよりも、もっと鋭く熱いものが足を犯してる。訳が分からない痛みに思わず目を瞑り、歯を食いしばって、追隨する悲鳴の束を押さえ込み両手で右足を押さええた。

目を開けて、途端に苦痛に崩れそうになる。

雨に濡れた石畳に、生まれたての鮮血が流れる。自分の血を他人事のように見ていた。右足、膝からブーツを切り裂き、踝近くまで一筋の赤い線が出来ていた。そこから雨に晒され冷たくなった白肌を焦がすように、熱い血が流れている。

影を見た。

見下ろしている。白い能面にはひび一つない。マントの裾からは、白銀の刃が生えていた。

それに切られた、と理解した瞬間、左足の激痛が鋭さを増した気がして、もう逃げることはできない、立つことさえ満足に出来ない、と冷静な自分が脳裏で囁いた。

出来ることなんて、私を見下るす能面を睨みつけるぐらい。皮肉や恨み言の一つでも言わなければ痛みは治まらない。けど、それを言えるほど生優しくはない。

ひゅーひゅー、と能面から鳴き声が漏れる。

ひどく人間味のない声なのに、影は人の形をしている。

唇が震える。右足の傷を抑える両手が血に濡れた裏える。

脳裡に、いくら振り払っても離れない死の予感が憑く。

能面が揺れた。影の輪郭が揺れる。

青白い光を帯びた刀の切っ先が、私の喉元に向けられた。

「あ………ゃ」逃げたくて体を滑らした。

ヒューヒューという鳴き声に、

ふふふ……と妖艶な笑みが混じって聞こえる。

切っ先に二分にされた視界から白い能面から。

「貴女が、邪魔なの。奥津城絵馬」

怨嗟と慈悲に響く、人の声が聞こえた。

細い雨のヴェールを隔て、私は初めて、能面に穿たれた暗い孔の奥に、

微かに煌めくのは瞳を見た。

私の唇が何かを叫ぼうと動く。無言。

突きつけられた切っ先が天へ昇る。

そして雨と共に、落ちる。

落ちる。

死ぬ。

その間に目を瞑った脳裡に浮かんだ、

それを叫んだ。

瞬間——しやらん——鈴の音。

目を開ける。

能面を被る影が両腕を前へ突きだしたまま停まっていた。

繰り返し連なる清らかな音の中、時間が止まった気がした。

カランカラン、と乾いた音がけたたましく鳴り響く。

そして、束の間の停滞が動き出す。

黒い影が消え、白い影が過ぎった。

しやらん——鈴の音が弾け合う金属音と共に鳴り響く。

「キャツ——」

私のものじゃない悲鳴が響くと。

嘘のように黒い影も綺麗すぎる凶器もなくなっていた。

ゆっくり上半身を起こして、音が鳴る方へ振り向くと。

黒い影は青白い刀を振り回して、白い影に向けられていた。

白い影——闇の中で光沢を放つような艶やかさを持つ純白

の着物を纏ったそれは、短刀の様な物で、刀を防ぎながらまるで舞を踊

るように、ひらひらと袖を翻している。

それが誰なのか、姿を見る前から私には分かった。

「シキ」呟いた。

影を追い払おうと、シキは手にした小振りの刃で黒い影を祓はらっている。しやらん、とシキの動きに共鳴して、鈴の音が連なり鳴り響く。

二十メートルほど離れ、闇の中で微かな煌めく。

シキは跳躍ジャンプしてた。落雷の勢いで降り落ちる小さな刃を、黒い影はそれ以上の刃渡りの刃で防ぐ。一拍、小さなシキの体が宙に停滞し、影を蹴って後ろへ大きく跳び退いた。それは跳躍というより飛翔に近かった。

宙を舞う白い影は、ひらひらと廻り、数回のバックステップで私の側で着地した。

「シキ……………？」小さな白い背中を見つめ呟いた。

「はい。——シキです」

シキは、まるで緊張というものが無い声で顔だけ振り返る。

「ごめんなさい。お姉ちゃんの声が聞こえて、戻ってきちゃいました」

シキの手には見慣れぬ物が握られている。

「シキ、それ……………」まだ痛みに思考が阻まれたまま呟く。

先端にひし形状に近い銀色の刃。柄は朱く、それだけなら短刀のように見えるが、無駄なほど半径が長い金色の柄の外縁には、同色の小さな鈴が幾つも房のように飾られ、柄には五色の色鮮やかな細長い布が束ねて着いている。

思い出した。見覚えがあるそれは、巫女が舞を踊る際に持つ神具の一つ。矛先鈴ヤサシ。その先端の刃も模造品。ただの装飾品だ。

「……………血の匂い」呟いたシキは顔を俯かせ、膝を曲げて手探りで私の右足に触れた。「怪我、してる……………」その独り言のような声は震えていた。「大丈夫？ お姉ちゃん」

シキは私の方を向きながら、不安げな表情できいて、手にしていた矛先鈴を地面におき、懐から包帯を取り出した。両目と同じ包帯だ。それを私の右脹ら脛ひざに巻いて応急処置を施してくれた。白い包帯はすぐ赤く渗む。

「傷は浅いから、大丈夫。でも走らないでね」

シキは、テキパキと包帯を巻き終えるとそう言って、顔を上げた。そして、後ろを振り返った。

「立てますか」シキが訊いた。

「……………平気」

私は近くの灯籠を手がかりに立ち上がるうとした。二度、膝を折って、右足に体重を乗せなければ我慢して立つことはできた。走ることはできないけど足を引きずって歩くことならまだ出来るかもしれない。

シキは地面に置いていた矛先鈴を手にして立ち上がった。五色の布が雨水をすって色褪せてしまっている。でも、その鈴の音は変わらず清らかな音を鳴らす。

「虎子さんに連絡してください」

シキは振り返りながら言った。

「あれが、虎子が探している。夜鳥です」

シキの声が鈴よりも闇によく響く。

シキの背中越しに、それを見た。

樹海を背にして影が、刃を携えてゆらゆらと佇む。いや、その闇と近似色の衣で遠近感はやや曖昧。けど近づいて来くる。その速度は歩みから疾走へ、砂利で刃を鳴らしながら私達に襲いかかってくる影。

だけど、その恐怖を祓うように鈴が鳴る。

「行つて、お姉ちゃん。あれは僕が引き留めておきます」

まるで今日の雲行きを告げるような軽やかな響きで、シキは言う。顔いて、雨のヴェール越しにシキの背中を見つめた。

「シキ……………殺したらダメだからね！」

シキが太刀を浴びることの不安などより、その不安が私を叫ばせた。

「人殺しは、絶対にしてはいけません」

厳かな声で返し、シキは顔だけ半分振り返り、瞑った目のまま微笑んだ。

「僕がするのは」手首を捻って鈴を鳴らした。

そして、右腕を円かを画くように振って、

シヤン——と一際大きく鈴の音を響かせる。

五色の布が上弦を画き、下弦を画く前に、腕を引き一文字に流すと同時に、シキは体を蛇のように地面に沈ませた。

「鈴祓いです」

神事を始める言葉を厳かに告げ、シキは地面を蹴った。

飛び散る水飛沫。

その向こう側からは、再び刃を構えて能面が迫る。

それがまるで亀のような遅速なほど、シキの疾走は獣のそれだった。衝突する白と黒の影。

弾ける金属音と鈴の音。

五色の布が、影を彩るように舞う。

稚拙なほど乱雑な黒い影の太刀筋を、シキは舞を踊るように軽やかに、目を瞑ったままで、それでも紙一重でよけては、鈴を鳴らし五色布で影を祓い打つ。その巫女舞のような光景を見て、私は灯籠から手を離れた。不安はある。後ろ髪を引かれる思いは強い。

「だけど——、と激痛が残留する足を引きずりながら踵を返し、母屋に向かつて、二つの影から離れた。

しゃらん、と鈴が鳴る。

その音に後押しされるように、シキを残して雨の中を進んだ。

それは剣劇と呼ぶにはあまりにも不相当な組み合わせ。

黒影が持つ刀が創り出す煌めく軌跡は、短く直線的で不細工な格子模様を描く、拙い素人のもの。だが、踊り手の一方である白影は、刃の形こそ成してはいるがそれは柔い鉄で似せた模造刀にすぎないながら、その鈍い煌めきの軌跡は、一筆書きで刃を何重にも描き、銀の刃、五色の尾、白の衣を纏う小軀すべてが演舞のためにあるかのように流れている。

双方の実力の差は歴然。その差を埋めるものがあるとすれば、双方が手にしている刃、そして、目であろう。

刃の勝負は早々に決着をみた。

シキの模造刀は本物の兇器に負け、都合六度の打ち合いの後により切断され、より鋭利な尖端と鈴を残して刃の形を失った。

それを見ずとも、おそらくは、重みと切られた際の感触だけでシキはそれを察したのでろう。二度とそれで刀を受け止めようとはせず、けれど矛先鈴を手放そうとはしない。

これは何の遊戯だろう。

能面の影は、刀を振るって白衣の子供を惨殺しようとするが、それはまるで霞か煙を相手にしているように、まるで掠めることもできない。シキはもはや武器として役立たずの鈴を手にし舞う。

まさに舞台であらずとも、彼はまるで巫女舞いに興じているように身体を翻し、回り、弾け、優雅に、どこぞへと流れていくようだった。

鈴がなる。雨の調べの乗って、静謐な鈴の音が連なり鳴り響く。そう、流れている。

何かにとり憑かれたように能面の影は、シキを両断斬と刀を振るう。掠ることはなく空を切るばかり、その度に間合いをつめ、再び刀を振るい、あるいは突き出す。

二つの影は境内を命がけで流れている。

まるで風と共に、何かに導かれるように、もつと暗いところへと。

白も黒の影も呑み込む濃密な闇の中へと流れていく。

鈴が鳴る。残響が連なり軌跡と成る。

招くように、導くように、誘うように。

シキは舞う。鈴を鳴らす。流れていく、暗いところへ。

能面は唸る。刀は鳴らず。惹かれるも、気づきませず。

シキは巧みに刃をかわしつつ、能面の影を拝殿へ、そしてその裏へと誘いこむ。それは踊り手の一方の手を取り、円舞の大輪の流れへと誘導していくような滑らかさ。

それに気付かなかつたとすれば、焦りからだろう。能面の下からは乱れた呼吸が漏れ聞こえ、それが次第に間隔が短くなり大きくなっていく。それも仕方ないことだろう。日本刀の重みは、ニキ口は優にある。それを何度となく振り回していれば、疲労で呼吸が乱れるのも無理からぬ事。

疲労は思考を鈍らせ、狂気は執着する。

もはや能面の奥の目には、シキの惨殺死体しか幻視<sup>ま</sup>えていないだろう。

空は光を拒む濃密な暗雲。宙には輝きを抱きしめて墜落死する雨。地上は昼の熱と夜の狂気と人々の悪意が蓄積した闇。そして命を喰らう樹海。

闇に包まれよ。

そう、この場に置いて尤に縊る『目』がどれ程役に立とう。

樹海に近づく二つの影。ゆっくりと停滞に似た遅速か、音に似た高速か、それさえも些細。境内に真ん中であろうか拝殿の中か、空の底かさえ定かにしようとしないうちの闇の中で、その差異を考えるほどの余裕が、両の目を猛禽のようにギラつかせた者にあつたであろうか。

袖に刃が触れる程の距離を一進一退としていたシキが、拝殿の裏手から神殿の奥へと近づいた辺りで、突然、後ろに大きく跳躍した。

間合いを計るためか、その間に止むことの無かった刀の振り子が停まり、乱れた呼吸が雨に吸い込まれ、束の間の冷静をもちたらずような静止が挟まれた。

「こっちだよ」誘う声は幼い。そして遠ざかる。

「あ、ああー」潤い満ちた闇に枯れた声が漏れる。

追いつめるように追いかける。

白い影は軽やかに速く、黒い影は鈍く鈍い。

ならばと黒い影は刀を捨て、小振りのナイフを手にした。

命がけの鬼ごっこ。

それは。

「あああああああああああ！」

命も存在も忘れた人生のすべてか。

あるいは。

「まだ、こっちだよ」

今はただ楽しい笑みに含まれる子供の遊びか。

どちらであれ、その二つの優劣はなく、微小な差でしかない。

平面など無い地面を弾けるボールのように進むシキ。乱立する木々と枝はどこにおいても手を伸ばせば必ず触れてしまいそうなほど樹海を占拠している中、微風が通り抜けるように闇を切る。まるで小石一つ小枝一本の位置さえも把握している様子。

追いかける黒影は、何度となくバランスを崩し転びかけながらも、執着で生えたような草木がマントにしがみつかれようと、葉ほどの穴から見えるシキを追う。その姿はまるで獲物を追う猛禽の獣というよりも、糸に囚われたまま逃げ出す蝶に引きずられている、滑稽な蜘蛛の様に似ていた。

だが蝶は、糸に囚われている限り蜘蛛からは逃げられない。

仮にシキが樹海の細部の地図を記憶していたとしても、日々、植物は生長し土壌は動物により煽動<sup>せうどう</sup>する巨大な動物の胎内に似た樹海で、平地と同じように行動するのは不可能だろう。

おまけに盲目に等しい状態ならば、いくら樹海に慣れていると二人の距離は縮むはず。そのアドバンテージのタイムリミットは、シキ自らが打ち切った。

シキは木々の間を縫うように跳躍し、広い窪地の真ん中へ着地し、同時に向かい合うように振り返った。まるで追いかけてこはもう飽きてしまったような軽やかさ。

当然のように追ってである黒い影も停まると思いきや、いや、それこそ当然のように、静止するどころか更に加速し、手にしたナイフを水平に立て飛びかかった。

重苦しい雨に咆吼ほうこうが混じる。

距離は結ばれることを強要されたように縮まり、ゼロとなる。

刃が獲物にかみつく獣のように、シキに襲いかかる。

直線的な突き。

を、ひらりと躲かす。

木の葉と鉛玉の様。

半身退いて躲かした勢いで回転し回し蹴り。

シキの左踝が、白骨の仮面を掠める。

雨粒が天から地に辿り着くより前に、束の間の交差は終わり、シキはそのまま竹とんぼのように大きく後ろへ跳躍して窪地を脱出した。大木の側に着地して、見下ろすように、残された白い仮面へ顔を向ける。

影から潜めていた呼吸が怨嗟に混じって解放され、雨に溶ける。

仮面の下から現れた顔は、少女のものだった。

言葉はない。ただ、火傷を庇かばうように手で顔を覆いながらも、その指の隙間から、栗色の髪の毛の隙間からは、兇器に似た視線をシキに送り続ける少女の名は、明神綾子みよるじあやこ。

その名を知っていても、シキには、その蛇が憑依したようなやつれた顔を知ることには今はない。いや、彼女を知る絵馬達が見たとして、その形相を果たして、彼女それと認識できるだろうか。それほどまでに、彼女は、日常の彼女ではない。

「コ……て……る」

その声は、

「ロシテ……シテ……コロ……」

泥に混じった雨のように濁り、

「コロシテ……シテ……シテ……コロシ」

雨音に対する雑音のように潜めき、

「コロシテ……コロシテ……コロシテ！」

女のそれとも男のそれとも、人間のそれとも違う、

「ぶっコロシテヤル！」

禍々しい叫び声を森に響かせ震える妖怪。

「ねえ、なんでそんなに怖がってるの？」

緩やかな言葉を綾子の耳に落とす。

「君は、何をそんなに怖がってるの？」

静謐な声が、二人の間に波紋のように広がる。

綾子は首を横に振った。まだ人語を理解できる、だからその言葉を否定するように、いや、拒絶するように濡れた髪を乱し黒衣が靡くほど、全身をもって応えた。

『違う』という言葉で「コロス」と叫んだ。

「違わないよ。だって君は、怖くて怖くて、堪らないって泣いてるじゃないか」

禍々しい殺意の叫びが、シキには泣き声に聞こえた。

「その恐怖の正体が分からない？ どうしたら消えるか分からない？ だから駄々を捏ねてるだけでしょ。恐怖に閉ざされて何も見えないだけでしょ。だから、そうやって殺すなんて弱い言葉を叫んで誤魔化そうとしてる。自暴自棄になるのは簡単だ。殺すと叫べば楽になるだろうね。だけど気付いてる？ 君は誰かを傷つける前に、君自身がその言葉に傷ついてるってことに」

まるで雨音も大気もすべて彼に味方するように鎮まる。

「君が今すべきは、誰かを傷つけることじゃない。なににより自分を救ってあげなくちゃダメだよ」

水溜に落ちる木の葉のように優しく落ちる言葉は、その場の生命すべてに、休息を与えようとして沈黙の波紋を打った。

雨音。

弾ける葉音に呑み込む大地。

岩を滑る雫。癒着する枯れ葉の悲哀。

雨音。連続にして無作為の絶叫。

響く。沈黙は塗りつぶされても静か。

獣の震え。震え凍え。小声零れ。

濁流に似た嗚咽。壊れそう、今にも。

震える肩を支えてくれる人はいない。

倒れそうになっても、許そうとしない狂気。

停まっては死んでしまう獣の命。兇器な本能。

女は叫ぶ。世界を拒むように、壊れるまで叫ぶ。

女の叫び。世界は拒むように、様々な音で潰す。

女の絶叫。子供は受け入れる、慈しむ命の様に。

女は言う。

「コロス」

駆けだす女を前に、シキは蝶を見初める優雅さで告げる。

「僕には、君が助けると、叫んでるように聞こえてならない」

悲しげな声に、だけど綾子は停まることなく窪地を駆け上がった。

シキは、それを向かい受けるように大木を背にして佇む。

飛び跳ね駆け上がり、綾子は無造作にナイフを一閃。

シキの胸の前を微風が過ぎる。まるでそれを知っていたように動かない。だけど、もう一步踏み踏み込まれ、振り下ろされたナイフには、木の幹に張り付くように後ろに下がった。

綾子の口から禍々しい気迫の叫び。モはや呼吸と同化したように気にせず、焦るようにナイフを突き出す。

それは繰り返しだろ。

シキは木の幹に沿うように身体を横に滑らせた。

そして容易に避け、傷を負う事はない。

「っあ、つつう！」小さいが、確かに悲鳴があげた。

何かに打ちのめされたように、シキが突然ぐらりと揺れ、幹に寄りかかるように膝をついた。濡れた包帯を抑える。白生地に朱色が滲む。

その頭上には、誰からも忘れられたように藁人形が太い五寸釘で木の打ち付けられている。その釘が、ナイフを避けたシキの額を抉るように傷つけた。

不意の痛みに悶えるシキは、先までの俊敏な動きを失い屈んでいる。

動かない。それとも動けないのか、動きたくないのか。

そんな疑問を破棄するように、綾子は絶好の機会を拾った。

近づく。

かける言葉を忘れたように、破顔の笑みから息を漏らし腕をあげた。

ひと思いに、墓標を打ち込む無慈悲で、幼い少年を。

「コロシテヤル」

そのためだけに、今、彼女は生きている。

そして、ナイフを振るい落とす。

その瞬間、シキの両目を覆っていた包帯がさらりと解けた。

◇

辿り着いた時、彼はそれを見た。

夜と雨に侵略された境内で、黒影と白影が解け合うことを拒絶し合いながらも浸食し合うように、命がけで円舞に興じている様を。

観客であった。

シキと綾子による殺し合いを、見ていた。

興奮していた。血液が雨を吸収し、増大し膨張し暴走しては、血管を擦り裂く勢いで全身を駆け巡る、白熱の興奮を感じていた。

それは他人の殺し合いを目の当たりにした事よりも、黒マントの白い能面の人物に出会えた事だろう。

その幸運に絶叫しそうになった。

だが、冷静はまだ残っている。

殺し合っている。

アイツはあの子供を殺すのだろうか。

あの子供はアイツを殺すのだろうか。

どちらでもよかった。でも、出来れば自分が殺したい。

どちらを？

もちろん、どっちだっていい。一人か二人なんて数はもうどうでもいい。殺す、ただそれだけが同じなら、一度だけの殺人か、繰り返し殺人か、の違いしかないだろ。

もう殺した人数なんて気にしていない。昨日殺した相手の顔さえ覚えていない。今、覚えているのは、最初の情熱と他人の命に触れて消えていく喪失感と、今、殺したい女と邪魔な奴の顔だけ。

それで充分。生きること、それ以上のことなんて必要ないと。

二つの影が闇の奥、森の中へと遠ざかる。

それを彼は追い、森の中へと入る。

途中、剥き出しの日本刀が落ちていた。落とし物にしては好都合なものだったから、それを拾った。

森には明かりはない。光を糧にでもしているようだ。

すでに二つの影は見えない。

追跡するにはあまりにも無謀な闇。

ここから先は、優雅な観客ではいられない。

呑み込まれては命の保証はない客席につく勇気か狂気がいる。

躊躇うだろ。それが正常な理性。

だが躊躇いはない。

姿は見えない。

でも、聞こえる。

闇に潜めく獣達が、新たな仲間を歓迎するような咆吼が聞こえる。

どこから？

方々へと反響。

無指向性の絶叫。

道標はない。

道もない。

ただ獲物が居る。

ただ殺意がある。

ただ執念が宿る。

同調する狂気を探り、

共鳴する殺意を辿り、

共有しない思想を無視し、

彼もまた獣に還り、樹海を駆ける。

叫びを忘れたように黙々と。

言葉を忘れた叫びを聞いて。

光に見捨てられた森の中を。

瀟洒された純粹な雫を飲み。

殺すための心と狂気を携え。

彼は、彼のためだけに走る。

迷い迷い、躊躇しつつ。

狂い狂い、獣の息遣い。

走り走り、傷を作って。

転び転び、森に抱かれ。

聞いて聞こえる獣の絶叫。

手繰る辿る、闇の向こうの闇の中。



目の前の人間を殺す、という約束された快樂しか見えていなかった。そう、見えていなかった。

獲物を追いかけるため、踏み出した。走り出す。

途端、すべてが停止した。

「ツヒィ」刹那の悲鳴。

それまでの熱が無慈悲に、暴力的に奪われた感覚が彼を襲う。

寒気。それは裸のまま極寒の地に放り込まれたような残酷さ。

痛み。傷つけられてはいないのに、身体の芯から刺された錯覚。

恐怖。それはきつと初めて知った。

殺すか殺されるかの対等な関係ではない。

圧倒的なまでの強者による一方的な殺害。

それは殺人ではなく、生命の摂理に等しい。

その寒気、恐怖、畏れ、嫌悪、喪失感、あるいは絶望。

それは、なにより純粹な死の気配。

そう、殺されると、彼は思った。

振り返る。見えない手に掴まれたように、振り返るしかなかった。

すると、正面から吹雪に晒されたような、心臓が止まりそうな寒気を

感じた。いや、それはもはや生命維持すら拒むような悪寒ですらあった。

そこは変わらず、雨が降り続ける夜の樹海の中。

なのに、吸い込んだ酸素さえも異質なもののよう感じた。

その違和感の根源は、すぐに見つかった。

まるで引き寄せられるように、視線はそこへ。見上げる。

斜面を這う視線。

登り切ると居た。

子供がひとり立っている。

血と泥と雨に汚れて白衣。

まるで幽鬼のように佇んでいた。

ただ、それだけ。

たったそれだけのこと。

たかが子供ひとりに。

何度も殺人を繰り返した彼が、未知の畏れを感じていた。

なぜ、どうして、なにが、わからない、疑問に埋め尽くされる頭。

視線は白衣の子供に釘付け。

何をするわけでもない子供に、一秒後に殺される錯覚が憑き纏う。

そう、少年はただ佇んでいるだけだった。

佇んで、ぼんやりと見ている。

潤んだ瞳にふたつ、微かに煌めくその眼で世界を視ている。

それだけで、彼を含めた全ての命が、死に犯される恐怖に震える。

まるで、そこに死そのものがあるように。

そこに死神がいる。

昨夜とは違う。殺し合いで負かされたのとは次元が違う。

そう、あれは生きていた。同じ生き物同士の対等な殺し合いだった。そして彼が今まで繰り返していたのは同じ生き物同士の殺戮だった。故に、理解した。

今、目の前にいるのは、自分とは違う、モノだと。

それが死神なのか、それともアレが死というものなのか。

そんなことまで考える余裕などあるはずもない。

震えている。

雨のせいなんかじゃない。

ただ、怖いだけなんだ。

彼の身体にある細胞一つまでもが畏れに震えている。

じわりじわりと死んでいくのが手に取るように分かる。

そう、今、自分は、殺されている、と。

少しづつ、ゆっくりと、でも、確実に。

殺されている。犯されている。死に犯されている。

このままでは死ぬ。

分かっているのに、震えが止まらない。

震えが止まらず、上手く動くことが出来ない。

ただ、彼もまた少年を見ているしか出来ない。

先に動いたのはシキだった。

足元に落ちていたナイフを拾った。綾子が落としたものだ。

それを持って、幽鬼のように儚く、静かに斜面を降下する。

ああ——彼の口から息が漏れる。

まるで死の固まりが迫ってくる、と思った。

そして今更ながら気付いた。

ああ、オレも殺される人間か、と。

昨夜とは違う、理解だった。

気付いた。手にしていたはずの刀はもうなかったと。

気付いた。もう呼吸すら去の息だと。

気付いた。もう熱を感じないほど身体は凍えていると。

気付いた。認めたくもない言葉が、奥深くから囁きかけてくる。

「殺せよ」

一分前の自分ならきつと生涯、口にすることのないはずの言葉。

諦めからきたものでも、強者への敬意や尊敬、悟りの類でもない。

ただ、殺されても良い、という許可を誰かから貰ったような気がした。

「殺せ」

腕を伸ばせば届く距離まで近づいたシキに言う。一足踏み込めばナイ

フで心臓を貫くことも出来るだろう。触れることで人が殺せる距離まで

近づいている。日常的な他人との間合いに入っている。

彼は眼を瞑った。それだけで、眠ってしまおうだった。

だけど、何かが横切る気配がして、眼を開けた。

一際濃密な臨死の感覚が過ぎ去った。

シキは、まるで誰もいないかのように彼を通り過ぎた。

錯覚がした。もう死んでいるのではないかと。

だけど、生きている。

振り返る。

ゆらゆらと遠ざかる子供の背中。

まるで眼中になかったかのような颯爽さ。

まるで何事もなかったかのような優雅さ。

まるでこの世に誰もいないという孤独さ。

その態度は、彼が存在を拒絶するものでも、無視するわけでもない。

まるで、暗雲から泥の底へと落ちる雨粒ひとつほどの些末な存在だと。

そう語るように、シキは樹海の闇へと消えた。

残された。

生かされた？

見逃された？

彼は泥の中に膝を沈めた。

失われた臨場感が戻ってくる。

生きている。

それだけのことが、なぜか、すごく泣きたくなった。

それは悲しさか、悔しさか、喜びか、怒りか、はたまた呼吸のように

かは誰にも、きつと彼にさえ分からないだろう。

そういう生き物だ、獣とは違う。

朝、目が覚めると雨が止んでいた。

雷雨は沢山の涙を流し爽快なまでに潔く去る。後に残ったのは無数の水溜と、ふやけて脆くなった朝霧。

昨日の出来事をまだ消化しきれないまま眠りについて、目覚めてもまだ、それらの記憶に現実味は帯びていなくて、まるで小説の中の出来事か、無責任な古い師の戯言のようになら、まだ私には思えなかった。

だけど足の傷だけが、今の私は昨夜の続きで生きていると言っているみたいなのに、くすぶつた痛みが残っている。

母屋に戻った私の前に現れたシキは、包帯もなく、手には無骨なナイフ、着物は泥と誰かの血で汚れていた。それだけで、シキが何をしたのか、私は言葉を思いつく前に想像できた。ありありと、拒むことを許さず脳裏に押し寄せてきた。

その時から、シキの様子は怪訝おかししくなってきた。

いや。シキが全部、怪訝おかししくさせたんだ。

境内で、あやめを見たときシキが言った。私はすぐに、あやめの家に電話した。あやめが出た。様子が怪訝おかししかった。パニックになって、助けを求めて言った。そして小さな悲鳴を残して、消えてしまった。すぐに虎子と一緒にあやめの家に行ったら、家の中にはおぼさんの死体があった。けどあやめの姿はなくて、その後からおじさん死んだと聞かされた。

なんで、こんな事になったのかな、なんて分からない。たった一晚の間に、色んなことがありすぎて、もう考えるのも嫌になる。もう、誰でもいいから、勝手にどっかの名探偵みたいに事件を強引に終わらせて、とっとと眠たくなるエピソードで物語りに幕を下ろして欲しい。

全身を覆う生温い夢が。

羊膜のように包み込む。

外と内を分ける境界線。

あるいは壁。または匣。

外の声が撓たわんで聞こえる。

そして今、私は何をするでもなく、ただぼんやりと居間にいる。

「絵馬、今から鳥居礼慈とそのツレを呼ぶ」

私には届く、届いた瞬間溶けていく。

遠い。近くにある光も遠くて。

私の中に届いた頃にはもう腐ってる。

「で、そうすれば、が真相を語るだろう。ご隠居がいない

今は、奴しか、おそらくこの事件の真相を見てる奴はいないだろう。……

…悔しいかな」

遠い。近くに誰かがいる。声は遠く、私に届かない。

揺れる。たぶん、私に誰かが触れた。何かが触れた。暖かいのか冷たいのか、硬いのか柔らかいのかさえ、夢のように曖昧。

だけど、声だけは聞こえてしまう。

「シキに合わせる。いいな、絵馬」

理由が分からない、考えるのも嫌になる。

シキに合わせる。

それはいけない事だったはず。

昔、それはダメだって約束したはず。

いつだったかな？ 誰と約束したんだっけ？

なんでダメなんだっけ？

どうして約束したんだっけ？

なんで守らないといけないんだっけ？

わたし、約束を守ってた？

なんで、約束を守ってたの？

シキ………キライ………ずっと嫌い。

あいつのせいで、わたし、いつも厭いやな思いしてた。

なのに、いつも、わたしが、あいつを、あいつのために。

『——あげてね』懐かしい声。

誰かと約束したから。

だから。でも。

「………勝手にして」そう本心から思った。

水に絵の具を垂らしたように滲んだ顔が目の前にある。

それが遠ざかる。

それだけで吸い込む空気が軽くなった気がした。

天井。焦げた水飴みたいな甘い色が蛍光灯の明かりに滲む。  
ゆらゆら揺れる。

今、眠ってるの？

今、起きてるの？

今、生きてるの？

今、死んでるの？

今、夢の中なの？

ゆらゆら揺れる。

波打つ水面のを水中から覗いたように、ゆらりゆらり。

影が、風に流される雲のように視界にかかる。

ぼんやりと落下。

白い障子。滲んで汚い。

黒い影がゆらゆらり。

「……………いらっしやい」ロボットのよう反応して声がでる。

今、誰がいるの？

「どうしたんだその足？」

今、誰が喋ったの？

私に訊いたの？

ま、どっちだっついていいよね。

まるで誰かが私を操っているように他人事。

まるで私は、私じゃない私を、私の中から見ているよう。

「あやめはどうなったんですか！」

誰かが怒鳴ってる。

ぼんやりと視線を向ける。

ぼやけた輪郭……………曖昧な固まり……………それしか見えない。

まるで涙で視界が溺れてるみた。

だとしたら、たったちよつと隼で、現実がとても遠くに感じる。

なんか寂しい……………寂しいの？

これが普通じゃないの？

それまでが、近すぎたのよ。

手を伸ばせば触れられるほど近い。

人の手で人を殺せてしまうほど近い。

なんで、そんなに近づいてたんだろ。

耳に響くノイズ。

誰かの声が聞こえる。意味なんてきつとない。

「柁家は全滅、ですか」

なのに、その声は津波のように私に襲いかかる。

私の中にある何かが怯えてるような不安定な揺れ。

気持ち悪い。

私に届く何もかもが、腐敗した果実のように気持ち悪い弾力で触れて

くる。

曖昧に溶けた何もかも。

「妃真河村の……御三家からの依頼からの以来でネバー・モアの調査をしていました」

なのに、誰かの声は鋭いほど明瞭だ。

警戒色の言葉に、後ろ髪を引っ張られたように顔をあげた。

今の言葉は誰が言ったの？

でも、聞き逃しちやいけない言葉……音だった気がする。

視線が彷徨う。すぐに虎子の視線と衝突した。

重なった視線。無言で何か、私に問いかけてくるような視線。でも、

読み込むことが私にはできない。

束の間の接触。

網膜に覆われたような曖昧さに戻る。

でも、透明だった膜は汚れてしまったように、濁って見える。

容赦なく私の中にその汚れが入ってくる。

犯される。

なんて気持ち悪い。なんて不愉快。苛々する。吐き気がする。

なのに抵抗することさえ億劫で、拒もうとさえしない。

まるで雲から投げ出された雫のように、落下していくみたいに。

どんなに抵抗したって翼がない私は、落ちていく運命に逆らえない。

逆らえないのなら、もういい。もう、どうだっていいじゃないか。

犯されるがまま汚れていく。

今まで、守ってきた約束とか。

今まで、大切だったものとか。

今まで、隠してきた秘密とか。

もう、どうだって、いいじゃないか。

そうでしょ？ ねえ。

「後は、おまえが決める、絵馬」

誰かが私を呼んだ。

振り向いたら、虎子の背中が見えて、それもすぐに消えてしまった。

そして残された私と……今更になってちゃんと顔を見た二人。

礼慈が私を見てる。神籬が私を見ている。

沈黙。それさえ耳煩く感じてしまう。

それから逃げるように立ち上がるうとした。けど礼慈に止められた。

神籬が私に話しかけた。何か指さした。まるで誘導されるようにそれ

を見た。部屋の片隅にある和筆笥の上に飾ってある写真立てだった。

もう十年以上前の写真。幼い私と爺や。

「一緒に写ってるのは両親？」

それにお父さんに、シキが生まれる前の、元気だった頃のお母さんと

一緒に写ってる、数少ない家族写真。

「うん。……もういないけどね」

あたりまえのような家族写真が、どうしてか、可笑しかった。

だってこの家族は、もう、壊れちゃってるもん。

こんなに仲良く集まって笑うことなんて、もう出来ない。

お父さんとお母さんが死んだからじゃない。

その前から……あいつが生まれてから、怪訝おかししくなったんだ。

少しづつオカシクなった。

真っ白なシートに、一滴の黒い雫が落ちたように。

それがゆつくりと、染み込んで広がって汚れていく。

この家にとって、あいつは、汚れそのもの。

なのに、なんで必死になって守ろうとしているの、わたし。

馬鹿みたい。……馬鹿馬鹿しいよ。

いいじゃん。もう、どうだってさ。

今は。

「奥津城……」

「分かってるッ」

その優しい声さえ鬱陶うっとうしい。

「分かってるから……」

秘密とか約束とか、どうでもいいと思うのに。

どうしてか、守ろうとしてる私もいる。

それだけは汚がされないように、必死になって守ってる私がいる。

よく、わかんないや。

もう、わからないよ。

でも、今のままはイヤ。

だから、誰かが書いた台本でも、物語を進めよう。

たとえ、誰かに仕組まれた罠だとしても、今のままはイヤ。  
立ち上がるう。

今日、初めて自分の足を実感した。

居間を出て、家を出る。

朝霧は散り、朝陽の刺々しい眩しさに視界が白熱する一瞬、吸い込ん

だ雨上がりの空気は、青臭いほど瑞々しかった。

通り慣れた林道。見慣れた竹林、樹海。

線路に乗った機関車のように、私の足は決まった道筋を歩く。

草花が着飾っている昨日の雫が足にかかる。

冷静な温度が不快な温さで私に纏う。

鮮明な色に囲まれているのに、まるで夢の中。

歩いている実感さえ、他人事。

シャツターを切るように断線する視界。それもきつと一瞬。

そのたびに、風景は変わる。

写真を見ているような風景。見慣れた風景。溶け込んだ見慣れた土蔵。

白い壁。赤銅の扉。拡大。錆び付いた丸い取っ手。

儀式のように口が開く。

「……今から会わせるのは、私の弟……」

まるで扉を開ける呪文のよう。

弟という言葉に目眩がするほど違和感を覚えた。

「この蔵の中にいるのか」

神籬の音が聞こえた。

「生まれてからずっと、死ぬまでずっと、ここから出したらダメなの」

まるで御伽噺おとぎばなしのような言葉。

「だから、もう一つ約束して」

まるで私じゃない私が喋ってる。

振り回される景色。礼菴と神籬がいる。

「あいつに、ここ以外の世界を教えなないで」

そこまでが呪文。

扉を開ける。その時だけ重みと手の感触だけが目覚めていた。

僅かな隙間から中に入る。

いつも、そうだった。

私は、いつも、ここに来ていた。

何のために？ 誰のために？

そんなの決まってる。

一度だって、それ以外の理由はなかった。

時間が止まったような古い匂い。

扉を開けたら、後は蔵の奥から誰かが引っ張っているように、私は脇

目もくれずに奥まで進んだ。

一番奥の壁際に白いソファは空席。

その横に目が覚めるような赤い服の女が壁によりかかって立っている。

私はその隣に無抵抗に移動して、壁に寄りかかった。

ひんやりとした土壁の感触が、脳髓のうずいまで突き刺さるように伝わる。ぼんやりと視線をあげた。

すると反対側の壁際に礼菴が移動しているのが見え、その上の回廊にシキの姿があった。

真っ新な純白の着物が、どんな色より鮮烈に眼球に突き刺さる。

どきりと、一瞬、深い眠りから殴り起こされたような衝撃がした。

梯子をつたい下りてきたシキは、私に微笑を見せた。

罪深いほどに無邪気な笑顔。

見たくない。

私は拒絶した。

そして、夢の続きを見るように、瞼を瞑った。

周囲の空気に同化するように、輪郭を失っていくように。

古びた匂いも、色褪いせた光あも、巖いかな誰かの声こゑも。

なにもかも、開わりたくはなかった、今は。

聞こえるのは深く息を吐いた自分の呼吸だけ。後は雑音。

真っ暗な視界。とろけたように外縁は微かに明るい。

見えるものの代わりに、ここにいない人の顔が浮かぶ。

「あやめ……………」

呟く声は、きつと私だけしか聞こえない。

呟いた途端に、胸にじわりと熱い雫が落ちた。

覚えている。

円らな瞳で笑いかけてくる、あやめの顔。  
覚える。

私の名前を呼んでくれた柔らかな声。  
覚える。

『本当に、心配したんだからね』  
羨ましほど優しく。

『絵馬ちゃんのそういうの、私は好きだけどな』

無邪気な笑顔をいつも私に見せてくれた。

なんて、優しい子。なんて、綺麗な子。

覚える。

あの夜、私達は一緒に夜を過ごしたよね。

あやめ、寝てるるとき迷子になった子供のようにな、泣いてたんだよ。

知ってたよ。

私、知ってたの。

なんで、あやめが泣いてたのか。

その理由を、知ってたの。

なのに、わたし……最低だ。

なにも、してあげられなかった。

『ごめんね、ごめんね………絵馬ちゃん』

崩れそうな声で、あやめはごめんねって言ったけど。

電話越しに、泣いてるあやめが見えていたのに。

私、あやめに何もしてあげられなかった。  
友達なのに……。

暗闇。

いつの間にか、私達の間に出ていた暗い壁。

昨日の夜のように暗い。

雨の音が聞こえた。激しい音。

鼓膜が破けてしまいそうな雷鳴

心臓が潰れそうなほど怖かった。

心配で、あやめのことを心配で、怖かった。

寒かった。厭な予感に体が冷たくなっていった。

あやめの家。

暗かった。

不吉な空気が充滿していた。

何もかもが終わったような、

何もかもが手遅れのように静か。

リビングに首のない死体があった。

私はそれを見つけた。

獰猛な狼の群れがいたように、散らかった部屋。

その死体は真っ赤に染まっていた。

むせ返る血の匂いに目眩がした。

けど倒れることを許してくれなかった。

何か振る舞わされるように、家中を捜した。

あやめを捜した。

暗い。暗い。

どこにもいない。

あやめは、もういなかった。

あやめの家族はもういない。

みんな、ヤタガラスの祟りのせいで、死んでしまった。

殺されたんだ。

あやめの家族を殺したのは、ヤタガラスの祟りなら。

それは……その祟りを産んだのは、シキだ。

「ああ」そうだ。

やっぱり。

『あやめ。シキに関わると、殺されるわよ』

シキが、殺したんだ。

あいつが……あいつが、私の友達の家族まで！

「榊ミヨ、美代子を殺したのは、榊あやめです」

ナイフで胸を刺すような声に、心臓が止まりそうなほど驚いた。

「シキ————ッ！」

気付くと、私は怒りまかせに叫んでいた。

眼を開ける。突き刺すような眩しさ。瞬時に着色される視界。残った

のは白いソファと白衣のシキ。

イマ、コイツ、は、ナンテ、言った———？

殺した？ 誰が？

あやめが？ 殺した？

自分の母親を？ 自分の祖母を？

あやめが？ あやめが？ あやめが？ 殺した？

う。そ。だ。

「あやめがそんな酷いことするはずがない！」

脳裏を埋め尽くす言葉を吹き飛ばす。

「あやめは私に言ったのよ。お母さんがお婆ちゃんを殺したって！」

壊れてしまいそうな声で。

「助けを求めて私に会いに来たのに……」

私は気付いてもあげられなかった。

「家に戻ったらお母さんが殺されてたって泣きながら……」

見えないはずなのに、その姿が私には見えた、たしかに。

「あやめ、泣きながら私に言ったのよ！」

嘘なんかじゃない。絶対に、嘘なんかじゃない。

嘘なんかで、汚れた泣き声じゃなかった。

あやめが、私に、嘘つくはずがない。

「榊あやめは、祖母を殺した」

なのにシキは、表情一つ変えずにそんな事を言う。感情の欠片も乗ら

ない言葉。無味乾燥とした声。生きた人間が語る声じゃない。

「脳挫傷だそうです。榊あやめが告白した内容の刺殺ではありません」  
冷徹な声、言葉の波紋に、私は寒気がした。

こいつ、だれ——？

私の目の前に、シキの姿をした、人じゃないモノがいる。

それが喋ると、背中に冷たいモノを感じる。

頭に熱くて鋭い痛みを感じる。

「そして母は刺殺され、それに使った凶器からは、血がべっとりとついた榊あやめの諮問だけが発見された」

「でも、あやめが……」私は必死に抗った。

押し寄せる。厭なモノが押し寄せてくる。

「あやめにそんなこと出来るわけがない！」叫ぶ。

暗く赤いリビングの真ん中に首のない死体。……母親を刺す。そんなあやめの姿なんか、想像したくない。祖母を殺してバラバラに解体する。そんなこと、あやめに出来るわけがない。

あやめは、そんな酷いことが出来る子じゃない。

あんなに優しく、純粹で……かよわいの……。

あやめは、友達だって。シキにさえ、友達だって言ってたのに。

「いえ、どちらの殺害方法も、榊あやめの体の構造上可能です」

それなのに、コイツは。

「道具と環境さえ整えば、出来て当たり前です」

人でない残酷の声で、あやめの想いもすべて拒絶した。

「でも……」

それが悔しかった。ソイツの言葉が、あやめを傷つけているようで。

「でも……ッ」

なのに友達を守れない自分の無力さに、頭が割れそうなほど悔しい。

コイツの言葉を信じちゃダメだ。

「榊あやめが人を殺した事は、事実なのですよ」

認めたらダメだ。

そんなことをしたら、あやめが……。

「そして、榊あやめは姿を消した。となると何ものかに攫われたか」

許せない。

コイツがあやめを語るのが許せない。

「あるいは……」

嫌だ。

「榊あやめは、もう……」

やめる！

言うな！

「殺されているかもしれませぬ」

その瞬間、その声だけを残して、世界が停止したように静かになった。心臓を握りつぶされるような苦痛。

今まで避けていた言葉が脳裏に鮮明に姿を現す。

血塗られた部屋に、動かないあやめが横たわる。

そんな映像が、毒々しいほど鮮明に。

血の匂いも、薄れていく温もりも、呼吸を終えた静けさも。

何もかもが鮮烈に、私を汚す。

オカシクなりそう。

「シキ――――」

白熱する感情そのまま、シキ殴った。

殺すつもりだった。

この場で、殺してやりたかった。

「よせ絵馬！」

なのに虎子に止められた。

行き場を失った激情が、涙になって出て行く。

◇

礼慈達が出て行き、少し遅れて私も出ると、もう二人の姿はなかった。扉の前の階段に座り込んで、それからずっと俯いたまま、眠るように停止していた。思考とか感情とか、そのままに。

しばらくして今度は、虎子が土蔵から出てきた。

「まったく……オマエは油断も隙もあつたものじゃないな」

汚物でも見るような蔑むような声。足音が直ぐ側を通り、頭に硬い何かが触れるようにぶつかった。

「オマエ、シキがどういふ状態か、忘れたわけじゃないだろ」

私は返事もせず、ただ祈るように両手を組んで頭を抱えていた。

そんな私に呆れたのか、露骨な溜息が聞こえた。

「絵馬。もう大人しく家に籠もってる、事件が終わるまで。この事件も詰めだ。榊あやめも、じぎに見つかる。そうすれば、少しは落ち着くだる。え？」まるで独り言。

「私は戻る。また夜にでも顔をだす。私じゃなかったら、葬儀先生にでも、きてもらおう。ああ、その方がいいだろ」遠ざかっていく声。

覗き見るように顔を少し開けて、前を見た。

なんでガキの子守をしなくちゃいけないんだ、と今にも文句を言いたそうな鬨めつ面で私を睨んでいる。まるで敵か悪人でも見るような危険な視線。

「今のおまえは、人を殺しかねない。シキより危険だ」

研磨された軽蔑の音が残された。

その声を言葉に変換して意味を咀嚼して反芻する、気が遠くなる時差を置いて顔を上げた時、すでに虎子は背を向け、林の中にいた。

その後ろ姿にさえ、敵意を漂わせているには見える。

「っは……私が……？」

口に含んだ腐った果実が崩れるように、口が歪んで笑みが零れる。

嘲笑い、吐露した。

なんて的外れな言葉。

「あんなのと、一緒にしないでよ」毒を吐き捨てるような呟いた。

手のひらで眼球を押しつぶすように頭を抱える。

「違う……わたしは……あつみみたいな人殺しじゃない！」

燻る火に焦がれる声が、憂鬱に響く。まるで匣の中で反響し続ける絶

叫のよう。

「お姉ちゃん……」

背後から、鈴のように弱々しい澄んだ声が聞こえてきた。

シキの声に、自分でも恐ろしいほど体は敏感に反応した。呼吸が二拍

ほど止まった。肩が寒気に抱きしめられたように震えた。息を吞む。そんな

な自分がたまたまなく許せなくて腹立たしかった。

けど、それ以上に。

「お姉ちゃん」

そんな風に私を呼ぶシキが許せない。

「お姉ちゃん………いるんでしょ？」

その声に鳥肌がたつ。

「………神あやめは人を殺した。人としてやっちゃイケないことをしたんだよ」

偽善的な声。昨日まであやめちゃんって呼んでたくせに。今は、まる

で汚いモノのように冷たくその名前を言う。

「しかも、家族を………自分の家族を殺した」

抑揚のない声が、瘡に障る。

「それは悪だ。お姉ちゃんが悲しむことはないよ」

怖くて強い声だった。

それが届いた瞬間、私から、なにか憑き物が落ちた。

「あやめが………悪？ ……人殺し？」

風に弄ばれる柳のように、緩慢に背筋を伸ばす。背中に当たる鉄の扉

の硬くて冷たい感触が、私を夢から醒ます。

「っは、はは………」

漏れ出す吐息。吸い込んだ空気が血の味がする。

くだらない夢はもう見飽きた、と凶暴な感情が囁いた。

憎くて、憎くて———殺したいほど憎かった。

だって。

「死ねばよかったんだ………」

だって。

「あんたのせいで、あやめが！ あやめが！」

壊れそう。

私の中で何かが壊れる音が聞こえた。

「あんたなんか死ねばよかったんだ！」

弾ける感情と共に、立ち上がり、振り返りざまに扉を押し倒すように

叩いた。この向こうにアイツがいると思うと、無性に頭にきた。

壊れればいい。

「あの時死んでれば！」

壊してやる。

「あやめは！ あやめの家族も！」

壊れていく。

扉を叩く。この手が壊れてしまいかもしれない。

「みんな、あんたが生きてるせいで！」

それでも、私の気持ちは止まらない。

「お、ねえちゃ——」

耳障りな泣き声。

汚らしい声。

「あやめが悪ですって！ つは。だったらアンタは何なのよ！」

胸が焼けるほど熱い。指先から喉まで痛い。

「あやめを追い詰めたのはアンタなのよ！」

優しい子、純粹な女の子、かけがないの大切な友達。

「汚したんだ！ オマエが！」

狂ったように怯え泣く声が耳に残ってる。

かわしように。アイツに関わったばかりに汚されて。

悪に染まって汚れてしまつて。

「アンタのせいで みんなが不幸になるんだ！」

だから、死んだほうが良いんだ。

「それが分からないの！」

凶暴な感情にまかせて扉を蹴った。頑固な鉄の塊。痛みがすべて返っ

てくる。震える。全身に波のように広がる衝撃に、なみなみと溜まつた

涙が、目から零れた。

「みんな……あやめも」

生きてるだけで、悪なんだから。

「お姉ちゃん……？」

だったら壊れてしまえ。

もう、なにもかも、壊れたっていい。

「お母さんもお父さんも、オマエのせいで！」

壊れよう。壊してしまおう。壊れていく。

はは………もう、嫌だ。

大切なものが誰かに汚されるなら、いっそその前に、自分で。

「お母さんとお父さんを殺したのは、シキ！ あんたなのよ！」

すべて汚して壊してやる。

「お姉————ちゃん？」

空耳のような鳴き声。

錆びた鉄のような沈黙。

それを埋めるように、私の口から、毒々しい笑い声が漏れる。

は、はは……………扉越しに伝わる。

ふ、ふふ……………曹原が足跡で泥まみれに汚れていくような。

く、くく……………綺麗だったモノが、静かに、汚く崩れていく音が。

あ、ああ……………心が汚れていく感触が伝わってくる。

「つふ、ふふ。なんて簡単なことを……………」

なんで今まで出来なかったのか、「可笑しかった。

「お姉ちゃん……………」消えかけの声。「なに、言ってるの？」

縫ずがるような声が、鬱陶うっとうしくて可笑しい。

「アンタが、お父さんもお母さんも……………殺したのよ。私の目の前で」

私は今でも鮮明に覚えている、あの夜のことを。

だって人が、初めて死ぬところを見たんだもの。

「お姉ちゃん、どうしたの？ わからないよ。なんで？ なんでそんなこと言うの？ ねえ、お姉ちゃん……………だって、死んでなんか……………」

声。鉄の扉を透過する声。なんて愚鈍な声。

「分からない？ そうよね、分かるわけないわよね」

笑いがこみ上げてくる。

だから私の言葉なんて、きつと、届いてない。

「だって、あんたは————」

違うんだから。

生まれた瞬間から違ってる。

私とあいつは、世界が違う。

違う環境で育って、違う運命に生きて、違う想いを抱いているから。

常識が違う。思考が違う。思想が違う。人生が違う。境界が違う。

噛み合うことも、解け合うことも疎通し合えることもなく理解もない。

私はそれを知ってる。

声をあげる。その瞬間、わずかな躊躇いと抵抗があった。

けど、そんなの、もうどうだってよかった。

私を狂わす笑みを噛み砕き、言ってやった。

「だってシキは『死ぬ』ことが、どういふことか知らないものね」

妖しい笑みが漏れる。

悲鳴にも似た息を呑む音が、幽かに聞こえた。

「覚えてる？ 八年前の事。神社の境内で沢山の大人が、寝てたでしょ。

あんたから逃げ回って、あんたの目の前で動かなくなったでしょ。覚えてるでしょ」

止まらない。

一度踏み越えてしまったら、もう止まらない。

「あ、れ……………は、眠って……………」

聞こえる。幻のようなシキの声が聞こえる。  
なんて可笑しい。

「バカね。……あれはね、シキ。みんな、もう死んでたのよ」  
可笑しかった。そんな当たり前のことも知らない。

「そんな……はず」切れる悲鳴。

「だって、みんな……まだ……有ったよ。……居たよ」

シキは知らない。

「生きてたよ！ だって消えてなかったもん！ そこに居たもん！ おかしいよ、ねえお姉ちゃん！ だって、だって……！！」

誰も教えなかった。

「死んだら、何も残らず消えちゃうんでしょ？」

小鳥のさえずりに似た幽かな声。

みんなで秘密にしていた。

誰だって知ってることなのに。

生を語るなら知ってて当然のことを。

人が死ねばどうなるか。

「死んじゃったら、幽霊に……消えて無くなっちゃうじゃないの！」

シキは、誤っている。

「みんな生きてたよ。生きてたんだよ、お姉ちゃん。まだ……みんな、お母さんも……お父さんも……みんな……眠ってる、だけ……」

なんだよね——と悪夢に魘うなされたように、ひどく脆い声だった。

「そうよ、眠ってたのよ。絶対に、もう二度と、永遠に目を覚まさない」  
ずっとずっと、間違え続けていた。

「目を覚まさない！ もう動かない！ 息もしない脈もない心臓も動かない、笑ったり怒ったり泣いたり、もう話すことも触れあうことも……出来ないのよ……！」

思い出してしまふ。

母が死んだ夜の事を。

優しい笑顔が好きだった。抱きしめてくれた、その暖かさと柔らかさが私は好きだった。その胸の中で泣いた時の、厭なことを忘れさせてくれる穏やかな匂いが好きだった。私の名前を呼ぶ。その声が好きだった。

父が死んだ日の事。

力強い眼差しが少し苦手だった。けどを見守ってくれて嬉しかった。寡か黙もくだったけど、大きな背中を見ているのが楽しかった。大きくて堅い手で、いつも私を守ってくれた。頭を撫でられるのが、好きだった。

すべて過去形。もう未来はない。すべて過去に置き去り。

「それが死ぬってことよ！ あれは死体なのよ！」

鐘かねを鳴らすように扉を叩き叫ぶ。

どさりと何かが崩れ落ちる音が聞こえた。

微かに空気が軋こむ音と、幽かに嗚咽めいげんが回る音がした。

「アンタがどんなに否定しても、私達にとつてアレが死よ！」

シキは知らない。

死体知らない。

人は死ねば消えると教えられたから、死体なんて幽霊と同じ。どちらも実在しない。

シキにとって、死体は実在しないもの。

動かなくなった死体は、寝ているのと同じ。

そう、ずっと教え続けられてきた。

「シキ……もう一つ、いいこと教えてあげる」

蒸気のように騒がしく熱くなっていた凶暴な感情は反転し、恍惚に似た冷感が艶やかな冷徹を呼び、私の口元を歪めて、殺意を加速させる。

「あんた………化け物よ」

ああ、聞こえる。

綺麗だった白が、汚れていく音が。

「アンタはね、睨むだけで人を殺せる化け物なのよ！」

約束したのに、言わないって。

だけど、もう遅いよ、止まらないよ、悪いのはシキだもん。

「爺やが、包帯で眼を使えなくして此処に閉じ込めてるのも全部、アンタが化け物だけだよ！ 見ただけで人を殺しちゃうのよ………そんなの、殺人鬼と一緒にゃない！」

恐ろしい眼。今でも覚えてる。

初めてシキの眼を見てしまった時、

私は、幼心に、死ぬのは嫌だと強く思った。

「信じられない？ だったら思い出してみない！ 八年前の夜のことを。みんなアンタが怖くて逃げてたのよ！ アンタが見たから死んだのよ！ アンタ、見てたんでしょ………みんなが、眠って動かなくなるところを、その眼で！」

「あ………そんな………ああ」濁った言葉は獣の呻き声みたい。

「思い出しなさい！ お父さんが眠っていった姿を、お母さんが眠って

いく顔を、眠ったその後を！ 見た？ 眠ったあとに目を覚ますお父さん

とお母さんを、あんたは見たの？ どうなのよ、シキ！」

分かりきった返事なんて聞きたくない。

「見たことないでしょ、アンタが見た眠ってる人が、目を覚ますの！」

体の芯が鉄のように冷たくなって、頭が鉄のように熱くなる。

背徳的な快感が、みんな壊してしまえと絶叫する。

それに従う。

「見たことないでしょ！ 当然よね。だって、死んでるだもん。みんな

死体なんだから、目覚めなくて当然よ！」

壊れるまで叫ぶ。

「あんたが殺したのよ、シキ——！」

静寂が押し寄せる。

「あやめが人殺しで？ だから悪ですって？ っは、だったら」

乱れた呼吸を整えても、私の内側の炎はまだ収まらない。

嵐を待ち望む獣の咆吼のように言ってやった。

「生粋の殺人鬼のあんたは、

生まれてきたその時から、生きてるだけで悪よ！」

ずっと言ってるやられたかった。

「アンタが生きてるだけで、アンタに関わる人みんな汚れて」

イヤだ。

イヤだイヤだ嫌だ。

「死ぬんだ！ おまえに殺されるんだ！」

あんな悲しい思いをするのは、もう嫌だ。

あんな悲しい想いを、もう誰にもさせたくない。

「お、ねーちゃん……………」

扉が微かに内側から震える。

縋るような、打ちひしがれるように、助けを求めるように震えていた。

幽かに聞こえる声を無視して、私はそばに落ちていた南京錠を拾いあげた。

予感がした。何か壊れる悲鳴がする、と。

だから、その前に扉に鎖で縛って鍵をかけないと。

匣の中の死体のように、土蔵に閉じ込められないと。

もう二度と、私達の世界に迷い出てこないように。

「お……………ねえちゃん……………おねえちゃん……………おねーちゃん！」

重苦しい囁き。近づく囁き。増大する囁き。輪唱する。

繰り返し繰り返し、匣の中から呻き声がする。

扉を叩く。

子供の声が匣の中から聞こえる。

イヤだ。もう嫌なの。

「……………嫌い」

今まで黙ってたけど。

「あんたなんて弟じゃない！ 大っ嫌いだ！」

全身を振るわせ叫んだ声の後、耳が痛くなる静けさが襲った。

「シキなんか、死ねばいいのよ」

純情を捨てるように、別れを告げた。

追いつがる悲鳴を見捨てて去る。

もう、こんなところに居る理由はないから。

子供が独り、泣いている。

母の手を見失ったように、呆然と泣いていた。

涙が枯れるまで、その身が枯れるまで泣き叫ぶ。

閉ざされた匣の中でただ独り、シキは泣いていた。

細々と積み重ねてきた硝子の塔が、砂礫のように崩れる。

今での経験も、時間も、知識も、思考も思想も、人生も。

すべてが無価値で、すべてが無意味で、すべてが無関係。

すべてが白紙に戻す暴力に、打ちひしがれている。

堪えられるはずもない。彼はまだ子供で、独り。

頭を抱え、引きちぎれそうなほど身が振れ、弾け、狂い、絶叫。

言い知れぬ暴力が脳裏の奥底から忍び寄る。

とても怖い声で、とても恐ろしい言葉を囁く、闇の中から。

まるで、妖怪が人を惑わし、奈落の底へと引きずり込むような声。

首が裂けることを厭わず頭を振るって、その魔性の声を拒もうとする。

子供は、泣いていた。

どんなに泣いても、どんなに嫌だと声を荒げてても、払われない声。

子供は、泣いていた。

「ああ！ や！ 違う！ 違うよ！ や！ や！」

収拾のつかない言葉はもはや人の言葉を失われていた。

けど、黙っているより、何か叫んでいないと不安に心臓を握りつぶされそうだった。

子供は、泣いている。

姿の見えない声を払うように腕を振るう。書架の書物が散乱し祭具が小さな手を傷つけ床に落ちる。ただそれだけで、傷しか残らない。

子供が、泣いている。

暗闇に放り込まれ、自分の位置はおるか、自分の形さえ見失い、蒸搔きながら、無くしたものをかき集めようとしている。

子供が、泣いている。

声は枯れ、涙も枯れ、その身が枯れ果てようとしている。

張り付いた悪夢を剥ぎ落とそうとするように、頭を掻きむしる。

包帯がほどける。

二つの瞳が露わになる。

突然差し込んだ闇とは違う別世界。

そこには光がある。

世界を拒むように、瞳は虚ろな陰に潤んでいた。

その眼に、どこからともなく這い出た鼠が写る。

瞬く間に物陰に潜む機敏な小動物は、だが、シキの眼に捕らえられ石化したように動きを停めた。

シキは、その小さな生き物を視ていた。不思議そうに、次第にその小さな命を愛でるように、瞳に幽かな輝きがともし始めた。

だがその瞬間、子供に愛でられた鼠は死んだ。

凍え死にしたように倒れ丸まり、痙攣を数度起こして動かなくなった。眠ってしまったかのような静かな死だ。けど、決して眼を覚ます事はない。

それがどういう事はわからないかのように、シキは躊躇いながらも近づき、その小さな手で、さらに小さな鼠の死骸を掬うように触れた。

もう冷たい。もう動いていない。見つめる、それだけで液体窒素に浸けた薔薇のように、少し力を加えただけで壊れてしまいそうな、儚い予感を孕む。

「これが——死？」

囁く声は幻のよう。

崩壊の兆しのように震えている体を抱きしめ。

「あ、ああ、——」

嗚咽を押し殺し、辺りを見渡した。

誰もいない。

求めるもの。

それはもう、ここにはない。

もういない。

震える声で、それを呼ぶ。

手を伸ばす。

たすけてと、手を伸ばす。

小さな手を。

握るものは、誰もいない。叫び続けた、声を求めて。なのに無音。

遠く遠くに、去った人を、彼はずっと、呼んでいる。

何かに怯え、何かを恐れ、

不安になり、哀しくなり、

空虚になる、どうしてか、

それさえも、わからない。

その正体も、それが何か、

分からない、ままだだ。

迷子になった子供は、泣き続けた。

◇

自宅に戻った。

町外れにあるその邸宅は、昔ながらの木造平屋建てで、六人家族が暮らすには余るほどの広さがある。だから、彼が深夜にこっそりと帰宅してもドアを開閉する音は、寝静まった住人達を起こすまでの勢いを保つことなく静けさに紛れてしまうだろう。

一日ぶりに帰宅。出かけた時はまだ雨は降っていないかった。そして今夜は、昨夜とは違い大人しい夜空をしている。まるで遊びすぎを咎められた子供のように静かなものだ。

そして、彼はいつものように、合鍵を使い家に入った。いつもの静けさだ。いつもの風景の焼き直し。

変哲のない変化もないような平穏な家の姿。

だというのに、彼はドアを後ろ手でしめ、玄関にしばらく佇んでいた。虫の息でも探るかのように耳を澄ませて佇む。

それは勘としか言いようのない行動だった。

高揚していたせいか、感覚が研ぎすまれているのかもしれない。

昨夜の熱はまだ冷めていない。

樹海で人を殺そうとして、殺されそうになり、ネコの気まぐれのよう  
に無様にも生かされてしまった事に、彼の自尊心や矜持は、圧倒的な暴  
力のように無価値と告げられた気概。

その噴気たるや、一晩ばかり雨に打たれた程度では冷めやまなかった。それもあり、好戦的だった。

直感した。

家族以外に誰かいる、と。

即断した。

そいつを殺そう、と。

短絡的なほど滑らかな決断だった。

そうと決まると、先ほどまで獲物を逃し、ふて腐れていた獣のように虚ろだった彼の眼は、命を吹き返したように活気に輝いた。

忍ばせていたナイフを取り出す。そして獲物の匂いを辿るように、彼は静かに玄関をあがり、足をすべらせ廊下を移動した。

まず、玄関近くにある子供部屋へ向かった。

妹と弟がいる。その二人の部屋は玄関の横にある脱衣所の横に並ぶようにある。その奥が彼の部屋だ。

息を潜め、暗闇の中、静かに移動する。

妹の部屋のドアをゆっくりとあける。

わずかな隙間から中をのぞく。部屋の中は真っ暗で、細部まで闇になった眼でも見通すことは叶わない。ドアを全開にし、部屋を見渡したところで、彼の警戒心はわずかに緩んだ。

それは拍子抜けというよりも、疑問が割り込んだから。

部屋の中に入る。暖色の絨毯が引き詰められ四角い部屋には勉強机やテレビ、ダンスやベッド、それに壁一面にならべられたヌイグルミがある平凡な間取り。彼はベッドへ視線を向けた。

そこで、彼は不思議なものを見つけた。

匣。

闇になれた眼でも、暗闇の中にあっても、その匣は濃密な闇色。

彼はその匣に見覚えがあった。

まっさきに思い浮かんだ。

その匣は、彼が殺した人間が入っていた匣によく似ている。

それがベッドの上に、あった。その下に寝ているはずの妹の姿はない。

この匣の中に妹が入っている、と彼は抵抗なく考えた。

だが確かめようとせずに部屋を出て、隣の弟の部屋に向かった。

先ほどとは違い、今度は音に気をつけながらではあったが、扉を全開

にし、すぐに中に入った。同じような間取りの部屋で、隅にはパイプベッ

ドがある。

匣。

ベッドの上に匣がある。その下に寝ているはずの弟の姿はない。

それを見た彼の口端が、つり上がった。

もしかして、と確信に似た予感に駆り立てられ、彼は今度は両親の寝

室へ向かった。もうその時には廊下をかける音など気にもしていない。

プレゼントの中身を見たがる子供のように急いでいた。

両親の寝室には、ふたつ、匣があった。同じ黒い匣だ。

そして曾祖父の部屋へ向かった。

家の端にある座敷。

襖を取っ払うような勢いで開け放つ。

畳の上、布団の上に、匣がふたつ並んであった。

しんと静まりかえった深夜の家。

家族は寝静まり、誰も目を覚ましていない。

きつと、誰ひとりとして目を覚ますことはないだろう。

親兄弟に祖父母の部屋には、人数分の匣があった。

家族が、魔法で匣が変わってしまったように、生活の余韻が綺麗に残っ

ている。まるで質の悪い怪談のような話ではないか。

ふと、匣を見つめた彼は思った。

家族全員が匣が変わっている。だったら、自分はどののだらう、と。

まだ見ていない部屋があった。それは自分の部屋だ。

それに、まだ残っている。誰かがいる、という勘は。

冷静だった。家につくまでの焦げるような憤りは残忍なまで冷え切っ

ている。思考はクリア。仮に今、背後から襲いかかられたとしても、対

処できる自信があった。それほど感覚は研ぎ澄まされいた。

座敷から廊下へでる。

もうじき、夜が明ける。

外は淡く蒼く、闇の濃度は薄まっていた。

夜中に集積された熱が無価値に捨てられたように冷たい空気が充滿。

日常生活のような気軽さで、彼は自分の部屋に戻った。

それは期待しているようだった。

きつと客を待たせている気分になかった。

手にしたナイフを弄ぶ。いつの間にか三日月のように歪んで笑みを浮かべている自分の口に気づいた。

そして、部屋のドアをあける。

そこで、彼は恍惚に似た溜息をついた。

出逢った。

「初めまして、か——」

彼はつぶやいた。

部屋の真ん中には、人が立っていた。

鴉の濡れ羽のように黒く、気体のように軽やかに靡く外套に身を包み、

顔には闇に浮き上がる嘴のある真っ白の能面。影のように闇に溶む異質な影。

その風貌に、彼は見覚えがある。

忘れるはずもない。

昨夜と今夜の二度、彼はそれによく似た者に出逢っている。

「ただ、初めましてか、と彼は言った。」

外見は似ているが、まるで中身が違う気がした。

「ただ、そんなの、殺してしまえば些末な事だろう。」

彼はナイフを強く握り直した。

けど、すぐに駆け寄ろうとしない。

直感した。それが危険なことだと。

あの外套の中に何か忍ばせているのではないか。

そう考え、相手の出方を窺った。

相手は、煙の上昇のように腕を彼に向けて伸ばした。

「オマエを迎えに来た。蕪木仁」

銅鐸のように重い声が闇に響く。

「オレを？」怪訝な表情を浮かべた。「何者だ、あんた」

その問いに、能面の下から壊れた管楽器のような音が、笑うように漏れた。

「仲間、だ。オマエをオレ達の仲間にしてやろう」

抑揚のない声で、しかし相手の心を押しつぶすような重い声。

蕪木仁は一瞬、狼狽えたが、的を外れの返答に鼻で笑った。

「っは、何言ってるの、おまえ。バカじゃねえの。てめえの仲間になんかなるわけないだろ。さんざん人の邪魔しておいてよ！」

怒号と共に駆け出した。三步で間合いは詰められる。一秒も要らない。

相手が身構える前にナイフを突き出す。

が、煙を突いたように手応えはない。

すぐに突きだしたナイフを横に払う。

「っ、が」苦悶が漏れた。

「っ、が」苦悶が漏れた。

なぎ払った腕は影から生えた手につかまれた。万力のように握りしめられ、彼は苦痛に耐えかね声を漏らし、ナイフが手から落ちた。

「もう一度だけ言おう。——来い」

腕を掴んでいた手が離れ、すぐさま彼の顔面を驚掴みした。

「あ、があー」絞り出される声。

頭蓋骨が軋む音が内側から聞こえる。

拒めば殺される、と彼は直感した。

自分より僅かに背丈があるだけなのに、目の前のそれを人間とは思えなかった。頭部を掴む手さえ、死体のように冷たい。

力の差の問題以前に、人という種として対等でないと思いつた。

こいつは、化け物だ。

「貴様の未来は二つ。ここで死ぬか、殺し続けるか」

厳しくも魅惑的な言葉。

わずかに頭蓋骨を締め付ける力が緩む。

見開かれた眼は血走り、無表情な能面を睨み付けた。

言われてみれば、そうだな、と。

彼は、嗤った。

すると拘束は解け、彼はその場に膝をついた。

「共に来い。さすれば、オマエの目的は必ず叶う」

墜ちる蠱惑的な言葉。

彼は見上げた、

漆黒の影を、

人の死に餓えた獣の眼で、真偽を問いかけるように。

影は言う。

「奥津城絵馬は、オマエのモノだ」

神託かあるいは悪魔の契約か。

荘厳な響きで影は告げた。

「っは……」息を呑む一瞬「いいね、それ」彼は艶やかに嗤った。手が差し伸べられる。

「どの道、貴様にはもう帰る場所はない」

奈落の底から響き渡るような声。

深呼吸をする。

そして彼は悪魔の手をとった。

ここに契約は完了した。

最後に、蕪木仁は問いかけた。

「あんた、何者だ」

◇

モはや名乗りあげる間柄ではない。

朝の賑わいが一段落した頃、習慣のように鬼束虎子は、奥津城邸へと足を運んだ。数日前なら玄関で呼び鈴でもならすのだが、モはや連日のように訪れているせいか、あるいは偏屈な隠居が不在というのが知れているせいか、そのまま中へ入った。

玄関で絵馬を呼ぶ。数秒待ったが返事はない。耳を澄ましても生活の音もない。平日のこの時間なら、学生らしく学校に登校でもしているのだから、戸締まりを忘れると考えにくい、それ以上に、今の状況で登校するほど絵馬が学校好きとは、虎子にはとうてい思えなかった。だから、居留守を使っているという結論に達する。この手の陰険な嫌がらせを絵馬が好むのも、彼女は経験的に理解していた。

虎子は居間へ向かう前に、絵馬の部屋を覗いてみた。八畳間ほどの広さの和室だが、この年頃の女子の部屋としては病的なまでに簡素で、まるで逃亡生活のようだ。虎子は思った。部屋は無人。

居間に入ると、案の定、そこに絵馬が居た。

座卓に頬杖をつき、ぼんやりと正面を眺めている。何をするわけでもなく、お茶を飲んでいるとかテレビを見ているというわけでもなく、人形のように部屋の装飾の一部と化していた。

「正気か？」

入るなり虎子はそう問いかけた。

「……………ああ、虎子か」

やっと彼女の存在に気づいたように、絵馬は人間らしい活動を再開した。それでもどこか覇気がなく、質の悪い風邪にでもかかっているかのようには惚けている。

無理もない。ここ数日、この少女にどれほどのストレスがあったか。一連の事件により、迫害めいた状況に陥り、あげくに親しい友人は生死不明の状態なのだから、年端もいかない少女にはあまりにも酷な出来事の連続だったはず。追い打ちをかけるように昨日のシキの推理は、この少女にどれだけの精神的な傷を与えたが、想像を絶するだろう。

まだこうして会話が出来るだけ、大したものだと虎子は感心した。

「で……………なんの用？」絵馬は億劫そうに姿勢を正した。

「ん。ああ……………おまえの様子を見に寄っただけだ。何か変わった事はあったか？」

「別に」溜息。「……………何も無いわよ」視線が横にそれる。

「そうか……………」

沈黙。

虎子は向かい合うように座り、絵馬の様子を観察する。経験則から、絵馬へ対する違和感を覚えたからだろう。なにか隠していると感じた。それは重大なことだが、だが、事件と関係がある気がしない。

もしやシキと何かあったのか、と虎子は思った。

だが、それに触れるかどうか躊躇<sup>ためら</sup>われた。

それは奥津城の家族の問題だ。自分のような他人が気安く立ち入って良いはずがない。虎子の脳裏に、座敷に鎮座する仏頂面の老人の姿が浮かんだ。

呼び鈴がなった。

「ん。ヤブ医者<sup>ヤブイシャ</sup>が来たか？」

「いつからウチは集会所<sup>ツグイソ</sup>になったのよ……」

絵馬の愚痴<sup>ウチガヒ</sup>を無視して、虎子が立ち上がり、居間を出て玄關に向かった。しかし玄關の戸を開けると、そこには見知らぬ男性が立っていた。

「っお。どうもこんにちは」

てつきり喪服姿の老人がいますと思っていた虎子は、目の前の男性の姿に不覚にも呆気にとられ、怪訝な表情を浮かべた。

草臥<sup>くたび</sup>れたコートに褐色のシャツと色あせて汚れが染みついたジーンズ。頭髮は揚げソバのように乱れ、無精髭<sup>むしやうひげ</sup>とセットになっている。そんな外見よりなにより、まるで納豆と発酵魚でも抱えているような臭いが、その男の異様さをコンマ五秒で虎子に印象づけた。まるでホームレスか世捨て人か、あるいはそういう変質嗜好者か。街で見かけたならば、まず職質をかけるだろう。

「誰だ貴様」警戒心剥き出しで虎子は職質をかけた。

「え、あ、いや。ボクは決して妖しい者じゃなくて……困ったな」  
苦笑いを浮かべる男を前に、虎子の警戒心はより高まる。

緊迫と困惑が混濁した沈黙の中、奥から絵馬が現れた。

「あ、おじさん！」

まるで未確認飛行物体でも発見したような驚きをあらわらに、絵馬は足早に玄關までやってきて、陰しい表情をした虎子を押しのけた。

「どうしたんですか、いつ日本に？ っていうかどこ行ってたんですか」

「あれ、もしかして絵馬ちゃん？ うわあ、見違えたよ。ますます綺麗になっただけ」

さっきまで栄養失調で倒れた猫のようだった絵馬が、急にはつらつとして不審人物と楽しげに話しをしている姿に、虎子は困惑を隠せなかった。だが、見たところ知り合いのようだから危険という訳ではないだろうと、大人しく居間に戻ることにした。その後ろでは。

「ところで、そちらのお姉さんは？」穏和な男の声。

「あ、あれは警察の方です。でもマトモな刑事じゃなくて、情緒不安定で加虐趣味がある可哀想な人なので、気にしないでください。オホオホ」  
「そうか、彼女は現役の……」

背後から聞こえる似非お嬢様の暴言に、虎子は足を止めはしたが、振り返ることなくそのまま居間に直行した。発言に問題こそあるが、泣き喚いたり、ふさぎ込まれるより、嫌味でも言ってるほうが絵馬らしいと、ほんのすこしだけ微笑ましかった。

居間に戻り、勝手に茶を入れて小休止。一服していると絵馬が戻ってきた。その表情にはまた陰が差し込んでいる。

「誰だ、あの秘境探検隊みたいな奴は。不法入国者か？」

「違うわよ」

気を遣って多少ユーモアを出した虎子の問いかけに、絵馬は容赦なく受け流した。それが気に入らなかつたのか、虎子は舌打ちした。

「礼慈のお父さん」絵馬は面倒くさそうに答えて、もとの場所に座った。

「そうか……」哀れむような視線が宙を彷徨う。

それ以上の会話が續かない。沈黙がそれを埋めようとしたが虎子の上着のポケットから携帯電話が鳴った。それをとって、耳に傾けてすぐに虎子の表情が曇り舌打ちをし、苛立ちをまき散らすように通話を切った。

「絵馬。確認するが、おまえを襲った奴は、白い面と黒のマントを身につけていたんだよな。背丈？」

「……………確か、私とそんなに変わらなかつたと思わうわよ。体格まではわからないけど……………どうしたの？」

「見つかつたんだよ、そいつが。死体でな」

答え、虎子は立ち上がった。

絵馬は驚きを見せるも、一瞬で気化したように気急げな眼差しを向けた。

「まだお前を襲った奴かは断定できないが、無関係ではないだろうよ。言つてなかつたが、昨夜、別の殺人犯が自首してな。およその殺人事件の犯人が割れてきている。手島霧霞を捕らえれば、およその事件にカタがつきそうだしな」

そう上手く行けばいいが、と占うように呟いた。

「私はこれから現場に行く。お前はじっとしてろよ。家から出るな。いか、絵馬。出来ることなら、シキとも事件が終わるまで会うな。……………今まで通り、歪な姉弟のままの方が、お前達のためだ」

僅かだが慈愛に似た声色で、虎子は、幼い子供に言い聞かせるように言った。

そして、また後で来る、と言い残して奥津城の屋敷を出た。

絵馬はその後ろ姿を、残像でも見るようにぼんやりと眺めていた。

嫌な雲模様だ。

昨日まで綺麗だった青空が、今は、この世のすべての汚濁を練り込んだような雲に覆われ、蛇の群れが棲んでいるみたいだ。

虎子は、午後になって再び現れた。家の中には入らず玄關で用件だけ告げてすぐにまたどこかへ行ってしまった。その時の虎子の表情は、何かを隠すような、いつもの嫌味なほどの自信がなかったように思える。

虎子は去り際に、礼慈のことを頼むと私に言った。

どういう意味なのか尋ねた。

「アイツは今、手島霧霞を追って樹海に入った。お前も知っての通り、手島霧霞には殺人容疑がかかっている……それも不安だが、なにより樹海というのがそれだけで危険だ。シキの奴が夜になれば道標があるから大丈夫だと言っていたが、一応、迷わない程度で、あとで探してやってくれ」

事務的な伝言なのに、どうしてか虎子がとても優しく思えた。不思議だ。まるで私に、何か後ろめたいことでもあるみたいで、少し、気持ち悪い。

午後から雨が降り出した。

静かな雨。

雲はもう濁りもなく、汚れきったように重厚な闇の固まりに。

日の光は遠い。星の光は弱い。月はかくれんぼ。

別に虎子に言われたからじゃないけど、私は家の中に居た。

何をするわけでもなく。何をすればいいのか分からず。どうしたいのかも分からない。何かをしようとすれば、億劫になって。もうどうだっていいよ、と背後から誰かが囁くんだ。

ぼんやりと居間から庭を眺めていた。

殺風景な裏庭。植木もない花もない。

誰もいない庭を眺めていると、ぼんやりと重なる。

幼い私が駆けつけてる。縁側で、お父さんと爺やが見守ってる。私が転ぶと、二人が腰を浮かせて駆け寄ろうとするけど、お母さんが吐って止めて、だけど優しく微笑んで手を差し伸べてる。その手を握るために私はひとりで立ち上がった。泣かなかった。泣いたら、お母さんもお父さんも爺やも、困った顔をするから、それが嫌だから私は泣かなかった。この家には私がいる。爺やがいる。お母さんがいた。お父さんもいた。それが当たり前で、それがいつまでも続くと疑いもしなかった。そんな事を知らない子供だった。

なんて幸福……なんて幸せな夢……なんて遠い記憶。

なんて惨め。

もうその夢は叶わないと分かっているのに、私は、それを振り所にしている。ときどきそんな夢を見てしまう。

白状すれば、あやめの家族が羨ましかった。

遊びに行ったときに垣間見た他人の家族の幸せに、私は胸が痛くなつた。口にはしなかつたけど、いいな、と思つた。

きっとそこに、昔の私の家族の続きを重ねていたんだと思う。

「一緒だね、わたしたち……………」

真つ暗な部屋に、私の声だけが孤独に鳴る。

夢から覚めると、外はもう暗かつた。時計を見たら夕方。だけどせつかちにも夜の景色に変わつてる。まだ秋だというのに、日が隠れるのが早いな。

雨も降つてる。屋根を楽器のように打つ雨音に混じつて、電話の音が廊下から漏れ聞こえてきた。出ようかどうしようか迷つた。けど、もし相手が虎子だったら後で嫌味を聞かなくちゃいけないから、仕方なく出た。すると相手は寮の定、虎子だった。変わった事はなかつたか、という用件だけ。ちよくちよく家に来たり電話したり、忙しい女だな。いつからこんなに世話好きになつたんだろう。

「鳥居礼慈は戻ってきたか？」

虎子のその言葉で、私は礼慈の事を思い出した。自分でもびっくりするほど、綺麗に忘れていた。たつた今聞いたかと思えるほどだった。

思い出すと、急に心配になつてくる。

電話を終えて、私は外に出た。

懐中電灯を持って傘を差して神社に向かつた。

走らないけど、のんびりと歩けなかつた。

厭な予感がした。ザラザラと不快な感触が肌につく。

あやめがいなくなつた。

あやめが好きな人が、今、樹海の中にいる。

樹海。

迷いの森。

二度とは戻れない森。

たくさんの人が死んだ森。

たくさんの死体がある森。

夜の樹海に、礼慈がいる。

「バカ！ なんだってそんなところに行くのよ……………！」

無性に腹が立ってきた。

林を抜け境内にたどり着くと、誰もいない。

雨音だけの静けさが、少し怖かつた。

私が神社に着くと、そこには礼慈がいて、こつちの心配なんてお構いなしに、よう、とか言つてバカみたいに笑つてる。そんなことを私は期待していたかもしれぬ。

腹が立つ。ここに居ない礼慈にも、少しでも期待した私自身にも。

なんて弱い私。これじゃまるで、ただの臆病な寂しがり屋みたい。

「バカ礼慈……………」苛立ちを誤魔化すように叫んだ。

返事をしてくれない。

神殿の後ろへ回り、懐中電灯の光を樹海の中へ向ける。

樹海の中はまるで奈落のように暗い。

呼びかける。谷底に届くように大声で呼びかけた。

なんて暗い。なんて恐ろしい闇。光のない森。

呼びかけた。その都度、厭な夢が脳裏をかすめる。

血まみれの礼慈、森の中で伏している———そんなイメージ

寒気がした。

冗談じゃない。そんなのイヤ。

「礼慈！」

樹海の中に少し入って光を照らす。

淵ふちから呼びかける。闇の中から出られるように。光を声を。

何度も呼びかけた。何度礼慈を呼んだ。何度も呼び続けた。

時間が経つにつれて厭な予感よかんは濃度を増し、体が冷えていく。

目眩めまいさえしてきた。

「奥津城———！」

だから幻かと思った。

「礼慈？」

とても小さな、囁きほどの声。

だけど、それにも答えてくれた。

樹海の中から、私を呼ぶ声が聞こえた。

生きている熱い声。

光を向ける。礼慈から闇を払う。

びしょびしょに濡れて、泥遊びでもしてたみたいみたいにシャツは汚れて、

それでも力強く笑う礼慈の姿を確認すると、それだけで体が温まる想いがした。

不覚にも泣きそうになったけど、なによりまず、一発こいつを殴って

やる。私を懐中電灯を握りしめて、樹海から出てきた礼慈に近づいた。

「よう。迎えに来てくれのか。ありがとな奥津城」

ほら、やっぱりこっちの心配なんてお構いなしに笑った。

だから私は、かるく拳で答えた。

◇

三日三晩秘境を彷徨ったみたいなのと一緒、母屋に戻った。

樹海に半日近くいて、無事に戻ってきたのにも驚いたけど、背中に殺人犯を背負って生還するあたり、礼慈のどうかしてるころだと思ふ。

詳しい事情を知らない私は、その辺りの経緯を尋ねた。長々と礼慈にしては珍しく話してくれたけど、かいつまめば、樹海の中で弓の死合をした、という、一昔前の少年マンガみたいなことをやってたらしい。

「バカじゃないの」本気でそう思った。

「おまけに、殺人犯をわざわざ背負って帰るなんて、お人好しにもほどがあるわね」

「しかたないだろ。あいつも迷ってたんだ。悪い事したら見捨てるんじゃないで、誰かが手を差し伸べて、叱ってやらないとダメだろ」

「それがお人好しだっていうの」

「お人好し結構。それで救われる人がいるなら、それでいい」

ぶっきらぼうに礼慈はそう言った。昔からこの手の話になると、すぐに拗ねるのは変わらない。

「で、どうするのアレ」

礼慈が持ち帰った手嶋霧霞は今、座敷で寝ている。まるで三日三晩不眠不休だったみたいなのに、礼慈がここに連れてきたときにはもう気絶していた。

礼慈も、シャワーで身体を温めて、私が用意した白い浴衣にとりあえず着替えた。

「今は、寝かせてやってくれ」優しい苦笑いを浮かべる礼慈。

関係ないんだ。礼慈の優しさは、たとえ相手が人殺しだとしても変わらない。困っているなら、救いを求めるなら、手を差し伸べる。自分自身を後回しにして、自分の命を度外視して。たとえ、殺されるかもしれないと分かっても。だから馬鹿なんだ。

でもそんな馬鹿だから、シキにも、普通に接して普通の人間扱いしてあげられるんだ、きっと。

礼慈のそんなところが、私にはコワイ。

虎子に連絡したら、すぐに部下を送ると言った。めずらしく興奮と切迫感のある声だった。無理もない。だって、ようやく殺人犯を捕らえることができるんだから、空腹の虎に生肉を与えるようなものだ。

礼慈は、シキに話がしたいと言った。樹海から戻る時になにかあったらしい。私は止めたけど、すぐに戻るからと言って、傘を借りて家を出て行った。

入れ違いに、虎子の部下という人がやってきた。

鳥口と名乗った刑事は、ほかに制服をきた警官を数人つけていた。

ついでに、なぜか葬儀のおじいさんも一緒。

鳥口さん達が座敷で寝ている手嶋霧霞と話しを聞いている間に、私は玄関の外で、暇人のおじいさんの相手をした。

「なんで先生までいるんですか？」  
努めて丁寧な葬儀先生に尋ねた。

「いえ、鬼束君から頼まれましたね。怪我人を診てやってくれと」

相変わらず医者にあるまじき喪服の老人は、穏やかな笑みを浮かべてゆつくりとした口調で、薄っぺらな感情をこめて答えた。

「先生のお手を煩わせるほどの怪我はありません」

私がそう言うと、葬儀老人は陰のある笑みを浮かべた。

「そうですね。彼らの怪我は外傷ではなく、心の方ですからね。私が出る幕はないでしょう。もちろん、お嬢ちゃんの傷も」

私の心を見透かすような卑しい眼。

昔から、この老人の狡猾な眼が嫌いだった。

「では、何しに来たんですか？」

「もちろんお嬢ちゃんが心配なので様子を見に。儀人から留守中のことを任されているので、その友情に答えたままでです。それに一応、私も捜査協力をしているのですよ。もちろん、正式な要請以外のことなので個人的なものではありませんが」

そこで老人は周囲を一瞥し、少し私に近づき囁いた。

「一連の事件の首謀者は、奥津城に何か因縁があるようです」

それだけ囁き老人は後退した。

その言葉の意味を理解するのに躊躇う。

「首謀者の目的がなんであれ、狙われているのは確かでしょう。ですが、心配いりませんよ。およその目星は、儀人がすでにつけて動いているようですし」

「……………爺やが？」

「ええ。儀人はおそらく誰よりも早く事件に気づいて、動き出したのでしよう。……………」ところで、儀人から何か連絡はありましたか？」

「……………いいえ」私は首をふった。

この老人の言っていることをまだ消化しきれない。ただ分かったのは、私はとんでもない事に始めから巻き込まれていて、それを知らなかった、という事だけだった。

「あの……………」気の弱そうな声と共に玄関のドアが開かれ、鳥口刑事が現れた。

「手嶋君を署に連れて行きますね。そこで詳しい話を聞くから。それで……………鳥居君？ 彼も一緒に来て欲しいんだけど……………」

腰の低い態度で鳥口刑事は、まるで怯えているような口調で言った。

それを聞いて私は、礼儀がまだ戻っていない事に気づいた。もう二十分近く経っているはず。なのにまだ戻ってきていない。

「私、呼んできます」

傘を持って、土蔵に向かった。庭をぬける間に後ろから誰かに呼び止められた気がしたけど、立ち止まらずに林道に入った。

霧のような雨。潤んだ空気。柔軟な地面。甘い樹木の香り。

土蔵に行くのが少し嫌だった。

礼慈がシキと会っている、それを想像するのが嫌だった。

シキと顔を合わすことになるかもしれない、それが嫌だ。

だから土蔵の外から礼慈を呼ぼうと決めた。

「すぐに戻るとか言ったくせに」

雨の道連れに愚痴を零して、林道からそれて土蔵へ。

死んだように静か。

鉄の扉に近づく。外から呼びかけ、しばらく待っても返事がない。扉を蹴って呼んでみたけど、それも効果なし。

もしかしたら神社にいるのかな。

こういう時に携帯電話を持っていない礼慈に腹が立つ。

しかたがないから林道まで戻って、神社に向かった。

深海のように暗い。だけど幻のように朧に木々の輪郭が見える。

なにかかも曖昧で、なにかもが朦朧としている。

立ち止まって空を仰いだ。

ふと、ずっとこうしていると自分自身さえ、この闇に溶けてしまいそう。そんな錯覚がした。

生きているのか死んでいるのか、そんなことさえ不確かにしてしまう。

漂白されていく気分だった。

まるで夢のよう。夢に続きに似た感覚。

立ち眩みの一瞬に、夢を見た気さえした。

——あああああつあああつあああつあああつあああつあああつ——

森全体を駆け抜ける絶叫に、叩き起こされた。

驚き、戸惑う。

獣じみた遠吠えは、だけど酷く人間じみていた。

それがどこから聞こえてきたのか分からなかったけど、居ても立ってもいられず、私は、神社に向かって走り出していた。

降り注がれる雨は緩やかな落下を続ける。

けど、そんな悠長な速度に付き合う気はない。

傘が邪魔。捨てた。

林道を抜け、視界が広がる。

白くぼんやりとした境内に出た。

鳥居から拝殿へと視線を流す。

途端に、その光景が眼球にたたき込まれた。

「殺せた！ 私が殺したやつみんな呪い殺せた！」

空気をねじ曲げるような絶叫。

誰かが倒れている。誰かがそれを見下ろしてる。

白い着物が眼に入った。

それを見下ろしていた奴が、逃げるように境内から出て行く。

それを眼で追う。同時に走り出した。

目の前を横切る。

息を呑んだ。思わず悲鳴を上げそうになった。  
小夜子が、私の知らない顔で過ぎ去った。

立ち止まる。質の悪い夢のように目眩がする。

「なんで？」という疑問が浮かぶ。

「小夜子！」叫んだ時にはもう姿はない。

寒気。氷のような雨のせいじゃない。

後を追うと体が動こうとした。けど、走りだしたのは逆方向。

振り返り、拝殿の前で倒れている誰かに駆け寄った。

その人は白い着物を着ている。

シキの顔が浮かんだ。

けど、それはすぐに消える。

だって体型が違うし、なにより見間違う訳がなかった。

「礼慈！」叫んだ声が雨に濁る。

御影石を滑るように駆け寄り屈んで、礼慈に触れた。

俯せに倒れている。その背中に、はみ出た骨のようにナイフが刺さり、

白い着物が、淡い赤色にじわじわと染まっていく。

「礼慈……………礼慈！」

背中に触れた。赤い血が寒気がするほど熱い。

体を揺らした。名前を呼んだ。

「礼慈、礼慈！ 返事してよ！ 礼慈ったら！……………なんで」

いつもアンタは私が呼んでも返事しないのよ。

なんでこんなことになってるのよ。  
二つの言葉が胸の中で渦巻く。

「あ、あ、……………イヤ」

分からない。

なんで礼慈が刺されたのかも。

なんで小夜子がここにいたのかも。

どうしてまた私の大切な人が巻き込まれたのかも。

どうしたらいいのかわからない。

どうしたらいいか、考えられない。

なんで、どうして、どうしたらいいの。

イヤ、イヤ、イヤだ。

光が無くなっていく。暗くなっていく。

暗いのはイヤ。夜は嫌い。誰かがいないと嫌だ。

なのに、どうして。

「ツう……………あ、うあああああああ」

なにもかもがイヤでイヤでしかたない。

泣いてる私も。泣いてるだけの私も。涙さそう厭な夜も。

助けて。

「れい、じ……………たすけて、れいじ」

返事してよ。

助けてよ。

お願いだから。

助けてよ。

死なないで。

お願い。

誰か。

誰か。

お願い。

誰か。

助けて

助けて！

12

雨音にかき消されそうなほど幽か、だけど痛烈な悲鳴。

それを絵馬の後を追っていた葬儀老人と鳥口刑事が聞きつけた。彼等が境内に到着すると、拝殿の前で倒れている鳥居礼慈とその傍で、親と離ればなれになった幼い子供のように泣いている奥津城絵馬を発見した。状況の把握に戸惑いながらも葬儀老人が応急処置を施し、鳥口刑事は救急車を手配した。数分後には駆けつけた救急隊員によって礼慈は搬送された。

救急車が出発する直前、それまで一言も発せず、花びらからこぼれ落ちように涙を流していた絵馬が、急に声を荒げて自分も一緒に行くと叫びた。葬儀老人はそれを止めようとしたが、駄々をこねる子供みたいに退かない絵馬を見かねて、代わりに屋敷に残った。

救急車の中では人の声が絶えなかった。沈黙が致命的であるかのようになり、救急隊員達は礼慈の命を取り留めるとめに一所懸命だった。その傍らで、絵馬は祈るしかできなかった。きつと名を呼べば助かるなら、彼女は喉がつぶれるまで叫び続けただろう。

駅近くの総合病院に着くと、トリガーを引かれた弾丸のように礼慈を乗せた担架が救急車から降ろされ救急入り口へ吸い込まれていく。そして待機していた医師や看護師と共に、病院の奥へと流されていく。

絵馬は遅れて救急車から降り、それを見送った。まるで川に流された白線のように、もう戻ってこないのではないかという予感を置き去りにして行く、その光景を見ていた。

すぐに手術が始まった。手術室前の待合室の真ん中で、絵馬はひとりで、手術中という赤いランプを見詰めていた。周りは樹海のように誰も見あたらない。人が現れても、墜ちていく雨粒のようにそこに留まらずにどこかへ消えていく。

手術室の扉を見ていた。

いつ開くか見逃さないように。

そこから礼慈が逃げないように見張るように。

立ち尽くす。ほかに何もできないみたい。

立ち眩みでもしたのか、絵馬は風に弄ばれる木葉のように、近くの長椅子に腰を下ろした。けど視線はずっと手術室の扉を。両手は離ればなれになることを嫌うように、指を絡めて握られていた。

何度か手術室の扉が開かれた。その度に、その瞬間に蘇生したように絵馬は機敏に腰を浮かせて駆け寄ろうとしたが、手術室からは看護師が出たり入ったりするだけで、それが分かると萎れたように座り込んだ。

「奥津城……ッ」

しばらくすると、神籬安良が待合室に現れ、絵馬に声をかけた。急いできたのか、呼吸がやや乱れている。

「礼慈は？」

屈んで、絵馬の眼を見ながら神籬は尋ねた。

瞬きするように瞼を瞑り、絵馬は首を僅かに降った。

それだけ礼慈の状況を察したのか、神籬は溜息をつくように、そうかと呟いて立ち上がった。それから手持ち無沙汰に周囲を見渡した。無人島で二人きりのように誰もいない。生者の息吹さえも感じないほど。床の白いタイルや壁は年月に染められたよに薄汚れ、それでも潔白であれという脅迫めいた白で統一された室内の空気は、外よりも息苦しいのか、二人の呼吸はすこし浅かった。

遠くの廊下を誰かが足早に過ぎ去る足音さえ届く静けさに、絵馬の不安は消え去るどころか、濁り固まっていくばかり。

「奥津城。ほら」

とつぜん絵馬の視界に飛び込んできた神籬の手には、ホットミルクの缶が握られていた。

それが見えているのに受け取ろうとしないから、神籬は、膝の上で握られている絵馬の両手と両腕の間に缶を置いた。その熱でやっと気づいたのか、絵馬は視線をさげ、それから両手で缶を握って、寝息のようにありがと、と呟いた。そこまでで蓋を開けようとしな。もしかして、ショックでそんな気がないのだろうか、その様子を見ていた神籬がふたをあけた。そして人ひとり分の距離をとって絵馬の隣に座って、自分の缶をあけてコーヒ―を一口飲んだ。それだけで、二人の間には会話がなかった。

足音が聞こえ、それが近づいてくる。

それに最初に気づいて振り返ったのは神籬だった。

男が近づいてくる。迷彩柄のズボンにポロシャツという服装は勤務中の医者でも看護師のようには見えないだろう。

見知らぬ男が近づいてくる。それでも神籬は、それが誰がおよその察しがついたのだろう、警戒することなかった。

「絵馬ちゃん」

男は神籬を一瞥し、隣に座っている絵馬に近づいた。

視界に男の顔が入ると、絵馬は眼を見開き震えながら口を開いた。

「お……おじさん。……あ、あ、の……わたし。わたし……礼慈が！」

必死に何かを訴えようとしても上手く喋れない絵馬に、男は優しく微笑みかけて頷いた。

「葬儀さんから連絡をもらって事情は知ってる。……ありがと、絵馬ちゃん」そう言って、男は絵馬の頭を優しく撫でた。

「しようがないな礼慈の奴は。女の子をこんな心配させて。ダメじゃないか、ほんとに」

男は微笑み、力強く頷いた。そして神籬へと顔を向けた。

「礼慈の友達かな」男の声は落ち着いていた。

「はい。神籬安良です。もしかして礼慈の……」

「父親だよ。君の話は聞いているよ。礼慈のために……ありがとね」

「いえ……」

男は落ち着いていた。きっと二人と同様、気が気ではないはずなのに。だけど、まるでこうなることが分かっていたように、あるいは覚悟していたように鳥居荘司は静かに、息子が現れるのを待った。

一時間ほど、三人の間に会話はなかった。荘司も、二人の後ろの長椅子に座り、じっと瞑想をするように眼を瞑っていた。

そして、ようやく手術中のランプが消え、しばらくすると手術室から数名の看護師と共にベッドが出てきた。

絵馬が飛びつくようにベッドに駆け寄る。

白いベッドの上、白い布団の中、白い包帯を巻かれた礼慈。

それが見えた途端、絵馬の足が止まった。

病室へと運ばれるベッドを見送る。長い廊下から見えなくなるまで。足音の輪唱が聞こえなくなるまで、絵馬は見ていた。それしか、出来な

かったかもしれない。

「奥津城」神籬が近づき肩を叩いた。「大丈夫か」今にも倒れそうに見えるのか、絵馬の肩をそえるように掴んでいる。

「うん……」密かに深呼吸をして絵馬は振り返った。

「絵馬ちゃん、神籬君」鳥居宗司が二人に近づく。

「どうやら命に別状はないようだ。ありがと、二人とも」

現れたから変わらぬ笑顔。それに絵馬はどことなく礼慈と同じ暖かみを感じた。鳥居宗司は残り、神籬と絵馬は病院を出ることにした。神籬

がタクシーを拾い、奥津城の家まで送っていく。

車中は礼拝堂のように静かで、跳ねられた水飛沫の断末魔とエンジンの猛りしか聞こえない。

「ありがとね」

冷め切ったミルクティーの缶を握りしめながら絵馬が言った。

神籬は隣で、静かに頷いて窓から星空のような町並みを眺める。

奥津城の屋敷に着き、二人はタクシーから降りた。タクシーが赤いテールランプが見えなくなるのを確認してから神籬は口を開いた。

「奥津城。ちょっと話があるんだが」

門を潜り庭に入って玄関に向かおうとしていた絵馬が振り返る。なに、と尋ねるように首をすこし傾げた。

「礼慈のことだ。あいつ、誰にやられたんだ」

暗闇のなかに浮かび上がる神籬の真剣な顔に、絵馬は一瞬怯えるように肩を振るわせた。そして躊躇いながら、口を開いた。

「わからない。……私が神社に行ったら、礼慈、もう倒れてたから……」

再生される記憶。

「誰かいなかったか？」

闇、雨、青白い灯籠に御影石、白、血、倒れている友人、静寂……捻れた絶叫。息を呑む。瞼を睨り、思い出す。躊躇いを自暴自棄に似た潔さで置き去りにして答える。

「小夜子が……。小夜子を、見た」そんな気がした、とまで言いかけた。

「一之宮……か」まるで予想していたように大きな驚きを見せず、考え込むように腕を組んだ。

「どうしたの、神籬」

「いや……おかしいな、とってさ」

「なにが？」

「ほかに誰もいなかったのか。あのキツ感じの刑事さんや座敷童とかさ」訊かれて、絵馬はいなかったと首を横に振ると、命題を突きつけられた哲学者のように、神籬は小さな呻きを漏らした。

「それがなんだっていうのよ」

絵馬の声にやや熱がこもる。

「一之宮も事件に一枚噛んでるみたいなんだ」

「……なに、それ。そんなの私！」

「ああ、言っていない。今朝、死体があがったのは知ってるか？」

「……たぶん」絵馬は自信なさげに答えた。

「それ、オレらの一個上の先輩の明神先輩なんだけどさ。一之宮が昨日の夜にその先輩に襲われて、殺されかけたんだ」

「……なんで？」

「さあな。でも、一之宮の奴、ひと月ぐらい前から誰かにストーカーされてたらしいから、もしかすると明神先輩がそうなのか、オレには分からないけどさ、とにかく一連の事件に少なからず関わってるのは確からしい」

抑揚のない声だった。

「うそ……………そんなこと小夜子、私に……………」

言ってくれなかった、と呼吸のように呟いた。

「秘密に、してたんだろ」

添えられた言葉に、絵馬は抱きしめるようにぎゅつと腕を握った。

「それで、一之宮に尋問すれば事件解決の糸口がつかめるかもって、あ  
のガキが言ってさ。でも出られないんだ。だから一之宮を、鳥の森神  
社まで連れてくる計画だったんだ。その時、一之宮はオレのアパートに  
居たから、あの刑事の姐あねさんが来るまで足止めするのがオレの役目で、  
それからは二人の仕事っていう役割分担だったんだが……………」

「なによ、それ。わたし、そんなこと全然……………」知らなかった。

誰も言わなかった。

誰も教えてくれなかった。

虎子も言わなかった。

礼慈も言わなかった。

私だけ知らない。

みんな隠していた。

みんなで秘密にしていた。

ひとりだけ何も知らずに。

「計画通りなら、礼慈が刺された時間ってのは、みんな、あの土蔵にい  
るはずなんだ」

言われ、絵馬ははつと息を呑んだ。

ああ、だから礼慈は樹海から戻って間もないのに、シキに会いに行く  
て行ったのか。土蔵には虎子も小夜子もいるから、気になってたんだ。  
私には内緒で、私に隠れてみんなでシキのところ——しゅんじゅん逡巡する想い  
に空虚を覗む。怒りのような感情が胸に染み渡るのに、冷たい悲しみが  
瞳じゅんけんに充填される。自分のものなのに、自分でも説明できない感情に痛み  
を与えるばかり。

「オレ、ちょっとあのガキに話してくる。一之宮の件もどうなった気  
になるからな……………奥津城も一緒に行くか？」

絵馬は、俯きながら首を振った。

「私は、いい……………もう、疲れたから」

「そうか」

後で報告に行く、と言い残して、神籬は庭を横切り林道へ向かった。  
絵馬はそれを見送ることなく、一瞥するように空を見上げ、外で着い  
た泥を振り落とすように溜息をついて、玄関に向かって歩き出した。

そこで気付いた。玄関の硝子戸から家の灯りが漏れていない。暗かっ  
た。明かりがついていない。

確か葬儀老人が自分の代わりに家に残っているはず、と救急車に乗る  
前の事を思い出した。

ドアは案の定、鍵がかかっていた。玄関近くの植木鉢に隠していた予  
備の鍵を使ってドアを開け、玄関に入った。

生けとし生ける者すべてに安らかな眠りを誘うような静けさは、けれど、墓地のように死に絶えた静けさでもあり、身震いすらする寒気も伴っていた。

絵馬は屈んでブーツを脱ぎ、家上がった。

がらん、と背後で硝子戸が開く音。

「ん。神籬？」

振り返る。

浸食する夜気。

冷たい缶が落ちた。

転がる。

その先は外。

出口がある。

「あ——」

凍り付く悲鳴。

引き寄せられる視線。

その先には出口がある。

闇から夜への出口。

闇と夜の間、影があった。

濃密な影と濃厚な白色の能面。

「ヒューヒューヒューヒュー……」

振れた管楽器のような鳴き声。

絵馬は、その闇に魅入られていた。再び。

そう、それを彼女は知っている。

その影を知っている。

その闇を知っている。

だから動けなかった。

その影が外から内に入ってきて。

唇が震え、その間から漏れる吐息。

悲鳴あるいは喘ぎ。

磔はりつけにされたように動けない。

濃厚な死臭と冷気の固まりが近づく。

絵馬の前に、影の塊が立つ。

闇の中から青白い腕が伸びる。

絵馬の頬に、死体のような手が触れる。

その直前に、雷に打たれたように絵馬は爆ぜた。

触れかかる手を払い、踵かかとを返し逃げ出した。

長い暗い廊下。

どこへ向かうかより、ここから逃げたかった。

だが、逃げられるはずがない。

出口がない。

腕を掴まれそのまま引張られる。

バランスを崩し背中から倒れた。  
苦痛に絵馬の表情が歪む。

瞑られた瞳が再び開かれる間に、  
倒れた体を起こして逃げる間に、  
すでに絵馬の体には影が乗りかかっていた。

両脚を人魚のようにばたつかせ、  
両手を翼のように羽ばたかせて、

なんとか異質な影から逃れようとする。

悲鳴をあげる、それすら冷たい手に塞がれた。

重みがあった。人間めいていた。

温もりがある。人間めいていた。

呼吸している。人間めいていた。

だけど、だから鮮明な恐怖があった。

「いつまで……いつまで……」

能面から絵馬の顔に零れる怨嗟。

近づく仮面。

「まだあ殺しちやあダメだああ」

長い舌で舐めるように揺れる。

絵馬は見た。

そこに穿たれた二つの穴。

その奥に蜥蜴のように蠢く二つの眼。

「や……」首を振る。

甘い香り……誘惑の香り。

誘われる。とおい遠いところへ。

いやだ、と訴える潤んだ瞳に、

仮面に反響した嗤い声が妖しく木霊する。

「おまえのすべてを——汚してやる」

その声は呪い。

その影は祟り。

その夜は褻ぎ。

あるいは、

その言葉は汚れ。

◇

その言葉に、鬼束虎子は後悔していた。

冷たい雫を充填した夜気を、猛獣の呻りに似た爆音を轟かせながら突き抜ける赤い高速車の車中で、エンジン音と共振するハンドルを握りしめ、青白く照らされた前方を睨みながら、虎子は下唇を噛んだ。

今朝、彼を見た瞬間に感じた違和感。それはこれから起きる出来事を予見させるような不吉な雰囲気、あるいは妖気を纏っていたようだった。

虎子は知らない。その決まり事にどれだけの犠牲と葛藤そして歴史あるいは思想と思惑があったか。狡猾な老人の想いからすれば、彼女の考えなど稚気に等しいのだから、彼女が真意を知ることなどできなくとも仕方がない。だとしても果たして、自分の決断は正しかったのだろうか。古くからの約束、もしくは絶対的な秩序あるいは尊い命を、裏切り踏みにじたのではないかという、罪悪感と慚愧の想いを感じられずにはいられない。

「虎子さん。僕を……外に連れて行ってください」

半日前、シキはそう言った。

生まれてから、あの樹海から出ることなく外の世界を経験することなく、その生涯を限られた箱庭で終える事を運命づけられ、それを信心深き咎人のように自らも受けれていたはずの少年が、自らその禁を破った。

虎子は第三者に過ぎない。

シキという漂白の少年を外界に出してはいけないというのは、奥津城という一つの家の禁忌にすぎない。その経緯も真意もしらない他人である虎子も、けれどその禁忌がどれほど重要なものかは、彼の家の素性を知る故に察しはついていた。

だから少年の懇願に、驚き狼狽し困惑した。

その陰鬱な響きの声にも悪寒を感じていた。

パンドラの匣の蓋に手をかけている錯覚さえした。

逡巡と葛藤を渦のように巡らせる。

そして彼女は、パンドラの匣を開けてしまった。

彼女は、少年の共犯者となって禁忌を破った。それらを守り続けてきた人達への裏切りの代償に、一連の事件は終息し、これ以上の犠牲者が現れないことを願った。そのために彼女は、独断で少年を外へ連れ出した。

だが、その結果がこれだ。

手配中だった手嶋霧霞の身柄は抑えることができた。だがそれと一緒に、何者かによって鳥居礼慈が刺されたと報告がされた。さらにその後、宅にもどってきた一之宮小夜子を確保しようとして、何者かに狙撃され取り逃がし行方不明となり、彼女の自宅からは匣に入った両親のバラバラ死体が発見された。その中で、捜索していた榊あやめが、生きたまま発見されたのが、幸いだっただろう。

次々と匣が開かされ、中に入っていた謎が明らかに、けれど同時に、次々と新たな匣が目の前に置かれていくような、まるで堂々巡りをしていくな気分を、鬼束虎子は味わっていた。

事件の出口は見えず、犠牲者の数だけ増えるばかり。

自分の判断は間違っていたのではないだろうか。

口こそしないが、増え続ける犠牲者の数と肥大していく事件に、不安と弱音を吐き出したい想いから、自分の無力さに苛立ちを感じられずにはいらなかった。

「僕が、すべての元凶です」

爆音に共鳴する車内で、シキの声は悪夢のように良く響いた。

ハンドルを握る虎子の手が一瞬、大きく傾き、危うく中央車線を越えそうになったが、すぐに車体を元の軌道に戻す。

怯えるように膝を抱え、それでも器用にシートベルトを装着した状態でシキは指をくわえて俯いている。

運転席の虎子は前方を睨む。その表情には当惑に目を見開き、痙攣しているかのように唇を微動していた。口にする言葉が思いつかないのか、シキの言葉がまだ消化しきれていないのかもしれない。

重い声だった。

「……………シキ」ハンドルを強く握り直し虎子は囁いた。

車はまるで自動運転かのように運転者の困惑とは関係なく、更にスピードを増し、滑らかなテールランプの軌跡を残し闇を疾走する。

続きが出てこないほど、思考が停止しているのか。否、虎子の思考スピードは、今まさに最高速度と行っても過言ではないだろう。

一連の事件を匣に響たもとえるのなら、匣を開けているのはシキだ。

だが、不可解な匣を目の前に容赦なく突きつけるのもまた、シキだ。

虎子は、咬み砕かんばかりの力で思索と歯を鳴らし、手が赤くなるほどハンドルを強く握りし、アクセルを一層深く踏んだ。

鞭を入れられた暴れ馬のように車体は一瞬左右に微動。闇を切り裂くような甲高い音を鳴らし、地響きのようなエンジン音を吹いた。

我が物顔で夜に蔓延まんえんした闇を、無慈悲に容赦なく蹂躪じゅうりゃんしていくか如く、車は瞬く間に大橋を越え、朽木の奥地へと矢の鋭さで突き進む。

背中に伝わるエンジンの振動に同調するように、虎子の心拍は調子をあげ、心臓の鼓動も跳ねるように血潮を巡らせる。

「虎子さん」

耳を覆いたくなるほど、けたたましいエンジン音が響く中において、シキの声はまるで別次元のように虎子に耳に届いた。前方を見ながら、視界の端でシキの姿を捉え、なんだ、と応える。その声に動揺の残留していなかったか虎子は数秒迷った。

「手嶋霧霞は、逮捕されますか」

幼い子供の声で、不安げにシキは尋ねた。

「もちろんだ。自供している。それから証拠が揃えば、逮捕しなければならぬ」

虎子は意図的に無表情で抑揚のない声で言った。

「どんな罰を受けるのですか？」

シキは同じような不安定な声で尋ねた。

それに虎子は僅かに表情を崩し、怪訝な眼差しでシキを一瞥した。戸惑いを顕わにしたシキが、歳相応に情緒が揺れ動いている少年が、悪夢でも見ているかと、自身を疑うほど珍しかった。

「そうだな……歳が歳だけに司法判断は難しく長くなると思うが、おそらく、死刑だろう」

少し考えながら、虎子が淡々と答えた。

「死刑……ですか」

「ああ、そうなるだろうね。殺人だからな、しかも一人二人ではない。それは手嶋霧霞だけじゃない。箱入り殺人の犯人にしても、私がもし殺害現場に居合わせたなら、躊躇いなく、そいつを撃ち殺すよ」

軽快な口調で、けれど厳しい声で虎子が言う。

「だがシキ。なぜ今そんな事を訊く。それは、すべて事件が終われば、我々が知らない所で、勝手に決めてくれる。考える必要などないだろ」

虎子はちらりと覗き見るようにシキを見た

するとシキは、震える体を抱きしめるように膝を強く抱き寄せた。震えているのだ。エンジンの振動ではなく、彼自身が何かに怯えるように震えている。

車は住宅街に近づき、周り道になるが走行しやすい二車線の道を、はじき出されたパチンコ玉のように滑らかにカーブを曲がり、更に加速した。もうじぎ、樹海が見えてくる。

「すべての事件、ですか……」シキは小首を傾げた。

「それは八年前の事件もですか」

「な——に？」

エンジンメーターの針が急激に下がった。

「それは……」アクセルを踏む足を微かに緩め、虎子はシキを流し見るように睨んだ。

「殺人事件は、八年前にもありました。虎子さんが捕まえようとしているのは、現在起きている箱入り殺人の犯人ですか、それとも八年前の殺人の犯人ですか？ それとも両方ですか？」

シキは見つめるように虎子の方を向いたまま、幼い声で明瞭な音を響かせる。流れるような言葉。淀みなく、けれど不安定な調べ。

「……無論、そんなこと決まってる」両者を捕まえるに決まってる、虎子は強い口調で答えた。そう強く言わなければ、発音できなかつた。

瞬きのような間に沈黙。

虎子は、シキを見た。

「シキ。貴様……」続きの言葉はない。

言いたい事、言いたい言葉は沢山ある。だけどそれらすべてが、どうしてか唇に触れると霧散してしまう。

虎子はすぐに視線を前方へと戻した。

「きつと——お爺様が誰よりも早く、真相に至ってしまった」

シキの声に、虎子は一瞬、我が耳を疑った。

「だから一人で、妃真河へ行ったんだと思います。そして……………」

まるで泣いているように潤んだ声を残し、シキは顔を伏せた。

「おい、シキ！」虎子は思わず叫んだ。

「どうした。さっきっから怪訝しいぞ。しつかりしろ、貴様らしくない」

爆音が充満した車内で虎子は、喉に痛みを感じるほど、隣にいるシキ

を呼びかけた。もしなければ意識が途絶えてしまう重傷者のようだと

思えてならなかった。

樹海の輪郭が見えてきた。青白いヘッドライトが、波打ち際のような

木々から闇を引き剥がし照らす。

もうすぐで、神社につく。

それまで沈黙は、続かなかった。

シキは独特の、闇に良く透る声を響かせた。

「現在の箱入り殺人事件は、八年前のヤタガラスの祟りから派生した、

元は、同じ匣に入っているでしょう……………」

ラストスパートを掛けるようにエンジンは更に暴力的な音を響かせる。

だがそれでもシキの声は、何ものにも干渉される事なく独立した響きを

奏でる。

「箱入り殺人の犯人が夜鳥ならば、

ヤタガラスの祟りを生み出したのは、ハ咫鳥」

そして——と息を呑むように紡ぐ。

青白いヘッドライトは樹海の外縁をなぞるように照らし、まるで穿た

れたような穴へと吸い込まれた。車は僅かに減速し、強引に押し込むよ

うに左折した。

樹海に穿たれた孔。異界へと通じるトンネルは暗い。

ヘッドライトは、数十メートル先の朱い鳥居を照らした。

瞬間。

「そのハ咫鳥の正体は、奥津城です」

激かな声が響き、直後に闇を貫く音と共に車はスピンした。

滑る赤い車。右へ百度近くスピンして、朱い鳥居の前で停止した。

「だから、僕が終わらせなければいけない——」

車が停止すると同時に、シキは車から飛び出す。

スピンと急停止の衝撃の中で虎子が、シキの姿を捉えた時には、すで

にヘッドライトに照らされながら石段へと向かっていた。

待て、と叫びながら虎子も急いで車から降り、走りだした。濡れた石

畳に一瞬足を捉えバランスを崩しかけたが、それでもすぐに体勢を取り

戻し走り出す。

鮮烈な青い光に透명한雨粒は宝石のように輝き地面で弾ける。

潤いを充填した闇。

朱い鳥居を抜ける。見上げるほどの急勾配の石段へ辿りつくと、虎子は思わず足を止めて頂上を見た。

既にシキは石段を登り切るうとしていた。その光景は、まるで白い大蛇が闇を這い昇っている様だった。けれど速さは獣のそれに近く、蛇行するそれは、とても人の形を持っているとは思えない滑らかさ。

虎子は、そのスピードに唖然としながらも後を追う。

達人と遜色ない武闘派の虎子をもつてして、先行するシキには追いつくことは出来ず、六分の一を昇った時には、すでにシキの姿はなかった。

虎子はその常軌を脱した動きに舌打ちしながらも石段を駆け上がる速力を緩めることなく、二段飛ばしで駆け上がった。

銃声が聞こえた。

その鋭い響きに、虎子は足を止めて空を仰いだ。

「……………クソ！」

困惑に数秒のタイムロス。

虎子は悪辣な声を吐き捨て、ジャケットの内側に忍ばせていた銃を手にして、再び石段を駆け上がった。

何が起こっているのか、その不安に加速する。

銃声。

シキは何かあったのか、その焦りに加速する。

銃声。

だがそれよりも、敵がいる、という直感が虎子を押し上げる。

息絶え絶えながら、石を蹴る足の感覚さえ麻痺するほどまで加速した疾走を維持し、虎子は最後の一段を踏み切り台のように跳び、鳥の森社の領域へ飛び込んだ。

着地と同時に片膝をつき、正面に銃を構えた。

藍色の闇に、芒々と朧に青く煌めく石灯籠。

その二つの列の間に、白い影法師。

シキがいる。

それを確認すると虎子の頬が若干緩んだ。

だが、それも束の間。

シキはゆらりと、まるで花びらが舞い落ちるように倒れた。

「なッ——」息を呑む「シキ！」構えが崩れる。

虎子はシキのもとへ駆け寄った。

その間に。

ヒューヒュー・ヒューヒュー、と。

まるで壊れた管楽器のような鳴き声が聞こえた。

その鳴き声に虎子の背中に悪寒がはしった。御影石の上を滑り込むようにシキに接近し、同時に声が聞こえた方向へ銃口を向けた。

「シキ」呼びかけながら、シキの背中也手を当て、視界の端で収めるように顔を傾けた。

手に伝わる。火傷しそうなほど熱く、ぬるりとした感触。

それを見ることなく、虎子は苦虫を噛んだ。

そして、銃口の先へと顔を向け、その先を睨んだ。  
ヒューヒュー・ヒューヒュー、と悲しげな声。

虎子の二つの瞳が、雨粒の弾幕越しに闇を——それを直視した。  
白い仮面が闇に浮かぶ。

そこから壊れた管楽器のような鳴き声が漏れる。

闇より濃厚な黒色の外套。

鴉のような翼を折り畳み、包みこむ。

虎子のはその異形の鳥に、呼吸を止め魅入っていた。

そして痺れるほど、その闇の中のそれを見た。

握りしめた銃身が軋む。銃口は、知らずそれを狙っていた。

異形の闇色の鳥から、骨のように白い両腕が生えている。

その腕に、かぎ爪のように鋭い十指の中で、

まるで死に装束のように白い装いに身を包み、

長い黒髪を柳のように垂らし、静謐な顔は天を仰いでいた。

「絵馬」

軋むように嘯き、虎子は冷たいトリガーに力を込める。

闇に銃声と、夜鳥の鳴き声が響く。

13

懐かしい夢を、聴いた。

” 絵馬ちゃん “

柔らかくて優しい音。

” 絵馬ちゃんは、お姉ちゃんだけら…… “

大好きな声。

” 弟を守ってあげてね “

大好きなお母さんは、涙を流していた。

” かわいそうな子なの…… “

よく分からなかった。

” 誰も、この子を愛してはくれない……誰も守ってあげてくれない ”

お母さんが、なんで泣いているのか。

わたしは子供だから、分からなかった。

” いっそひと思いに殺してあげられたら、どんなに……どんなに “

苦しそうなお母さんの声を聴いていると、

わけもわからず、私もとても悲しかった。

” わたしがいなくなったら、この子は…… “

はじめて泣いているお母さんを見て、私はとても悲しくなった。

胸が潰れてしまいそうで、苦しかった。

” 絵馬ちゃん……………絵馬“

その声には、私とお母さんとの今までの時間が籠もっていた。  
嬉しくて悲しい声だった。

” 絵馬ちゃんは、お姉ちゃんだから……………“

お母さんは言いかけて、黙ってしまった。

哀しい涙を拭いて、私に笑顔を見せてくれた。

木漏れ日を浴びたように、ほっとする笑顔。

” 絵馬ちゃんは、この子のこと好き？“

—— うん。

” そう……………よかった“

眠るように微笑んだ。

” お母さんね、これから、とつても遠いところに行っちゃうの“

—— いつ帰ってくるの？

” ……わからないの。もう、帰ってこれないかもしれないの“

—— いやだよ。

—— いっちゃんだよ。

—— なんて？ ねえ、なんでいっちゃんなの？

” ごめんね……………ごめん、ね……………“

哀しい声と一緒に、お母さんは私の髪を撫でてくれた。

ごめんね、ってなんでも言った。

” 絵馬ちゃん。お母さんが、戻ってくるまで“

” この子を、お母さんのかわりに、守ってあげて“

わたしの手を包むように握った。

見上げたら、お母さんは泣いていて。

どうしてお母さんが泣いてるのか分からなかったけど、

” この子は、ひとりぼっちだから……………“

その声の儚さを、わたしはその時は分からなかったけど、

子供のわたしには。

お母さんの気持ちなんて。

その時はわからなかったけど。

” 絵馬ちゃんが、この子の手を握ってあげてて“

わたし達を愛してくれていることだけは分かった。

—— うん。

そして、お母さんをもう泣いて欲しくなかった。

だから。

—— わたし、お母さんが帰ってくるのを待ってるから。

元気いっぱい笑ってみて、

—— シキと一緒に待ってるから。

だから、安心して、

もう、泣かないで。

” ごめんね、ごめんね……………“

痛いぐらい抱きしめて、

手にふれて、ほほにふれて、かみにふれて、  
それでもまだ泣いてるから、

——だってわたし、お姉ちゃんだもん。  
覚えている。

”——ありがとう——“

その笑顔を覚えている。

静かな夜だったから、

わたしは、覚えている。

流れる涙の音も、

優しい命の音も、

黄金の月の光も、

蒼い草の香りも、

覚えている。

きつと、忘れない。

わたしは、お母さんとの約束を忘れることなんてできない。

たとえ、叶わない夢でも。

◇

鈍い頭痛と共に夢から覚めた。

鈍痛に思考と視界が霞む。少しずつ指先から血が通っていくように感  
覚を取り戻すと、両手首に違和感があった。

「つう……………あ」

苦悶を漏らる。すぐさま息と共に呑み込んだ。

「な、に……………」

低い視界。暗い視界。狭い視界。

ようやく右半身から伝わってくる硬くて冷たい感覚と斜めの視界で、  
やっと、私は横たわっていることが、ぼんやりと煙を吸い込むような曖

昧さで理解できた。

霧に包まれたような仄暗さに包まれた部屋。埃が満遍なく敷かれた床。  
吐息で舞い散る。

身体を起こそうとして、両手足の自由がきかないことに気付いた。

その理由を考えるより、体半分が鉛になったような体を、なんとか上  
半身だけでも起こして、まだ霧がかかったような視界で辺りを見渡した。

まるで無人の教室のように、四角い部屋。暗い。正面には四角い穴が  
並んだ壁。外も暗く。どうやら昼ではいいことだけが分かった。

静かで、自分の呼吸がひどく煩く聞こえるほど。

気怠い虚脱感が身体にのしかかる。

少し身体を後ろに傾けると壁に当たった。そのまま身体を預ける。

「どこ………ここ？」囁いた声が乾いていた。思うように唇が動かない。

まだ寝たりないみたいに意識が点滅する。

明かりはない。

見覚えもない。

記憶は朦朧で。

意識は不安定。

これは現実？

はたまた夢？

それさえ不明。

まるで夢の様。

なにもかもが嘘みたい。

瞼を閉じて、埃っぽい空気を吸い込んで深呼吸をした。

軋む音がした。

規則正しい音。足音。

滑らかな摩擦音が幽かに聞こえた。

「目が覚めたか……、絵馬」

その声が鼓膜を揺らした瞬間、私は瞼を丹らに開けた。

まるで教室で挨拶を投げかけるような飄々さ<sup>ひょうたつさ</sup>。聞き覚えがある気がした。

相変わらず薄暗い。だけど、さっきまでなかった細い長い影が唇気楼<sup>しんきろう</sup>のように立っていた。そしてその影の上に仮面。

それを見た瞬間に、眼球を針でさすように鮮烈な頭痛が私を襲った。

「あ——ッ」知ってる。その影を、私は知ってる。

暗闇と同化した黒い外套。嘴がある白骨のような仮面。それはまるで人の姿をした鴉のように黒く、鋭い爪を潜めた姿。

「だ……れ——？」

声を出したら寒気がした。

水を打ったような静けさ。

沈黙は束の間。

静かに白い仮面が、宙から墮ちた。

穿たれた穴から差し込む幽かな月光。

照らされて闇の中、朧に、だけど鋭い輪郭が浮かび上がる。

知ってる。わたし、この人、知ってる。

脳裏で囁く幼い自分の声に答えるように、虚ろだった焦点が定まる。

その瞬間、歓喜に似た溜息をソイツが漏らした。

「あ—— わかるかい。俺だよ」

浮遊するように軽い声によく似合う軽薄な顔。

陰鬱が染みついた髪。トカゲみたな眼。

「蕪木……先輩……ッ」喉を鳴らして名前を言った。

すると影が揺れる。抜けるような吐息に靡く。



聞く者の身も心も引き裂くような絶叫が響き渡った。

私は歯を食いしばって堪えた。悲鳴なんてあげるものか。

腹の中の物すべて吐き出したように、蕪木が浅い呼吸を繰り返しながら、私を見下ろす。視線を固定したまま屈んだ。

蜘蛛の糸。いや、ヘドロみたいに粘っこい視線が私の体を這う。

眼、鼻、唇、頬、首、項、肩、鎖骨、胸、脇腹とどんどん下がって行く。そして、そのまま下半身にまでさがって、視線だけじゃなくて、私の足を掴んだ。は虫類みたいに冷たい手が、私の足を撫でまわす。その間、蕪木は私を見ていた。粘っこい視線で私の頬をなめていた。

「絵馬ああ」

吐息を漏らし、裸足の指を食べるように口に含んだ。

「っう」電気が走る。

蛆虫が詰まった泥の中に、足をつけたような不快感に吐き気がする。

くちよくちやと小さな音が響く。

それが止まると生温い虫類の舌が、私の足を這い上がってくる。

見ていた。蕪木は、私をずっと見ていた。

踝をなめ回し、太ももをなで回している間も、

私の反応を楽しむような卑しい眼を向けていた。

蛇のように舌を這わせて内ももを舐めて、そのままあがってくる。

ゆっくり、ゆっくり、咀嚼するように這う。

舐められ吸われ甘噛みされる度に、不快の波に鳥肌がたつ。

「ううッ」絶対に声なんてあげるもんか。

下唇を噛んで、こみあがる吐き気に堪えた。

それが気に入らなかつたのか、蕪木は、私が着ているワンピースの裾を力任せに引き裂いた。脇腹あたりまで切れ目が入った服を乱暴に捲り上げ、閉じた両足をこじ開けようと掴み、露わになった下着を噛みちぎるように顔を埋めた。

「っくう」

吹き付けられる生ぬるい吐息が、肥大した舌よりの肌に触れる。カビが生えそうな湿った息が気持ち悪くて、足を閉じようとしても鬱血したように力が入らない。まるで他人の足みたい。そのくせ、感覚だけが鮮明。

頭に血が回らない。気が遠くなりそう。

声はあげない。それだけはしたくない。

見下ろしたら、私の下腹部から蕪木の顔の上半分が生えていて、ニタリと笑いながら卑しい眼で私を見ていた。何か言って欲しそう眼。

「っふん。………駄犬」

だから、ありつたけの軽蔑の込めて見下してやった。

舌の這いずりが止まって、蕪木が顔をあげた。

顔を近づけてくる。虫けらみたいなプライドでも傷つけられて怒っているのか、狂犬みたいに息を荒げて、弱者にしか見せない卑しい強気な眼をしていたから、私はもっと冷たい眼で睨み返した。

それが癪に障ったのか、目を見開いて顔を歪ませた。

「つく。ふうん！」猛牛みたいに鼻息を荒げ、私の首を掴んだ。喉に残っていた息が漏れる。

両手で締め付け、鼻息が頬にあたるほど顔が近い。

「いつだってそうだ！」

息が、出来ない。

「いつだってお前は俺をそうやって見下す！冷たくして馬鹿にしていてもいつも、一度だって俺をちゃんと見ようとしな！クソ！」

骨が軋む音が、した。

「絵馬あ。おまえ言ったよな、俺に言ったよな。俺のこと嫌いだって。

弱いから嫌いだって、よ。ああ！」

意識が、揺れる。

「どうだよ、これでも弱いか！分かってるのか自分の立場が！オレが少し力入れたら簡単に殺せるんだぞ！分かるか？おまえの命はオレの気次第なんだぞ、オレが生かしてやってるのに——これでも弱いか！」

嵐のように脳が揺れる。

すっと萎んでいく意識。

落ちる寸前に乱暴に突き放された。

「っはうッう　っがああ」肺が食るように酸素を吸いこもうして、痙攣した喉のせいで咳き込み、締め付けられるように苦しさ胸に満ちる。

「オレは弱くない。オレは強い」

口の中に酸味が広がる。背中を丸めてゆっくり息をしようとしたけど上手く呼吸ができない。埃が喉に入ってしまった咳き込む。両手で口を覆って、手を温めるように呼吸をした。

「分かったか……分かったよな」

卑しい笑い声が聞こえる。なんて不快。

頬に散ったアイツの臭い唾が鼻につく。

「絵馬ああ」

乱暴に髪を掴んで顔を起こした。

見たくもない見にくい顔が正面にある、それだけで吐き気がする。

生臭い息が頬にかかる。蛇みたいに舌を出して私の頬を舐めた。

声を出さず睨む。

「勘違いするなよ。俺は別に、お前のこと、好きとか愛してるわけじゃねえ」

まるで狂犬みたいな顔。

「だけど、俺はお前が欲しい」

見開いた眼はまるで濁った月。

「この髪も唇も胸も膺も眼も臍物も心臓も、身も心も、命もぜんぶだ！」  
そいつはピエロみたいに口を歪めて嗤う。

卑しい自尊心や虚栄心に灯った眼。

犯すように見て、手を離した。

床に放られた私を、蕪木が見下ろす。

「まだだ。まだ殺さない」

蕪木が近づいてきて目の前で屈んだ。何か取り出した。小さな粒みたいなもの。片手一杯のそれを私の口に押し込むと水を流し込んだ。

口の中に鉄臭い水と、沢山の豆みたいなもので満たされる。

そんな訳のわからないもの飲み込みたくない。

だけど蕪木が、私の口を手で覆って左右に激しく振る。

吐き出そうと口を開いても押し返された。

意識が朦朧として、飲み込んでしまった。

それを観て蕪木が手を離れたから、残りを吐き出した。

「自分から犯してくださいって哀願するまで壊してから、俺が飽きるまで犯したら殺す。お前がいくら泣きわめこうが、命乞いしようが殺せと

叫ぼうが、お前の生き死には俺が決める。お前の命は、俺の手の中だ」

嗜い声が頭に響く。

「せいぜい呪え、生まれたことを。せいぜい崇れ、悪しくないこの世を。

諦めて壊れる、お前はもう俺の匣の中で、死ぬしかないんだ」

狂った嗜い声の絶叫が渦巻く。

それを従えて、影が遠ざかる。

私は、ただぼんやりと眺めていた。

醜い獣の影よりも、壊れた窓から望む純白の月を、私は見ていた。

切ない想いがこみあげてくるけど。

そして、シキは夢から目を醒ました。

初めに感じたのは拘束されているような体の重みだった。まるで他人の体のような不自由に襲われ、次に声が聞こえた。

「む、ようやく起きたか」

その声を聞き、それが誰のものかと分かるまで数秒のタイムロスがあった。そして鬼束虎子の声だと分かると、次の瞬間には、現在の状況や意識が途絶える前の記憶の回想、それからのいくつもの現状、未来へのシュミレーションへと平行思考へと走った。

「虎子さん、ですよ」

まるで錆び付いたような口でシキは尋ねると、そうだよ、と近くから声が落ちてきたのが分かり、全身の感覚がその時ようやく回復して、待ちわびたかのように上半身を起こした。その反動か、右脇腹に金槌で殴られたような痛みが走り、シキは硬直したように体を丸めた。

「気をつけるよ、銃で撃たれたんだ。致命傷じゃなかっただけありがたく思え、そして私に感謝しろ」

高圧的な口調だが、どこかおどけているよう声だった。

「虎子さん……」声に漏れそうな痛みを呑み込み、シキは、虎子の方へ顔を向けた。

「みなまで言うな」

虎子はシキの頭を鷲づかみにして、そのまま押しつけるように片手でシキを再び仰向けに寝かせた。

「話してやるから大人しくしているろ。貴様に、こんなところで壊れてもらっては、困るんだ」

いいな、と虎子は手は離れた。

「私が境内に到着したとき、貴様が倒れていた。それとあれは……貴様が以前言っていた夜鳥という奴か……長身で、おそらく細身だがガタイはいい。どういう状況か今一良く把握できなかったが、とりあえずその鴉マントに一発、撃ち込んでやった」

「とりあえずで銃を撃つのは、どうかと思います」

幽かに苦笑いを浮かべるシキに、いいんだよ、と虎子は飄々と答えた。

「理由など後でいくらでも考えればすむ」

「……それで、捕まえたんですか？」

チャンネルを切り替えたようにシキの声は硬くなる。

それだけで周囲の酸素濃度が低下したように息苦しさを帯びる。

「いや。相手がマントを羽織っていていたせいで、肩の辺りを狙ったのだが、咄嗟に避けられた。それどころかな、こっちが撃たれたよ」

苦々しく声を振り絞り、虎子は舌打ちをした。

「どうやら相手は複数犯だ。どこかに狙撃者がいたようだな。一之宮小夜子を捕獲する際に邪魔をした奴かもしれんが……。その対処する間に、あの鴉マントにまんまと逃げられてしまった……」

それがどういう意味を告げているのか、二人は理解しているのだろう。だから虎子は、すまん、と呼吸ほど小さかったが、声をもらした。

「後を追うにも貴様がそれだからな。とりあえず、貴様の手当をするために奥津城の屋敷に運んだ。ここは、隠居の部屋だ。貴様の怪我は、葬儀先生に処置してもらった。運がいいよ。オマエも鳥居礼慈も」

「はい……」 絞り出すように返事をして、シキは溜息をついた。

「それと、絵馬だが……」

「虎子さん」 遮るようにシキが鋭く声を挟んだ。

「事件の方は、どうなりました。僕が眠ってから、半日は経っているのではないですか？」

「ああ。事件の方は、そうだな。進展しているようで、進展していないと言ったところか。手嶋霧霞の逮捕以外は、大きな収穫はない。それに奴は、通り魔殺人ではなく、ネバー・モア事件の重要人物なのだ」

「はい、おそらく。ネバー・モアの売人殺人は、彼によるものでしょう。そして神家は、娘の神あやめによる犯行。一之宮家の両親の殺人は、おそらく通り魔事件に入るのでしょね。あと儀道家は、儀道カズキによるもの。細かな裏付けや証拠探しは残っているものの、通り魔殺人以外の事件は、ほとんどその全貌が明るみになっている。……虎子さん、行方不明になっっている一之宮小夜子の足取りは掴めましたか？」

「いや、まだだ。神あやめは、まだまともに会話が出来る状態ではないからな、手がかり無しだ。そもそもなぜ消えたかも不明だからな」

「……………虎子さん。一之宮家の上下の階の部屋は調べましたか？」

「ん。……………いや。どうしてだ」

「マンションというのは、おかしな建物ですね。同じ様な外観に間取り、階が一つ違ってても、目を瞑っていても、そこが何階かも分からない。それを知るのには、階層が書かれた目印ぐらいでしょ。それだつて簡単に細工はできる。まるで箱を並べて積み重ねたような建物だ。……………だから、もしかしたら一之宮小夜子は、七階ではなく、真下の階の部屋に逃げ込んだのではないのでしょうか。だから、僕達が本当の一之宮家の部屋に入つても、一之宮小夜子はいるはずもない。同じ間取りの別の部屋にいたのだとしたら……………。警察が去ってから彼女を連れ去ることも用意でしょ。それまで隠れていればいいのだから」

シキが蕩々と語り終わると、虎子は溜息を呑みこむように深呼吸をして頷いた。

「調べてみる。まだ手がかりがあればいいが」

「きつとありますよ。それと……………神籬さんとは連絡とれますか？」

「ん。いや、連絡はとっていない。その必要がないからな」

「……………そうですか。一応、取っておいた方がいいですよ」

「そうか？ まあ、それもそうか……………」

「それとね、虎子さん」

声と共に息を深く吐き、静けさに耳を傾ける間を置いて口を開いた。

「連続箱入り通り魔事件には、犯人なんていません」

透き通るほど明瞭な響き。

だからこそ、虎子は、我が耳を疑い呼吸を二秒止め静けさを聞いた。

「いえ、そもそもそんな事件は、ないんだ」

まるで夢想を語るような蕩けてしまふような口調で、シキは言う。

虎子は、何も言えなかった。その言葉の真意を問う事さえも忘れて、何かを待っているようだった。

「虎子さん、ごめんなさい。もう少し……………寝かせてください」

そう言って、目を閉じ、息を引き取るようにシキは口を閉じた。

◇

苛立ちを発露するように、虎子は襷を開け放った。

「おい、ヤブ医者」

極悪犯人に銃を突きつけ最期通告を言い放つような勢いで、居間の中央で、お茶を飲んでいゝ喪服の老人を睨みつけた。老人は飲みかけた湯飲みを座卓に置き、大げさに眼を見開いて、どうしたのですか、と流暢で穏やかな口調で返した。

「シキがおかしい」

簡潔に述べ、虎子は向かい合う内に腰を下ろした。

「彼がおかしいのは、生まれつきですよ」

老人は虎子とは対照的な落ちついた態度を維持したままだ。

「そんなこと、貴方も先刻承知済みでしょう」

「ああ。それは体質的なものだろ。私が言っているのは精神面だ。どうなってる。あいつ、いきなり事件について話だして、かと思えば箱入り殺人に犯人はいない、それどころか事件そのものがないとぬかした。クソ！ こっちが混乱する。なにか危ない幕でも盛ったのか、ヤブ」

「私は葬儀です。それに安全な幕などありませんよ」葬儀老人はお茶を一口のみ、それを座卓に戻して、ふむと息を漏らし座り直した。

「しかし、確かにそれはおかしいことですね……。いや、しかし、そういう言い回しは矢張り血を感じる」

葬儀老人はくすりと笑ったが、虎子の刺々しい視線に気付きすぐに表情をノーマルに戻した。

「きつと彼なりの考えがあつてのことなのでしょう。儀人もそうです。私も考えた結果だけを言う。こちらが、なぜだ、どうしてそうなると思ねなければ説明をしない偏屈屋なのですよ。それに今は、怪我のせいで意識が混濁しています。それに、お嬢ちゃんが誘拐されてしまったのですから」

萎むような声の消沈は、そのまま空気へ感染したように部屋は重苦しい雰囲気にも包まれた。

「その隠居はどこでなにをしている」

座卓に頼杖を立て、そっぽを向きながら苛立ちを抑制した声で虎子が言った。

「白状すれば、ここまで膨張した事件を一刀両断するジョーカーは、隠居かシキだと思つてゐる。奴らが、この事件の核心部分なのだろ」

睨みつけるように虎子へ視線を向けた。それを正面から受け止めてなお、葬儀老人は態度を崩さず、なにか考えるように数秒目を瞑り、口を開いた。

「儀人は、因縁に始末をつけると、私に言い残し妃真河村へ行ったきり。いつものように、二人のことを頼むの一言だから、愛想というものがな……。奴は、今起きている事件ではなく、八年前の事件と奥津城の因縁に幕を降ろしに行ったのでしょ」

「そう、そこだ。私も、大まかな話は、隠居からも絵馬からも聞いているが、八年前の事件について詳しく知らない。あの同時多発変死事件の真相、知っているのではないか、貴方は」

獲物を捕らえた獅子の如く、虎子は鋭く睨みつけ、威嚇するような口調で問い詰めた。

緊張が部屋中の空気に感電していく。のど元に刃と銃口を突きつけ合うような緊迫感、火蓋が切られる寸前で、葬儀医師の声により霧散した。

「私も、直接見たわけでも関わった訳でもありません。あれは、彼が無自覚に起こした惨劇なのですよ。あの時……私は最後になって真相を聞かされた口でね、儀人はなぜか、私や熾天王寺の介入を拒みつつ……私達が関わりだしたのは、事件が終わってからです」

悲しげに語り、どこか遠くを見詰めるように眼を細めながら、葬儀老人は溜息をついて口を閉じた。

「聞きたいことがある」

「何ですか」

「八年前の事件。それをシキが無自覚に起こした惨劇と言ったが……、それは無自覚に人を殺してしまった、ということか、それとも人を殺した事すら自覚していないのか」

虎子が問いかけた瞬間、それまで穏和だった葬儀老人の目つきが、鋭く深みのある煌めきを灯した。

それはほんの一瞬のこと。だがその一瞬を、虎子は見逃さず捉え、息を呑んだ。

「結論から言えば、両方です」

落ち着いた口調で、淡々と葬儀老人は答えた。

「八年前の事件の後、私と儀人は、彼に洗脳を施し続けた。死体を死体と認識できないよう……人は死ねば消えるものだ」と

懺悔するかのように重苦しい声は、けれど実に淡々と流暢に紡がれた。

「なぜ……そんな面倒な事を……」

その理由を考えながら、虎子は問いかけた。

「なぜって、それは彼を救うためですよ。貴女も知っているように、彼は殺人を許容できる思想を持っていない。命というものが好きなのです。もしそんな彼が、自分が人殺しなどと理解したら、どうなると思いますか。確実に精神を病んでしまう……自殺するかもしれないでしょう。そうならないために、洗脳したのですよ。彼には、八年前の事件はただ目の前で次々と人が眠っていった、というだけのこと。実の母親もそうです。でなければ、彼はとっくに破綻している。もっとも……、手遅れかも知れませんが」

「それはどういう意味だ」僅かに腰をうかせ、虎子は尋ねた。

「彼、今回の事件の真相に気付いたみたいなのではしょ？」

「のようだな。相変わらず遠回しな言い方だったが、断定的な言い方をしているから、きつと、分かったんだらな」

視線を落とし、片手を口元に添え考えるように言う虎子を、葬儀老人は油断のない鋭い眼で見詰めていた。

「死体が理解できない彼が、箱入り殺人の真相に至ったと？」

その言葉に、虎子は眼を丸め、僅かに口をそのままに、宙へ視線を向けた。そこに、ありもしない幻影を見つけたように硬直している。

「そして、貴女に外に連れ出して欲しいと申し出た」

非難するような抑揚のない硬い老人の声に、虎子はわずかに肩を強張らせた。その事については話していないのに、とうの昔に見透かしていたような眼から、虎子は思わず、ほんの一瞬だが視線を逸らした。

「ただの殺人事件であれば、それもありうるでしょうが。死体遺棄を彼がどう推理するのです……。彼にとつて死体は無です。」

それに外に出たいなど本来そんな願望、彼が抱くはずがない。彼の認識する世界は、あの森の中だけで事足りている。わざわざ俗世に踏み出す必要なんてない。そういう思想を、埋め込んだのですよ。なのに、彼は外に出たいと自ら申し出て、尚かつ、箱入り殺人事件の真相に至ったということとは」

「その洗脳は解けている……」

葬儀老人は苦々しい表情を浮かべ頷いた。その苦渋が感染してしまつたように虎子の表情も曇っていくと同時に、今まで感じていた違和感の正体に気付いた。

「そんなに簡単に解けるモノなのか」

「いいえ。私と儂人が何年もかけて施しものですよ、普通なら死ぬまで解けませんよ。いや、そうならないように継続していたのですからね。

ただ……何がきっかけで解けるかわからない。それに彼は特殊ですからね……」

「シキはどうなる？」

「壊れますよ、それはもちろんです。彼の性格からして、自殺もありうるでしょうけど。どのみち、長くはないでしょうね。解けたにしろ、解けていないにしろ。そういう運命なのですから、仕方ありません」

淡々と語り、葬儀老人は茶を飲んだ。

「貴女はどうも、彼に感情移入しすぎのようですね。いいですか、彼は決して貴女と相容れぬ種類の生き物です。棲む世界が違う。貴女側の秩序は、彼の存在を許してはいけません。謂わば、彼は貴女達にとつて、悪そのものなのですからね」

言い終わるのを待たず、虎子は立ち上がった。

「それでも、シキが今やろうとしている事は正しいと、私は思います」

畳の上に落とすよな喧きをこぼし、虎子は振り返って襖に手をかけた。「私はアイツを信頼している。だから、手を貸してやりたくなくなってしまふんですよ」

不敵に、けれど柔らかな微笑みを浮かべる虎子を、葬儀老人は見守るよに頷き、若いですね、と笑って返した。

「それで、これからどうするつもりですかね」

「絵馬を救い出します。そのために箱入り事件の犯人を」  
捕まえると、続けようとする虎子の唇が、唐突に開いた襖の音に遮られた。

「箱入り殺人事件の犯人は、蕪木仁です。彼を捕らえましょう」

襖が開け放たれ、シキの声が明るい居間へ入ってきた。薄暗い廊下に、白衣のシキは唇気楼のような空気を羽織って立っている。その登場に、虎子は一瞬狼狽し、半歩ほど後退した。正面から少年を見据える葬儀老人は目を細めた。

「虎子さんが念のために、現場に顔を出した野次馬を写真に撮っておいたおかげです。彼だけが毎回、現場に現れていた。それに僕の目の前で、明神綾子を襲ったのも彼ですから。証拠はありませんでしたが、彼の家で見つけた物から、事件に関係していることは確かですからね」

淡々と直立不動のまま、居間へ足を踏み込まずにシキは語る。

「ほう。何時の間にそこまで進んでいたのですか」

葬儀老人は湯飲み片手に、虎子へ視線を向けた。

「昨日の事です。こいつが容疑者が分かったと言うので、一緒にそいつの家に行ったら、例の匣を六つも発見したんです。家族構成から、その蕪木仁という、絵馬と同じ高校の男子生徒だけ消息がつかめず。家宅捜査を行えば、死体を解体するのに使われたと思われる工具と予備の匣も発見されたんです。……………私も、なぜそいつが犯人だと分かったのか、今しりましたよ。……………一之宮といい、なぜ黙ってる」

「隠していた訳じゃないです。確証がなかったから黙ってただけです」  
抑揚なく淡々と喋るシキに、虎子は睨みをきかせながらも溜息をついてすぐに、視線を逸らした。

「だが、シキ。蕪木の家には、絵馬の行方に繋がるような手がかりはなにもなかったぞ。もちろん、捜査は今も続いているから、そう悲観することはないが」

「ええ、そうでしょうね。ですから」

シキの声を遮り、突然、硝子が割れる音が木霊した。

三人が機敏に反応する。

「今の……………を聞か」

最初に動き出した虎子はそう呟き、居間を飛び出した。そのあとをシキと葬儀老人が追う。

虎子が玄関に到着すると、硝子戸には拳大の穴がと罅が入っていた。

そして彼女達の履き物の上には硝子片が散らばり、それに紛れ、紙に包まれた石が落ちていた。

虎子がそれを広い、石にくるまれていた紙をはがし、確認する。その背後では、シキと葬儀老人が遅れて到着した。

「派手ですね。で、なんですか、それは」

葬儀老人が暢気なほど穏やかな口調で尋ねると、虎子は振り返り、手にしている紙切れを渡した。そして、玄関をあけ外を見る。

「虎子さん。もしかして」シキは陰鬱な声で尋ねた。

「ああ。誘拐の次は要求と、教科書通りの展開だ。もっとも身代金の要求というよりは、果たし状のように私は思えるが」

警戒の目を弛めず、虎子は外を睨みながら答えた。

「奥津城絵馬の命と引き替えに、八咫鳥やたがらすひとりで来い、ですか。ご丁寧に地図まで描いてある。しかし、八咫鳥とは……………」

「奥津城の事ですよ」

外の天気を啖くような軽やかさでシキは啖き、葬儀老人を追い抜き、玄関の外にいる虎子の隣に並んだ。

「八咫鳥は死人を黄泉へと導くとされていることから、或る村では、悪象徴と同時に、穢れの担い手として八咫鳥と呼ばれる生け贄を作ったのです。……………それが奥津城であり、ヤタガラスの崇りの正体です」

唄うように、夕風に導かれるようにシキは言う。

「虎子さん。お姉ちゃんを助けるために、手を貸してください。お願いします」

シキは振り向き、陰しい表情、静かな感情を閉ざしたような声で言う。

虎子はその姿に不吉を感じたように、慈愛を潤んだ瞳を向けていた。

「シキ。おまえ……………何を隠してる？」

か細い問いに、シキは全身の力を抜くように微笑で返した。

「行きましよう。最後の匣が、閉じてしまなう前に」

15

少し、昔話をしよう。

それは昔、まだ地上より夜空が輝いていた時代からの続く物語。時代がかわり人がかわっても生き続けている妖怪のような儀式。

村人達はみな、心清らかであり善良な者達でした。

そう、みんな望んでいました。

そう、みんな願っていました。

村人同士が争う事もなく、恨み合い妬み合い嫉みを抱き、悪事を働き殺意を向けあう事もなく、清らかで健やかなる良心の下、

みな、平和に暮らすことを願っていました。

だけど、その願いは叶はずがありません。

人は、人を妬みます。

人は、人を恨みます。

人は、人を憎悪する。

人は、人を軽蔑する。

人は、人を嫌悪する。

人は、人を拒絶する。

人は、人を差別する。

人は、人を殺します。

誰かが誰かを慰めたら、誰かが誰かを貶けなしてる。

誰かが誰かを癒したら、誰かが誰かを傷つける。  
誰かが誰かを敬ったら、誰かが誰かを妬みます。  
誰かが誰かに憧れたら、誰かが誰かを蔑みます。  
誰かが誰かを守ったら、誰かが誰かを壊します。  
誰かが誰かを助けたら、誰かが誰かを恨みます。  
誰かが誰かを愛したら、誰かが誰かを憎悪する。  
誰かが誰かを生かした、誰かが誰かを殺します。  
繰り返し、繰り返し、善行があれば悪行もある。  
人は、善人と悪人に分けられていないのです。  
誰かには善人であっても、誰かには悪人だったりします。  
村人達はたしかに良心がありました。  
けれど、たしかに邪心よこしまもありました。  
村人達はその邪心よこしまを恐れてました。  
まるで鬼です。悪しき心は鬼の心です。  
草花を愛し、老若男女を分け隔て無く優しく接する善良な村人も、  
魔まが差して、悪しき心に弄ばれて、鬼となってしまふ事もあるのです。  
村人の心には鬼が巣くくついている。鬼が居る限り、平和など訪れません。  
悪が人々の裡にあるかぎり、  
悪がこの世にあるかぎりは、  
村人達の願いは叶いません。  
だから、

みんなは”悪“を納れる匣ひらをつくりました。  
そして、  
すべての悪を一人の子供に背負わせました。  
それは、生け贄なげです。  
数年に一度、一人の子供が選ばれます。  
その子供は罪も知らず、罰を与えられる。  
匣ひらの中に閉じ込められ、一生を終えるのです。  
そういう運命を、背負わされる。  
誰が、そんな事をするのか。  
少なくとも子供ではありません。  
生け贄の子供は、匣ひらの中で生かされ、  
罪という罪、咎とがという咎とがを背負わされるのです。  
その子供は、悪です。  
誰かが悲しめば、その子のせい。  
誰かが不幸になれば、その子のせい。  
誰かが苦しめば、その子のせい。  
誰かが死ぬば、その子が殺したのだと。  
村に起こる厄災やくさいや惨事さんじ、悪事のすべて、  
悪という悪、罪という罪、咎とがという咎とがはすべて、  
すべて、匣ひらの中の子供へと向けられるのです。  
子供は匣ひらの中から見えていました。

誰かが泣いているのを。

誰かが怒っているのを。

誰かが誰かを憎んでいるのを。

誰かが誰かを傷つけてるのを。

誰かが誰かを妬んでいるのを。

誰かが誰かを呪っているのを。

誰かが誰かを殺しているのを。

すべての悪を見続けていました。

誰かが言う。オマエが悪いのだ、と。

誰かが泣く。オマエが悪いのだ、と。

誰かが叫ぶ。オマエが悪いのだ、と。

誰かが蔑む。オマエが悪いのだ、と。

誰かが怒る。オマエが悪いのだ、と。

誰かが呪う。オマエが悪いのだ、と。

子供が見る村人は、すべて醜い顔をしていました。

みんなみんな、その子のことが嫌いなのでしよう。

憎くて、憎くて、しかたがなかったのでしょうか。

村で不幸があるごとに、彼は罰を受けました。

見知らぬ誰かが犯した罪は、すべてその子のせいです。

だってその子は、悪なのですから。

人には罪はない。人を罪を犯させる悪にこそ罪がある、と。

故に、罪を犯した人を罰せず、人に罪を犯させた悪にこそ罰を。

悪は誰ですか。悪は、その子です。

だから、子供は罰を受けました。

咎という咎を、罰という罰を、裁きという裁きを受け続けました。

匣の中で、ただ悪として生き続け、ただ悪として無自覚の罪を背負う。

その子は死ぬまで匣の中。外に出してはいけなない。

なぜなら、その子は悪だから。

そうする事が、みんなにとって善い事だから。

そうしなければ、みんなが不幸になってしまうから。

みんな幸せでいたいから。善い人生を送りたいから。

だから一人だけ、みんなの不幸と罰を背負わせたのです。

大人達は相談して、悪として生きて死ぬだけの子を作りました。

子供は知らない、逆らう事も叶わない。

それが運命だと言う大人もいました。

それが掟だと吠える大人もいました。

それが善い事と説く大人もいました。

それが当たり前前の事だと、子供だった大人が言いました。

そうして大人は、子供を呪いをかけ続けたのです。

悪と呪われ、悪を背負い、罪を知らず咎をうけ。

匣の中でひとり、子供は世界の醜さだけを知ったのです。

◇

御伽噺おとぎばなしのような夢を見た。

不思議な夢は粘性が高くて、目覚めても霞かすみとなって視界を曇らす。

体の中に鉛の塊が混入したみたいに鈍い痛みがする。その痛みさえ曖昧で、体を動かすことさえ夢のようで、目覚めの爽やかさどころか、その実感さえ曖昧だった。

磨り硝子をはめたように視界。だけど、そこが暗かったせいもあって、オレンジ色の炎が見え、その温もりと共に、近くに焚き火があるんだな、とぼんやりと私は理解した。

何かが鳴いてる。

何回か瞬きをして、目を擦ろうとしても両手は背中から離れなかったから、時間が視界の霞を払ってくれるのを待った。その間、ただ、ぼんやりとしていた。何か考えよとすると頭が痛くなって、考えることがひどく億劫に思えてしかたなかった。

どこからか、蕩々と鳴き声がする。それをぼんやりと聞いていた。

しばらくすると、焚き火の揺らめきも見えるほど視界が晴れ。同時に、その炎に照らされて退けられる闇に紛れて、濃密な影の塊が見つけた。

それを目にした瞬間、私の体がびくりと震えた。

闇で塗り固めたようなマントで全身を覆い、いまさら白い仮面で顔をかくしているけど、その正体を私はもう知っている。

蕪木だ。あいつがまた私の前にいる。

焚き火の側に座って、私を見ている。

「馬鹿馬鹿しいとは思わないか、奥津城」

そして潰れたような声で、私に語りかけていた。

何を話しているのか分からなかった。

私は体を強張らせて、蕪木を睨んだ。

悔しいけど、今の私にはそれしか出来ない。

「ガキひとりの人生を台無しにしても、人が人を支配するかぎり、人と生き続けているかぎり、善を肯定するかぎり悪もあり続ける。そうだろう。いくらガキに、すべての悪性を押しつけたところで、押しつけることしか出来ない。せいぜい、殺される人間が一人か二人ばかり減るぐらいさ。そんなの些末な差だ。いったい世界中で一秒間に何人の人間が死んでると思ってるんだ。……………だが、それでも奴らにとっては世界全体よりも、自分を中心とした周囲数十キロメートル程度の村という世界の方が重要なんだろうな。ちっぽけな村で一人死ぬのと、二人死ぬのでは大きな違いだ。不幸という矢がどれだけ降ってくるか、それが自分に降りかかってくる確率は、うんと変わってくる。不幸になりたくない、そのためなら、どんなことでもする……………たとえば、他人を不幸にしても、な」

朗読するように、陰りのある声で蕪木は語る。

私は、その話を知っている気がした。

どこかで、似たような話を聞いたのか。

それとも、その話に似たような経験をしたのか。

わからないけど、なぜだか、他人事のように聞こえなかった。

まるで、私の物語を語っているような気さえた。

「なあ奥津城。人を殺す、って……どういふことか分かるか」

友人に語りかけるに蕪木が訊く。

鈍くなった頭は、その問いを考えよとしなかった。

「命を奪うことだろ。それって、人生を奪うのと同じじゃないか」

自問するような声。

まるで懺悔するように、けれどそこには後悔の陰は聞こえない。

むしろ、その陰は私のとても近いところに現れたような気がした。

蕪木は言う。

「人の命を奪う事が殺すことなら、人の人生を奪うことも殺す事ではないか……。奥津城。たとえばオマエを一生、死ぬまでここに縛り付けたまま閉じ込め、オマエはもう外を出歩くことも、普通に友達と喋ったり遊んだり、今までオマエが思い描いていた未来がすべて奪われたとしたら、オマエは死んではないが、俺はオマエを、奥津城絵馬を殺した事になるのだろうか……」

自問するような呟きが仮面から歪んで漏れる。

想像した。まるで夢を見るように。

このままずっと、ここで生き続ける事を。

もう二度と、もとの生活に戻れない事を。

沢山の記憶、楽しい思い出、もしもという未来。

決して届かない夢を見続けて生きていく事を。

私は想像してしまって、血の気が引くほど胸が苦しくなった。

「ああ……そうだろう、嫌だろうな。泣きたくもなるだろう」

私は泣いているらしい。

「だけど、だからといって、殺されるのも嫌だろ」淡々と語る。

「どれだけ他人の人生に干渉するか……。他人の人生に關わるなんて、そいつを殺すか、産むかぐらいしかない。他にあるとすれば、その人生そのものを奪うかだろう。そう、匣に入れて、死ぬまでずっと手もとで飼うように、だ。……妄念にとり憑かれた村人達がやってきたのと同じようにさ」

分からない。蕪木がなにを話しているのか分からない。

なんで私にそんな御伽噺を語るのか分からない。

なのに、聞かないといけない気がした。

「人を殺す事は、悪いことだろうか。ああ、殺されるのは嫌だよな。だから人殺しは、社会から遠ざけたいよな。そんな奴が、近くにいたら自分が、殺されるかもしれないから。殺人という罪を作り、社会から排除するために罰する。そうして、災いの原因になるような奴は、隔離したいんだろ。いや、隔離するだけじゃない、殺さなきゃ気が済まない、安心できない。」

だから、命は尊いと高尚なことを布教し、殺人の罪深さを説きながらも、奴等は、死刑という凶器で人を殺してきた。罰という大義名分で矛盾を隠蔽して、殺人の罪を社会という数多の人間で分割して、害虫駆除程度の意識にまで薄め、当たり前のように殺人者を殺し、これからも殺し続けるだろう」

淡々としていた声が、炎のように揺らいでる。

まるで呪うような声。まるで蔑むような口調。

まるで私を糾弾しているようにさえ聞こえる。

「一人で殺すか、二人で、十人で殺すかの違いはあっても、やっつてる事は、みな同じさ。死刑を許容する社会も、ガキを見殺しにする村人も、殺人鬼もな」軽蔑を含む幽かな嗤い声。

薄暗い部屋の中で、炎に炙られても、その影は濃かった。

「子供は村人達によって、人生を奪われた。その儀式のためだけに産まされたのだから、生まれる前からその村人達の奴隷さ。いっそ、生まれてすぐに匣にでも詰めて、そのまま殺せばよかった。なのに、その子供は普通に育てられて普通に暮らし、お前達と同じように生かされから、すべてを奪われてたんだ。嗜虐趣味もいいところさ。さんざん良い夢みせつけ、希望なんて玩具を与えて遊ばせておいて、それを奪って、綺麗だった希望や夢や、美しかったものの愛情すべて、幻にすぎないと壊され、この世はひどく醜いという現実をたたきつける。後は、幻想を抱いたまま匣の中で死ぬまで、自覚のない罪のために罰を受け続けるだけさ」

自虐的に声を震わせ、影が立ち上がった。

「おまえがその立場ならどう思う。奥津城絵馬」

蕪木の声は、私を落ち潰すように重い。

胸が苦しくなる想像が、その言葉にあるから。

「杞憂ではないぞ。今から、オマエもそうなる」

影が揺れる。羽ばたく鳥の翼のように大きく揺らめく。

「怖いかな？ だが因果応報だろ。オマエはそれを、強いていた側の人間だったはずだ。違うか。身に覚えはないとは言わせないぞ。そうだろ」

漆黒のマントが、私から灯火の恩恵を奪うように翻った。

「ここがオマエの匣になる」

息を呑む。心臓を貫かれたような一言が、死刑宣告を告げられたように聞こえた。視界がまた霞んでくる。熱い潤いに満たされて視界が溺れていく。歯を食い縛って吐き出しそうな悲鳴を胸に押さえ込むと、今度は胸が、全身が泣き叫んでいるように震えて苦しい。

「オマエの罪を知れ、奥津城絵馬」

遠ざかる声。

「そして罰は、自分で選ぶがいいさ」

もう見えなかった。そんなこと出来なかった。

夢みるように、私は瞼を閉じていた。

だけど幸せな夢なんて訪れない。

私の瞼の裏には、刺すように鮮烈な白い、シキだけが写っていた。

太陽光で彩られた青空が、藍色に染まり満月が姿を見せだした頃。

鬼東虎子とシキは、或る森の中の、死骸のような廃墟に辿り着いた。

指定された通りに、人里離れた山奥に向かう車中、二人に会話は無い。町から遠ざかるにつれて車内の緊張感はず力をまし、青空が陰るにつれて、深夜の墓地めいた静けさも増していた。

県道から林道に入り、そこから舗装されていない山道に。四輪駆動車を使わなかったことを虎子は後悔したほどの悪路を登り、それでも車一台ぶんほどの道、逃げ場を無くすように両脇には鬱蒼と生い茂った木々の群れ。

しばらく山道を進むと、まるで瞬間移動でもしたかのように周囲は突然開け、山中に似つかわしくない巨大なコンクリートの塊が青白いライトに照らされた。まるで巨人の死骸。

元は工場だったのか、荒涼と装飾を剥ぎ取られた建物は、骨と皮しか残っていない木乃伊のように、草木に吞まれ、森に吞まれるのをただじつと待っているように建っていた。

虎子は廃墟を見て、この中から一人を捜す労力を想像し重苦しく溜息をはいた。かくれんぼをするには、その廃墟は大きすぎる。マンション一等分はあるのではないか。

虎子は廃墟の正面入り口の手前で、車を半回転させ停車した。

白骨のように白い木々がライトに照らされ闇に浮かぶ。果てはない。ライトを消しエンジンを切る。それでも青空の残り火のように、夜の気配が近づいても外は明るかった。

虎子は助手席を一瞥した。シキは、人形のようにシートに埋まっていた。車を降りる。腐葉土のように地面は雨のせいも、ややぬかるんでいた。辺りを見ると太い棒で落書きしたような曲線や、いくつかの足跡らしきものがすでにあり、最近ひとが入りしていると推測できた。

「どうやら、ここで間違いなさそうだな」

虎子は呟き、ついでのように助手席のドアを開けると、トランクから荷物を取り出した。あの間に、緩慢な動作でシキが地面に下り立つ。

「景気よくロケランが欲しいが、絵馬がいるんじゃない」

三丁の銃を腰と脇と足のホルダに収め、虎子は、シキにナイフを無言で手渡した。シキは、それが何か重みや形で分かったのだろう、背中の帯にナイフを収めた。

「平気か……」囁きかけ、シキの様子を見た。

額には脂汗が浮かび、呼吸も不規則で隣に立てば音も聞こえるほど荒い。額に触れたら明らかに平熱を上回っていた。

「行きましょう」シキは静かに答えた。

相棒の体調に不安があるものの、虎子は頷き歩き出した。

「手、つなぐか」

二人は並んで、廃墟の中に入る。

玄関ロビーらしき場所には、置き去りにされた荷物が散乱し、不法投棄されたようなゴミも床に散らばっていた。とうぜん明かりはない。けれど、月の照明は闇を緩和している。

場所は指定された。だが、どこにいるかは定かではない。

虎子は、罾を張り待ち伏せでもしていたかと思っただが、その気配はない。車を降りた途端に狙撃されないかとも用心はしていたが、お茶会のお招きのように呆気なく建物の中に入れた。

拍子抜けもいいところだ。むしろ、こちらを舐めているのか、何か別の思惑でもあるのかと、虎子は辺りの様子を窺いながら思索した。

「とりあえず端からつぶしていく。シキ。何か聞こえたらすぐに言え。オマエの耳と鼻は警察犬代わりになる。それと油断するな」

はい、と頷きシキは虎子の後に歩き出した。

拳銃とライトを交差するように構えながら、虎子は壁に肩を当てるように歩き、上下左右と周囲をくまなく睨みながら慎重に、けれど大胆ともいえるほど堂々と、床に散乱するゴミくずを蹴散らしながら、足早に進んでいく。後に続くシキはまるで散歩のように歩いていているものの、表情は陰しく、息遣いもマラソンを終えたように荒いまま。

閑散とした廊下は長く、ライトがなければまだどこまで続いているのか見えなかっただろう。右手には窓硝子のない穴が規則正しく連なり、左側の壁には同じように穴だらけの壁が仕切りのように奥に続いている。大きな箱の中に、仕切りで部屋を作ったようなシンプルな構造。

あるいは、残ったのはそういう骨ばかりなのかもしれない。昼間であれば、もっと短時間で済んだだろう。

もとは迷路だったかと疑うほどの柱と壁が、二人の足取りを遮る。死角を増やす、その度に虎子の手が拳銃を強く握る。コンマ五秒以内に発射できるように。

裏側まで回る。虎子は窓から建物の裏庭を確認するように一瞥した。大型トラックが十台ぐらい横二列で駐車できるほどの距離を隔てて、森林が広がっている。

「虎子さん。何か、匂いませんか？」

「失礼な。どんなに忙しくともシャワーと着替えぐらいはしてるぞ」

互いに顔を見合わせず探索は続く。

正面玄関の反対側辺りまで歩くと、階段を見つけた。

そこで虎子は二階に上がるか、一階の左側部分を続けて探索するか考えるため足を止めた。するとシキが虎子を追い抜き、階段を三四段上がって二階を見上げた。

「上から臭いが……あと、足音も」

星を語るようなシキの声で、虎子は迷わず階段を登った。指摘され、自分もその臭いを嗅ごうとしたが、埃っぽい匂いしか嗅ぎとれなかったのか、手で押さえながら咳払いをした。

二階に上がると、まず眼に入ったのは十メートルほど視点が高くなった建物の裏手の風景。

廊下の窓からは、樹木が波打つように広がり山脈が津波のように巨大な影となって周囲を取り囲んでいるようだった。まるで自然の監獄だな、と虎子は呟き振り返った。

左右に続く廊下、そして正面には大きな窓枠が施された壁。一階に比べれば破損は酷くはない。まだ部屋が残っている。そして廊下から中がうかがい知ることが出来る。

だから、虎子はすぐにそれを見つけることができた。

月の灯りもあるが、それでも夜の闇に浸っていたせいもあり、廊下の端に漏れる赤々とした光は、無視することができないほど鮮明だった。

「焚き火……あの臭いか」呟き、銃を構え直した。

そしてその明かりを指して歩き出すと、後ろからシキが追いついた。

虎子は部屋側の壁に、剥がれかけのポスターのように身を寄せ、やや屈んだ姿勢をとった。そして向こうの物音ひとつ聞き逃さないように耳を澄まし自身の音を削り、すり足で近づく。その後、すこし離れたところで、シキは傍観者か背後霊のように立っていた。

部屋の入り口まで近づくと、顔を半分出して室内を覗く。焚き火のかすかな火花の音しか聞こえず、人の息遣いや動く音が確認できない。

深呼吸をひとつし、意を決したように銃を正面に構え、部屋の中に入した。

センサのように銃が上下左右へと機敏に動く。それ以上に彼女の目が暗闇の中で獲物を屠る豹のように鋭く敵をさがす。

部屋には塵屑が散乱こそしていたが、人が隠れられそうな場所も物はなく、けれど警戒を続けながら、虎子は部屋の真ん中へと踏み込んだ。

部屋の真ん中には一斗缶の焚き火。

「シキ！」怒鳴るように彼を呼んだ。

そして、その灯りの明かりが届く場所に、

「絵馬——」息を呑むような呟き。

白い服を着た女性がひとり、横たわっていた。

◇

眼を開けた。

部屋の青暗く、焚き火は炎を失い、燻るくすぶるように煌々としていた。

ほんの一時だけ瞼を瞑っていたつもりが、どうやら眠ってしまっていたらしい。もう夜なのかもしれない。そんな感覚はない。だけど、さつきよりも目覚めは良かった。頭もスッキリとまではいかないけど、さつきよりは、ずいぶんマシだ。

ゆっくりと深呼吸をして、ようやくそれに気付いた。

さつきまで両手足を縛っていた縄が解かれていた。

「え……………なんで……………」

その理由がわからなかった。若干じやっかんの恐怖さえ感じた。けどそんなこと、深く考えるより前にすぐに自分の体を見た。

コンクリートの床に横たわっていたせいで節々が痛いけど、それ以外の怪我はなさそう。服は床の色に近づいてはいるも、蕪木にスカートを破られた以外は変わらない。

ゆっくりと上半身を起こして辺りを見渡す。最初、ここで目覚めたときとは、一斗缶の焚き火以外は変わりはなさそうだ。床を見渡して何か落ちてないかと見てみたけど、紙くずぐらいしかない。まるで独房みたいに殺風景。

人の気配はしない。耳を澄ましてモ小鳥のさえずりのような焚き火の音しかない。つまり今、誰も私を見ていない。

そう安心した直後、足音がきこえた。幻聴かと思ったかすかな音は、だけど、だんだんと主張するように大きくなり、近づいてきている。

今すぐ飛び出すか、それとも留まるか。慌てて考えている内に、足音は室内に響いた。急いで私は、両足をそろえて足首を隠すように足を曲げ、正座を崩しような姿勢で両手を後ろに隠した。

「絵馬ああああ」

うなじに這うヒルように気味の悪い声をあげて、そいつは現れた。衰えた焚き火の明かりだけでも、よく見える。黒いマントを羽織っているけど、今度は仮面を外していた。

「ああ、目を覚ましていたのか。よかったよかった」

嫌悪感おほを煽る笑顔で、近づいてくる。

「犯すにしろ殺すにしろ、眠られたままじゃあヤリ甲斐がないもんなあ」  
酔っぱらってるような足取りで近づいて、足を止めた。

のぞき込むように顔を近づけるから、私は睨みながら、間合いを計った。もう少し近づいて、馬鹿みたいに隙だらけになって欲しい。あと三歩ぐらいの距離。それが焦れたくてしかたなくて、睨みを増した。

けど、そいつは間抜けにも、その焦れたい三步をあつさり踏んだ。  
「さて。楽しみの時間だぞ」

しかも子犬でも捕まえるようにマントから両手まで出した。



「てめええ」近づく顔から唸り声。

「っう！」意識が霞むまえに蹴飛ばした。

正面の壁にぶつかると蕪木。

急激に酸素を取り込もうとして咳き込む。

バネのように蕪木が再び襲いかかる。

迫る手をよけ、疲労で意識が霞む中、重い足を振り上げた。

勢いが無い。あっけなく片足をつかまれ、そのままバランスを崩されて仰向けに倒れる。

蕪木が、私に跨り首を絞めようと覆い被さる。逃げようとしても逃げれず、覆い被さられる前に両手を掴み、体を丸め、見よう見まねで投げをした。

けど不慣れた技は上手く訳もなく、投げ飛ばすまではいかず、互いの頭を付き合わせて三角形の頂点を作るように倒れた。

同時に立ち上がるうとしていた。

投げられた衝撃が効いてるのか、私の方が早く立ち上がり、蕪木が体を整えるまえに、もう一度顔を正面から、踵で蹴り飛ばした。

鈍いモノが潰れるような感触が伝わる。

蕪木は背中から倒れ、顔を押さえて悶え転げる。

無我夢中で激しく体を動かしていたせいで、忘れていた疲労感がずっしりと、人ひとり分余計に体重が増したようにのしかかってくる。過剰に酸素を吸い込む喉が痛い。それを急かす胸も苦しくて立ち眩みをする。

咄嗟に、窓の縁に寄りかかった。

蕪木は気を失っていない。またすぐに襲ってくる。沢山文句を言ってやりたい苛立ちはあるけどそんな余裕はない。

だけど一言。

「言ったで、しょ」熱した呼吸「私、弱い男、は、嫌いだって」吐き捨てて、私は窓から外に出た。

鬱蒼と包み込むように広がる木々の群れ。

誘い込もうとする森。

見上げた夜空は藍色。

伶俐な完全球体の月。

牙え牙えとした夜気。

目が眩む程冷たい夜。

鋭い覚醒と鈍い思考。

私は、気怠い体を引きずって走り出した。

ここがどこだか分からない。

出口がどこか分からない。

数秒後の自分もわからない。

この森がどこまで続くのか。

この森を抜けきった先には。

何があるのか、どこなのか。

私の帰る場所に続いているか。

この夜を越えたらいい、  
どんな朝があるのだろうか、  
そんな事は分からないから、  
わたしは、とにかく走った。  
月を追いかけるようにして、  
蒼い森の中をひとり駆けた。

人形みたいな私の体は、何度か転げた。  
足が上手く動かない。その感覚さえ希薄。

生い茂る木々はどれも似たり寄ったりで、まるでずっと同じ場所を走っているのか、それとも歯車の中を延々と走っているような錯覚さえした。

足がもつれ、柔らかい地面に倒れた。走るのを止めた途端に、体中が悲鳴を上げたように胸がすぐ苦しくて、立ち上がるうとすると涙も一緒にこみあげてくる。溢れ出すまえに拭い払う。

上手く走れなくて、歩いていた。それでも後ろを振り返るのは嫌だった。引き返すのは嫌だった。とにかく進もうと、気持ちには、体の事なんて気にせず、前へ、前へと進んだ。

とにかく逃げたかった。

ここはとも嫌だから。

逃げたくて足を動かした。

不気味な木々の影に怯えながら。

どこからか聞こえる鳴き声は怖くて。

あとどれぐらい歩けばいいのか分からなくても。

何度も足をとめて眠ってしまえと誘惑が聞こえても。

きつと諦めてしまえば、すぐ楽になるかもしれないけど。

帰りたい。

私は家に帰りたい。

眠るなら家がいい。

泣くなら家がいい。

私が足を止める場所はここじゃない。

私が帰る場所は、ここにはないんだ。

家に帰りたい。

もうこんなところには、居たくない。

帰りたい。戻りたい。

あの場所に、あの頃に、みんなのところに。

あやめや小夜子と一緒にお昼を食べた屋上。

礼慈と神籬が走ったグラウンド。

虎子と愚痴と嫌味を言い合った喫茶店。

寡黙で優しい爺やがいる座敷。

お母さんと笑い合った居間。

お父さんに見守られた裏庭。

家族がいたあの家。

そして、誰もいない夜の神社で一緒に遊んだ。

そこに帰りたい。

その一心で森を進む。

同じような光景。

青々と生い茂る木々の葉が風に鳴る。

まだ冬は遠い浅い秋。

なのに空気は冷たく、寒さに体が震える。

道なき道を、あてどなく歩いた。

すると、それは突然。

「どこへ行くつもりだ。奥津城絵馬」

悪夢のように、私の前に現れた。

「え——」

数秒、呼吸が止まった。

痛めつけられた体は悲鳴さえ上げられなかった。

溶けてしまいそうな程の熱が急激に冷めていく。

寒気さえした。鳥肌がたつ。

全身全霊で、目の前の光景を否定しようとした。

だって、そんなのありえない。

「う・そ——」

私の前に立っている。

月光に照らされた艶やかな闇のような外套を纏った、白い仮面。

もう二度と見たくもないそれが、私の行く手を遮る様に立っていた。

幻だと思った。

そう思いたかった。

こんなのウソだ。

だって、蕪木は倒れてるはずだから、ここにいるはずがない。

私の前にいるはずがない。

なのに、それは悪夢じゃない。

紛れもなく現実だと、私はもう理解していた。

「そんな……」喘ぐ。

その闇を目の前にして、全身の力が泡のように消えていく。

今まで弔死になって堪えていたのに、場に座り込んでしまった。

歩くことをやめてた途端、隠していた涙が溢れ出た。

◇

行方不明になっていた一之宮小夜子を発見した。

廃校の教室のような部屋の中で、小夜子は白い病院服のようなワンピースを着ているせいか、ひどく衰弱しているように、虎子には写った。拳銃を手放さず、脈などをとり、顔を起こして顔色をみるなり、彼女の容体を簡単に確認した。

その様子を見詰めるようにシキは、虎子の後ろに佇んでいた。その表情は懺悔する罪人のようで、あるいは慈悲深く懺悔を聞き受ける神父のように、悲哀の能面を被っているようだった。

「気を失ってるだけか……。シキ、とりあえず車まで運ぶぞ」

虎子は銃をホルダに納め、軽々と一之宮小夜子を背負った。

「歯がゆいかも知れないが、このまま放置して訳にもいかないからな」

虎子が魁めに似た言葉をかけた相手は、もう入り口の方、そのさらに奥を眺めているようだった。

「誰かいる。……。たぶん二人。慌てて下に降りてる」

囁くようなシキの言葉に、虎子は静かに舌打ちした。

敵との遭遇は望むところだが、タイミングが悪い。こちらは人質を背負い、で両手がふさがり銃が使えない。かといってシキは、普段ならば頼りにしているのだが、今はどうも不安が勝ってしまう。

虎子は瞬く間に、そう考えを巡らせ、一之宮をここに置いて、敵を始末するかと好戦的な選択肢を一段と強く思い描いた。

そんな虎子の葛藤を意に介さず、シキは遊び回るように部屋をパチンコ玉のように行ったり来たりとして、部屋の片隅で足を止めた。

「虎子さん。これ、なに？」

珍しい昆虫をみつけたようなシキの問いかけに、虎子は苛立ちながら振り返り息を呑んだ。そしてすぐに駆け寄り、隅っこに置かれた段ボールを蹴飛ばした。

「……………クソ！」

空の段ボールの下には、まるで一目で自分の存在を知らしめるように、小さな機械と紙筒の束が剥き晒しで放置されていた。素人が見ても分かる、それは。

「爆弾だと」悔しさをかみしめ「私への当てつけか」その危険物を、火が灯ったような眼で睨んだ。「行くぞシキ。一度戻って立て直す」

爆弾を確認し、虎子はすぐに好戦的な案を破棄し、逃げを選択した。

足早に出口に向かい、焦りながらも慎重に廊下の様子を確かめる。

その時、可聴領域を殴りつぶす爆音が響いた。

直後に、鯨がうねるように建物全体が揺れる。

爆音が数度、地震のような揺れが響き渡る。

虎子は、背負った一之宮を庇うように壁に寄り身を屈めて、その突然の襲撃をやり過ぎし、揺れが通過するとすぐにシキを捜した。濃霧のような煙が充満した部屋の中でシキは直ぐ側にいて、大丈夫ですか、と耳元で囁いた。頷き、行くぞ、と虎子は怒鳴って走り出す。

幸い、虎子達がいた部屋の爆弾ではなかったが、いつまでもそこにいるつもりなど毛頭ないらしい。廊下に出ると、獣のように猛々しい炎が方々から飛び出し、闇を燃やしていた。乾燥した空気が燻され、煙が侵入者を追いかけるように、二人を包囲しようとする。

「シキ！」怒鳴り、虎子は階段を駆け下りた。

一階に降りると、周囲にはすでに炎に包囲されつつあった。幸いにも正面玄関まで一直線。そこにはまだ炎は押し寄せてはいない。

走り出す直前に、虎子はシキの存在を確認した。ちゃんと後ろにいる、それを確かめると息を吸い込み呼吸を止め走り出した。

玄関までの五十メートル弱の距離。一気に駆け抜ける。

だが、失念していたのだろう。

ここには、炎や爆弾以外の敵がいることを。

「ああああああああああっ」

虎子の目の前に突然飛び出て咆吼。

男が禍々しい嗤いを受け、大物のナイフを振りあげる。

振るわれる刃物が彼女の目を狙う。嗤嗟にバックステップ。

「蕪木—— 仁」怨嗟を含んだ虎子の呟き。

背の重みが彼女のバランスを狂わす。

間髪入れずに蕪木が襲いかかる。

間に合わない。体勢は崩れ両手が塞がれた彼女に避けきれない。迫る蕪木と、立ち止まった虎子の間の僅かな隙間。

そこに白い影が飛び込み、蕪木を連れ去った。

「虎子さん！」行ってください、と暴漢に体当たりしてシキは叫んだ。

一瞥、歯を食い縛り虎子は頷いて走った。

「あああああああああああああ！」

標的を変えた蕪木が、シキに襲いかかる。

振り回される腕を掴み、刃を止めるシキ。

組合、押し合う。

体格も腕力も圧倒的に蕪木が勝っている。

みるみるうちにシキは押され柱にぶつけられた。

「姉さんは、どこですか」苦悶に顔を引きつらせながら問う。

「ッは、知るか！」蹴り、反動で後ろに後退しながらナイフを振う。

ナイフが迫る寸前に、舞うように回転しながらシキは避けた。

柱にナイフがぶつかり火花が散る。

蕪木は諦めず、逃した獲物を追う。

ナイフが振るわれる。縦横無尽に。

ナイフは避けられる。紙一重で。

炎が二人を死闘と傍観するように取り囲む。

喝采するかのよう火花を散らし燃え盛る。

「姉さんは！」叫ぶシキ。ただそれだけを求む様に。

「いねえよ！」蕪木が吠えた。

「どいつもコイツもオレを無視して逃げやがった！」

一方的に蕪木が攻め、シキはその暴力を避けるのみ。廊下まで後退し、ついには窓際まで追い詰められ後はない。

蕪木がナイフを突き出す。シキを掠め壁にぶつかると、

突き出された腕をシキは両手で掴んだ。

けれど蕪木も空いている左手で、シキの顔を万力のように締め上げる。

建物の方々から小さな爆発音が木霊する。

炎が続々と生まれて、二人を熱する。

「殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる、はは、皆殺しだ！」

「っう」頭蓋骨の軋みに似た呻きが、シキから漏れる。

「あなたは……………ただの道化だ」

炸裂する音の中で、シキの声は透き通った響きで相手を撃つ。

わずか、息を呑み込むわずかな瞬間、蕪木の体は硬直し力が緩んだ。

その隙、シキは拘束する腕を捻りナイフを落とし、さらに前へ押しだし間接を外した。

悶絶の絶叫と共に蕪木が、シキから離れる。

「蕪木仁。貴方が連続通り魔殺人の犯人ですね」

肩を押さえ、殺人者は血走った目を銃口のように見開き、愚問をたず少年を睨みつけた。

「でも貴方は、夜鳥ではない。以津真天でも鷓鴣でも五位鷲でも八咫鳥でもない。ただの負け犬だ！」

燃え盛る火花の中であって、その声だけが善く通った。

呪いのように、蕪木の呼吸がその言葉により束の間止まった。怨嗟に燃えた眼が、矜恃を碎かれたように呆然とシキを見る。

「オレが……………負け犬、だと……………っは、はは」

「姉さんはどこですか」

「違う……………違う！ オレは……………オレは！」

「姉さんはどこにいる！」

「そんなはず、ない！」覆い尽くす煙を払うように腕を振るつた。

そしてそのままシキに体当たりし、鳩尾に肘鉄を受けた。悶えながらよろめき、窓から身を投げ出したまま不規則に呼吸をする。

シキは一瞥するように。

「貴方は弱い」

静かに、判決を言い渡すように告げた。

「貴方が殺めた人達よりも、魔に負けた貴方は、弱い」  
言い残し、シキは歩き出した。

廊下を。

炎のアーチの中を。

虎子が待っているであろう外ではなく、  
玄関へ向かわず、廊下を歩いた。

「お姉ちゃん！」

叫び声が炎に掻き消される。

吸い込んだ煙で喉を炙られる。

すでに炎は彼の行く手を遮り。

猛毒の煙は、彼を包囲していた。

だけど、手を差し伸べる。

それでも、彼は呼んだ。

「お姉ちゃん！」

迷子になった子供のように、呼び叫ぶ。

その叫びが突然、消えた。

閃光。

爆音。

衝撃。

一際大きな爆発が、シキを襲った。

◇

遠くから大きな音が地響きと共に、私の脆い感情を揺らした。

「奥津城絵馬」

冴え冴えと蒼白い闇の中で、更に濃い闇の衣と月のように白い仮面の怪人が、私の名前を呼んだ。まるで地獄へ連れて行く順番が回ってきたような気分させられる。

「これがオマエが選んだ、罰か」

重苦しい声落ちてくる。

「自分が犯した罪から逃げるのが、罰か」

厳しい声で責める。

「わた、しは……………なにも……………」

首を横に振った。ただ震えていただけかもしれない。

それでも、私は知らない。

私は、誰も殺してないし、人殺しでもない。

私はただ、普通に生きて、普通に暮らして、普通に……………。

つまらないかもしれない夢とか希望とか持って、ありふれた未来が当然のようにあると思ってる、普通の、まだ子供でしかないから……………。知られたくない秘密があったとしても、私は罪を犯した覚えはない。

「無自覚ならば、その秘密、暴いてやるうか」

蠱惑的な言葉。無表情はずの能面が、歪に嗤った。

悲鳴を呑み込んだ。見上げた顔を背けた。

「昔話の続きをしよう」

仮面が蕩々と語り出した。

「蒙昧な村人達によって、人並みの幸せを見せられ、人生のすべてを奪われた子供は匣の中で”悪”と呼ばれ続けた。……村で誰かが死ねば、その子に罪がありと罰をうけ。村で災いが起きれば、その子に罪がありと罰をうけ。不幸はすべて、その子供が元凶とされ、数多の罰を受け続け、醜い憎悪ばかり見せられ続けていた。

村人により、罪悪を知らぬ子供は、あらゆる罰を一身に背負わされた。みなが幸せになりたいという欲望により人生を奪われ、代わりに与えられたのは、そういう運命だ」

抑揚のない声のかわりに、駆け抜ける風によって揺れる木々が感情を代弁するように激しく揺れ、不気味な音を響かせた。

「だが、その子供は、村人を恨んではいなかった」

周囲の闇も従えるように影が、翼を広げた鴉のように大きく見えた。

「最初は……ああ、筆舌に尽くしがたい憤怒もあったさ。だが、そんな感情も、直に沸いてこなくなる。なぜだか分かるか。

そいつは”悪”だからさ。生来の名を奪われ、悪と呼ばれ、悪であれと呪われ、悪として存在することを願われ、祀られ、強いられた。そいつは人じゃない。村人達とは違う生き物。悪という名の妖怪だったのさ」

影は詠う。

「匣の中から垣間見る世界は、ひどく醜かった。人の本性とは、善悪混濁して尚も憐れなほど醜く、生き汚い。もしかしたら人々を、救いたいと願ったこともあっただろう。だが、すぐに悟った。

彼らは、自滅することしか生きることができないのだ、と。救うことになんの意味があるのか。彼らと共に生きる事が素晴らしいことか。世界は醜く汚れているのではないか。故に、匣の外に憧れはなかった。匣の中は汚れなどなかった。そして、その子供は紛れもなく悪だ。だが悪意はなく、誰よりも何よりも汚れない、純白の魂を持っていた」

羽ばたくように影を靡かせ、仮面が近づいてくる。

「だが村人達は、その子供を悪と呪い、罰と悪意のみを与え続けたが。ひとりだけ、匣の中の子供を哀れむ女がいた。その女は、匣の外から呼び続けた。名前を……『悪』と呼ばれる前の名前を、呼び続けた。もし、憎んでいたとすれば……」

白い仮面に蔓延る影が、それが仮面なのか素顔なのか曖昧に、まるで感情を表しているように揺れた。

「ただひとり、その女が憎かった」

押しつぶされた叫びに共感した風が、すべてを揺す。

「無名の悪というだけの存在だった俺に、人としての名を与え、呼び続けたその女が、憎くてたまらなかった」

冷たい月の光が、ぼんやりとした私の思考を解凍しながらも、その揺らめきは私に、在りえない幻を見せる。

「なるほど……たしかに、名前も呪いだ。悪のままなら、その子供は幸せだったはずさ、自分の罪も汚れも知らずに死ねたのに。あの女が、名前を与え、その子供を人間にしまったがために罪を知り、苦しみ穢れ、悶え狂い、壊れてしまった」

仮面が語るその話は、御伽噺のはずなのに。

私の瞳に映る幻影は、眩しい程に白い子供。

「すべてを奪い匣に隠し、人だった子供は殺された。」

けれど、その子供に名を与え、人間にしたがために、穢れてしまった」

白い仮面が雪が舞い落ちるよう目の前に。

明かりが遮られ白い仮面が闇にそまる。

二つの孔、そこから覗く二つの瞳が、言う。

「誰が殺した？」

鉄のように重い声が、私の胸に落ちる。

「果たして、どちらが悪なのだろうか」

唄を詠うような声が、染み込んでくる。

波紋のように広がり、私の心を揺さぶる。

「ああ——」夢の残滓を吐き出す。

ようやく、気付いてしまった。

ようやく、夢から覚めた。

語られた話は御伽噺なんかじゃない。

私に、無関係な話じゃなかったんだ。

私に語りかけていたんだ。

私に、問いかける。

罪を。

私に、問いかける。

罰を。

私の、秘密を暴く。

疵を。

私に、訴えている。

悪を。

「あ——ああ」

気付いたら、涙に溺れた。

気付きたくなかった。

知りたくもなかった。

分かってしまったら。

もう秘密にできない。

もう後戻りできない。

運命のように、逃れらることはできもしない。

汚された白は、もう綺麗な純白には戻れない。

だから、私は口にしてしまった。

「私がシキを——殺した」

告白を、仮面は死刑を宣告するように頷いた。

「それが無自覚に犯した、オマエの罪だ」  
静かに仮面は、夜闇に投げ捨てられた。

「お前たち姉弟は、同じ匣の中にいたんだよ。奥津城」

親しみの籠もった声、見慣れた人の目。

月下にさらされた顔に、私は驚かない。

たとえ、それが匣の中の悪だった子供でも。

きつと、予感していたはず。覚悟していた。

「そっか……」涙を誤魔化す笑みも濡れる。

見上げた月の光輪が涙のように輝いて、

黒衣から昇った三日月に似た刃を冷たく照らす。

断首刀のように高々と昇る刃。

眩しく煌めく白い輝き。

刃は、許し難い罪のように残酷なほど鋭く。

私を、私の罪諸共きつと。

「これが私の罰なの………神籬」

最後の問いに、彼は頷いた。

そして三日月が、私の胸に墜ちる。

燃え盛る廢墟を背に、シキは起き上がった。

爆発により外に吹き飛ばされ、気を失っていた間。

「お姉、ちゃん……？」

声を聞いたような気がし、目覚めると耳を澄まして辺りを探った。

すでに崩壊を運命づけられた燃えさかる廢墟。

その炎は周囲の森林を、まだ巻き込んではいない。

立ち上がったシキ。まるで何本か糸を断ち切られた人形の様子で。

聞こえるのは爆ぜる炎と、廢墟の断末魔のような軋み。

両目には包帯。目の前に静かに月光浴をする森林。

何かに導かれるように、シキは歩き出した、その森へ。

「お姉ちゃん……」

悪夢にうなされていいるような声。

「お姉ちゃん」

煤けた白衣を漂白するような澄んだ声は、潤いに満ちていた。

虚ろな足取りは、まるで朝霧に似て不安定。

夜気やまを含む木々の葉からは、洗淨された雫が静かに墜ちる。

彷徨う手。掴かむもの、触れるものは、すべて求めるものではない。

何度もつまずき、何度も転び、何度も木の幹に体をぶつけ。

森を進むほどに、その小さな体は痛みを受け傷を負った。だけど、歩みは止まらない。

「お姉ちゃん。お姉ちゃん、どこ……お姉、ちゃん」  
止まれるはずがない。

だって、その子は今、それだけのために生きているから。

どんなに痛みを受け、どんなに傷を負い、どんなに命を削るうとも。

「お姉ちゃん！」

天への道標のように長く伸びた蜘蛛の巣めいた枝。

青葉に覆われた森林は、まるで洞窟のように朝と昼を拒む暗さに満たされ、その中を微風に舞う葉のようにゆらゆらと、朝霧が凝結したような白い着物が揺れる。

包帯に覆われた両目に、何が写るか。

踏みしめる大地とは違う世界を見据えるように。

虚ろげに、前だけを向いて歩いている。

雀の鳴き声のような呼吸。乱れて身体から抜けていく。

闇の中を子供は歩いた。

その幼い眼には写るのは、きっと幼い女の子。

彼が最後に見た姉の姿かもしれない。

あるいは触れた命の温もり、声。

はたまた、麗しき香り。

ほんの少しでも良かった。

曖昧な思い出よりも、今の彼女の姿が、シキは欲しかった。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！ ……お姉ちゃん！」  
叫ぶ。叫び続けるだろう。

聞こえるまで。彼女の声を耳にするまで。

きつと、その身が灰になろうとも叫ぶ。

それを森は、優しいほど静かに聞き届けた。

星達も、おしゃべりをやめて聞くだろう。

生花と緑色の香りに満ちた獣道。

月下の森に蠢く無数の影は、邪魔をしない。

風は、森に棲まう妖精のように後押しする。

乱立する木々も、幼い子供のために道を開けた。

辿りついたのは、まるで秘密の遊び場。

広場に咲き乱れる青々とした草花の絨毯。

足を踏み入れれば、月光是さらに彼を白々と濡らす。

見えない彼には、そこはただ何も無い闇だったのかもしれない。

手を伸ばしても何も無い。くると回っても何も阻まない。

空に手をかざしても、届くことは決してない。

初めて、立ち止まった。

そして、空を見上げた。

音を聞くように。

地に残る雨水の音。  
空に轟く暗雲の音。  
流離う風と霧の音。  
隠れる獣の呻き声。  
潜む怪鳥の鳴き声。  
墮ちる蟬の断末魔。  
届かない祈りの声。  
空から墮ちた月輪。  
打ち砕かれた飛沫。  
磨り減った命の音。  
瞬く光と屠る闇も。  
すべて等しく、ここにはある。  
すべて等しく、どこにもない。  
すべて等しく、清められては、  
すべて等しく、帰ってしまふ。  
その束の間に、鳴き声を残す。  
まるで、生きている証のように。  
死と無の境界を、記するように。  
風が吹く。  
鬱蒼とした老樹の葉から、音が舞う。  
その静寂の間に、導かれるように、それに顔を向けた。

小さな唇がゆつくりと、花咲くように開く。  
「貴方が——夜鳥ですね」  
月下に現れた鴉のような男に向け、シキは言う。  
まるでここが約束の場所だったように。  
まるで運命のように、二人は邂逅した。  
「ようやく、出てきたか」  
黒衣の男——神籬安良は、待ち焦がれた夢が叶ったように深い溜息をついた。それでもやはり、この再会を予感していたのだろう。  
広場に満ちた清涼とした空気を陵辱するかのよう、毒々しいまでに漆黒の衣を翻る。  
見えているかのようにシキは、佇まいを直すように深呼吸をした。  
「神籬安良さん。貴方が、黒幕」  
静謐な音に、白骨の仮面から幽かな笑い声が零れる。  
「町で起きている事件に潜む、以津真天、鵠、そして青鷺火。夜闇に隠れ人々を惑わす妖しき鳥の怪。」  
榊あやめを祟りに陥れ、一之宮小夜子に呪いを吹き込み、礼慈君達を、闇へと誘った。  
そして惑わされた人達が”ヤタガラスの祟り”と成り、惨劇を繰り広げていった。けれど夜鳥は、闇に隠れ惨劇には姿を現さない。  
その貴方が、僕の前に現れたということは、貴方自身の目的……それを果たすためですね」

蕩々と熱にうなされていくように口早にシキは言葉を紡ぐ。

そうしなければ、意識が保っていられないかのように、その表情は苦悶に満ち、今にも倒れてしまいそうに身体は微かに揺れていた。

だが、神籬が一步、近づいたその微かな足音で、シキは手負いの獣のような警戒心と敵意を纏い身構えた。

「まさかもう一度、僕の前に現れるとは思いませんでした。狡猾な貴方の事だ、僕が疑っていた事に気づいていないはずがない。……………貴方の目的はなんなのですか。ヤタガラスの祟りの再現が、貴方の目的とも思えない。そんなこと、貴方にはどうでも良い、些末な出来事なのでしょう、違いますか」

夜闇の残骸を纏った神籬が、ゆるりと草花を踏みつけ近づく。

「八年前の事件の……………復讐ですか」

月の青白い灯りを浴びて影が這う。歪んだ笑み。

「だったら僕を殺せばいい！ 僕を……………」

葉音が鳴る。

羽音が散る。

「答えてください」

震える拳を握りしめながらシキは呟いた。

それに返す言葉は、声とよべる音は響かない。

「答えてください」

哀願のようなシキの訴えに、神籬は何も答ええない。

まるで品定めでもするかのように黙々と、淡々と影は動く。その機械じみた動きは、けれど二つの眼が禍々しく、あらゆる感情に濁って煌めきを灯し、生物であることを物語っている。

「答えて……………ください」

シキの顔は俯き、静寂も積もる。

伸びた影が、シキの影に触れようとする。

「答えて……………」

抑圧された静けさが。

「答える——ッ！」

弾けた。

瞬間、放たれた弾丸の勢いを模倣し、シキが影へ向かって疾走した。

草花の上を飛ぶ白い影が、黒い影に一瞬で詰める。

そして突き上げた白い腕で、黒い外套を掴んだ。

「僕にはなにもない！ 命だつて惜しくない！」

でも、それでも——嗚咽を零し。

「お姉ちゃんだけは、失いたくない……………！」

白い子供の慟哭が波打つように響く。

「だから……………」消え入る幼い声。涙が滲む。

後に残るのは、水を打ったような静寂、

「つく……………くくく」

それと、滲みでたような嗚い声。

漏れる雑音のような声が、闇間に染みる。

「何人殺した、殺人鬼」

シキの腕が弛緩し、息を呑むその顔が蒼白となる。

「八年前、たくさん殺したんだろ、殺人鬼」

淡々とした声は、呪いとなってシキを蝕み、黒い外套を握りしめていた手が弛み、波に押されるように僅かに身を退いた。恐れているのか。微かに細い肩が震えている。けれど後ろへ退こうとする身体に抗い、踏みとどまった。それが、答えであるように。

「認める。オマエは、間違えなく人殺しだ。そうだろ」

けれど五寸釘を打ち付けるように、神籬は問いかける。

それから逃れようとするシキの襟を掴んで引き寄せた。

「思い出せ。覚えているはずだ。八年前オマエが見た全てを。何を見た。さあ思い出せ！ 見たんだろ、その包帯に隠された目で。オマエを見て恐れ歪んだ顔を、恐怖から逃れようとした人の背を、もがき苦しみながら死んでいった人の最期を、生きたいと懇願した哀れな死体を！ 見ていたんだろ、その眼で！」

脳を揺さぶるような声は、重く歪んでいる。

思い出せ、という呪文に、シキは首を振って抵抗した。

認めるよ、という呪いに、シキは違うと拒絶を示した。

その繰り返し。呪文が渦巻き、二人を取り巻く。

「目的は復讐かと訊いたな。ああ、たしかに恨んでるよ、オマエを」

影から伸びる細い腕は、着物の襟からシキの首へと持ち替えられた。それを、抵抗もなく、シキは受け入れた。

「大切な人を殺された。それで恨まぬはずがないだろ。殺したのはオマエだ。オマエが殺した人の中に、オレの、失いたくない人がいた」

そのまま首の骨を折るほどの力が込められ、絞り出された喘ぎ声と共にシキの足が、わずかに地面から離れた。

「どれだけ恨んだか分かるか。どれほど長く呪った事か。何度、怒りで気が狂ったか。どうすれば失ったものを取り戻すことが出来るか、オマエは知っているか？」

怨嗟が零れる。シキの顔に零れ落ちる。それは毒。浴びる都度に苦悶に表情を歪め、血の気が引いていく。

窒息死してしまう、その寸前で、シキは無造作に投げ棄てられた。

喉の渴きを潤す勢いで呼吸しようとするが、身体がそれに追いつけず、壊れてしまいうようなほど、咳きをした。

「だが……オマエを殺すのが目的ではない」

神籬は柔らかなに、地面に伏せて咳き込む子供に語りかける。

「オレは、オマエを救いにきた」

倒れた子供を助けるように、長身の影は屈んで、手を差し伸べた。

それがたとえ魔手だとしても、あたかも救いの手と偽るように。

それほどまで、シキにとって無明の視界に飛び込んできた言葉は、その意味、その理由が分からず、喉で暴れる息をも静まった。

「不思議か。大切な人を殺したオマエを、オレが救おうとする事が」  
額のようにシキは息を呑んだ。

それがよほど可笑しかったのか、ノイズのような喋いが仮面から滴り落ちる。

「つぶ。オマエは生粋の殺人鬼だよ。奴等からすれば、絶対的な悪だ。つもり、オレとオマエは似たもの同士。やっと出逢えた、同じ運命の間だ。だから救ってやると言っている」

撫でるように、魔手はシキの頭へと伸びる。

「連れて行ってやる。こんな不自由な暗闇から、枷も束縛も捏造された運命もない、自由な世界へ」

頭に触れる手がまるで猛毒をもつ蛇かのように、シキは俊敏に四肢をバネのように使い、飛び退いた。そして警戒する獣の姿を真似たまま、閉ざされた視界でそれを睨む。

「なぜ逃げる、殺人鬼」

薄ら笑いを漏らし、ゆらりと影も立ち上がる。

「違う。僕は………違う！」

絞り出されたシキの慟哭を、影はやはり嘲笑った。

「違わないさ。オマエは生粋の殺人鬼で、自由になりたいと願ってる」

そうだと、とシキに歩み寄りながら、神籬は問う。

草木を踏みしめる音が、まるで大鎌を携えた死神の足音のようにシキに聞こえ、地面についた四肢に力が入り、身体が強張る。

違う、という拒絶の一言さえ、怯えているかのように震えていた。

「嘘だ。生きている限り、自由になりたいという願いを持つ。それが生きていく事だ。……オレ達は、自由を知って生まれる。その自由の素晴らしさ、美しさを知っている。そうさ、生まれてくる前は、自由だった、なにもかも。それに比べ人生は、ひどく不自由で鈍重だ。そうだから少しでも、あの自由へ近づきたいはずだ。そうでないと言うのなら、それは生に縋っている死体だ」

莊嚴な響きが風に舞う。

「一生……これから気が遠くなるほどの時間を、暗闇の中に閉じこもっているつもりか。その眼が見るものは、そんなモノだけじゃないはずだ。あの森の中で死ぬのか。毎日、ただ呼吸をするだけで浪費する人生でいいのか。何も得られない何も成せない何も残らない、何一つ望みは叶わない。そんな、死体のような人生しか、今のオマエにはない」

冷やかな月が濃厚な雲に隠れ、森は夜の調に引き戻される。

暗い、深海のように暗い間に。

「オマエの世界は狭く不自由に閉じられている」

影が響く。

「だが、今ならば外へ——自由になることも出来る」

影が囁く。

「今までオマエを縛ってきたもの。狡猾な老人が仕掛けた幻術も、とっくに解けているのだ。オマエは真実を知ってたはずだ。違うか。」

奴らはオマエを騙し、欺き、縛り続けてきた。一度たりとも、人として見やしない、生きていることを祝福しない、一秒でも早く死ぬことを望んでいた。それでも生かし続けた理由はただ一つ。それが自分達にとつて、都合が良いからだ。

疎ましい反面、生かすだけの利用価値はあった。生き物ではなく、ただの道具として使うまで、誰にも知られることなく誰にも奪われないように隠されていただけ。奴らはな、本当はどうでもよかつたんだよ、生きていようが死んでしまおうが。生きているのなら使う、死んだのなら捨てる、ただそれだけだ。

オマエが今、生きているのは偶然、死ななかつたからで、育てられているわけでも、生かされているわけでも、ましてや愛されてなんか、いやしない」

禍々しく歪んだ嘲笑に空気が汚染する。

まるで白地の袖に、黒い染みが広がるような遅速さで、  
「ただそれは人類に悪が根付く確実さで広まっていく。」

「さあ行こう。共に来い、シキ」

神籬は手を差し伸べた。

シキは、ゆっくりと立ち上がる。

「僕は……いかない。僕は、貴方とは違う！」

それをシキは首を振って拒否する。

「それでもいい……。何も得られなくても、何も成せなくても、何も残らない無意味な人生でも。……。自由がなくても、この命が無価値だとして、誰にも愛されなくても、たとえ死を望まれていても、僕はそれでも……。いい。どんなに不条理で理不尽な運命でもかまわない！」

悲痛な声は、優しく。

「僕はただ、お姉ちゃんと帰りたい——！」

祈りのように夜にとける。

それを聞き届ける祭司のように、そうか、と神籬は呟いた。

「決裂だな。……。となると、あとは」

分かりきった結果を口にするような空しい呟きを零し、神籬はマントから片腕を出した。

「やはり殺し合うしかないか、殺人鬼」

かざすように月下に晒した三日月に似た白銀の曲刀。先端にだけ、微妙か真新しい朱色の血が、絵の具をこすりつけたように残っている。

「待って！ 僕は……」

「殺し合いは嫌だ、人殺しも嫌だ、か？ つは」

歩み寄る神籬の苛立ちに、足下の青葉が蹴散らされた。

「メチャクチャだな。オマエさ、矛盾してるぜ」

燻るような静かな声で蔑み、神籬は跳躍した。

突如、歩みは獣の速度と化し、シキを襲う。

迫り来る殺意に、シキは瞬時に帯からナイフを抜いた。

衝突、離脱、加速、剣戟、金鳴り。

シキと神籬の間に、月下に、二つの刃が十字架を模す。

「自分は殺されても、命は惜しくないとほざくオマエに、初めから誰ひとりとして、救うことなんて出来やしない。自分は殺されても、お姉ちゃんだけは死なせたくない、だと？」

シキを両断せんと三日月の刃がのしかかる。一言一言を発する度に熱を帯び重みが増すように、神籬の刃はシキを押し付ける

「嘘だな。本当は、その姉の事さえ、どうだっていいんだろ？」

震える二つの刃が、微妙な均衡で保たれる。

「そんなこと……」苦悶に顔を歪めながらもシキは、否定するようにナイフで押し返そうとする。

それを見取るやいなや、神籬の足がマントから飛び出し、シキの脇腹を蹴り飛ばした。

ぬいぐるみのように蹴り飛ばされ、地面に伏すシキ。蹴られた場所から血が滲み出て白衣を汚す。

「無様だな、殺人鬼！」

猫のように丸まり悶えるシキに、冷徹な声と共に容赦なく曲刀を振りおろされる。転がりながら避ける。が、間髪入れずに降り注がれる矢のように、刃がシキを襲う。転がって避けようとするも、刃がひっかくように切り裂き、弾むように立ち上がりナイフで防ごうとしようと、神籬の曲刀は、容易にその盾を突破し、切り、弾く。

月を仰ぐ白い花弁に、赤い血が降り注がれる。

「そうさ。本当、失いたくないと口では言いながらも、何も得ようともせず、有るモノでさえ守るうともしない。すべての関係性を破却しようとする。誰かと関わることさえ執着しないから、簡単に捨ててやる」

鞭を振り回すように縦横無尽に曲刀が奔る。

「神あやめが殺人者と分かるやいなや、オマエはアイツを見捨てた。あの時のオマエ、あいつを人として語っていなかったぞ」

さながら剣舞。だが優雅さはなく、嵐のように荒々しく、刃に載せられる怒号も裂帛し、重みも早さも増していく。

「礼慈も、オマエが手嶋のもとへ追いやった。二人が殺し合うと分かっていたはずだ」

振るわれる都度に、小さな体は傷ついていく。

「奥津城絵馬も。あの時、見えずとも気づいてたはずだ。なのにオマエは、姉を救わず、オレを見逃した。問答などせず、万全なオマエなら一瞬で、オレを倒して姉を救うこともできた。なのに、そうしなかった。なぜだか分かるか」

細い血が飛び、白衣は朱の線が描かれる。濁水のような顔色で、吐息を乱しながらシキは、嵐に翻弄される柳のように、刃に弄ばれている。

「自分に関係する他人を排除することで、自分が自由になれるからさ。自分を縛るもの、それは自分以外の人間だ。関係という鎖をオマエは断ち切れれば、自由になれる。そうすることでしか、自由は得られない」

無造作に曲刀でなぎ払われて、紙屑のようにシキは容易に弾き飛ばされ、よろめきながら片膝をついた。

「何かを壊さなければ、自由は得られない」

神籬は言う。

「本当は、奥津城絵馬とて、殺したくてしかたがなかったんだろ」

銅鐘どつしやうを鳴らすような深い声を森に響かせ問う。

乱れた呼吸を強引に整えるように息を呑み、シキは、世界の崩壊を予見してしまったような苦悶に満ちた顔をあげた。時間がひどく遅速したような感覚に襲われ、無秩序に崩壊し続ける衝撃に似た頭痛が暴れる。閉ざされた暗闇に視界が崩れていく、そんな気がした。

「くれてやる。オマエが欲しかったものだ」

打ちひしがれたシキの目の前に、神籬はそれを投げた。

草木の香りに混じり、懐かしい匂いが、シキの鼻孔をくすぐる。

「お姉ちゃん……………?」

白紙に束ねられた艶やかな黒髪。

血の臭いが混じり微かに、熟れた果実の匂い。

「あ————」

ナイフが墜ちる。震える手。それに触れた。

艶やかな手触りに、かすかに糸ひく潤い。

「あ、あ、あ、……………」

愛おしげに両手で掬い上げ、シキは胸に抱いた。

それが何を意味するか気づき。

「あ、あ、あ、……………ううっ」

嗚咽を漏らした。

「喜べ。これで、オマエを縛る者はもういない」

抱きしめた愛しさの一部は、彼女の命の欠片。

真新しい血が乾いた黒髪を、その人のように抱きしめた。

「奥津城絵馬は、オレが殺した」

何もかもが壊れていく絶望感が、シキを包まれる。

確かにある空が落ちてきそう。

確かにある大地が崩壊しそう。

確かにある陽射しが陰りそう。

確かにある空気が消失しそう。

確かにある自分が消えてしまい。

確かにある大切なものを喪失し。

確かにあると、確かめる拠り所がなくなってしまう。

失った。

たった一言で、シキは見失った。

ただ、内側が空っぽになった、それを漠と感じた。

「どうした、殺人鬼。オマエの大切な人を殺した奴が、目の前にいるんだ。遺骸を握りしめず、そのナイフを手にしてオレを殺しに来い。奪い返しに来い。罰を下しに来い。オマエに出来るのは、それだけだ！」

何も反応しない虚ろな少年から、間合いを計るように神籬は後退し、嘲笑うような眼で見る。冷めていく目は、声も抑揚をなくした。

「絵馬を手にかけたのはオレだが。どのみち、オマエは絵馬を救うことも、守ることも出来やしなかったんだ。遅かれ早かれ、オマエは、姉を見殺しにする」

魔力を持った声は、嗚咽おえつに似た呻うき声を漏らしながら俯うつく少年の顔を引き上げる。茫然ぼうぜんと、開きかけの蕾つぼみのように口をあけたまま、彼は聞いてしまった。

「絵馬を殺したのは、オマエだ、シキ」

優しい声は、毒のように子供を犯かす。

「何も成せない。何も残せない、何も生み出せない、無意味で無価値な人生でも構わないと言ったな。そう、それがオマエの本質さ。ただ壊すことしかできない、殺人鬼。それがオマエの本性だ。そういう名と運命を刻まれた。それは気づいてるはずだ。だから、自分の命さえ蔑あざむる。それでも誰かを救いたいだの守りたいだの言うのなら、それは偽善だ。自分の命さえ大切に出来ない奴が、他人の命をどう大切にするといい」

うずくまる子供を、見下す神籬の表情は鋼の彫刻像を摸し、硬く冷たい感情によって描かれていくように、言葉の一つ一つにも、悪に付随する想おもいが添そえられているように重く響きだった。

「失いたくないと、守りたい、救いたいと言葉で言うのは容易い。だが、そのためには戦わなければならぬ。自分を大切にするといいのは、目の前の敵から眼を逸らすな、という意味だ。失いたくないければ戦え！人ならば刃を、獣ならば牙を、殺人鬼なら本能をもって戦うしかないんだ。それが出来ないのなら、あの森で、あの匣の中で、誰とも関わらず、傍観者で居れば、オマエは、絵馬を殺すことはなかったんだ」

少年にその声が届いていた。包帯で隠かくされていた疵きずを抉くるような言葉。シキは身悶みもえながらも微かに首をふった。

「オマエは生粹なまじの殺人鬼だ。それはどう抗つても逆らえない。殺人鬼は、人を殺すことで戦い、殺めた命と引き替えに、何かを守る者の名だ」

脳髓のうずいを麻痺まひさせるような痛みと、頭が白熱はくねつするような餓うえにも似た苦しみを抱えながらも、彼の耳は、それを聞き届けていた。

「オレを殺せなかったオマエが、絵馬を見殺しにした」

そして、白銀の刃が、シキの胸を貫いた。

「人を殺すことが出来ない殺人鬼に、何ひとつ守ることはできない」

告げ、曲刀を引き抜き天に掲げ、振り下ろした。

袈裟けさ斬りに、一息の間で曲刀がシキを斬った。

草木が浴びる鮮血。空気が食らう血飛沫は微か。

喉を枯らした獣の勢いで白衣が溢れ出る瑞々しい血を飲み込む。

花が茎もるとも折れるように、自分を斬った相手に頭を下げ、俯せに、眠るように、シキは倒れた。

見届け、静かな観客に終演を伝えるように見渡し、神籬は離れた。

そして、煌びやか夜空には厚い雲が敷かれ、

広場は、幕がおろされた舞台のように明かりが落ちていく。

死人に群がる死に神のように、シキに忍び寄る暗闇。

痛みは熱となって、小さな口から長く吐き出される。

閉ざされた両目は、低い場所の草原の揺らめきのような闇を見ていた。

今まであった大切なもの、自分には何もないと言った、だけど何かに満ち溢れていたものが、裡から消えていく寒気が、空っぽになっていく実

感が鮮明に、朦朧とした意識でも感じた。

手の中には、お姉ちゃんがいた。

微風の音が、雨の音に似ていた。

——— 雨の中、となりで子守歌のように優しい声で歌っていた。

雨のように柔らかな音。

体に染み込む声。

感じてた暖かい歌。

すべて、覚えてる。きつと、忘れない。最後まで、いや、それだけは

残ってほしい。零れ落ちていく血潮が尽きようと。

血の塊を吐き出す。

傷口が獣のように痛みを撒き散らして、呼吸をすることさえ厳しい。

ただ生きる、それだけのことが厳しかった。

ひとりでは、生き難い。

だから、あなたが居た、それだけで幸せだった。

ただそばに居てくれた。それでだけで満たされた。

だから心のそこから、お姉ちゃんが大切だった。

たとえ、

『あなた………化け物よ』

蔑まれても。

『あなたが殺したのよ』

恨まれても。

『生まれてきたその時から、生きてるだけで悪よ』

憎まれても。

『あんたなんて弟じゃない！ 大っ嫌い！』

嫌われたって、

『シキなんか、死ねば良いのよ』

生きる事を許されなくても。

僕は、いつの夜も、お姉ちゃんを想っていた。——— 淡く脆い願いに、

シキは微笑んだ。

それだけで良い。それだけで充分。

祈りを捧げるように想う、

それだけの人生で満足していた。

それだけで、幸せだったから。

水に沈んでいく蟬燭のように霞んでいく意識が、星の瞬きのように点滅を繰り返す。腹に猛禽の獣が巢く、血肉を貪る痛みと苦しみをさえ、もう遠い過去ののように、陽射しに色褪せた思い出のように、自分のものでは無くなっていく。

死ぬのかな、と他人事のように思った。

死が迫ってくる。

けど、怖くはなかった。

そう、死は怖くはない。

ただ、大切なものを失くない、空っぽになっていく生が怖いんだ。

無垢な想い、綺麗な温もり、美しい世界の愛しいものたち。

みんな、みんな、死んだら、消えてなくなってしまうから。

それは、とても、悲しくなってしまうほど嫌なことだから。

だから、きつと、精一杯がんばって、生きようと思えるだ。

だから、きつと、必死になって、守ろうと戦う事も出来る。

たとえ、それが、どんなに辛辣な苦痛でも、空しくつたて。

美しいものを知っているから、死を畏れず戦う事ができる。

祈ってるだけじゃダメなんだ。

想っているだけじゃ守れない。

何かを失う、それを知って尚。

何かを守る、そのために戦う。

間違っていた。

自分の命を賭して守ることと、自分の命を惜しまないことを。神様が決めた運命や、他人の手に委ねては、ダメだったんだ。自分の大切なもの、失いたくないのなら、この命にかけても。この命が尽きるまで、その時がくるまで、想いを貫くために。その果てに、すべての罪という罪、咎という咎が残ろうとも。この先には、暗い孤独しかなくて、贖罪の人生だとしても。まだ死ねない。

まだ死にたくない。

この魂が穢れになろうとも。

どんなに無様でも生きていたい——と、少年は願った。

戦うと決めた。

月のように蒼白に色褪せていく顔を、夜空と森を向けた。

手を這うように伸ばして、ナイフを拾う。

そして、初めて大地を踏みしめようとする幼子のように、痙攣する四肢で、動こうとする意思に細胞が悲鳴をあげようとも、鉛のように重い

血潮を背負って、煙のような揺らめきで、シキは立ち上がった。

目眩がする。

迫り上がる血を飲み込み、たたらを踏んで堪えた。

握りしめた姉の髪に口づけを残す。

忘れないように。

『人殺しはいけないことよ。』

人を殺していい人も、殺されてもいい人なんて、絶対にいないの』  
その言葉を覚えている。

『約束して。絶対に殺さないって』

その約束を覚えている。

『約束やぶったら、私、許さないから。絶対に、許してあげないから』  
なにもかも覚えてる。

でも——それでも許せないんだ。

こんなこととしても無駄だって、

お姉ちゃんに会えないのは分かってるけど、

せめて守りたい。

この想いまで、失いたくない！ だから——。

「……絵馬、ねえちゃん」

己の血で化粧した唇が花弁のように開く。

雪解けし楽しい思い出を夢見たように、儚げに笑みを咲かせた。

「——ごめん、ね」

朧気に囁きが、さ・よ・う・な・ら・を・告・げ、握った拳を開いた。

風に舞う艶やかな絹髪。

清らかな闇に愛しい香りが幽かに流れる。

そして。

「あああ——！」

再演を告げる血塗られた咆吼に、天の幕が開かれた。

初めて明確な意志で包帯を解く。

蒼白く焔めく二つの眼が顕わになる。

そして、

伶俐な光を纏う白月の下で、世界が穢れた。

◇

魂を揺さぶるような叫び声に、神籬安良は振り返った。  
そして、穢れていく世界を見た。

空と大地との境界たる深い森。

鬱蒼と群れなす生きた木々。

纏う瑞々しい葉はまだ緑黄。

冬はまだ遠く秋浅い月下で、青々とした葉は、

燃え上がるように赤く、朱く、紅く。

血潮に似た鮮やか紅に、森が染まる。

生命は枯れ果てる。

枯渇していく深森。

それはいかなる奇跡か。

地上には紅い深森。

周りには黒い夜闇。

夜空には蒼い満月。

月下には白い子供。

シキの先には、後戻りの出来ない穢れた世界が広がっていた。

微風に靡く黒い髪、蒼い月光に晒され、紅葉に照らされた、

白衣を纏った少年。

「ああ——」

神籬安良が、恍惚に似た寒気に息を呑む。

互いに交わす言葉はない。

二人の手には刃が握られている。

ならば後は、当然のような結末に向けて奔るのみ。

神籬安良は黒外套を翻し走った。

駆ける。それは人のそれではなく獣のそれに近い。

シキは流した血の上に佇み、穢れる森を視ていた。

何もしなくとも、あと数分で絶命するほどの出血だ。

あと一太刀、刃がその身に届けば、絶命するだろう。

止めを刺す必要はない。そのまま去ってもよかった。

けれど神籬安良は、かつて”愚“と祀られた子供、

だった青年は、夜を穢す少年のために奔った。

そして、曲刀を振りかぶり一際強く大地を蹴る。

獲物を屠る獅子の影。

鋭利な殺意が少年を貫く。

その寸前、シキは流麗に、

「あなたを——穢す」

振り返り、刃で闇を切り裂いた。

◇

それは一秒にも満たない刹那のこと。  
白き少年の刃が舞い落ちる間のこと。

はじめて、否、生涯でただ一度だけ、  
世界が——人が美しい、と思えた。

清らかな極彩色の煌めきを秘めた瞳は、  
視るものすべての命を穢す魔性の眼だ。  
けれど、その眼を持つ子供を美しくして。  
その瞳に愛でられた、世界さえ美しい。

たとえ、それが己を殺す者であろうと。  
美しい、と彼は思った。

最後に、その想いを眼に写したまま、  
秘密の内に匣を閉じるように、神籬安良は、瞼を閉じた。

◇

終幕は瞬く間に。

神籬が突きだした曲刀は手首もろとも斬り飛ばされ、  
シキのナイフも、振るった勢いのまま手から離れ、飛んでいった。  
両者の刃は、互いに致命傷の傷を負わずことなく役目を終えた。

だが、手首を切り落とされても神籬ならば反撃できただろう。予備の  
武器、あるいは肉弾によってシキに、止めを差すこともできたはず。

しかし、両者は互いに向き合い、見合ったまま動かない。  
神籬安良は、死んでいた。

切断された腕から砂のような血が零れ、晒された肌はひび割れ、全身  
が枯れ木のように堅く脆くなり、命を泉と譬えるのなら、彼の命は二度  
と水を得ることもないほど致命的に枯渇してしまったのだろう。

喝采を投げるような柔らかい風。

神籬は、砂礫の彫刻が壊れるか、枯葉のように倒れた。

シキは、運ばれる紅葉の重みに堪えきれず跪き、空を仰ぐ。

「ああ——」

夜空には満月。

穢れない白い月が、  
静かに、死を迎える命を見守ってくれていた。

私を呼ぶ声があった。  
 痛みに痺れた体で、  
 私は立ち上がった。  
 目眩に意識が霞む。  
 今にも倒れそうで、  
 不安定な体だけど、  
 でも聞こえるから。  
 仄かに明るい森の中。  
 方々から聞こえてくる。  
 姿を隠した鳥達の鳴き声。  
 私を怯えさせる怖い鳴き声。  
 私を惑わし迷わす妖しい囁き。  
 私を導こうとしてくれるような鳴き声。  
 私に問いかけてくるような鳴き声。  
 様々な鳴き声が森の中で響きわたる。  
 闇の中からずっと鳴き声が聞こえる。  
 闇の中に隠れたままの鳥達の鳴き声。  
 ひとつひとつが私に何かを伝えてる。  
 誘惑してるのか誘導しているのか。

脅しているのか怖がってるのか。  
 私には分かるはずもなかった。  
 だけど感じることはできた。  
 私にはよく聞こえたから。  
 確かに届いているから。  
 耳を澄ませば伝わる。  
 私の体の声よりも。  
 夜の鳥の鳴き声が。  
 私に伝わってくる。  
 幻のように朧気に。  
 夢のように曖昧に。  
 仄暗い森に映し出される幻想。  
 走馬燈の様に現れては消える幻。  
 木々の隙間から母の姿を視えた。  
 視線が彷徨えば父の顔が視えた。  
 進む先に懐かしい家族の風景が。  
 声が聞こえてくる。  
 会いたい人の声が。  
 鳴き声が木霊する。  
 何度も足を止めようとした。  
 何度も歩くのを止めそうになった。



ごめんね、と。俯いて、シキは涙のように繰り返し零した。

「謝ったって、許してあげないんだから」

「うん——ごめんなさい」

「ばか。……だから、もう、あやまらないで」

儂い声をたぐり寄せるように寄って、私は跪く。

「ごめんね、シキ」

そして、その小さな肩を掴んだ。

小さく冷たくなったシキの身体。

たくさん傷ついて、たくさん血を流して。

震えながら、怯えるようにナイフを握りしめて。

こんなになるまで、今までずっと独りにさせて、ごめんね。

「わるいお姉ちゃんだよ、わたし」

お母さんと約束したのに。私が守ってあげらって約束したのに。

私は、君のことずっと、ひとりぼっちにしちゃって。

「ごめんね」

「……お姉ちゃんは、悪くない。お姉ちゃんが謝らないですよ。だって、僕が悪いんだから。……お母さんもお父さんも殺したのも、ぼくだ。

ぼくは、たくさん、たくさんの人を殺してしまっただから……」

泣きながらシキは言うから、暖かい涙が私の頬までぬらす。

「僕が、穢してしまった」

だから僕が悪いんだ、と後悔と罪深い涙に染められた声で言う。

「お姉ちゃんは、なにも悪くない」

その言葉は優しさに包まれ、私を拒絶しているように聞こえた。幻のように、私の前から消えようとしているように思えてならなかった。

すべてが夢のように。私には、ただこのいつか消えてしまう温もりを残して、罪と咎だけを道連れに、シキは死ぬつもりなんだと分かった。

私の腕をそっと解く小さな手。別れを告げるように押し返す。

「シキ」

だからその前に、この手でシキの頬を包み込むように触れた。

「私を見て」

シキの顔を引き寄せた。

「お願い、見て」

だけどシキは瞼を瞑ったまま、首を振ろうとする。

「私を視なさいシキ！」

思わず声を荒げてしまったら、溜まっていた涙まで流れてしまった。

いちど溢れ出した涙は連なるように流れて、私の言葉を遮ろうとする。

今言わなきゃイケないのに、どうして邪魔するの、ばか。

「お姉ちゃん」

胸から迫り上がる涙を呑み、弟の名前を呼んだ。

「シキ。私を殺して」

言うと、耳が痛くなるほどの静けさに紛れてまた涙と痛みが、頭を真っ白にさせる。だから、想ってるままのことを伝えた。

「このまま死ぬつもりなんでしょ。罪を全部被って、死ぬつもりなんでしょ。許さないからね、そんなの！ 死んで償おうとするなら、私も殺しなさい。死ぬなら、一緒に……私も一緒に殺しなさい、シキ！」

胸に溜まったすべてを一気に吐き出したたら、力が抜けて、シキの胸に顔をうずめた。聞こえる、心臓の音が。熱を持った傷。冷たくなった血。シキを感じて、涙を呑んだ。

「お姉ちゃん——」

鈴の音のように善く通る声。

「僕は、お姉ちゃんを穢したくない」

さよならを告げるように、シキは言った。

骨まで冷える絶望が私を襲う。

「わたしを、ひとりにしないで」

両手一杯力を込めて、シキにしがみつく。

イヤだ。離したくない。

ふと、駄々をこねる私にの頭を冷たい手が撫でた。

「許されるのなら、僕は……生きたい」

儚げな声は、優しい力が込められてた。

顔をあげる。目の前にはシキの顔。

「どんなに無様でも、どんなに罪深くても、僕は生きたい。生きるために、犯してきた咎と罪を償いたい」

哀しげな声に、ああ、私はようやく気がついた。

「そんなの。シキ、またひとりぼっちじゃないの……」

「うん。だって、好きだから、穢したくないんだ」

その罪を、この小さな身体は背負おうとしてる。

また今までと同じように、ひとりで、生きようとしてる。

大好きな命を穢さないように、ひとり、匣の中に入るうとしてる。

それに気づいて、無性に腹が立った。

「ばか。そんなの生きてることに、ならないじゃない」

私、覚えてる。

「シキ、私に言ったでしょ？」

命って自分ひとりだけのものじゃないと思うんだ。

ひとりじゃ、空しいだけ。

ひとりじゃ生きていけない。

ひとりじゃ死ぬこともできない。

誰かに寄りかかっていないと、

命は、きつと、どこにもないから——

「ひとりぼっちで生きるなんて、そんなの、生きてるって言わないわよ」

「でも、僕、きつとまた……」

誰かを殺してしまう、なんて言いそうだったから、

その先の言葉を遮るように、私はシキを抱きしめた。

「大丈夫よ。私が一緒にいてあげるから  
強く抱きしめる。」

もうこの子を、ひとりにしないように。

「シキの罪は、私も一緒に背負うから」

だから、と頬をよせて耳もとで囁いた。

「もおいいよ。ひとりで隠れなくて」

「でも、お姉ちゃん……」

「いいの。私が、守ってあげる。支えてあげる、迷わないように手を引いてあげる。もう誰も殺さなくていいように、傍にいてあげるから……。」

「一緒に生きるのよ、シキ」

「………いいの？」

うん、と戸惑う弟の頭を撫でて、

「だって私、シキのお姉ちゃんだもの」

もう独りにならないように、しっかりと捕まえた。

傷ついた身体を、冷たい身体に寄り添い。

互いの命をたしかめ合うように、私達は熟れた吐息を重ねた。

月夜に晒された穢れは、もう、孤独じゃない。

秘密は壊れたね。

だから、隠れんぼは、もうお終しまい。

「いつまで、いつまで」

鈴の音に似た可愛い声。

白昼夢に沈み落ちようとしていた私を、現実の日射しの元へと引き上げる。整備不良の道路を走るバスの揺れが、まるで心地いマツサージミ  
たいだったから、危うく寝入って降りそびれるなんて悪夢めいた事態に  
なりそうになった。郊外へ向かっているバスの乗り続けてたら、一日三  
本なんて田舎へ配送されかねないもんね。

もうすぐ廃車になりそうなバスの中は、平日の午後ということもあつ  
て、お客は私を含めて四人しかいない、とても贅沢な運送。

埃にコーティングされた窓硝子から、水飴みずあめみたいな陽射しが、私の頬  
におちて、身体の一部は暖かい。

色褪せるように時代を逆行していくような風景を眺めながら、私は窓  
を少しあけた。寂しくなった項に、ひんやり冷たい風が撫でる。

あの夜から二週間ほどが過ぎた。

私は、幸いにも軽症で、数日ほど入院することになった。もちろん、  
まっとうな病院に。だけど、戸籍のないシキを普通の病院に搬送するの  
も警察の調書に名前を載せる訳にもいかないから、虎子が職権乱用して  
秘密裏に葬儀先生の個人病院に搬送してくれた。

シキは瀕死の重傷だったらしく、二日ばかり生死の狭間を彷徨う昏睡  
状態が続いたと、後で聞かされた。それでも、やっぱり私とは身体の内  
りが違うのか、礼慈より重傷のはずのシキは、礼慈より早く、今週にで  
も退院できるほど回復してらしい。今日やっとお見舞いの許可が下り  
た。私の膝のうえには紙袋にはいつた鯛焼き。つまみ食いたい気持  
ちをぐっと、あと少しの道のりを我慢。

一時間ほどバスは走って、誰もいないバス停に、ひとり降りた。

閑散とした街並み、住宅と田園が仲良く一枚の絵画を描くように共立  
してる長閑な風景。ビルみたいな高い建物がないけど、平たい街並みの  
一角に、苔こひを生やした帽子みたいな小高い丘がある。病院はあの丘の上。  
よし、と気合いを必入れて長い登り坂を歩く。

バスにゆられた半分ぐらいかけて登ると、街並みには思っていたより  
田舎の風景で、家々や道路がまるで虫食いの穴ほどしかなかった。

丘の上には、伐採ばっさいの難を逃れたように大きな杉の木が身を寄せ合うよ  
うな林があり、そこに隠れ住む御伽おとぎばなしの魔女の屋敷みたいに、葬儀診療  
所はひっそりと建っている。

黒ずんだ木造の診療所は蔦つたに覆われ、知らずに迷い込んだら、間違  
なく幽霊屋敷の類だと思はす。

玄關の硝子戸を開けて中に入る。消毒液と得体の知れない薬品が混ざつ  
たような仄かに甘い匂いが漂い、それは、鈍く磨かれた板張りの廊下や  
薄汚れた壁、建物と融合しているようだった。

ブーツを脱いでスリッパに履き替えると、ちょうど葬儀先生が廊下を歩いてきた。挨拶と他愛のない会話を二三交わす間、私はいつもの喪服姿ではなく、ちゃんと白衣を着ている姿に驚いた。その白衣に隠れるように、女の子が側に立っているのが気になった。歳はシキと変わらないぐらいだと思う。こんにちは、と挨拶したら、恥ずかしそうに、軽く会釈を返してくれた。そして、なぜかキャンディを両手で抱えるほど持っていた。甘党なのかな。

「お嬢ちゃん。お見舞いはいいですけどね。彼、早めに連れて帰って下さい。孫には、あまり教育上よろしくないのです」

口調と表情こそ穏やかだけど、どこか棘のある言葉を残し、少女を連れて葬儀先生は二階へと上がっていった。

「孫だったのか……………かわいそうに」

薄暗い廊下を渡り、一階の端にある病室の前まで来ると、硝子戸隔てた向こう側から、病院では、あるまじき大声が。

「ハアッハッハッハッハ！」

実に活字にしやすい明快かつ豪快な笑い声が聞こえた。

盛大に溜息をつきながら、ドアを開けた。

すると、やっぱり居た。

「おお！へまちゃんじゃないか！」

豪快な声と共に、質素な病室の中で、純金で編んだような金髪が、まっさきに目に飛び込んできた。

革ジャンやら金ピカのピアスやネックレスに指輪の悪趣味なゴージャスルツク。絵になるけど目に悪い。

「燻天王寺先輩がなんているんですか。それと絵馬です」

「見ての通り、手負いの友へのお見舞いだ。見て分からないのか。よもや、愚鈍ならば可愛らしく見えるなどと思うアホか。君には似合わないぞ、その赤いスカート同様。そんなに丈が長くては、お気に入りのブーツが隠れてしまうぞ。脱げ！」

黙っていればハリウッド俳優みたいぶ日本人離れた美麗な顔立ちで、それだけで絵になる男だが、その実、我が校が誇る超人四天王を凌駕する、我が校が恥じる変人王子その人でもある。見た目に騙されてはいけない、生きた見本だ。神様は優しくない。

「はいはい、と適当にあしらって、ベッドに近づく。」

「シキ、調子はどう？」

「元気だよ、お姉ちゃん」

真っ白のシーツのベッドと同化したように白い浴衣姿で、はだけた胸からは包帯しか見えず、当然のように両目にも包帯をしているのに、元気ですと言われても、ミイラみたいな見た目だから鶴呑みに出来るはずがない。

「見て見て、お姉ちゃん。このお菓子の山！儀琉くんがね、持ってきてくれたんだよ、すごいでしょ！」

満面の笑みを浮かべてシキが指さしたのは隣の空ベッド。

だが、その上には文字通りのお菓子の山。色とりどりに包装されて一個十円や二十円なんて駄菓子じゃなくて、どこぞの専門店でお買い求めになられたような高級品ばかり。どう見ても、人ひとりが一日や二日で消費出来そうもない山は、あつたま悪いんじゃないかねえの、と言いたくもなる質と量。それを送った張本人は窓枠に座って得意げに不敵な笑みを浮かべている。こいつ、シキを糖尿病にさせる気か。

「病院の料理は無味無臭と聞いてな。なに、礼などよい。たまたま店の品すべてを衝動買いしてしまって、処分に困っていたのだ。甘い菓子は好きであるう。さつき、葬儀の孫娘にも分けてやったら、潤んだ瞳で見つめられてしまったよ。ああ、どうやらまたひとり、我の膚が増えてしまったな」

頭のおかしいお兄さんを無視して、シキのベッドに座った。

「おお！ なんと罪深きことだ」

「シキ、あとで鬼淵さんが来るって、また事情聴取ってやつみたい」

「鬼淵さんが来てくれるの嬉しいんですけど、もう三回目ですよ」

「しかたないんじゃないの。ちゃんと説明できるの、シキぐらいだから。事件は終わっても、私まだ、よくかわらないもの」

「コラそこ！ 我を無視するなど重罪だぞ。それと絵馬、事件はまだ終わってはいない

「え？ だって犯人は」

「殺人犯は捕まった。だが、黒幕はまだであるう」

「黒幕って……………だってそれは」死んだ、とシキの前では言えなかった。「君が言う黒幕。その引越しかいいう男」

「神籬です」

「そうそいつ。まだ捕まってない。あの女、詰めを誤ったぞ。死体を運んでいた車ごと、まんまと盗まれたのだからな」

「……………それ、ホント？」

「間違いない。あの女に会ったときに読んだ」

指輪の宝石を見つめるような片手をあげて、熾天王寺先輩は自信に満ちた声で断言した。シキの表情も、それを肯定するように陰しかった。

「この事件、我を懇願すれば、これ程までに無様な結末になどならなかったのだ。忌々しい。我以外に探偵に相應しい者などおらぬ。凡夫が分を弁えぬからこうなるのだ。全てを識るは王である我にのみ持ちうる覇権である。貴様は、詭弁を語るだけで良いと申したはずだ、シキ」

不動のまま、声には憤怒を露骨に込めて言い放つ様は、まるで暴君。

「そうですね」シキは苦笑いを浮かべながら、そう応じた。

「だったら、いつもみたいに、初めから勝手に首突っ込んで、滅茶苦茶にかき回せばよかつたじゃない。そうよ、このひと月、何してたのよ」

私は暴言に堪えかねて乱暴に言い返すが、この暴君にはまったく効果がない。探偵だ、とさらりと言い返された。もう議論の余地が無いぐらい、オレが正しいと力押しするようない方だ。

「探偵って……………、何時から、どこにですか？」

この男とまともに会話ができるシキが尋ねた。

「たしか、浅間とかいう村だ。長閑なことこの上なし。九月に入ってから懇願してきたから、赴いてやったが……」何か尖ったものが突き刺さったように神妙な顔で「そうか……そういうことか、シキ」と、禍々しい笑みを浮かべ呟きいた。

「悔しいですが。僕達よりも、儀琉君を正しく評価していたのは、あちらだったようですね」まるで同調するようにシキも、神妙な面持ちで意味ありげに笑みを浮かべた。

完全に蚊帳の外に追いやられた私は、どういうことかシキに説明を求めた。が、窓枠から苛立ちをぶつけるように飛び降りた熾天王寺先輩に遮られた。

「我を警戒して町から遠ざけるとは、これは褒美をとらすべきだが。我を謀った罪、万死に値する。シキ、いつ気付いた」

「だから、どういうことなのよ！」

「儀琉君が、もし町にいれば十中八九事件に絡んでいたでしょう。そうすれば黒幕の正体を、もっと早く看破できたはず。隠れんぼで、探す側に儀琉君が居ては勝負になりませんからね。最強の探査機を鬼が持っているようなものだから。だから、彼らはいち早く、儀琉君を町から、事件から遠ざけたのですよ」

「そういう事だ、キツツキ君！ よって後の始末は我がやる。手を出すなよ、シキ」

「入院中ですよ、僕」

熾天王寺先輩は床を蹴るように歩き出し、部屋を出て行くのかと思えば、何かのついでのように私の前で立ち止まった。

「髪は女を最も魅せる装飾というが……。案ずることはない。飾らずとも、汝は純として魅力的な女だ、絵馬」

項に触れるように髪を撫でて、そして何事も無かったように病室を出て行った。あつけにとられながらその後ろ姿を見ていたら、隣でシキが押し殺すように笑っていた。

「なに？ あのバカ王子、何するつもりなの？」

「まだ解決されていない謎があるから、それを壊しにいったんですよ。ほら、謎を解いて隠された真実を暴くのが探偵でしょ。それは虎子さんや僕なんかでもなくて、儀琉君にだけ許された天命だから」

「謎ってなによ。黒幕は……神籬、だったんでしょ」

「黒幕がひとりなら」

「何それ。他にも……」

「虎子さんが、一之宮小夜子をマンションで追い詰めた際に狙撃されました。そして僕も、神社で神籬さんと対峙していた時に、別の角度から撃たれました。虎子さんが言うには、おりんぴっくのメダリスト級の名手だといっていましたけど、逮捕された人達、あるいは殺された人達の中に、そんな狙撃の技術を持つ人達はいないそうです。無論、神籬さんにも不可能です。」

そもそも、一之宮小夜子がマンションに戻った時間に、狙撃ポイントの対岸のビルの屋上に居ては、彼が、礼慈君が運ばれた病院にすぐに駆けつけることは距離的に無理があります。アリバイはあるのです。

それに、どんなに手慣れていたとはいえ、蕪木仁によって殺害された死体を、十数分で誰にも見られずに解体するなんて、一人では到底無理です。さらに言えば、神籬安良という男は、僕たちと出会う以前から、死んでいたらしいのです」

「はあ……？ 死んでたって。でもアイツ……。そんなのまるで幽霊か妖怪じゃない」

「そうです。僕と同じく、戸籍上は幽霊だったのですよ。警察が戸籍に記載されている両親を尋ねたら収穫なしで、鬼淵さんが直接赴いて聞き出したところ、十五年以上も前えに、死亡していたらしく、その戸籍を利用したでしょう。でも、僕はそういうのよく分からないけど、個人で他人の戸籍を利用するのって、簡単にはできないでしょ？ ましてや子供が。それって、その戸籍を用意した人物が他にいてってことで、それが今回の事件と無関係だとは、とうてい思えない。お姉ちゃんが監禁されていた廃墟はいこに仕掛けられていた爆弾を用意したり、あと車とかもいるよね、銃も、あの匣も特製だっというし、そして儀琉君を誘い出した。共犯、あるいは組織的なモノがあると思うんだ」

淡々と矢継ぎ早に言い終えると、気持ち切り狩るのように、思い出を忘却するように、私の方に向き返り笑顔を浮かべた。

「でも、一連の夜鳥によるヤタガラスの祟りは終わった。あとは、虎子さん達がすべてを解き明かしてくれるはずだよ。だから、もう、僕達が関わることはないはずだから」

安心して、とその笑顔が言っているようだった。

「ねえ散歩しよ。裏に草原があるって葬儀先生が言ってたから。ね、お姉ちゃん」

そう言っつて、シキはベッドから飛び降りて、私の手を握った。

裏口からこっそり病院を抜け出して林を抜けると、一面に広がる草原は、あまりにも鮮やかな朱色の華を飾る彼岸花に埋め尽くされ、見上げた空は、まるでここが海底のように透き通った青。風に波打つ草の絨毯じゅうたんは足が沈むほど深く、微かな甘い香りと共に靡く。

潤いに満ちた彼岸花の赤は、死に化粧の紅を連想させる。

ふと、こうして手を繋いで歩くなんて初めてかも、と思った。

「神籬さんは、救ってやる、と、僕に言ったんだ」

膝ひざまで伸びた猫の毛並みのような草を撫でながら、シキは呟いた。

「その時は、きつと僕達を殺す気はなかったと思う。もしかしたら、彼を夜鳥にしたのは、僕かもしれない」

憂うれいと慚ざん愧けいに震える細い声が、まるで癒えきっていない傷を舐められた小さな悲鳴のように聞こえた。それを聞くのは辛い。

「でも、あやめや小夜子、礼慈も、アイツのせいで多くの人が死んで、不幸が生まれて、たくさん悲しんでる。私は、アイツに同情しない」

人を裁く気も勸善懲惡を語る気もないけど、私にはどうしてもシキのように、神籬を想えなかった。それは殺した側か、殺されかけた側の違いかもしれない。だけど、殺人は悪いことだと分かっているけど、シキには、もうこれ以上、苦しんで欲しくないというのが私の本音だった。

なのに、シキは私の手を解いて。

「彼は人を惑わす夜鳥だったけど、人を殺める凶鳥ではなかった」

赤い草原を独りで歩き出した。

「神籬さんは誰ひとりとして殺してはいない。でも、僕は、彼を殺した」

その言葉が、追いかけてようとする私を踏み止まらせた。

「後悔もない、あの時の気持ちに嘘はないから。今の自分を誤魔化す気も、眼を逸らすつもりも、ましてや誰かを恨むなんてこもしない」

まるで慰めの言葉なんか要らない、と言っているように聞こえる。

「僕は殺人鬼です。生きとし生ける者達にとって、僕は悪たる存在です。でも……それでもやっぱり僕には、この世界が、命が美しいと思う。だから、その時が来るまでは、ここに居たい」

丘の上から人々を愛おしそうに眺める。手の届かないものを、踏み入れない世界を、こんな風にいつも、シキは見ていたのかも知れない。

この子は穢れだ。

でも誰よりも人を、なにより命を愛しているではないか。

これが神様が決めた運命だとすれば、それはなんて意地の悪い呪いのだろう。

冷たい風が彼岸花と一緒にシキまで撫でると、ゆらりと靡いて後ろに倒れる。

「つちよ、シキ！」咄嗟に駆け寄って背中を支える。

すると猫が顔を洗ってみたい顔で見上げてきた。

「えへ。ひさしぶりに外に出たから、目眩がしちゃった」

「もう。……病室に戻ろっか？」

「ううん、もうちよつと……」

そう言うと、力を抜いて私に寄りかかってきた。

「もう少しこのまま。今は、ひとりで立っていられないから……。一緒にいて、お姉ちゃん」

眠るようにシキの重みが私に託されていく。

軽いな、と感じた。そっか、こんなにも軽かったんだ。

こんなにも弱くて、簡単に潰れて消えてしまいそうな命。当たり前のように朝がくると眼が醒めて、当たり前のように陽射しを浴びて、歩いたり、誰かと話をしたり、当たり前のように夜、また明日、また朝になったら当然のように目が覚めると疑いもせず眠りについて意識を失う。

その繰り返し“毎日”になって、その繰り返しが私達の”日常”になって、生きてることの偶然と奇蹟の凄さを、忘れてしまっていた気がする。

「しょうがないなあ、この甘えん坊」

冷えた身体にマフラーのように腕を巻く。

同じ目線で、代わりに私が、特別な日常を見よう。

力強く咲き誇る赤い彼岸花の海。  
寶石のように透き通った青い空。  
一つに解け合った私達の黒い影  
空から零れた雲のように白い君。  
夢のように温かくも冷たい空気。  
遊びを終えて帰っていく静けさ。  
眠るための絵本はもういらぬ。  
ここには私たちがもういない。  
生も死も、善と悪も、罪と罰も、  
清濁と共に醜さも美しさえもが、  
みんなひっそりと、隠れている。  
眼を閉じては見えない日常でも、  
眼を閉じても見えない真実もある。  
「ねえシキ。帰ろうか、お家に」  
色褪せはじめた山間を眺めて、耳元に囁く。  
「ぼくは、森にいるよ」  
聞き覚えさえ感じるほど予感していた言葉だった。  
結局、今まで通り、あの森に独り、隠れてしまうのか。  
孤独が良いなら、私はもうなにも言わない。  
今まで通り、逢いに行けばいいだけだから。  
同じ家に一緒に暮らすだけが家族じゃないよね。

私達は紛れもなく家族で姉弟だから。  
ううん、やっぱりそんな無条件の繋がりなんか関係ない。  
私はきつと、もしかして――。  
「もう終わったんだよね」  
胸に秘めて、眩きの代わりに言う。  
「冷えてきたね。もう戻るよ」  
「まだ」  
「まだって、いつまでよ」  
シキが、恥じらうように、  
一瞬の奇蹟に似た儂げな微笑みを見せた。  
「まあだだよ」